

# 酒呑物語

ハイ！タクシー！

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

鬼の頭目、酒呑童子。

鬼の中でも最強と言われた彼女。しかし実は鬼の中で最弱だった。配下の鬼達から最強と勘違いされながら、彼女は地雷だらけの日々を生きていく。

「ごすろじ様から素敵ないラストをいただきました！」

嬉しい………本当にありがとうございます！

※先に言っておきますが、この物語の伊吹萃香は酒呑童子になる筈だった説を推しています。伊吹萃香が酒呑童子じゃないと絶対に嫌だと言う方は読まない事をお勧めします。

# 目次

## 最強の鬼

鬼の頭領の独白 | 1

大陸での出会い | 7

狐っ子……いいよね…… | 16

お酒、良くない | 26

初めて酒呑がマウント取れた話 | 35

とある桃鬼の独白 | 46

鬼の軍勢 | 54

その星は赤く | 63

決着とその後 | 74

来訪者 | 85

弱い鬼 | 95

## 地底と幻想

星熊の後悔 | 107

目覚め | 125

地底世界 | 136

賭博の鬼 | 147

誇りか埃か | 157

逆転の鬼 | 166

そして賽は投げられた。 | 180

衝撃 | 190

粛清 | 204

謝罪 | 217

## 鬼の襲来

東方地霊殿、始まり。	231
ある日、緑髪の女の子に、出会った。	243
絶望	254
即堕ち魔理沙	267
幻想郷に降り立つ	286
再会の盃	305
かつて酒吞童子と呼ばされた鬼	322
始まる動乱	344
酒吞は今日も死ぬ	352
合体！ 魔理沙☆少	362
戦渦	372
錐揉回転	381

## 最強の鬼 鬼の頭領の独白

世界とは時に残酷である。

見渡す限り全てを地面で埋め尽くされた空を見上げながら、私はそう思わずにはいられない。

そうだ。この地底の世界に住むことになったのも、数々の悲劇が起きたからだ。どうにもならない現実と、信じていた者達に裏切られた絶望が、私をこの世界に追いやった。

私は弱い。運命を覆せるほどの力も持たない……。術はあるが、それは所詮紛い物の力。私本来の力ではない。身に余る力は己を滅ぼしかねない。だから私は本当に差し迫った時にしかその力を使わない。

そして借り物は借り物。それを上手く扱う頭も器も持っていない。だから私はいつも間違える。

「おい大将<sup>かあさん</sup>。一緒に酒盛りしないかい？ 前鬼のやつが良い酒を……つてえ、どうしたんだいかあさん？ 辛気くさい顔して」

「……勇儀ですか。いえ、何でもありませんよ……。それより酒盛りでしたか。ええ構いませんとも」

「そうこなくちやー！」

ああ……。またしても世界は私に試練を与えてきます。ちつばけな私を嘲笑うかのように、現実は脅威となってやってくる。

私は小さな存在……。弱き者です。強き者に媚び、卑しく賤しく生きようとする小動物。寄生虫のようなもの。それでいて強き者に常に己の命を握られた存在。彼等の気が変われば私は一瞬でゴミのように棄てられ、殺される。

「相変わらず空を見ていたのかい？ いくらここが一番高い場所だからって、地上の空は見えないだろうに」

襖を開けて窓の縁に腰掛けて黄昏ている私に話し掛けてくる彼女。星熊勇儀が私の前まで来て壁に寄り掛かる。

チラリと彼女を盗み見て、私は内心で大きなため息を溢した。

上は体操服に、下は薄く透けて見えるスカートとブルマ。目の覚めるような明るい金髪に、人と比べてかなり高い身長。

性格も姉御肌で気前も良い。指摘するところと言えば、嘘が嫌いなことと約束には容赦しないこと。

そこまでは良い。そこまでなら私は特に何も思わない。それだけなら私はこうして重い気持ちになら無い。

その額に、鬼の象徴とも言える一本の赤く星の模様の角が生えてなければ。強き者を好み弱者を忌み嫌う、私にとって最悪の性格がなければ。

私はここまで頭を痛くすることはない。

「さあ今日も飲み比べだ。いつも負けっぱなしだからね。今日という今日は勝たせてもらおうよ」

「……………また飲み比べですか。私はゆっくりと飲みたいんですが」

「そりや無理だ。鬼は飲みと喧嘩が生き甲斐なんだ。それを取り上げるとあっちゃあ母さんでも許さん」

少し私が愚痴を吐き出せば、直後に溢れる妖気。それは彼女にとってほんの些細な……………少しの嫌悪が無意識に出した妖気なのだろう。

しかし彼女にとってみれば僅な妖気でも、私にとって見れば天災だ。ソレに当てられた私は恐怖で唇が震え、背中の冷や汗が止まらなくなる。

「……………ごめんなさい」

「あ？ 何謝ってんのさ。上の者が下の者に弱気でいちやいけないっていつもあれほど……………いや、もうこの話は何度もしたか……………」

「ですが私は……………」

「母さんは私よりも強い、鬼の首魁なんだ。地底のトップがそんな弱気でどーすんだい」

そんな弱い私が。鬼の中でも一、二を争う強さの勇儀に……………いや、彼女よりもさらに弱い下っ端の小鬼にすら負ける私が。

この酒呑童子と言う名前の私が、ただの酒を呑むだけでそれ以外に何の取り柄の無い私が、何故か鬼の頭領の座にいるのだ。

おかしい。私はいつも思っているこの考えを未だに止めることができない。

何故私なの？ 他にいるでしょ？ 勇儀とか萃香とか鬼の四天王達が。

「……………なら、私ではなく勇儀が頭領になれば良い」

「何言ってるんだい。鬼の頭目は一番強い奴がやらないと誰もついてこない……………私がやったところで、他の奴等は誰もついてこないさ。私より強いかあさんがいる限りね」

そう。おかしい原因の一つがこれ。地底に住む他の鬼や妖怪達が、何故か私のことを強き者と勘違いしていることだ。おかしいでしょ？ でもこれが現実なんだよ（死んだ目）。

そもそも私は弱い。一応私は鬼と呼ばれる種族に入るのだが、鬼と思えないくらい致命的に弱いのだ。それなのに私は鬼の頂点に据えられている。↑ここ重要。

もうかれこれ1000年以上は経ったらしい。私が鬼の頭領として祭り上げられてから今日まで、誰一人として私のことを弱いと指摘してくれない。そのせいで私は未だに鬼のトップだ。

え？ 自分から話せば良いじゃないかって？ それができたら苦労はしないんだよ!!

部下達が集まる中、注目された状態で本当のことを告げてみる！

鬼は嘘が嫌いだ。偽りも狡いことも嫌いだ。そんな彼等に、私が千年間騙っていたことを告げてみる。その瞬間、私は全員にボロ雑巾のように袋叩きにあつて死ぬのが落ちじゃないか!!

ゼー……………ハー……………ゼー……………ハー……………

私は一体何に怒鳴っているんだ。いや、そんなことは良い。それよりも解決すべきは私の現状である。

何度も言うが、私は脆い。鬼とは思えないほど弱く脆い。どれくらい脆いかと言うと、例えば……………

「おいコラ、さけがなくなっちゃったじよ!! もっへほい!!」

(ひっ)

私と飲み比べてベロベロに酔った勇儀が空になった酒瓶で配下の

鬼をぶん殴ったその風圧で私が吹き飛びそうになっている。

私の表情筋が死んでいるせいか感情は全く顔に出ることはないが、内心は恐怖でガクブルである。仮にもし私が間違つてあの酒瓶に当たっていたら、全身が肉片となって飛び散ったことだろう。

そんな天災のような存在が私の周りに居座り続けているのである。しかも沢山。死神がお迎えに来ている処ではない。死神が殺意剥き出しで私の首に鎌を当てて殺そうとしている寸前である。

ありがたいことと言えば、私の知っている死神が仕事のサボり魔であることか。私は未だに鋭い刃先を当てられながら日々を生活しているのだ。

ありがとう

「むにゃ…………まけんひよおかあさあん…………」

「ようやく酔い潰れましたか…………」

目の前に広がる光景は死屍累々の鬼達である。酒で潰れたもの。喧嘩で倒れたもの。勇儀の理由の無い暴力でノされたもの。

私以外の鬼達は全員に意識が無くなっている。私だけが奇跡的に無事でいられている。

一瞬、甦る悪夢。この光景は嫌と言うほど見たことがあるが、それでも私は昔の事を思い出してしまう。

いや……………よそう。過去の事を思い出しても私のストレスが溜まる一方だ。ただでさえ日々のストレスで胃に穴が空きそうなのに、これ以上ストレスの原因を増やして堪えるものか。

私はいつこの地底から脱出出来るのだろうか。何故か知らないけど、地上の世界と地底の世界ではお互い不可侵条約を結んでいて地底から出ることも出来ない。誰が作ったこの条約。

助けてください。もう耐えられません。いつ些細な事で鬼の誰かに殺されるんじゃないかと気が気じゃないんです。

「んぬあ」

「ひいっ!？」

ほらあ！ 勇儀が寝返りしたら地面に拳がめり込んだよ!? 寝返りでこの威力だよ!? てか今太腿カスったから!!



ああ……あれもこれも全ての原因は私が持っている変な酒のせいである。

物心付いた時から片時も私から離れないこの酒のせい。

……でもなあ。このお酒のお陰で死んでないのも事実なんだよねえ。だから捨てるに捨てられない。持っているだけで事態が悪化するのに、捨てたら死ぬかもしれないとか悪徳商業より質が悪い。

私が持つ瓢箪。この中にあるお酒には特別な力がある。

それは飲むだけで力が何倍にも膨れ上がるという特別な力だ。このお酒のお陰で、私は数多の鬼達から強いと勘違いされているのである。

……この言葉だけ聞けばとても良い物に思えるがそうではない。

まず、このお酒の製造法がわからないので飲み続ければいつかは無くなってしまう。つまり限りがある偽りの力なのだ。

加えて、力が強すぎるあまり飲み過ぎれば酔い潰れてしまうのだ。一滴舐めるだけで私はそこらの鬼と同等かそれ以上に、二滴舐めれば大妖怪ともひけを取らない強さになれる。しかしその反動で一滴でほろ酔い状態に、二滴で記憶が無くなる。

もし並々注がれた盃一杯分など飲めば、一体どうなってしまうのか………恐ろしすぎて試す気にもならない。

飲まないと私と言う金メッキは簡単に剥がれ死ぬ運命しかないのだが、これに頼り続けていればその内酒が無くなる。

日常が常に綱渡りだ。落ちれば、深い谷底に真つ逆さま。

「……………」

一瞬、落ちる自分を想像しただけで気分は最悪だ。ストレスで胃に孔が空く。さつき飲み食いしたものの全てぶちまけそうだ。

嫌だ。死にたくない。誰でもいいから助けてえ……………。

華扇は何処に行ってしまったの？ 透花は？ 何故居なくなつて

しまったの？ 早く帰って来て、私をここから出して華扇、透花あ  
……

## 大陸での出会い

私の名前は酒呑<sup>しゅてん</sup>。字の通り酒呑みをこよなく愛す小鬼である。

いつ生まれたのか、どうやって現れたのか。それは知らない。気付いたら私は寂れた村の道端に瓢箪を持って佇んでいた。自分と一言存在が何であるかは何故か理解していたが、それだけ。あとは何も知らなかった。

最初の頃は大変だった……。

右も左もわからない状態でいきなり野生にぽいつ、である。様々なことに右往左往しながら、手探りで私は何とか生き延びてきた。

ある程度生活が整って来た頃には十年が経過し、弱いながらに己の目的を見付け、余裕のある生活をするのに何百年と経った。

そして現在、私は周の国のある森の中で一人チビチビお酒を飲んでいる。

このお酒はそこらの村から勝手に拝借させてもらった物だ。味はあまり良くない。良くないのだけど、今は味なんか気にしてられないくらい、お酒を飲んでないとやってられないのだ。

身に纏った衣服もボロボロ。光で輝く自慢の金髪は見る影もなく、鬼の象徴である二本の角も土と泥だらけ。

それもこれも、つい最近この辺りに現れた九本の狐尾を持つ妖怪のせいである。

この辺りは近くの湖に住む水虎と呼ばれる妖怪のテリトリーで普段は私以外何者も近付かない。私はお互いに不干渉の誓いを立てた上で、水虎に私がこの森に住める条件を取り付けたのだ。だから私と水虎以外森には誰もいない。

水虎は中妖怪の中でも強い部類に入る。そんな強い妖怪様が何故私のお願いを聞いてくれたのかは謎であるが、まあそんな事は些末な問題だ。

そんな事情があるから、私はとある機会にお気に入りのお酒を蔵から引っ張り出して飲んでいた。しかも、国の祝い事で振る舞われる筈だった醸造酒だ。昔、王宮に入る機会があった時に盗んだ秘蔵のお酒

である。

そんな時だ。あの九尾の妖怪が現れたのは。

厳密には私の前に現れて何かしたわけではない。遠目で九尾を眺めたときはその膨大な妖気に恐れて身を隠した。九尾はそのまま私に気付かず通り過ぎると水虎の所に現れて争いを仕掛けたのだ。

激しい妖怪同士の戦い。近くにいた私は堪ったものではない。

周りの木々を薙ぎ倒すほどの局地的な暴風が起こった。その影響で私は酒諸とも吹き飛ばされ、酒の入れ物は死んだ。

今私はぶっ掛かった酒でびしょ濡れの上、跳ねた泥や土で汚れ放題。

飲んでなきややってられないわチクシヨー……。

「あー………つたく、こんだけ飲んでるのに何で酔わないんですかー！！」

チビチビとやけ酒を飲んでいた私だが、とうとう盗んだ酒すら飲みきってしまった。だと言うのに私はほんのちよつとすら酔った様子がない。

ちなみに自慢じゃないけど、私はいくら飲んでも酒に酔ったことがないのだ。それが良いことの時もあるし、今のように酔え無くて悪いこともある。

例外として酔えるお酒もあるんだけど………これは駄目。やけ酒で飲んでいいお酒じゃない。命の危機にしか飲まないと決めているんだ。

「もういいです。ふて寝しましょう。あの九尾の妖怪もその内水虎が倒してくれるでしょうし。終わるまで寝ま——」

「ゴオオオオオオン!!」

「すっ?」

突然後ろから狐のような鳴き声が轟いた。直後、私の背筋に気持ちの悪い悪寒が駆け巡る。

私が寝ようと屈みかけた姿勢でいたことと、慌てて振り返ろうとしたせいか木の根が私の足を引っ搔けた事が幸いした。

直後、転けた私の頭上をとてつもない速さで何かが通りすぎたの

だ。

「わわわっ」

前方にあった太い木の幹が何かにくり貫かれたように穴が空いた。その木はバランスを保てなくなつたのか私の方へ倒れてくる。

いくら弱くても木に押し潰されたくらいで死ぬ私ではないが、今はそれで時間を取られる訳にはいかない。

私は慌ててそれを避け、突然奇襲してきた輩がいるだろう背後を振り返る。

そこに件の襲撃者はいた。

「グルルるる………」

腰辺りまで伸ばした私と同じ金髪に、小さい体。顔は美しく整っており、世の中のそう言う趣味の男達が放つて置かないだろう。

付け加えるなら、その幼女の頭から狐耳が飛び出し、腰から九本の尾を生やしている事くらいか。

つまり何が言いたいのかと言うと、だ。

完全に私がさつき話していた九尾の妖怪である。本当にありがとうございました。

………じゃねえ！ ちよつと待って！ 何でこの妖怪がここに

いるの!?! 水虎と争つていた筈じゃ……

その時私は見てしまった。九尾の左手に幼い虎の首があつたのを。舌が力なく垂れ下がり、顔はピクリとも動かない。

ヤバイヤバイヤバイ。脂汗が止まらない。私は今さらになつて如何に自分が危険な状態にいるのかを認識した。

水虎はこの辺りの妖怪の頂点に君臨する。どんな妖怪も水虎を恐れ、近寄らなかつた。

それが少女のような見た目からは想像できないこの九尾の妖怪が殺した。争つた後だと言うのに特に外傷もなく、水虎を生首の死体に変えてしまった。

確実にこの九尾は大妖怪に分類される実力を持つ。

「な、何か私に用ですか？」

そんな天下の大妖怪様が目の前にいる。一言話すだけでも声が震えるのは仕方がなかった。

というかこの妖怪。さつき後ろから襲ってこなかった？私の背後にある太い木がへし折れているんですけど？ 私が躓いた時に殺そうとしましたよね？ え、殺意高くない？ 私何かしましたか？

「ガルルう……」

襲ってきた九尾が口を開いたかと思えば唸り声しか漏らさない。人間の見た目をしている割に言葉は喋れないのかもしれない。

ただ目が語っている。私を喰らってやると言う意志が垣間見えるのだ。

しかしまして。私を食う？ いやいや、美味しくないから。私、貴女より人間っぽい見た目しているけど、見て角。私妖怪だから鬼だから！人間みために美味しくないよ。止めてくれ。

そんな私の弁明の余地もなく、九尾は再び襲い掛かってきた。

「ちよ、まっぶえあッ!!?!」

お腹に刺さる激痛に口から変な声が漏れた。

て言うか痛い。痛い痛い痛い!! なにこれ、私のお腹に九尾の尻尾が突き刺さってるッ……

「がフツ……うえええ……」

お腹から尻尾が引き抜かれるとまた変な声が漏れる。

て言うか血が……ヤバイ。血が止まらない。いや、そんな事どうでもいいからお腹が痛い。腹痛とか言うレベルじゃないから。お腹に大きな孔が空いてるんだもん。

は、早く止血しないと……でも痛くて動けな……あ、ヤバ。意識が……

気付いたら私は荒れた土地で倒れていた。

なんだここ。私はこんなところ知らないぞ。て言うか九尾の奴は？ どどどどどこ行った!?

キョロキョロと辺りを見回しても、倒れた木々が腐り落ち、荒廃した土地が広がっているだけ。いや、マジで何処だここ。確か私は九尾に腹を刺されて死んだ筈じゃ……生きてたの？

………お、おお。刺された筈のお腹も元に戻ってる。流石腐っても鬼である。腹部に巨大な穴が出来た筈の服も何故か復元しているのは謎だけだ。

それにしてもここはどこだ？ そもそも私は何故殺されなかったんだろうか。食らうじゃなかったの？ いや、食われたくは無いです。

全てが謎だらけ。ううむ……まさにミステリー。この難解な事件を解き明かせるものはいるのだろうか。

「さて……馬鹿な事を考える前に、せめて自分の居場所をしっかりと把握しておかないとですね」

ツラたん(泣)、とかふぎけてる場合じゃない。て言うか本当にここどこ？ 周りは全て腐った倒木で埋め尽くされている。かつては綺麗な森だったような跡も、枯れ落ちた葉と沼のように湿った泥で見る影もない。これじゃあ食料の調達も儘ならない。

て言うかまで。私が今まで貯めてきた秘蔵のコレクション達は？ 数々の名酒は？ まさか、全てあの森に置いてき、た………？

「う、嘘でしょ………？何年掛けて集めたと思ってるんですか………？」

え、マジで？ 本当に？ 冗談じゃなくて？

……

……

……





私は空を見上げた。

「ひっ！」

そこには蛇のような細長いニョロニョロした物体が空を悠々と泳いでいた。ちなみに蛇ではない。何故なら身体中に鱗が生えており、顔からは鹿のような角と鬃が伸びている。

そして一番違うところと言えばその体躯。蛇なんかと比べ物にならないほど大きな身体が九尾と私を見下ろしていたのだ。

……あわ、あわわわわ!!!

ちよっ、何アレ!? 龍じゃん!! 何でこんなところにいるのさ!

てかずつとこつち見てるし!! え、貴方も私を食う感じ? 齧っちゃう感じ? ああ………痛いのは嫌だよ。せめて痛くないように一思いに………

内心で慌てている私を他所に、かの龍は私や九尾から興味が失せたのか、顔を反転させると何処かへと飛び去っていつてしまった。

その光景は幻想的で、空の支配者とも言える貫禄があった。頭がパニックになった私には、それをただ呆然と眺めることしか出来なかった。

「………水龍」

去っていく龍の様子を眺めながら、私はとある噂を思い出していた。

あの水虎がいた湖。あの湖には水龍が封印されていたと言う伝説が近くの村で噂されていた。私は眉唾物だとまったく気にしていなかったが、どうやら本当だったようだ。

水虎は妖怪であると同時に、もしかしたら水龍を封印する守り神だったのかもしれない。いや、それとも水龍を封印する悪い妖怪だったのか。

死んだ今となってはどっちが事実なのかわからないが。

いや、それよりだ。え、怖。ガチで怖い。私が知らなかっただけで、この辺りの森は人外魔境の地にだったの? まあ妖怪が住んでる時

点でそうではあるんだけどさ。

て言うか危な！ 私も運が悪ければ巻き込まれて森と同じ道を歩むことになったかもしれないじゃん!!

「げほっ、げほっ……ぐっ、かはッ！」

ん？ なんかすぐ苦しんでいる呻き声が聴こえる。……あ、忘れていた。そう言えば倒れている狐がすぐ傍にいたのだった。

ふむ……本当にこの九尾は死にそうである。恐らくあの水龍にやられたのだろう。良く見れば尻尾も何本か引き千切れて酷く無惨な姿だ。感じる妖気も少なく、かなり憔悴しきっていて可哀想に思えてくる。

……

「あぐ、んううう——！」

……

「はッ、はッ、はッ——」

……

……

駄目だ。無視できない。いくら先程私を襲ってきた敵だとは言え、ここまで弱まっている彼女を見捨てることが出来ない。

私は強い者が嫌いだ。だけど、死にそうになっているこの九尾を見ていると、今の私と重なって見える。その姿を見ると、まるで自分自身を見捨ててるようで、耐えられない。

「はあ………仕方がない」

そう、仕方がない。仕方がないのだ。

彼女を見捨てれば後味が悪くなりそうだ。そうなるとお酒の味も悪くなる。酒好きの私としてそれは看過できない。

結局、どんなに弱かろうと私は鬼なのだ。好きなことをして、後悔

せずに生きる。

鬼に横道はない

私はそれを胸に凶太く生き続けてきたのだから。

仕方なく、私は倒れて小さな九尾の体を抱き上げた。

狐っ子……いいよね……

パチパチと小気味よい音が鳴り響き、次いで魚が焼ける良い香りが辺りに充満している。

既に空は真っ暗。妖怪である私達本来の時間だ。しかし私は人間のように焚き火をして夜の暗闇を明るく照らしていた。

まあ、私は元々人間に限りなく形態に近い鬼だ。そもそもからして鬼は他の妖怪ほど夜目が利くわけではない。単純に暗闇でも昼間と同じく目が利くと言うくらいだ。

「んく……………」

「起きそうですね」

気絶していた九尾が身動きするのを見て、私は彼女がそろそろ覚醒する頃合いだと当たりをつける。

既に応急手当ては行った。昔、大陸の山奥で仙術を齧ったことがあり、そのお陰で気功による治療を行い彼女をある程度のところまで回復させた。

元が強い妖怪だからなのか、そこまで行けば後はもう自力で身体を治し始める。

ただ失った妖気はそう簡単に戻るわけではない。事実、今の彼女は私よりも妖気が薄い弱小妖怪並だ。例え襲い掛かって来たとしても充分私だけで対処できるだろう。

「う、ぎゅ……………」

「起きたようですね。気分は如何ですか……………って、彼女は言葉がわからないんですでしたね」

「ッ!!?」

おお、寝起きだと言うのに私の顔を見た瞬間すぐさま臨戦態勢を取るとは流石だ。私なら後数秒ボーツとしている自信がある。

が、やはりまだ回復しきっていないんだらう。警戒心たっぷり睨み付けてくるが、立って構えているだけで苦しそうだ。

「ぐるぐる……………」

「……………ふむ」

未だ警戒を解かず唸る獣な彼女に、私は先程捕まえて焼いておいた魚を近付けてみる。

ビクリと過剰に反応する九尾だが、差し出された魚から漂う香りを嗅いだのかもしれない。一瞬目を丸くした彼女は差し出された魚に食らいつこうと身を乗り出した。

が、

「おっと……あぶないあぶない。食われるところでした」

それを寸前で引つ込め、私はからかうように魚を彼女の前でフリフリと振る。そう簡単に食べさせてやるもんか。

九尾はその小さな手をいっぱい伸ばして魚を取ろうと頑張るが、私はそれを華麗に避けて取らせない。しばらくの格闘の末、九尾はようやく諦めて項垂れた。

心なしか、狐耳と尻尾も本人の気持ちに反応してか垂れて下がっている気がする。

「きゆう……」

………なんか悪いことしてるみたいで良心が痛んだ。い、いや………私は悪くない。私は別に見せびらかしたくてこんなことやってるわけじゃないんだ。だからそんな悲しそうな目でこっちを見ないで!!

「はあ……」

「？」

私は再び焼き魚を九尾の前に持っていき、もう片方の掌を九尾に見せる。再び取ろうと手を伸ばしてきたのを私はその掌で遮った。

「まて」

「？」

「まて、ですよ」

焼き魚が遠ざかり、私の掌が目の前に突き付けられた事に首を捻る九尾。

何を思ったのかそのまま私の掌を舐めてきた。

「ふわ……」

おふっ。く、くしゅぐったい………って違うから。そうじゃないっ

て。

私は焼き魚を突き付けては掌で『さて』の合図を繰り返した。しばらくその行為を繰り返していたら、九尾は何かしら理解したのか自分の目の前に焼き魚が振られても私の掌がある限り奪わないようになった。

「……よし」

私は片方の手を下ろして魚を九尾の口元まで近付ける。彼女は一瞬躊躇したあと、その焼き魚にかぶり付いた。

「カフカフツ」

ようやくありつけた食べ物に九尾はご満悦のようだ。少女のように可愛らしく笑みを浮かべ、耳はピンと立ち上がり、尻尾もフリフリ喜んでいる。

……可愛いなあ。彼女の頭を撫でたい。尻尾もモフモフしたい。

私は彼女の頭にそつと手を伸ばすが、九尾はそれに敏感に反応すると警戒したように私の掌を睨み付ける。

まだ駄目そうである。やはり信頼関係が足りないらしい。だが私は諦めんど。今日は駄目でも、明日明後日と機会はまだまだある！

私の日常に、怪我をした狐の少女が加入しました。

「紺<sup>コン</sup>。今日は鶴を狩りますよ」

「クオオーン！」

数日が過ぎ、私は九尾の紺<sup>コン</sup>と共に日々狩りをしていた。

ちなみにコンとは九尾に名付けた名前である。流石にずっと九尾と呼ぶのは可哀想な気がしたからだ。

私はコンの身体が回復するまでは世話をするつもりだった。あわよくばこの狐少女を飼えないかなって邪な思いを考えながら介抱していたら、最初の警戒心が嘘のように次第に懐かれていった。

今ではスキンシップを軽くこなす仲である。

もう日課となった狩りを二人（二匹？）で行い、余った時間はゴロゴロ。お酒の怨みもすっかりなくなり、一緒になってお昼寝である。

彼女は意外と甘えたがりだった。私が頭を撫でればもつとしてくれとばかり頭をグリグリと押し付けてくる。それがあまりにも可愛くて何度も撫でてしまうのが玉に瑕だ。

「モフモフ……」

「コン……」

今日も私はコンの九本の尻尾に包まり、彼女の毛並みの良い尾をモフる。

かわいい。かわいいぜコン。お前の可愛さは大陸一だよ。

親バカのような思考をしながら、私は盃に入った酒を飲み干していく。

最近は落ち着いた日常が続いているから気分が良い。水虎の奴がいなくなつたから、一時期はここも妖怪蔓延る土地になるかもと考えていたけどそんな事はなかった。

九尾のコンがいるから妖怪はこの辺りに近付かない。お陰で面倒くさい妖怪同士の縄張り争い何てもものも無く、平和にお酒を飲むことが出来ている。

「くうくうん」

じー——

「飲みたいんですか？ ……うーん。飲ましても良いのかな？」

私が美味しそうに飲んでいるお酒に興味でもあるのだろう。可愛らしい顔で盃に入ったお酒をずっと見つめている。

正直飲まして良いのか謎だ。コンはまだ妖怪の中でも幼い部類だろう。でなければ人間タイプの妖怪であるのに言葉を覚えていない説明がつかない。

人間と妖怪は切っても切れない関係だ。妖怪として生きていれば必然的に人間と関わらなければならない。何故なら妖怪は人間の想いと畏れを糧としているから。例外がないわけでもないけど、大体の妖怪はそうなのだ。

だからコンが幼いのは確定である。生まれたてである筈なのにここまで強いとか将来が末恐ろしいが、まあ仲良くなった今は関係ない。

それよりも、酔ったことで暴れないかが心配だ。

「じゃあほんのちよつと飲んでみましょうか。それなら酔う心配も無いですし」

盃に入った分を一口程残し、コンに渡す。彼女は鼻を引くつかせて嗅ぎ慣れない匂いを嗅いでいた。

ある程度匂いを嗅ぐのに満足したのか、盃に舌を伸ばし一舐め。すると勢い良く盃から顔を離れた。

「ツツツツ!!」

「ああ。やっぱり苦いですよね」

「ペツ、ペツ!」

案の定駄目だったらしい。涙目になりながら唾を何度も吐き出していた。

少しだけ飲み仲間が出来ないか期待していたんだけど、流石にそうはいかなかったか。

私はコンのふわふわした毛並みの頭を撫でながら残ったお酒を飲み干す。コンには苦いこの飲み物も、私にとつては味の付いた水程度だ。いくら飲んでも決して酔うことが出来ない。

儘ならないものではある。いくら美味しいお酒に出会おうと、どんなに強いお酒だろうと、私は一向に酔う気配がない。お酒を探し続けて数百年。未だに、私を酔わすことが出来たお酒は、自我を持った頃から持ち続けていた自前のお酒のみ。

いつになれば私の望みは叶うのだろうか……

まあ、それはまた追々考えていこう。妖生は長い。かれこれ千年以上生きている私には、誰かに殺されなければまだまだ時間はたっぷりあるのだ。

たまには、ひよっこり拾った獣娘を愛でつつ育てつつ、まったりした時間を過ごすのも良いだろう。

私達が共に一緒にいたのは僅か数ヶ月程であったが、私達は一緒に旅に出るほど仲良くなった。

元々私は長い間同じ地に腰を据えるほど落ち着いた鬼じゃない。森が破壊されたのを期に、コンの怪我も大分良くなった頃にこの地を



離れた。

旅の道中、彼女にはある程度話せるようにと言葉を教えていた。今では出会った時に比べて少しかけコンも喋ることが出来る。

「酒呑、ですよコン。しゅてん。しゅ、て、ん」

「シーテッー」

「可愛い……じゃない。しゅ、て、ん」

「しい、て、んっー」

まああまり順調では無いけど。

舌つたらずな声で名前を呼ばれるのが堪らない。最近はもうこのままでも良いんじゃないかと思うようになってきたくらいだ。

それくらい、コンは可愛い。

時には二人で村に侵入し、食べ物やお酒を盗み、金銀財宝をチョロまかす。

時にはそれで怨みを買われて人々に襲われ、遁走したり傷を負ったりと色々ヤンチャした。

物騒なことしかしていないが、それが妖怪である。人は妖怪を忌み嫌い、畏れ、拒絶する。私達は命を懸けながらそれでも人にちよっかいを掛けて畏れられる。

まるで一方的な関係だが、それが私達の関係であり、在り方だ。

だから私は充実していた。やりたいことをやり、やりたくないことからトコトン逃げる。人に退治されそうになるのも妖怪の醍醐味だ（退治されたいとは言っていない）。

私は弱いからあまりそう言ったことは控えていたが、コンと一緒になつてからは悪事が増えた気がする。

流石に殺されるような怨みを買いたくは無かったから、盗む場所は毎回違うところにし、人を殺すことは絶対にしなかったが。

リスクのある行動も二人で挑めば、程よくスリルのある娯楽だ。妖怪として人々を畏れさせながら、二人で妖生をしばらく楽しんだ。

相変わらずコンは言葉が上達せず、どんな相手にも襲い掛かるヤンチャなお陰で毎回諫めるのに苦労したが、それはそれで落ち着いた生活をしていた。

そんな時である。あの水龍と再会したのは。

突然だった。何時ものように森で休んでいた時、天を覆い尽くす巨大な妖気が私達の頭上に現れた。

パニツクになる私と、水龍を睨み付けるコン。そんな私達など意に介さず、奴は天災のように私達に猛威を奮った。

「あぐ。コ、ン……生きてます、か？」

「かつ………ッ」

森はあの時のように腐り荒廃し、世界が真つ青に染まっている。

周りの景色も酷いが、私達も同様に酷い状態だ。私の片腕は他の倒木と同じ様に根元から腐り、引きちぎれている。お腹が半分抉れて内臓が殆ど機能していないためか息もし辛い。

痛いとかそう言う問題を越えている。全身に水を浴びて冷えている筈なのに、あまりの痛みに全身が焼けるように熱く、汗も止まらない。

「コ、ンツ……!!」

視界の端に見えるコンはもつと重傷だ。元々、水龍は何故か知らないけどコンを狙っていたらしい。執拗に奴はコンを攻撃し、暴虐の限りを尽くした。

私はただその攻撃に巻き込まれてこの様。あまりの自分の弱さに涙が出そうである。

——これが、私の眠りを妨げた報いである。脆弱な狐よ。

ふと、重厚な声が私の脳に直接語りかけてくる。それが私達を襲撃してきた水龍の声だとすぐに気付いた。

「う、あ……」

——矮小な存在ごときで大罪を犯した。その罪、万死に値する。空の支配者はそう宣言する。

既に此方は死に体だというのに更なる攻撃を加えるつもりらしい。多分、前回殺したと思っていたコンが生きていたから、ちゃんとトド

メを刺そうとしているのだろう。

水龍はまったく此方の声に耳を傾けてはくれなかった。それほど怒っているのか、それとも頑固なのかわからないが、これほど打ちのめした後だと言うのにコンへの殺意が弱まらない。

「ふざ、け……………」

ぬ……………

「すい、龍う……………!!」

——いたのか。そんな狐より更に矮小な小鬼よ。

振り絞って出した声に漸く気付いたとばかりに水龍は私に目を向けた。

下等な雑魚を見下したような目で、悪びれた様子もなく見下ろしている。

——なんとも小さき小鬼だ。いくら小さくとも、鬼の妖気なら嫌でも気づくはずだが……………

「このッ」

——命乞いか？ まあ、貴様程度の小さき存在が私の脅威になるとも思っておらん。疾く、去るがよい。

「え……………」

理不尽な行いに悪態の一つでも吐いてやろうすると、まさかの水龍から見逃す発言が吐き出された。

思ってもいない事だ。私程度、生きようが死のうが水龍にはさして変わらないと言うのに、慈悲をくれるらしい。

「それは、本当……………ですか？」

——私の目的はそんな狐だけだ。お前程度の脆弱な小鬼の命などどうでもいい。

見逃された。私は見逃された。

いきなり降って湧いた幸運に私は内心で喜んでるのがわかる。この世界は常に食うか食われるか。生きてるだけで儲け物。確かに被害にはあったがそれでも生きてるだけでマシだ。妖怪の誇りがどうか、恥がどうか関係ない。生きてるだけで充分。

喜ばずにはいられない。いられない筈がない。

「うるさい駄蛇。器の小さい奴が、調子に乗って大物ぶってんじやない」

——なにっ？

「だけど私はすぐにそんなのポイっである。」

「生きていれば儲け物？ 誇りがない？ 恥などくそ食らえ？」

馬鹿か。私は鬼だ。鬼としての誇りは気にするし、鬼としての恥は許せない。

私だけの命ならいい。生きるためなら土下座でも何でもしてやる。だけど、仲間がいるなら別だ。家族の命が懸かっているなら別だ。水龍はコンを絶対に殺すつもりでいる。それをみすみす許すほど、私は畜生に落ちていない。この数ヶ月の間、彼女とは確かな絆を得たのだ。彼女がどう思っているのか知らないが、私はもう家族だと思っている。

「私は曲がった事が嫌いなんだ。仲間を見捨てて生き延びたなんて……鬼の名が廃る!!」

大体、眠りを妨げられたから何だっつてんだ。私なんてそこらの人間や妖怪のせいでしょっちゅう眠りを妨げられている。最近は少なくなっただけど、昔は良くあった。

「コンを殺る前にまずは私から殺ってみろ！ 図体がデカイだけの小者が！ この酒呑様が相手をしてやる!!」

……なーんて言ってみたは良いけど………さして、どうするか。圧倒的強者である水龍さん相手に盛大に啖呵切ってしまった。

勢いで言ってしまったが内心ガクブルです。膝がメチャクチャ笑っている気がする。足に力入らねっ。

ぶっっちゃけもつと穏便な方法があったんじゃないかと反省してい

る。もう遅いけど。コンを助けること事態後悔はしていないけど、もつとやり方があったんじゃないかってめっちゃ後悔してます。

——…よくぞ、吠えた。小さき鬼よ。ならば貴様の望み通り、そこな狐諸とも影すら残さず消滅させてやろう。

あ——！ やっぱり怒った！ 完全に殺る気だよこの龍！

やっぱ駄目だね。勢いで行動しちや。酒呑ちゃん、反省☆

——死ね。

え、あよつ、まつ。まだ準備が

「ふげっ?!」

下半身が吹き飛んだ。

凄い衝撃が私を襲い、何がなんだかわからないまま身体が吹き飛び、腐った倒木をへし折りながら後ろへ突き進んでいく。

ようやく止まった頃には、もう私の体に無事なところはなかった。下半身が無くなり、左半身は潰れてぺしゃんこ。感覚も既に無い。

ああ……やっぱり勝てなかった。そりやそうだ。だって私だもの。あんな強い龍に勝てるわけがない。

心臓も潰れたのに生きてるのは、私が鬼だからだろう。でもいくら鬼の身体でも、流石にこの傷は死ぬ。助かる見込みは無い。

……ああ……そうだ。忘れてた。そう言えば私はまだ、全力じゃなかった……。私にはまだ、切り札がある。

どうせ死ぬ身だ。なら、この際全部使い切るのも悪く、ない。

それが、コンの為なら尚更、だ。

私は原型を留めていない右腕を持ち上げた。痛みは無いが感覚も消え失せたその手に、それでもなお握られた瓢箪を見つめる。

あの攻撃を受けたと言うのに、瓢箪は傷一つ無かった。どんな材料を使えばそんな強靱な瓢箪が作れるのかわからないけど、今はそれがとてもありがたいことである。

私は口で栓を抜いて、最後の力を振り絞って中の液体を浴びるように飲み干した。

お酒、良くない

「ん………………。ここは、どこでしょう？」

お早うございます。お酒大好きっ子鬼こと、酒呑です。今しがた深い眠りから覚めて朝を迎えたら、寝る前と景色が変わっていたニヨ。いや、マジでここどこ。と言うより、アレ？ 九尾は何処行つた？

……………なんか前もこんなこと言ってたな。迷子多くないか私。

うーん、わからん。たしか、そろそろ傷も治って動いても問題無いくらいには回復していたような気がすることは覚えているんだけど……………もしかして、もう去っちゃったかな。

残念だ。まだ一度もモフモフさせてもらって無かったから、一度くらいあの毛並みの良い尻尾と耳を触りたかったんだけど……………

「まあ数日の仲ですから、挨拶もなしにいなくなるのも仕方ないですかね……………痛っ」

起き上がろうとした直後、鋭い頭痛が私を襲った。

て言うか痛い。なんだこれ。すんごい痛いんだけど。ズキズキする。まるで二日酔いのような痛みだ。私、二日酔いになったこと無いけど。

「いたた……………グスツ」

それにしても痛い。痛すぎて涙が出てくる程だ。

あとなんだろう。病気かな。さつきからどうしようもない喪失感が半端ない。私の心から何かがスツポリ抜け落ちたような、そんな錯覚がする。

おかしいな……………。特に失ったものなんてない気がするんだけど。強いて言えば、あの狐くらい……………

「うう……………あああああ」

それよりなんだよ。さつきから涙が止まらないんだけど。なに、私。どうした。本当に病気か？ 疲れているのかな。

うーん。一度、知り合いの妖怪に見てもらった方がいいかもしれない。最近会ってないから何処にいるかわからないけど、それを探すのも意外と醍醐味か。

……ああ、くそ。涙が止まらない。なんでだ。なんでこんなに悲しいんだ。

わからない。なんでこんなに胸が締め付けられるような想いをしないといけないんだ。

……もう、やめよ。深く考えるのは止めてふて寝しよう。そうしよう。

ちょうど周りは見渡す限り大草原。吹き抜ける風に太陽の暖かい光は日向ぼっこには丁度いい。さっさとお昼寝でもしよ。

……そう言えば、あの九尾。名前が無かったな。流星に遙か格下の私名前を付けるのはどうかと思っただけ……コーンって鳴くのが可愛かった。だから、コン。紺コンって名前を付けてあげたかったんだけど……もう、関係ない話……か……

あれから数日後。私は大陸の地を発った。

あの地にいると無性に悲しくなって、それがなんだか辛くて、私は心機一転して故郷の大陸から離れた。

目指すは新天地。なにやら東の海の向こうには大陸よりかなり小さい島があるらしい。私はそこに向けて足を動かした。

久しぶりに乗った船は快適だったと言いはる、酷いものだった。荒れる海、船の乗り心地は最悪、長い航海故の食料問題も無視できない。

人間が渡来する船に乗り込んだはいいが、最終的に私以外の人間は死んでしまった。

そうしてやって来た島は意外と大きかった。島、と言うから小さなものを想定していたのだけど、着いてみれば特に大陸の光景とまったく変わらなかった。

だが全体は変わらずとも見慣れない光景は多々ある。人々の文化

や、その土地の植物。新しい土地と言うのは知らないものが沢山あるからワクワクするものだ。

これだから旅は止められない。

しかし新しい土地に来てやはりと言うか必然と言うか、困ったことが一つ。この島(国?)の言語が全くわからないのだ。

大陸同様、漢字を使うのは同じなのだが、独自の文化に発展したのかかなり違う言語が使われている。これでは何もわからない。

妖怪と言えども、言語は大切だ。言語ことばと言つて、言葉には大きな力が宿ることもあるくらい、言語は大変重要なことである。

さしあたって、当面は勉強から始めなければ。

「おぎやあー！ おぎやあー！」

「はあ………お腹でも空きましたか？」

やはり知識を得るには、それを与えてくれる者を得なければならぬ。先達の者に教えを請う以外にやり方などない。それは文化は違えど同じなのだ。

「あうー」

「はい、おねんねの時間ですね。わかってます………全く、いくら村長の子供とはいえ、こんな気持ちの悪い………」

「あうあー」

ちなみに、おわかりいただけているだろうか？ 私は今赤子の面倒

を見ているわけではない。じゃあ何をしているか？ 言わせんなよ恥ずかしい。

………はい。そうです。私が赤子になっています。

いやー。これも妖怪の神秘ですかね(\*・ω・)bグツ。なんと私、赤子の体に憑依しているのです。もうかれこれ千年以上は生きてるのにまさかの幼児プレイ。最高ですね。

とは言え、私は別にこの赤子の身体を使ってどうこうしている訳ではない。むしろ逆。私はこの赤子に憑り付いただけで何も出来ない。



この赤子にも意思はあるし主導権も赤子にある。私は本当にただこの赤子に憑り付いているだけだ。

何故こうなったのか。それは数ヶ月前までに遡らなければならぬ。

いくら言語の違いや文化の違いがあろうと私は変わらない。何時ものように村や都市に繰り出してはお酒や食糧を盗むだけ。

そんな日課となった不法侵入の折りに、ふと私は導かれるようにとある村の大きな屋敷に入った。

その屋敷は盗みには丁度よく、出産を間近に控えた女性がいる家だった。その為、家の者達は常に忙しく動き気配を消している私に全く気付かない。

これはありがたいと思い、私はすぐに食糧のある倉庫を探そうと思っただが。私はとある赤子を視界に入れてしまった。

その赤子の頭になんと、小さい角が生えていたのだ。

まさかの同族の誕生である。しかも種族の違う人間と人間の間で生まれ落ちた。なんと珍しいことか。

私は思わぬ出来事に遭遇して少しばかり舞い上がった。何せ鬼の誕生だ。同じ鬼として喜ばない訳にはいかない

私はその顔をよく見ようと赤子を注視し……そして気付いてしまった。

この赤子は駄目だ。長く生きられない。そう気付いてしまった。

私は鬼であるが仙術を扱う異端の鬼だ。だからこそ鬼の事を熟知した上で、鬼の生命の気を敏感に感じる。

もうこの赤子は死ぬ。そうなってしまった原因はわからない。人と人の間に突然変異で生まれた故なのか、それとも何処の誰かの作為的な物なのか、もしくは単純に環境なのか。

現状ではわからなかった。

加えて可哀想なことに、この鬼の赤子は今誰にも見向きもされていない。多分、角が生えているせいで忌み子扱いされたせいなのか、それともこの子以外にもう一人双子の赤子が産まれかけている為に単純に手が回っていないか。

放っておけば今日中に死ぬ。

鬼とは生命力の高い生き物だ。鬼との子を設けない限り、鬼の出生は基本的に、劣悪な環境か自然災害に人々の思念が合わさって生まれる。その為、鬼はどんな状況でも生きられる生命力の高い者が多い。しかしこの赤子は違った。

生命力は著しく低く、誰の助けもなければ確実にこのまま死ぬ。生きるのが辛く、苦しい程に弱い。

この私のように。

私の決断は早かった。

この鬼の赤子を助ける。この身体に憑依し、仙術で私の気を常に送り続けて健康を維持させる。出来ない筈はない。私は普通の鬼と違って弱いため、本人への抵抗も少ない。更にこの子は同族故に親和性も高い筈。

私はすぐにこの赤子に憑り付いた。

「うー」

それ以降赤子は何の病気に掛かることもなく健やかに育っている。それでも身体が丈夫だとは言えないが、後数年も経てば身体もある程度丈夫になり、私がいなくても生きていけるようになるだろう。

だがやはりと言うか……この子を取り巻く環境は決して良くない。

その最たる物の一つがこの角。人には決してあり得ない、額に生えた二本の角が原因で忌み子として周囲から煙たがられている。

救いなのはこの村の村長の子供と言う立場か。一応、最低限の扱いは受けている。しかしそれ以外は特に何も無い。

乳は与えられるがいつも双子の弟の後。大陸に比べて質素な食生活のせいか乳母の乳の出もそこまで良い訳でもないから、満足な栄養を得られていない。

衛生面も良くない。老廃物はそのまま、身体も二日に一回しか洗わない。

他にも色々足りていない。この子の両親もこの子が気味悪いか、扱いもやはり忌み子のそれ。名前すら忌むべき名前を使われている。

いくら健康になったとは言え、それは人間の赤子程度に良くなったくらいだ。このままでは死んでしまう。

「ご飯の時間ですよ〜」

「んやー」

その内、私はこの赤子の身体から離れて彼女の世話をしようになつていった。普段はこの子の中にいるが、誰もいないときは外に出て乳母の代わりを行う。それ以外方法は無かった。

不幸中の幸いと言うべきなのか、この子は誰にも見られていない。誰もがこの子を忌み嫌い、居ないものとして扱う。この子にとつては悲しいことだが、育てないといけなくなった私には都合が良かった。

「華扇、華扇。いない、いない、ばあー」

「ぶーー」

「ふぎやつ！ ……だ、駄目ですか。いないないばーは嫌いですか」

この子の名は華扇。私が名付けた立派な名前だ。

華扇は私に良くなつた。拙いながらに色々彼女の相手をすれば、私のやることに華扇はいちいち反応を返してくれる。

……あれ、気のせい？ 私が構われてないか？

まあ、あれだ。つまりは華扇はとても可愛いと言うことだ。このクリクリな目も、ほにやほにやした顔も、伸び始めてきたピンクの髪も、ニョキッと飛び出た小さい角も。全てが可愛い。

何故人間達はこの可愛さがわからないのだろうか。

「華扇ー。ほら、酒呑ですよ。しゅ、て、ん」

「しい……て」

「しゅ、て、んー」

「しいてー」

舌つたらずな声で呼ばれるのが堪らない。最近は（ry  
あれ？ この考え、前もしなかったっけ？

まあ、いい。華扇は私が思っていた以上に順調に育っていった。一歳を超えた辺りでヨチヨチ歩きも出来るようになったし、言葉も少しだけ喋れる。限りなく健康児と言えるだろう。

しかし順調な成長とは裏腹に、この子を取り巻く環境は一向に良くならない。

この村はそこまで土地に恵まれた場所ではなかった。畑の約半分が駄目になるのは当たり前。飢饉の憂き目にもあった。

が、毎年不作といえるこの村でも今年は更に不作の年になってしまった。

ちなみにこれは何が原因があるからと言うわけではない。仙術で調べたが地脈も安定している。特に呪われていると言った『負』の影響も見えない。

強いて原因を挙げるなら自然が原因だろう。まだ一年目なのと年間を通してのこの地の天候は知らないが、私から見ても今年は雨が多く、駄目になる田畑は多かった。

一年目はまだ良かった。しかし、それが2年間連続で起これば村は立ち居か無くなる。既に備蓄はなく、次の年も飢饉にあえば、村の全滅すら危ぶまれる。

だが相手は自然。彼等がなんと願おうと意思のない自然相手には何の意味も持たない。

運がなかった。仕方のない事だった。そう諦めるしかない。

それでも、人間とは何かと理由を付けたがる生き物だ。居もしない龍神を奉り、その年が不作だと御供え物が悪かったせいだと理由を付けるように。

不幸なことがあればその理由を作りたくなる。仮に証拠も根拠も無かろうと、その不幸を何かのせいにしたくなる。

「あの忌み子のせいだ」

華扇が5歳を迎えてしばらくの頃だ。切っ掛けは使用人の些細な言葉だった。

忌み子。殆ど忘れ去られた存在となっていた華扇が、その一言で存在が明るみに曝された。

村は連続の不作で元気がなかった。負の感情に傾いていた。だから、華扇の事を思い出して以降、誰もが華扇のせいと理由を付けるようになった。

やれ、土砂降りのように雨が降り続けるのは忌み子のせい。

やれ、病人の数が日に日に多くなるのは忌み子のせい。

華扇に元々入る梓が無かったが、居場所すら無くなっていった。

「しゅてん……みんな、怖い」

「そうですね……」

特別何かされたわけではない。だけど、日に日に高まる華扇への言葉は酷くなる一方。

「ちちうえも、ははうえも。みんな、わたしをやな目で見てくる」

彼女の肉親である父親と母親も、彼女の頭から飛び出た角を見るたびに華扇を睨み付けて暴言を吐いていた。

今の彼女に誰も味方はいない。知り合いも友達も、親も、誰も。

わかっていたことだ。いや、わかりきっていた事だ。鬼になるものは皆忌み嫌われる。大陸の方でも人里生まれの鬼はこういう扱いを受けるのだ。

むしろ、それを乗りきってこそ鬼は一人前と言われる。

「しゅてんは……」

「……………」

「しゅてんは、私を見捨てないよね？」

さて。どうするべきか。

一人前の鬼として育てるなら、ここで私は華扇を見捨てなければならぬ。それが先達の鬼としてやるべきこと。

私はもう華扇を人間として育てるつもりはない。それこそ彼女には酷だから。いつか鬼として一人でもやっていけるよう育てるつもりだ。

だから、私は無意識にだろう伸ばしてきた華扇の手を振り払った。

「あっ」

そして――

そのまま彼女の小さな身体に抱き付き、ぎゅううつと抱き締めあげた。

「大丈夫。いつまでも私は貴女の味方ですよ」

当ったり前じゃないですかあああああ!!!　こんな可愛い子、今更見捨てる方がどうかしてるわ!!　て言うか、幼い頃から育ててたから正直私の愛娘だと思ってます、はい。

駄目ですかね？　私が母親じゃ駄目ですかね？

ああ、華扇。華扇、可愛いよ華扇。ペロペロ。

「大体、貴女を見捨てるなら最初から面倒を見てませんよ」

「ふえ……しゅ、てん……」

妖怪と人は決して相容れない。妖怪は人に求め、人は妖怪を拒絶する。今も昔もそれは変わらない。例え未来であっても。

この子がある程度成長したらこの村を出よう。この島国を旅し、華扇に色々な景色を見せよう。

私は心にそう誓った。

## 初めて酒呑がマウント取れた話

「おい×！ その器を俺に寄越せよ！ おいお前等、そいつを押さえ付けろ！！」×

「いや！！ 離して！！ 大体私はそんな名前じゃない！ 華扇つて名前があるの！」

やあ皆（・▽・）ノ。元気にしてるかい？ 私は元気だ。どのくらい元気かというと、目の前の存在達を一片の欠片も残さずこの世から消し去りたいと思ってるくらい元気だ。

あ、ちよつ。ゴラあくソガキ共！！ うちの華扇にその汚え手で触るんじゃねえ！！ ぶち殺すぞ！！

「はん！ 何がカセンだ。お前は××だろ………綺麗な装飾だな。こんな丁寧な木彫り、見たこと無い」

「いーやー！ 返して！！」

華扇が生まれて十年の月日が経った。未だに彼女を取り巻く世界は厳しく、村の住人からの風当たりは強くなる一方だ。

それは大人だけでなく子供からも例外ではない。

子供とは良く言えば素直で、悪く言えば影響されやすい。それでいて我儘で、残酷。いや………理性を持たない、野生動物に近い。

大人が何か否定すれば子供達はそれが己より弱いものだと考える。

子供は本能的に自分より弱い存在を識別し、自分の方が上だと自己主張を始める。

好き嫌いとかそういう感情的な話ではなく、野生に近い本能がそうさせるのだ。

今のようになら、華扇は村の子供達から虐められている。しかもそれはまだマシな方。実の双子の弟はそれに輪をかけて華扇への虐めが酷かった。

それでも普段の華扇は上手くそれらを受け流している。華扇は他の子供に比べて頭が良く、悪さをされるとわかっていればそれに対処できる処世術を身に付けていた。

でも今の彼女は違った。数人の子供達に組み伏せられて涙を流しながら、それでも奪われた『枡』を取り返そうとしていた。

その枡は確かにこの島国では類を見ない、木彫りが施された綺麗な枡だ。だけど、それだけ。

何故それほどまでに必死になってそれを取り返そうとするのかわからない。普段の彼女なら事前に大事なものは隠し、それでも盗られたら諦めるだけの分別も付いている。大人に近い思考を持っていた。

なのに何故、今更になって子供のように喚き散らし取り返そうとするのか。それは

「それは酒呑から貰った大事なものの！ だから、お願いだから返して!!」

「だからしゅてんて誰だよ！ 知らねーよそんなやつ！」

それは、私が先程華扇に渡した枡だからです。

あああああああああ………やっちゃったよ馬鹿野郎。なんで私はいつも変なところでミスするかな。そのせいで尻拭いを華扇がする嵌めに………ごめんよおおお!!!

それは、ここ数年お酒を飲んでいなかった私の状態に起因する。

華扇に憑り付いている時は実体を持たないからお酒は飲めないし、華扇の相手をしている時に目の前でお酒を飲む訳にもいかない。

でも、禁酒は長く続く訳じゃないのさ。我慢にも限界があったんだ。

最近、華扇も自由に動けるようになった。そんな彼女にそろそろ鬼として盗みの一つくらい覚えさせようと、食糧倉庫に行ったわけさ。

盗みは順調だった。華扇は一人でどの食材がバレずに簡単に盗めるか考えて盗んでいた。いつもはそれを私がやっていたから、それを見ているだけとなった私は暇になってしまった。

それが間違いの始まりだ。暇になった私が特に考えず辺りに目を凝らしていれば、特に意図せずお酒を見付けてしまった。



根っからのお酒中毒者である私は迷わず手に取った。何せかれこれ五年はお酒を飲んでいない。日に五本はお酒を空ける私が我慢してきた分、躊躇いなくそれを手にするのは仕方のないことだった。

本邸から外れた離れの倉に戻った私達は、見つかる前に早速盗んだものを食べ始める。

華扇はその生まれ故か上品に食べ始めたのを横目に、私は久しぶりに秘蔵の盃を取り出した。

「ふふふっ」

「酒呑、どうしたの？ とてもご機嫌なようだけど」

盗んだ酒を嬉々としてその盃に注いでいる私を不審に思ったのだろう。なにせこの時ばかりは鉄面皮の私でさえ頬を緩める瞬間なのだから。

「ふふっ。華扇には教えてあげましょう。この盃にはね、特殊な力が備わっているのです」

「へえ。どんな？」

「なんと、この盃に入れたお酒を大変美味しく変化させる力があるんですよ」

そう、この盃は注いだお酒のランクを上げる効力を持っている摩訶不思議な盃。これも瓢箪同様、気付いたときに私が持っていた物の一つだ。愛用している盃と違って、これはその効力故に普段は滅多に使わない。なぜならこの盃の欠点として、入れたお酒の時間が経つに連れてランクが落ちていくと言う面倒な制約があるから。

ゆっくり飲みたい私としては、この欠点はいただけない。

でもまあ、今日は久々のお酒だ。ご褒美として使うのも悪くない。

私は入れたお酒を早速飲み干し、その味を堪能する。

「ふーん。すごい物なの？」

「凄い物です」

「大事なもののなの？」

「ええ。とても大事なものです」

華扇の言葉に特に気にした事を考えずそう返した。

「……じゃあ、これは？」

華扇は他にも私が持っていた物が気になるのだろう。盃を懐から取り出す時に手前にあつて邪魔だったから取り出しておいた一つの枡を華扇は私に問いただしてきた。

「ん？ その枡は、なんだつたか……ああ、思い出しました。それはお酒を計るときに使われる物なんです。それにも特殊な力が備わっていますね」

「……大事なもの？」

「ふむ……私は使ったことはありませんが、『茨木の百薬枡』と言つてかなり貴重な物だった筈ですよ？ 確かその枡に入れたお酒を病や怪我に効く良薬に変える力があつた気が……」

「そうなんだ……」

返事をしながらその枡を眺める華扇。なにやら気に入つた様子で、ずっとその枡を手にとって眺めている。

「……気に入りましたか？」

「凄く綺麗……」

「……よかつたら、あげましようか？」

「いいの!？」

その時の華扇の食い付きは凄まじかつた。目を輝かせて此方を見つめる様子から、相当気に入つた事がわかる。

「え、ええ」

「やったあ!!」

普段は大人しい華扇が珍しく子供のよう喜んでいてのを見て、私も嬉しくならなかつたと言つたら嘘になる。

実際私は使わないから華扇に渡した方がいいだろう。この子は鬼と思えないほど体が弱いし。

そう適当に考えて渡した枡が、まさか華扇の重石になるなんて思わなかつた。

華扇は食事の間、ずっとその枡を手にかけていた。と言うか、その枡に飲み物を入れて飲んでいた。

何が嬉しいのかその杓を何度も使い続け、遊んでいた。

そんな可愛い華扇に目を奪われていたから、私は自分のご飯を食べ終わるのが遅くなってしまった。

本来なら既にご飯も食べ終えていた頃。未だに華扇の可愛い光景を肴に一杯やっていた。

そんなときに奴等はやって来た。そう、華扇の双子の弟と村の子供達。最近、華扇にちよっかいを掛けに度々離れの倉を訪れる彼等が、間の悪いことにやって来てしまったのだ。

気配を感じた私達は慌てて食べていた物を風呂敷に詰め込んだ。その風呂敷は私が仙術で編み出した風呂敷だ。その風呂敷には包んだ物と一緒に小さくなるという術を編み込んである。私が色んな道具を持っているのもこの術のお陰である。

そんな便利な風呂敷で小さくした食糧やら何やらを隠し、私が華扇の中に消えたのと同時に奴等が入ってきた。

そこからは普段と変わらない筈だった。華扇は何時ものように彼等のちよっかいをのりくらりと躲していた。

そんな余裕のある彼女に華扇の弟とその周りの子供が悔しがっていた時だ。目敏くも彼等は華扇が持っている杓に気付いてしまったのだ。

そうして冒頭の出来事が起きたわけである。

はいそうです私の責任です。私がお酒なんて飲まなければ、ゆっくり楽しんでなければ、こんな事態にはならなかったんです。

………ごめんねええ華扇さん!!! 私が悪かった！ 全部私がいけないの！ だからその杓は諦めていいから！ 私が後でそいつらから盗んで取り返すから！

「いい加減に、しろ!!」

「あうっ!!」

はっ？ このガキ、とうとう私の可愛い可愛い華扇を殴りやがった。

私は我慢の限界だった。もう知らない。知ったこっちゃない。い

くら温厚と言われた酒呑様でも堪忍袋の緒が切れたつてもんよ。

「おい、人間」

私は倒れた華扇を庇うように顕現する。すると、突然現れた私にガキ共は驚いたまま身体に動きを止めていた。

「しゅ、酒呑?！」

「な、なんだよコイツ……………ど、どっから湧いて出てきやがった……………」

「私の名前は酒呑。よくも私の華扇を殴ってくれましたね……………その罪、身をもって味わうがいい」

いくら私が最弱な部類の小鬼とは言え、それでも鬼。ガキ共を大人げなく泣かせるのに苦勞はしなかった。

「ひぎやあああ!!」

「角付きだ！ やっぱり××も角付きの仲間だったんだあ!!」

拳骨を食らった子供達の泣き叫ぶ声の外まで轟く。私は泣いて逃げ出した彼等を放置して華扇が殴られた箇所を診ていた。

だがその間に騒ぎが伝わってしまったらしい。外の様子が騒がしくなり、気になった私は外に出てしまった。

外にはこの村の大人達がワラワラと集まり、私を取り囲んでいた。「で、出てきたやがった!! 子供達が言っていたのは本当だったのかっ」

「くそつ、何故『角付き』がこの村にいる!」

「共にいるのは××……………やはり、奴が手引きしたのか。だから早くに処分すれば良かったとあれほど……………」

大人達は私と華扇に向けて武器を構えるやいなや、怒鳴り声と共に敵意丸出しで威嚇してきた。

しかし武器もその虚勢も鬼の前では何の意味も持たないことを理解しているのだろう。大人達は酷く緊張した様子でそれ以上何か仕掛けてくることはない。

敵意と共に明確な畏れを感じた。

「……………」

……………ちなみにだが、意外と私はしっかり状況判断を出来ているよ

うで結構焦ってる。

突然武器を持った人間が私達を取り囲んでいるのだ。普通、ビビる。て言うか、普通に怖い。

いくら人間とは言え、武装した集団だ。怖くないわけ無い。

アイエー！? なんで武器向けてくるの? 止めて! 私は無害な鬼よ!?

と言うか、普通に不味い状況です、はい。まだ私一人なら何とかなる。流石に千年間も生き続けていれば、戦い慣れていない村人が武器を手に持ち襲い掛かってきたとしても、それに対応できるくらいの護身術は身に付けているさ。

でも、華扇を護りながらとなると話は別なのだ。うん。

私には他の妖怪が持つようなブツ飛んだ能力は持っていない。仙術を扱うが、私が未熟なせいかな敵を薙ぎ倒せるような術はないのだ。だから、今戦闘を望んでいないのはむしろ私の方なのだ。

膠着状態。敵は私を恐れて近寄っては来ない。だからこそその恐怖を利用して、私は強者の姿勢を保つことでこの状況を打破できる作戦を考えねばならない!!

そんな折にようやくと言うべきか、集団の中から人を割って前に出てきた男が一人。多分だけど、私にとって救いの交渉人である。

「そんな鬼よ。要件を聞かせていただきたい」

「ち、父上……」

この村の代表である村長、つまり華扇の父親だ。

武力ではなくちゃんとした話し合いが出来そうなことに助かったと思うのと……同時に、「はあ……やってしまった……」と言う思いが渦巻いております。

取り囲まれた時から理解していたが、随分事が大きくなってしまった。もう、以前のように華扇がこの村で生活するのは不可能に近い。

ああ……ごめんねえ華扇。本当にごめん。これは貴女が決めるべきことなのに、決める前に私が普通を破壊してしまった。

「……この娘は我が同族です。此度のそちらの暴走を私は良しとしま

せん」

「……………なるほど」

私は強者の姿勢を崩さないために強気な物言いで話した。もし弱いことがバレたらたちまち襲われちゃうからね。

ただ流石村の長と言うべきか、私の強気オーラ（見せ掛け）に怯えを一切見せない。そればかりか、華扇の父親は周りの泣いている子供達とボロボロになった華扇を一瞥しただけで事態を把握したらしい。「ならば、その鬼子を連れて疾く去るがいい」

「ほう……………鬼相手に随分上から物を言うんですね？ わかつていますか？ 自分達が今どのような危機に面しているのかを」

「……………仮にもし貴様が我々の村を襲うなら、それは最初にやっていただろう。それをしないと言うことは、それが出来ないと言うことだ」……………ババババレてる!! 私が弱いことにこいつ、気付いてやがる!! 把握能力が私の予想を上回り過ぎてるんだけど！

あ、でも攻撃はしてこないのね？ マジか。ラッキー。

……………まあ攻撃してこないのは良いけど、その代わり別の問題が出てしまったな。

よりにもよって、連れて去れ……………か。

どうやらこの男は完全に華扇を捨てる気である。わかりきっていたことではあるけどさ。鬼である私が彼女の味方に付いた時点で、彼等にとって華扇は鬼と変わらない。

元より忌み子として扱われてきた華扇が、完全に敵対する位置に付いたのだ。今更この村に留めておく気は無いだろう。

でも、本当にそれでいいのだろうか？ 華扇にこんな形で村を出ていかせて本当にいいのだろうか？

いつか出ることはないわかっていたが、それはもつと穏便に、成熟した大人になってから村を出た方が良かったんじゃないか。

「……………」

私は黙ることしかできなかつた。華扇を連れて出るべきなのか、それともコイツらを脅してもう少し華扇をこの村に置いておかせるべ

きなのか。

私には決断できない。それをするのは華扇である。だけど、まだ華扇は決断も出来ないくらい幼い。ならば私が決断してやるか？

駄目だ。堂々巡りだ……………。

「父、上……………」

「華扇……………」

「××か……………」

私が何も言えず悔しがっていたら華扇が私を制するように前に出てきた。

えっ？ どうしたの？ もしかして実の父親に暴言でも吐くのだろうか？ そういえばさつき村から出てけ的なことを目の前で言われちゃったし、流石に怒ったのかな？ それとも、捨てられたことが悲しくて……………黙らずにはいられなかったとか……………？

……………うわああああ!! 華扇、ごめんよおおお!!

「私はこの村から出て行くべき……………」

「そうだ××。貴様は生まれたときから忌み子。故に、村から出るのは必然だった。むしろ、ここまで育ててやった私の恩情に感謝するといいい」

む……………今のはカチンとキタゾ。何が生まれた時から忌み子だ！

華扇はこんな可愛いのに！ むしろ、お前の息子豚みたいに太ってるけど育成失敗しちゃったんじゃない!?

やーい。お前の息子家畜顔く。

「そう……………」

「華扇……………」

耐えるように肩を震わせて俯く華扇。地面に顔を向ける彼女の感情は幾許か。その表情は怒っているのか、泣いているのか。

あまりにも痛ましく見える華扇に、私は思わず彼女に手を伸ばして抱き締めようとして。

「なら、私は人間の私を捨てる」

それよりも前に、いつの間にか取り返したのだろう杵を手に持ち、これまたいつの間にか注いだのだろう並々入ったお酒を一気に飲み

干した。

「……………へ？」

私が止める暇もなく、お酒を飲み干した華扇。

ゆっくりとその手に持った枡を戻し、顔を正面に向ける。

ようやく見えた華扇の横顔。頬はお酒のせいか上気し、心なしか彼女の顔付きが大人びて見えた。

「……………えっ？」

その時、私たちの周りの空気が変わった。

寒気が辺りを支配し、まだ太陽も出ている筈なのにこの場所だけがとぼりが下りたように暗さが増す。

周りの村人達も突然の事態に慌てふためいている。

しかしそんな事に一切興味も示さず、華扇は拳を握り締めると何故か地面に向かって振り下ろした。

直後、地面が割れた。

「……………はっ？」

大地が割れた。比喻ではなく、こうパツカリと固形の脆い物が割れたように大地が引き裂かれたのだ。

「「わあああああああ!!」」

その場にいた物達は堪ったものではない。何せ立っている地面が割れたのだ。幸いと言うべきか、亀裂の中心にいた人間以外は地面が揺れる程度の被害しかなく、立っていた者もふちに捕まることで何とか落ちることを防いでいた。

「……………ふえー…………」

わたし？ わたしはねえー…………華扇の後ろで尻餅付いてるよ。

腰が抜けたんじゃないかたれ！ だって目の前の現象もそうだけど、地面が揺れたんだよ!? こう、グラグラと!! ひいひい地震怖い！ 大陸にいた時はこんな大きな揺れは滅多に無かったから尚更怖い!!

「私は、もう××じゃない。私の名前は華扇…………茨木 華扇だ」

混乱の中、華扇はただ一人仁王立ちしていて慌てる実の父親に向けてそう宣言していた。

その顔は病弱な様子など一切ない、強さの象徴とも言える真の鬼の



姿であつた。

あれえー？ えー…つと……。

おかしいな？ ここは私が悲しむ華扇を慰めてカッコよく人間達に啖呵切るところじゃないのお？

え、違う？ あっ、そうですか……。

## とある桃鬼の独白

生まれた時から、私は私に住むもう一人の存在を認識していた。こう言う又何だか私の中にもう一人の私がいるみたいに聞こえるけどそうじゃない。正確には私の中に一人の鬼が住んでいたのだ。それに、鬼と言っても別に怖い存在じゃない。それどころか優しくて親しみの籠った……家族のような存在だ。

彼女の名前は酒呑。私の大切な鬼である。

酒呑は不思議な存在だった。いつもは私の中に住み、私に何かしら話し掛けてくる。でもたまに私の体から出て本来の姿に戻ったら私の世話をしてくれる。

酒呑以外の存在を見たことがあまり無かったから見た目の良し悪し等は詳しくなかった。それでも、彼女の姿は普段私の中にいるのが勿体無いと思えるくらいに綺麗だ。

仄かに光を帯びた金色の髪も、綺麗な碧い瞳も。額から伸びた二本の角も。私の衣服とは全く違う煌びやかな衣も。その見た目に劣るどころか、美しさをさらに引き立てる気品の良い所作も。

全てが私達人間と違う。汚らしい私達と違って触れることすら躊躇わせる神聖な存在。一目で格が違うとわかるその存在感。

そんな彼女を私はずっと見ていたいと思った。そんな彼女に私は憧れたのだ。

酒呑はあまりにも人間離れしている。たまにやって来る世話係の村人達と比べても明らかに彼女は異質。だから酒呑が私の身体を使つて、村の住人から身を隠していた事も疑問には思わなかった。

むしろ、私だけが酒呑を見ることができる人間だと思っていた。例え来る人皆から嫌な目で見られようと、羨ましがっているのだと勝手に思い、幼いながらに優越感を覚えていた。

酒呑と同じ、それでいて周りの人達にはない頭に生えた角。この角こそが私の誇りだ。

酒呑に憧れた私は幼いながらに彼女を目指した。彼女のようにな

りたいと、酒呑に似た私だけが彼女に近づける唯一の人間なんだと。だから私は彼女を指摘した。

だけど、五歳を過ぎた頃か。初めて会わされた両親と言う赤の他人に連れられて村の人達の前に立たされたとき、初めて人と言うモノを理解し、私の立場を正しく理解させられた。

彼等は私と同じ存在ではない。私は彼等と全く違う生物だと。

私を見て畏怖する目。敵意の目。哀れみの目。様々な感情が私に向けられていたが、一つだけはつきりしていたことが一つ。まるで別の生き物を見るような目で私を見ていた。

形は同じだ。手足はあって、鼻や口や目もある。髪もあれば耳もある。

でも彼等に無くて私にはある、頭に生える角。たったこれだけが、明確に私と彼等が違うものであると理解させられた。

その時に初めて会った実の両親達も、やはり違うと思った。明確な血の繋がりなど感じなかったし、むしろ酒呑に親と言われてもそれがどういった存在か理解できなかった。

周りにいる者、皆が違う。

私はこの中でただ一人の異物。幼いながらに本能がそう理解した。そう認識したからこそ、私は世界が怖くなった。

その日に何があったのか知らない。けれど私はいつものあの倉に押し入れられ、外に出ることを禁止された。酒呑が何か怒っていた様子だったから、あまりいいことでは無かったのは確かだろう。

お世話をする人は次第に監視する人に変わり、雀の涙程の食事も渡されなくなってしまった。酒呑が食料を持ってきてくれなければ今頃私は餓死している。

村の人達は私を殺す気でいた。いや、居なくなれば良いと思っただけかもしれない。殺したいなら直接私を殺せばいい。そうなのは彼等が心の底では人外である私を恐れたから。

殺したいというより、この村から出ていかせる。それも直接ではなく、自主的に。餓死で死ねば儲けもの。そうでなくとも、いつかは出

ていく。

私はこの村の誰にも必要とされていなかった。私は村の住人になれなかった。仲間はいなかった。

世話係のあの目。あれは羨んでいる目ではなくて、私を蔑んでいる目だとこの時になって初めて気付いたのだ。

それに気付いた時、私は何よりも酒呑に見捨てられることを恐れた。

今までは酒呑がいれば良いと思っていた。他の人間は要らなくて、酒呑さえいれば私は構わないのだと。

でもそれは本当は逆で。

村の人達から見れば、私こそが要らないもののだと認識させられた。私はこの村では一番の弱者。むしろ忌むべきものだ。

酒呑以外いない………：必要とされていないと気付いて、この関係が永遠のもので無いと理解してしまった。

酒呑は私と同じように角はあつたけど、私に出来ないことの数々が彼女には出来た。

私は酒呑みたいに飲まず食わずで生きられない。一応、酒呑も食べ物食べているけど、それは極たまに………ある種の娯楽で食べてるようだった。

私は酒呑みたいに妖の術を使えない。酒呑曰く仙術と言って、全く珍しいものでは無いらしいけど、とにかく色んな事をして私を驚かせる。

明らかに私とは違う。私と違って一人で何でも出来て、他の者から一切の協力も必要としない、強く孤高な存在。

私と一緒にいるのは単なる気紛れか、それとも同族だからか。

多分、酒呑に取ってみれば私は愛玩動物のようなものなのだろう。偶々鬼の見た目をした私がいたから、偶々飼ってみた。それだけの存在。

そんな上位者の彼女が私を見捨てた時、いよいよ私は本当の独りぼつち弱者になってしまう。

人間は言わずもがな、酒呑にも鬼と言う括りがある。酒呑以外に見たことはないが、この村の外には鬼がいっぱいいるらしい。

酒呑は私を鬼だと言う。でも私は鬼の姿ではあるが、彼女のように優れた力を持っていない。何でも器用にこなせる訳でもなく、色んな知識を持っているわけでもない。

彼女のように鬼だと言う確信が持てなかった。むしろ全く人と変わらない、弱く哀れな存在だ。

もし酒呑が私を鬼だと勘違いして拾ったなら。私が酒呑が思っている華扇と違っていたのなら。

それに酒呑が気付いた時、私は見捨てられる。訪れるかもしれない未来がとても怖かった。

私は見捨てられないように、とにかく酒呑の言うことを聞いた。力では役に立てない。元々鬼として完成している酒呑に、力の弱い私が何かしたところで足手まといだから。だから知識でいつか役に立つ為に、色んな知識を酒呑から聞いて覚えた。

将来、この村から出ようと彼女は言う。その時に彼女の足を引っ張らないよう、せめて知識だけは彼女と同じ位置に居なくては。

知識を求め続けた。この島では使われないらしい遠い大陸の文字を学び、酒呑が持つ文献を頼んで読み漁り、わからなかった時は彼女に聞く。

そうして知識を集めて、私は自分の状態について一つの事実気付くことができた。

私は鬼だ。いや、鬼擬きと言えいいのか。本来ならあり得ない、人から産まれた鬼であった。

鬼とは基本、自然発生するものだ。亡者の怨念や動物の亡霊。それらが集まり生まれる。人の身で鬼になるものも希にあるが、それは積もり積もった生物の念が合わさって変化したもの。

そこから考えると産まれ段階で私はあり得ないのだ。突然変異

で生まれた私は、鬼としての様々な機能が備わっていなかった。

そして次に名前だ。名とは重要なもので、その存在のあり方を指す。名によって存在の格と言うものが変わるほど、名前は重要だ。

昔から存在そのものを表し、力が与えられる名前を真名と呼ぶ。

妖怪の真名の殆どが生きていた頃の名前だ。そこから妖名が名付けられ、長い年月を掛けて畏れが集った妖名が真名を上書きして力を付けていく。

ここで私の産まれが関係してくる。私は生き人としての名が無かった。だから、名付けられた妖名が強い影響を与える。

×。つまり、名も亡き者。居ない者。

この名が私の力を縛る原因。

私はこの事実気付いた時、自分の産まれを呪った。何故、人の子として産まれてしまったのだと。私は××なのだ。彼女から貰えた華扇と言う素敵な名前ではなく、××なのだ。

一度付けられた名前は早々変わらない。いくら酒吞が強い鬼であろうと、世界が認めたものを彼女一人で上書きすることは出来ない。

方法は無いのか。この名前さえ変えることができれば、私は彼女が付けてくれた名前である華扇として生きられる。鬼として、名付けられた者として、名実ともに彼女の………になれる。

文献を読み漁り、何か無いかと遮二無二探した。寝る間も惜しんで探して体調を崩し、酒吞を怒らせてしまうくらいには探した。

そして私はどうとうその方法を探し当てた。なんでも、酒を注ぐだけであらゆる傷や万病、果ては呪いなどにも効く薬に変える枅があるらしい。

そして飲んだものを鬼に変化させる副作用があるのだとか。

私が探しているものはこれだと思った。

名前の効力は謂わば呪いと同じだ。つまり、呪いにも効力のあるその枅の力を借りれば、一時的には言え呪いを撥ね返せる。私はその瞬間名前による縛りから解かれる筈。

突然変異の身体も、この枅の副作用が解決してくれる筈。

その枡は何処にあるのか。

曰く、伝説の鬼神が数々の宝具を持ち、その一つにその枡があるらしい。

私は酒呑に鬼神について聞いてみた。彼女は知らないと言うが、私は直感だけど酒呑は知っているとと思って根気よく聞いた。

何度も何度も尋ねてみると、ようやく酒呑は洩るようにだがその伝説について話してくれた。

「鬼神ですか………何度も言うように、私はあまり詳しく知りませんね………ただ、大陸にいた頃は何度か聞きました。曰く、神出鬼没。お酒をこよなく愛し、盗みを働く。それでいて腕っぷしは最強。昔はその力で大陸を支配していたとか………。眉唾な話ですがね。少なくとも、私は会ったことはありません」

鬼神について話していたときの酒呑は、鬼神そのものを嫌っていそうな様子だった。

今思えば、あの時の彼女はただ恥ずかしがっていただけだと気付いたのは、村を出るときになってからだ。

そして、あの日。村を出る切っ掛けになったあの事件。

それはいつもの日常だと思っていた。早く大人になるために食料をいっぱい取って大きくなろうと沢山食事を取っていたいつものお昼時。

私は最初、あの枡を見て目を疑った。

酒呑が無造作に床に置いた枡。四角い木の入れ物は、外側に茨の紋様が施された見事な器だった。それと同時に感じる強い鬼気。

私が文献で見た枡の絵と瓜二つだったのだ。

あまりにも雑に放置されていたから、最初はよく似た偽物だと思った。でも後から酒呑に尋ねれば、正に私が欲していた物そのものだ。目的の物だとわかっていても、あまりにも呆気なく見つかったしまったものに頭が追いつかなかった。震える手でそれを持てば、明らかに見た目以上の重さを感じる。

凝視し続けていたせい、酒呑に私とその柀をねだっていると勘違いされてしまった。

「ただ、そんな事が気にならないほど私はその柀が手に入った時嬉しかった。」

「もう私を縛るものは何もない。××という名前も、私を敵視する村の奴等も、実の親と語る偽物達も。」

「私の世界は私と私の酒呑が見る世界だけだ。他は全てどうでもいい。」

「酒呑から貰った名に、私を鬼に戻してくれた柀の名から新たな名を付ける。」

『茨木華扇』

「この日、私は本当の意味で酒呑の家族になれた。そして。」

「本当によかったんですか?」

「酒呑と共にあの村から出てしばらくした頃、彼女からそんな問い掛けをされた。」

「未だに酒呑の領域にまで辿り着けない私の頭では彼女の考えはわからない。だから首を傾げれば、酒呑は言葉を付け足してまた尋ねる。」

「茨木華扇……良い名です。茨と言う過酷な状況の上において尚、自分を見失わない美しき扇……あの村からも、あの忌み名からも解放された貴女にとっても合っている」

「ですが、その名はこれからも貴女に困難をもたらすでしょう。茨を越えてその頂に立とうと、その棘は深く突き刺さり、年月を掛けて貴女に再び牙を向くかもしれない……後悔とは、遅くになって突然やって来るものです。もう一度深く考えて、やり直したいことはない」



か確認することは大事ですよ」

やはり酒呑の言っていることは私には難しく、わからないことが多かった。それでも、私に後悔はない。これからもこの選択を後悔することは無いだろう。

だから大丈夫だと彼女に告げれば、彼女は「そうですか……」と感情の見えない声で頷いた。

大人になった今でも、この時の酒呑が何に対して言っていたのか理解できていない。

鬼神と言う、神をも越えた力と、森羅を理解した叡知に、数多の秘宝を手にして操る鬼の頂点。全てを兼ね備えた酒呑の考えは、私には遠く理解の及ばない次元にある。

でも私は今になって後悔している。何故あの時、酒呑の言葉をもっと深く考えなかったのか。何故、彼女の役に立とうと努力した結果、それすらも彼女の重みになっていると気が付かなかったのか。

確かに自惚れていた部分はあった。酒呑率いる自分達『妖怪の山』は最強で、何者にも負けない集団であると誤解していた。

自分達は浮かれていたのだ。どんな敵が来ようと私達鬼の四天王には敵わず、そうでなくとも酒呑さえいればどうにかなると全てを侮っていた。

酒呑が物憂げに窓の外を眺めているのも、私達と悲しげに会話するのも全て、私の……そして彼女の思い過ぎだと思っていた。考えすぎだと思っていた。

だから現状に甘えて、酒呑が語る注意に気付かなかった。

今なら思う。あの時の自分を殺してでも酒呑の言葉をちゃんと聞かせておけば良かった。そうすればこんな悲劇は訪れなかった。

私は酒呑の亡骸を抱えながら、そう思わずにはいられなかった。

## 鬼の軍勢

『倭の国』改め『日の本』にやって来て、もう九百年も経つ。

小さかった華扇は美少女から美女へと姿を変え、私を指一本で捻り潰せるくらいには強い大妖怪となった。

あの可愛かった華扇は、もういない。それがとても悲しゅうて悲しゅうて……てけてけと私の後に着いてきた愛しい幼女は、二度と見ることの出来ない幻となつてしまった。

まあでも、元気に育ってくれたことは良いことだ。人よりも病弱だったあの時の彼女よりは、私の身体を凸ピン一発で四散できる位元気があつた方がまだ育て親として嬉しい。

……自分で言つてて肝を冷やした。と言うかマジでそれが出来るから若干華扇が怖い。彼女は私にそんな事しないと信じているから平気だけど、うっかり彼女の攻撃に当たらないとも限らないので安心は出来ない。

華扇は他の鬼と違つてとても理性的だから信頼はしている。彼女は悪ふざけで殴つてくることも無ければ、下品な飲み方もしない。悪酔いも無く、絡み酒も無い。

飲み方一つすら気品を感じる華扇は、幼少の頃から勉強も沢山していた為か、今では二倍の年月を生きている私よりも頭が良い。

私の唯一の取り柄が無くなつてしまつて少し残念だけど………で、そんな華扇は最近………鬼や鬼以外の種族の妖怪を集めて組織を作つていた。

別に彼女が進んで集めている訳じゃないのだ。ただ、最近の世の中がそうせざるを得ない状況になつてきてしまつたのだ。

ここ百年で、この島の人間の数が劇的に増え始めたことがそもそも原因だ。

人が増えれば死人も多く出る。そのため、妖怪の数もここ最近でかなり増えているのだ。

妖怪は皆、私の強い者ばかり。そんな妖怪達が増えれば衝突の一つや二つでは済まない。妖怪同士の争いで負ければ消滅か服従だ。

次第に争いは戦争へと拡大し、妖怪達の戦力は一つの場所に集ってゆく。

そんな情勢の中、勢力を伸ばし続けている妖怪たちに対抗するために、華扇もまた身を護るために集まってくる妖怪達を従え、自分達だけの妖怪組織を作るしかなかった。

最強の座を狙っている訳ではない彼女だけど、今のご時世は物騒な為に少しでも味方を増やしても損は無いだろうという考えだ。

味方が増えるのは良いことだ。巨大な組織の中にいれば弱い私でも死ぬ確率は大幅に下がる。それに私はこの九百年間ずっと華扇に寄生し続けているわけだから、彼女の方針に口を出せる立場でもないのだ。

ただ一つだけ、私は華扇に物申したいことがある。

「緊急事態です華扇様、酒呑様!!」

「どうしました?」

「勇儀を名乗る鬼の集団が我々の山に攻めてきています!! 要件は一言、『そちらの頭、酒呑童子を出せ』と!」

京の都のすぐ近く、大江山を支配する妖怪達の頭領。何故か私がその座に就いていることだ。

おかしい。どうして? なんで私が妖怪達の総大将なの? 普通

そこは華扇じゃない? 弱い私がいっても無意味だからね!!

「勇儀……聞いたことがあるわ。たしか南の方で鬼の集団を纏めている強い鬼の噂があったわね」

報告に来た鴉天狗の話聞いて、華扇は難しそうな顔で思考に耽っている。

私はその横でお酒を片手に死んだ目で虚空を見つめていた。

まただ。もううんざりだ。この組織ができてから、私はこうしてよく他の妖怪から命を狙われている。組織が大きくなるにつれて、その頭である私の名前も有名になり、噂を聞き付けた妖怪が戦争を吹っ掛ける回数が増している。

目の前で跪いている烏天狗もそうだ。元々は襲ってきた妖怪集団

の一体で、私の命を狙いに来たのを華扇が屈服させたのだ。

酷い……酷いよ華扇……なんで私をわざわざこんな危険な地位に置いたの？

……理由はぶっちゃけわかっている。華扇は何だかよく分からないけど何故か私を神聖視しているのだ。元が私よりも弱く、私が育ての親だったからかもしれない。

私を伝説の鬼神と勘違いし、それでいてしっかり者な頼れる最強の鬼だと思っている。

そのせいか彼女は私に甘い。幼少の頃から努力を重ねる華扇は自分にも他人にも厳しいが、私だけには甘い。怠けている妖怪には酒呑わたしのようななれと説教しているのに、私には何故か怠けると逆に言ってくる。彼女の言では、しっかり者の私はもつと休むべきだと。じゃないと下の者に示しが付かないからって。

違う、違うよ華扇。何度も言ってるけど、私は鬼神でもないし、しっかり者で強い鬼でもない。ただただ小鬼より弱くて怠け者な鬼なんだよ。

そう口を酸っぱくして言っているのに私が照れて否定していると思っているのか、まともに取り合ってくれない。

その間にも意思の弱い私は色々華扇に流されてしまい……ゴロゴロしては酒を飲み、ご飯を食べては酒を飲む。その間に衣食住全ての世話を華扇がやってくれて……

いつの間にか、私は華扇が傍にいないと生きていけない身体になってしまった。

罪悪感がハンパないし、もしこれで華扇が勘違いに気付いた時、何だかんだと華扇に流されて怠け続けていた私は、いくら育て親でも流石に彼女に見捨てられるんじゃないかと滅茶苦茶不安だ。

まあいくら不安だろうが、この生活を止める気は無いけどね！  
グータラするのさいこー!!

私が怠けている間も、華扇は他の妖怪達がいる前で、まるで私が彼

女より強い鬼であるかのような振る舞いを見せる物だから下の妖怪も勘違いを加速させていく。

そうして私は現状に甘えて過ごしていたら………気づけば大江山の、通称『妖怪の山』のトップに君臨してしまったのだ。

「どうする酒呑？ 今回の敵はかなり強いみたいだけど……」

いや、どうするって言われても私にはどうすることも出来ないからね？ 私が特攻したら一秒と掛からず挽き肉になる自信しかないからね？

「凄………こんな状況なのにお酒を飲んでる余裕があるなんて……」

違うから君。ただ現実逃避してお酒を飲んでるだけだから。

しかし何を勘違いされたのか、その行為が華扇には意味のある行為と思われたらしい。何故か決意の決まった顔で私に促してくる。

「そう……酒呑はやる気なのね。わかったわ。その鴉天狗、件の鬼は何処に？」

「既に山の中腹部まで侵略されています！ 我々だけでは進行を阻むのも限界です！」

「わかったわ。行きましよう酒呑。礼儀も知らない田舎鬼に格の違いを見せ付けてあげようじゃない」

そう言っつて華扇は立ち上がり、私に出陣するように促してくる。

うん、嫌でござる。自分、働きたくないでござる。

やめて！ 私が行っても犬死にですワン！ 死んじやうから！

本当に死んじやうから！ だからそんな期待の目で見ながら私の腕を引つ張らないでえええ!!!

という訳で若干拉致気味に連れてこられた件の戦場。

そこは、私達の部下が死屍累々の形で倒れていると言う大惨事になっっていた。

「ん、ようやく来たか。遅かったじゃないかい。もう、あんた等の仲間全員倒しちゃったよ」

その光景を作り出した集団。額や頭に角を生やした筋肉の塊、鬼。

その一番前にいるのは額から赤く星のマークが付いた一本の角を伸ばし、少し癖つ気のある金髪の髪を無造作に伸ばした美女がいた。女性にしては大柄だけど、周りの鬼と比べれば彼女だけ華奢な姿をしている。が、私にはわかる。あの身体に内蔵された圧倒的な生命力とその妖気を。

特に彼女から感じる生命力は、異様を通り越して異常だった。かつて私が大陸で見た龍を軽々と越える程。

溢れんばかりなその気は、一般的な鬼の百倍以上と言えばその凄さがわかって貰えるだろうか。鬼の生命力が生物界でも最上位に位置しているのを踏まえて、だ。

隣で佇む華扇すらも、気は測れなくとも相手が放つ圧倒的な存在感に冷や汗を流している。

「どっちも華奢だなあ……：…本当にあんた等が山の大将酒呑童子と、腹心の茨木童子だったのかい？」

「そう言う貴女は鬼の勇儀ね。木っ端鬼が徒党を組んでよくまあ私達の所に来れたものだわ」

あわ、あわわわわ。

ちよつと華扇さん!? 何、この状況で敵のこと煽ってるのさ!! いくら華扇が強くても流星にこの状況は不味いんですのよ!?

ヤバイ。あの勇儀とか言う鬼もヤバイけど、後ろにうじやうじやといる鬼の数もヤバイ。少なくとも見積もっても300くらいいる。

この人数とその中でも別格な勇儀を相手に華扇だけでは絶対に勝てない。

「ん? ……ああ、後ろを警戒してんのかい。安心しな、ケンカするのは私だけさ。大人数で袋叩きにするなんてつまらないマネはしないさ」

私の目が後ろに向いていたのに気付いたのか、勇儀とやらは尋ねてもいないのわざわざそう宣言してくれた。

ラッキー。これだから単細胞の鬼は。せつかくの集団と言う戦力を持っているのに使わないなんて馬鹿のすることだ。私ならなんの躊躇もせずに皆で襲い掛かるわ。

「ま、私はコイツ等が束で掛かってきても問題無いくらいには強いけど、ねッ」

勇儀がそう宣言した直後のことだ。

私の横を突風が吹き抜ける。

視界には既に勇儀はいなくなり、何故か私の斜め前に瞬間移動していた。まるで誰かを殴り飛ばしたような格好で。

「っ華扇!!」

慌てて横を振り向く。

そこには拳を両腕で防いでいた華扇の姿が。だけど勇儀の余裕の顔に対して、華扇の顔は苦痛に満ちていた。

「へえー！ 私の一撃を防いだか！ あんた、そこらの鬼とは違うなー！」

「っツ……いきなり、随分な挨拶じゃない」

「はは。悪い悪い。その天狗共があまりにも弱すぎたから、どうも不完全燃焼でねえ。中途半端に昂ったこの身体が止まらないのさ！」  
再び殴りかかる敵。華扇も棒立ちのままとはいかず、拳を見事にいなし、負けじと勇儀に蹴りを撃ち込んだ。

蹴りの反動でお互いの身体が離れるが、しかし華扇の動きはそれで終わらなかつた。なにやら口を高速で動かすと、いつの間にか天に掲げていた呪符を相手に向かって振り下ろした。

「ッが!」

それは私が華扇に教えた『微量の電気を浴びせて相手を驚かせる』と言う、あまりにも電気の量が微妙過ぎて存在理由を見出せない糞みたいな仙術の一つだと気付いたのは、相手に巨大な雷が落ちた後である。

おかしいな。私、あんなこと出来ないんだけど。

「痛い………つたく、鬼の癖に卑怯な術使うじゃないか。せつかく鬼同士での喧嘩だったのにさ」

「大したダメージも受けてないのによく言うわよ。此方は最大威力で放ったって言うのに」

そんな軽口をお互いに叩きながら、二人の戦闘は激しさを増してい

く。

正直二人が速すぎて全く目で追えていないのだけど、なんとなく二人が互角に戦っているのがわかる。

「ははは!! 凄いいじゃないか! ここまで私とやりあえるのはあんたが初めてだよ!!」

「逆にあんたは私と互角な程度でよくこの山にやって来れたわね。私よりも強い酒呑がいるってのに」

「言うか、相手が勝手にそう叫んでいるのが聞こえてくるだけであるが。」

それと華扇さん? いつから私が貴女より強くなりましたかね?

やめてよ。変に期待されても私が凄く困るだけだから。照れてるとかじゃなくて、ガチで否定しているだけだから!!

「そりゃいいや。是非ともその鬼と戦いたくなつた」

「私がいるから、それは無理ね」

「ふうん。随分と強気じゃないか。でもいつまで持つかな?」

二人は一度仕切り直しとばかりにお互い離れる。

勇儀は戦いそのものが楽しいのか、身体の至るところに切り傷や火傷がありながら笑っている。

対して華扇は………苦痛の表情であつた。

当たり前だ。彼女は相手の勇儀や一般的な鬼と違って戦いを好ましく思っていない。必要なら戦いもするが、基本彼女は平和主義だ。

頬を殴られて口の中を切ったのか唇は血で滲んでいる。余波で破れたらしい服の下から見え隠れするのは真っ赤に腫れた跡。

互角。いや………まだ決定的なダメージを負ってはいないが、このまま戦えば先に負けるのは華扇だろう。

なにせ彼女は自分に近い相手やそれ以上の強敵と闘った経験がない。今までそう言った敵と遭遇しなかつた事もあるが、私が進んでそう言った相手を避けるように誘導していた。

対して彼方は喧嘩好きらしい。数々の猛者を相手にしてきたのだろう。

息が乱れ始めている華扇に対して相手は余裕がある。



「勇儀姐さん！俺等も見てるだけじゃつまらねえんですが！」

お互いが予想以上の相手にどちらも出方を伺っている。そんな緊張漂う空気の中、空気の読めない馬鹿みたいな大声で横槍を入れる鬼の声が響いた。

「ん？ ああ……すまないね。予想以上に相手が良い感じだからさ。いいよ、あんた等。そこに暇そうにしているもう一人の鬼と楽しみな！」

「流石姐さん!!」

「ッ!?!」

ふあっ?! ちよつと待てえ！ 今あの鬼なんつった!?

いやいや私暇じゃないから!! こう見えて冷静な戦力分析したり華扇の応援したりでメチャクチャ忙しいから!! てかあの鬼、配下に姐さんとか呼ばせてんの？ 何処のヤクザ者だよ！

「酒呑の所には行かせな——ッ!?!」

「アンタは私の相手さ。身体も温まってきたんだ。まだまだ私と楽しむもうや!!」

頼みの華扇も相手に阻まれて私の助けに入る余裕がない。

巨大な身体の大群がドシドシと私までやって来る。そのむさ苦しくも絶望的な光景はトラウマものだ。よくあの鬼は女一人でこの中にいられるもんだ。

ていうか本当にヤバい。あんな鬼の集団に襲われたら抵抗すらできずに殺される。

万事休す。絶体絶命。さよなら。

ああ……私の命もここまでか。苦節二千年。長生きしたものだ。良い人生……いや、良い鬼生だったな。華扇も良い子に育てることが出来たし。若干妄想癖がある気がするけど、それでも育て親思いの愛しい我が娘だ。

生涯に一片の悔い無し……。

じゃねえ！ なに諦めてんだ私！！

うおおおおおおお！！ まだ私はやりたいことがあるんじゃない！！  
まだまだ未知のお酒に出会っていない！！ 私を楽しく酔わせてくれるお酒に出会っていない！！ それに、華扇のお嫁さん姿も見えていないし、孫も見えていない！！

私は！！ 極上のお酒を飲みながら華扇に養われて可愛い孫に囲まれる余生をゆつくり楽しむんじゃないやあああああ！！！！

「ほお、この数に囲まれて動揺の一つも無しか！ 流石は妖怪の山の大将、酒呑童子なだけはある」

「だが、良い女じゃねえか……華奢だがべっぴんだ」

「へへへっ、なあ姉ちゃん。悪いようにはしねえからよ、俺等と遊ばねえか？」

現実逃避してたら屈強な鬼達に完全に囲まれてるでござる。

しかも気持ち悪い笑みのおまけ付き。周囲から、特にあの二人から大きな身体を使って視線を遮っていることから、私を性的に襲うつもりだと嫌でもわかる。仮に私が何の抵抗も見せずにいたらアーーーー！！ ってなること間違い無し！！

それにこのままじゃ華扇もあの鬼に殺されてしまう可能性も高い。仮に勝てたとして、その後はコイツ等鬼の集団が控えている。そうなれば……………。

それだけは駄目なのだ。可愛い愛娘が死ぬなんて私は許容できない。それは、私が死ぬよりも嫌だ。

覚悟を決めるしかない。本当は嫌だけど。死にたくなるほど嫌だけど……………アレを呑むしかない。

私は右手に持った瓢箪の栓を抜き取り、飲み口に付いた水滴を指で掬い舐め取った。

その星は赤く

「あははは!! これだけ殴っても壊れないか! なかなかしぶといね  
アンタも!」

「このツ、馬鹿力め!」

「そりゃあ誉め言葉かい?」

華扇と勇儀の闘いは熾烈を極めていた。

華扇は様々な鬼の力に加えて仙術を用いた多彩な攻撃を繰り広げている。時には雷、炎、水、風。天候を操ることで自然の力を駆使する仙術は、まさに天災を思わせる程の破壊を起こす。

戦闘の経験も浅い華扇だが、天性の才能と仙術を持つて僅かに闘いを有利に進めている。

それに対して、勇儀は単純だ。ただ敵に向かって突撃し、殴る、蹴る。それだけだ。一応彼女も妖怪らしく妖術を使うことが出来るが、そんな物はいらないとばかりに己の身一つで敵に突撃する。

普通なら自然を操る華扇に敵う筈がない。如何に強靱な身体があるろうと、天災そのものに一個人がどうこう出来る筈がないのだから。

しかし勇儀はそれを可能にした。雷撃も溶岩も水流も竜巻も。全てをその身で受け止め、その上で敵を殴る。それで戦いが成立してしまふ。

負けているのは勇儀。その表情はまだまだ余裕がある。むしろ闘いを有利に進めている華扇の方が苦しい表情だった。

押している。怪我もあちらの方が多し。

なのに、敵は全く怯まない。全く止まらない。休まる気配すらない。

「どうしたどうした!? だんだん攻撃に繊細さが無くなってきたんじゃないかい!?」

「くうッ!!」

いくら強い妖怪でも、全力で動いていればいつかは息切れする。体力が人間の何千倍はあろうとも、動き続ければ必ず疲れは訪れる。

既に華扇は限界を迎えていた。気力で攻撃は続けているが、火力は

落ち、命中精度も悪くなってきた。体力の底が尽き始めたのだ。

なのに、勇儀は全く衰えていない。一撃一撃が最初の頃と変わらず、むしろ華扇の攻撃が弱まり始めたことで速度は更に上がっている。

勇儀は妖怪の最強クラスの身体を持つ鬼の中で、更に強い肉体を持つ特別な鬼だ。その力はまさに怪力乱神。体力は無尽蔵で、生命力は生物最強と言われた龍を軽く越える。

息の乱れた華扇が勇儀に押し負けるのは誰が見ても明らかだ。

そしてとうとう決定的な一打が華扇に突き刺さる。

「オラァ!!」

「しまっ——ヴウツ!!」

勇儀の拳がガードした腕ごと華扇の身体を砕く。

殴られた勢いで華扇の身体は面白いように吹き飛び、周りの木々を薙ぎ倒しながら何かにぶつかってようやくやく止まった。

「惜しいねえ……もう少しアンタが成長したら互角にやりあえたんだろうけど………ん？」

骨ごと内臓を押し潰した拳の感触に、勇儀は己の勝利を疑わなかった。

今の一撃で華扇が死んだとは思っていない。しかし、今までの経験上、相手はもう立ち上がれないだろうと言う確信があったから。

だから土埃の舞う彼女が倒れた辺りから倒木が自分へと投げ飛ばされてきた事に勇儀は驚いた。

当然、木ごときで彼女がどうにかなるわけではない。彼女は虫けらでも払うように向かってくる木の幹を殴り飛ばす。

「まだ、動けるか。いいねえ。私をもっと満足させてくれよ!!」

勇儀は再び構える。その表情に疲れは無く、むしろまだ楽しく戦えることに喜びを露にしている。

そんな彼女の前に現れたのは、しかし華扇ではなかった。

土埃が晴れ、月の光がその金に輝く存在を妖しく照らす。

「怪力乱神を持つ程度の能力……なるほど。確かに今の華扇には荷が

重いでしようね」

「アンタは……」

長い金髪を靡かせて悠然と歩いてくるのは、配下の鬼を向かわせた筈の酒呑童子。

腕には意識のない華扇がお姫様抱きで運ばれている。

「私の仲間はどうした？」

「あそこに全員いますよ。流石に無傷ではありませんがね」

酒呑が視線を向けた先には、確かに鬼達はいた。しかし彼等全員無事とは言えず、意識を失っているのか重なりあつて倒れている。

再び勇儀は酒呑に目を向ける。その身体に戦闘があつたような跡が見えない。汚れもなく、傷一つない。

「どう言うことだい？ さつきまではアイツ等相手に逃げ回つていたように見えたけど、いつの間に……」

「ああ。私がこんなに早く彼等を倒したのか疑問なんですか？ 私も、本当はここまで『呑む』つもりは無かつたのですが……さつきまでの意識は酔っていましたから。華扇の危機を見て慌てて呑んだはいいけれど、量を間違えてしまったようですね」

勇儀の疑問に酒呑は返すが、その言い分は要領を得なかつた。

飲んだ？ そう言えばさつき、視界の隅で彼女が手に持った瓢箪の栓を開けていたのが見えたが……酒を飲んで強さが変わった？

「なんだい？ その酒に何か特別な力でも仕込まれているのかい？」

「この酒ですか？ いいえ。別にこれといったものではありませんよ。普通のお酒です。ただ、私の妖気が大量に混ざっていますので、私以外の者が飲めば毒ですけどね」

腕に括りつけられている瓢箪を特に気にした様子もなく振る。

すると振動を感じたのか酒呑の腕に抱かれた華扇が目を覚ました。

「いッ……あ、しゅてん……？」

「おはよう華扇。少しは休めたかしら？」

腕に抱いた華扇を見下ろした彼女の表情に、勇儀は驚いた。

それは華扇も同じで、向けている酒呑の顔をずっと凝視したまま固

まっってしまったている。

いつも無表情の酒呑。表情豊かな華扇に、勇儀は鬼らしい裏表の無さそうな彼女の様子が気に入っていた。が、それに対してずっと無表情な酒呑には悪感情を抱いていた。

常に冷淡な表情。どんな物に対しても氷のように冷たく向けるその瞳。無感情なその顔の裏に何を考えているのかわからない。

勇儀は最初から酒呑を嫌っていた。

だが今見せた酒呑の表情。愛しいものを慈しむように労うように見せたその微笑みは、あまりにも鮮烈で、美しく、同時に安らぎを感じた。

その笑みを見たとき、勇儀は敵であるにも関わらずその笑みを自分に向けさせたいと思った。その表情を、感情を自分に向けて欲しい。今すぐにでも奪いたい。

そんな欲望が芽生えた。

しばらく華扇を見つめていた酒呑だが、名残惜しそうに視線を外すと空に逃げていた鴉天狗を呼びつけた。

慌てて降りてくる彼女に華扇を任せた酒呑は勇儀の方に向き直る。

「さて……華扇を負かしたからには貴女の相手をしなければなりません。が……どうやらそれ相応には傷付いている様子ですが……どうしますか？ まだやりますか？」

「……………ツ。当然だ!!」

凍るような視線を向けられた勇儀は、先程の思考を頭から振り払い構えた。

視線を向けられただけ。それだけの筈なのに、勇儀の本能が馬鹿みたいに警報を鳴らしている。背筋は凍え、この先に死地が待っているかのような、そんな恐怖が――

「はっ、しゃらくさい!! 鬼の私が何に怯えるって!?!」

震える手を隠すように硬く拳を握り、酒呑の下へ駆ける。

そんな勇儀を見て、華扇と共に空中に上がった烏天狗を確認した酒呑は、徐に手を顔の位置まで持って来て……………

目と鼻の先まで迫った勇儀の額に人差し指を添えて、宣言した。

『撃』

その瞬間、勇儀は受けたことのない衝撃を額に浴びた。

彼女の身体は突然の事に耐えられず後方へと吹っ飛び、進行上の邪魔な木や岩、谷を乗り越えて尚飛ばされ続ける。

「がっ、ぼあ、ッ、あぐ——!!」

地面を転がり、それでも止まらない。妖怪の山から二つほど離れた山まで転がり続け、ようやくその勢いが止まった。

今の光景を見ていた烏天狗はあまりの威力に恐怖を覚え、華扇は酒呑が放ったその術の正体に気付き戦慄した。

あれは仙術の基本である、ただ遠い所にある物を吹き飛ばすだけの術『撃』。

華扇が見せて貰った時は石ころを飛ばす程度の威力で、華扇が本気で放つてもせいぜい木を折る程度の威力しかない、基本的な術。

そもそも術として成り立っているか甚だ怪しいレベルの術だ。

華扇の拳圧があれば離れた所にある木々を余裕で数本薙ぎ倒せる。そんな術を使わずとも肉体があればいらぬ。

使う機会すらなかった初歩の術。そんな初歩の術も酒呑が本気で扱えば凶器と化す。

レベルの違いをまざまざと見せつけられ、華扇は驚くことしか出来なかった。

「痛……クソッ。どこまで飛ばされたんだ私はッ」

山越えを己の意思とは無関係に行わされた勇儀は、しかしその持ち前の頑丈さで五体満足でいた。だがダメージよりもその威力に精神的な傷を負わされていた。

（何が起った？ またよく分からない妖術かッ）

何をされたのかわからない。戦いの中で摩訶不思議な事柄は幾度も体験してきた勇儀だが、しかし攻撃をした筈の自分が気付けば吹き飛ばされていた等と言う体験は初めてのことだった。

未知とは恐怖を煽るもので、それはどんな生物であろうと変わらぬ

い。武者震いとも違う、原始的な恐怖が勇儀の身体を震わせた。

「つたく、ふぎけた術使いやがって！」

しかし振り払うことは出来る。

勇儀は固く握った拳で地面を叩きつけ、震える身体に気合いを入れ直す。

「八つ当たりとは見苦しい。格が知れますよ」

「ツ!!? この、オラア!!」

そんな勇儀の前に酒呑は突然現れた。

驚きよりも先に反射的に勇儀は殴りかかるが、そんな粗末な反撃は簡単に避けられてしまう。

「ほら、そこに隙が。『縛』」

「ぬあ!!?」

次に酒呑が行ったのは勇儀を縛ることだった。手足の首を光の輪が囲み、反撃出来ないように拘束する。

これも仙術による捕縛術。本来なら僅かな衝撃でも簡単に解ける程には弱い縛りなのだが、どういう訳か怪力乱神とすら呼ばれる勇儀の力で振りほどこうとしても、解ける気配が見えない。

そんな無防備となった彼女の身体に、酒呑は容赦なく攻撃を浴びせた。

『連撃』

「ツッつ、ぎ、ヴツ、があ、あああああ!!」

四方八方から襲い来る衝撃波に、最強の肉体を持つ勇儀も堪らず声をあげる。

しかしそこで終わらないのが勇儀という鬼だ。全身に強い衝撃波を浴びせられようと、その間に勇儀は腕力だけで強引に拘束を破壊した。

「!!」

「ゴホッ。んの、よくも散々やってくれたなッ！」

まさか怪力だけで拘束を破壊されるとは思わなかったのだろう。



驚きで反応が遅れた酒呑に、勇儀は握り締めた拳を振るう。

咄嗟に腕で拳を防いだ酒呑だが、関係ないとばかりガードの上から殴り飛ばす。

「ッ!!」

メキメキと人体から鳴ってはいけない音が響く。

それが酒呑の腕が碎ける音だと一目でわかるくらいに、彼女の腕はひしゃげ浮き出た血管から血を噴水のように噴き散らかしていた。

腕だけではない。胴体にも衝撃が行ったのか、口からは血を流している。おそらく、折れた肋骨の一部が内臓を傷付けたのだろう。

「ようやく一撃だ!」

「見事ですね……まさか、あの状態から反撃されるとは」

一気に形勢が逆転された。

勇儀は身体中ボロボロだがタフなお陰か問題なく身体は動く。対して酒呑は一撃で満身創痍。内臓にまでダメージを負っており、特に左腕の怪我が酷く、完全に使い物にならない状態だった。

「はっ、残念だったね! その怪我じゃ、もう戦えないだろう?」

「確かに、今の状態で闘うのは厳しそうですね。ですが……」

そう呟いて、酒呑は己の左腕に目を向けた。

直後、あり得ないことが起こった。

左腕が一瞬ブレると、驚くべき早さで形が戻り怪我が消えていくのだ。まるで、時間の巻き戻しのように元に戻っていく。

そして数秒と掛からず、彼女の腕はあんなにもぐちゃぐちゃに潰されていたのが嘘のように、元通りの状態に戻っていた。

その光景にはさしもの勇儀も口を開いて、瞠目せずにはいらられなかった。

「このように腕を戻せば問題ありませんね」

「おいおい………なんだいそりやあ………それも術か何かかい?」

「いえ、これは私の生来の能力です。再生能力ではありませんが、まあ能力の応用と言ったところですね」

特に大した事は無いとばかりに言う酒呑だが、勇儀は堪ったもので

はない。

あの異常な回復力が何度使えるかわからないが、それでも数回使うくらいなら全く問題ない様子。

殴っても蹴っても瞬時に回復されるとあっては、そもそも勝負が成立しないではないか。

客観的に見ても勝敗は目に見えている。

今のところ、力の差はほぼ互角だ。しかし、反撃されても即座に回復してしまう酒呑に対して、攻撃される度にどんどん怪我が蓄積されていく勇儀に勝ち目など無い。

絶望的。その一言に尽きる。

「……………」

「どうしました？ もう終わりなんて言うつもりはないですよね。貴女は鬼です。この程度の戦力差で屈服する程賢く生きていないでしょう？」

馬鹿にしたような言い方だ。しかし、同時にその言葉は勇儀に対して的を射ていた。

敵は怪しい妖術を使う？ 知らない。力で圧倒すればいい。

どんなに攻撃しても回復される？ 知らない。なら回復する以上に己が殴り続ければいい。

元より、勇儀に降参と言う二文字はない。あるのは勝利か敗北それだけだ。そんな単純な生き方だけで彼女はここまで強くのし上がったきたのだから。

「……………はっ。わかってるじゃないか……………そうだね。相手がいくら回復しようが関係ない！ 私はそれ以上に殴れば良いんだから！」

再び勇儀は酒呑に殴りかかる。他に知らぬとばかりに、作戦も何も無い単純な突撃。

しかし勇儀は己の身一つ、拳一つで勝ってきた鬼だ。そこには自信と誇りがある。むしろ何か小細工する方が反って負けるだけ。

その思いつきりの良さが、彼女の肉体限界を越えて更に加速する。

「オラア!!」

「あグッ!!……………なるほど! やはり鬼とはそうでなくては!!」

傷ついて尚、処か更に苛烈になる勇儀の拳。そんな彼女の拳を酒呑は防御も取らずに受け入れた。

それは普段であれば絶対にしらない選択。いつもの様子とは少し違う酒呑は、仙術を捨て、通常であれば絶対にしなないであろう肉弾戦で勇儀を迎え撃ったのだ。

「破ッー!」

「ゴフツ……………いいなあ! アンタも乗ってきたじゃないか!!」

酒呑の握り締めた拳が勇儀の腹に突き刺さる。お返しとばかりに勇儀が頬を殴れば、酒呑も頬を殴り飛ばす。

ガードを捨てた殴り合いだ。そこに技術もクソも無い。しかしお互いを殴る度に余波で地面は抉れ、空気が悲鳴をあげる。

「酒呑…………」

「ひええ……………何ですかあれ。自分から殴られに行ってる…………」

空から二人を見守る華扇に対して、傍観している烏天狗は酒呑ではなく敵の行為に正気を疑っていた。

酒呑はわかる。彼女の卑怯染みた再生能力は本物のようで、いくら殴られても殴られた端から回復していく。むしろ息を吐かせない殴り合いこそ彼女の真骨頂だろう。

しかし、相手の勇儀は違う。体力は無尽蔵に近いほどあっても、ダメージが蓄積されれば待つのは死だ。なのに、勇儀は酒呑に合わせて肉弾戦を続ける。

命を懸けた闘いならば小癩で卑怯な手段だろうと選択する鴉天狗の種族には理解できない闘い方だ。

だが勇儀は生粋の鬼。常に強者の考え方だ。

如何に負けていようが、劣勢な状況だろうが。己の最強の肉体で総てを穿つ。小細工は弱い奴がやれば良い。己はこの拳と脚だけ充分なのだから。

そして。

「ムグ……………ヴ……………ガハッ!!」

「終わりです。肺を潰しました。もう息をするのも辛いでしょう?」

「ッ……ヴぐう!!」

酒呑の腕が勇儀の身体を貫いた事で闘いは止まった。

喉から競り上がってくる吐血を何とか我慢しようとも、限界とばかりに勝手に吐き出される夥しい量の血。ガクガクと身体は震え、足下から急激に力が失われていく。

酒呑の身体はドス黒く染まり、勇儀は未だに身体から吐き出される己の血で肌を焼く。

決着だろう。もしこれ以上続ければ間違いなく勇儀は死ぬ。

酒呑としても、ここまで自分と真つ正面から闘った敵を好き好んで殺したいとは思っていない。

「は、ははっ」

「……勇儀？」

「まだだ!!」

しかし勇儀はまだ諦めていなかった。

己の腹を突き破った腕を乱暴に抜き捨て、そのまま投げ飛ばす。腕を抜き取る際の脳神経を焼いたような激痛。揺れては赤く染まる視界。勇儀は己の限界に近いことを悟る。

だが、まだ自分は倒れていない。脚はしっかり大地を捉え、拳はまだ固く握れる。己は闘えるのだと奮起する。

こんなにも楽しい闘いを疲れたからと終わらせるなんて勿体無い。それで手足が潰れようと。命が尽きようと。そんなの関係ない。

こんなにも自分は楽しんでるのに、この身体のを出さず何時出すのか。

「はぁーッ、はぁーッ………これで、最後だ。最後の一撃に私の全力を乗せる」

風前の灯火に見えた勇儀の身体。しかしあろうことか今までに無いほど妖気が内から溢れ始める。

その異様な様子に酒呑も構えた。何か来る。ここまで闘って来たからこそ、彼女は油断しない。

そんな酒呑を見て勇儀は微かに笑い、叫んだ。

「さあ、防げるものなら防いでみな!!　これが鬼の奥義、『三步必殺』  
!!!」

## 決着とその後

「『三步必殺』!!!」

勇儀が構えたまま脚を一步踏み締める。

次の瞬間、踏まれた大地から振動が伝わり、酒呑を呑み込む。

ソレは大地を大きく揺らし、近くの地面に立つ生き物全てをその場に縫い付ける。かつて華扇が故郷の村で起こした地震とは雲泥の差。立つことが困難なほどの揺れは、離れた位置にある都の人々を恐怖に陥れる。

そして二歩目。

踏みつけたインパクトで大気を揺るがし、振動を伝える。空にいる烏天狗と華扇すらも痺れさせる強烈な振動。

あまりにも強力な技に二人は戦く。

しかしこれは勇儀にとつて前座だ。本命は次。むしろこんなもの目の前の敵には何の意味すら無い。

本来なら一步目で動きを制限させ、二歩目で強引に封じる、技とも呼べない力業。勇儀は元から実力的に格上の酒呑に効くとは思っていない。

それに対応している間に、右腕に全ての力を溜める時間が欲しいだけだ。

そして、三步目。

力を最大まで押し込めた拳は限界だとばかりにギチギチと音を立てる。

これが、正真正銘最後の一撃。

「ああああああ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!!」

そして拳が振り抜かれ

その瞬間、世界に亀裂が迸る。

まるで原爆が落とされたような土埃の煙が天にまで届く。急激な空気の膨張に超強烈な衝撃波が起こった現場は、後を追うように強風が吹き荒れ続けている。

次第に強風が弱まり、今度は気圧の薄まったその場所は新しい空気を求め、逆向きの強風が吹いた。

低気圧による上昇気流。砂塵が上空に飛ばされ始めたことで、視界がゆっくりとクリアになっていく。

「はあッ、はあッ……」

まず始めに見えたのが勇儀。身体はボロボロで、息も荒く限界が近い。それでも倒れてなるものと片膝を地面に突きながら真っ正面を睨み続けていた。

そして、更にその奥。

爆心地の中心とも言えるその場所に、一人の影が見えた。

「……………ああ、クソッ。やっぱり勝てなかったか……………」

その姿を見たとき、勇儀は確かに己の敗北を認めた。

現れた酒呑の身体もボロボロだった。

全身から血を流し、彼女の一張羅である金の着物は返り血と己の血の判別が付かないほど真っ赤で、色んな箇所が破れ傷だらけ。見るに耐えない状態だ。

そして最も被害があり、かつ異様な事になっているのが彼女の右腕。指先から肩までに掛けて何故か灰化しており、今も尚ポロポロとその形を崩している。

腕が灰化している原因は定かではないが、彼女の再生を越えるレベルで灰化が進んでいるのは確かだ。

しかし、それでもその場所に彼女は立っていた。何処にも隙を見せず、腕は今も崩れ落ちているにも関わらず表情を変えずにしつかりとその足で立っていた。

それは彼女が勇儀の攻撃を耐えきった証拠である。

そしておかしな事に、アレほどの爆発があつた筈なのに彼女の後ろにある妖怪の山は全く被害を受けていなかった。酒呑達の部下や敵

の鬼一人も欠けずに呑気に眠っている。

勇儀が周りに被害を与えないよう配慮した？ そんなわけがない。あの状況下でそんな余裕があるはずもなく、彼女自身も酒呑に全力でぶつかるために出し惜しみなく力を使いきった。

「はっ……よくやるよ」

何をしたのか勇儀にも詳しくはわからない。

ただ攻撃を放つ直前、自分と勇儀を囲むように強力な結界が二人を覆い、酒呑自身も勇儀の奥義を迎え撃つために拳を振り被っていた事だけはあの瞬間に見ていた。

その結果が、自分達の中心にできた巨大なクレーターと、勇儀の拳をまともに受けたことで炭化している右腕なのだろう。

確かなのは、自分の全力を酒呑はその身で全部受け止めてくれた。それさえわかれば勇儀はどうでもよかった。

「私の敗けだ……もう身体も、動かん。煮るなり焼くなり……好きにしてくれ」

その事実を受け止め、勇儀は限界とばかり地面に倒れ込む。意識を失っていないのは流石と言うべきだが、しかしその言葉通りまともに動けないのだろう。

ゆっくりと近寄っていく酒呑に対して、彼女は何の反応も見せない。

勇儀としては、ここまでやった自分は殺されるだろうと腹を括っている。勝手に攻めいって、やりたい放題したのだ。首魁の自分は当然殺され、仲間達も運が良くなくて殺されない程度に罪を償わされるだろう。

「天晴れでした」

しかし予想に反して聞こえてきた声は勇儀を誉める言葉だった。

閉じていた目を思わず開けて、視線だけで酒呑に向ける。

彼女の顔は実に穏やかで、先程まで本当に命を懸けて闘っていたのが幻だったのではないかと思わせるほど、柔らかかった。

「まさに怪力乱神。この『酒天』の力を持ってしても押さえられなかった力。貴女の在り方は私以上に鬼として正しい」



語るように語り掛けるその様子は、嬉しくて堪らないとばかりに声を弾ませている。

「そんな貴女が私は欲しい」

本当に嬉しそうに告げられたその一言が。何故か勇義にはどうしようもなく魅力的に感じた。

「私は貴女が欲しい。どうですか？ 私の仲間になりませんか？」

倒れた勇義に酒呑は手を伸ばす。

勿論敗者である勇義は本来ならこれを断る権利がない。しかし、酒呑は手を伸ばすだけで強制してこようとはしなかった。

嫌々仲間になつてもらうのを嫌っているのか。それとも、他に何か考えがあるのか。

……わからない。いくら考えても彼女の思考を勇義は理解できなかった。

ならば直感に従おう。

元より勇義は己の勘を信じて行動してきた。この闘いもそう。楽しそうだと思つたから妖怪の山を攻めたわけで、実際彼女にとつてみれば酒呑との闘いは夢のような時間であつた。

そして彼女の勘が告げている。この人に付いていくことこそが正しいのだと。自分は、この人のためにこれから闘うのだと。

勇義は伸ばされた手を掴んだ。

「ふふっ。ようこそ勇義……いえ、その前に貴女が私の仲間になる祝いです。貴女には私が姓を与えましょう」

一度掴んだ手を離すと、彼女は懐から大きな盃を取り出した。

それを勇義に渡すように彼女の前に突き出す。

「これは『星熊盃』と言って私の秘宝の一つ。餞別です。これを貴女に託しましょう。そして、この盃の名と共に……私の下に付いて尽くしてください。……ふふっ。これからよろしくお願いしますね、

『星熊勇義』」

▽  
▽  
▽  
▽  
▽

皆、おそようございます。酒吞改め、酒吞童子です。

何時ものように私は普段使っている布団の上で寝ていたんですが、何やら外が騒がしく目が覚めてしまいました。

まだまだお天道様も真上に輝く真つ昼間。しかもさつきまで夢心地も悪く、何やら屈強な身体を持った鬼達に追われる悪夢を見たばかり。一体何事だと少し苛立ちながら廊下に出て大部屋に続く襖を開けてみれば。

「「お早うございます!! 頭あ!!」」

「ピッ!?!」

大部屋のど真ん中に道を作るように二つの列を組んだ屈強な鬼の群れが頭を下げている光景が目飛び込んで来たのです。

なんとという悪夢。なんとというトラウマ。

あまりのショックに変な声が漏れたわ。恥ずかしい……………。いや、そんなことよりこいつら全然顔を上げないんだけど。

え? 私が声掛けるの待ってるの? て言うかまずなんだよコイツら。いつ山に住み着いた。認めてないぞ!?

見ないものに蓋をするように襖を閉めて廊下に戻り、自分の寝室へと帰る。

現実逃避だ。頭の整理が付かない時は二度寝をするべきだってじつちやん言ってた。

布団に潜り、枕に頭を乗せて完璧な寝る姿勢。

そのまま悪夢を見ないよう二度寝を洒落込もうとして――

「ほら起きな大将。いくら宴の後だからって二日も寝るもんじやないよ」

そんな女の声と共に私の布団が引っぺがされた。

「……………はっ?」

「まったく。私も悪いと思ってるんだよ母<sup>かあ</sup>さん? まさか母さんがあんなに酒が強いなんて思わなかったからさ。一人残して潰れちまっ

たのは悪かったよ」

いつの間になっていたのか。

不法侵入を白昼堂々とかましている美女。私と同じように額から一本の角を生やしていることから見て同類だとはわかる。

でも、私の知り合いにここまで特徴的な服を着た鬼はいない。そもそもこんな風に自分の寝室に勝手に入ってくるような知り合いなど華扇一人だけだ。

「貴女、誰ですか？」

「ちよ、そんな不機嫌にならなくてもいいだろ!? ごめん、悪かった!! この通りだから!」

取り敢えず何者か尋ねなければ始まらないと思ひ尋ねたら、何故か土下座で返された。なんだ。不法侵入に対して謝ってるのか? ならさっさと出てけ。と言うか、謝るくらいなら入ってくるなし。

「起きたかしら酒呑? よく寝たわね……って。なんで勇儀が酒呑の部屋にいるのよ」

起き抜けに知らない美女が土下座をしてくるというカオスな状態に私がどう対応するか考えていると、襖が開くと同時に見知った声

が。

我がマイスイートプリティこと華扇である。

「おん? 華扇じゃないか。いや、母さんが長いこと寝てたからね。起こしてやろうかと」

「起こしてやろうかと……じゃないわよ! 酒呑の面倒を見るのは私の仕事なの! 勝手に盗るな!」

「お? なんだい。やるつてのかい? いいねえ、私もケンカは大好きだ!!」

「この単細胞が!」

そんな可愛い華扇が入ってきて早々、謎の美女と喧嘩をおつ始めてしまった。

部屋の襖を壊しながら外へ向かっていく二人に、私は事態についていけず呆然とするしかなかった。

あの後話を聞いたところによると、何でも勇儀率いる鬼の集団が私達の部下になつたらしい。私の力に惚れたのだとか。

意味がわからない。私の力に惚れたってなんだ？　そもそもいつ私がお前らに力を見せた。初対面だろう。

そんな言葉も勇儀と華扇との喧嘩の光景を思い出して呑み込んだ。触らぬ神に祟りなし。せっかく強い妖怪が味方に付いたんだからラッキー程度に思っておこう。

その考えはものの数分で粉々に砕けるのだが、それは置いておく。

それから数年。私の（華扇の？）妖怪組織も更に大きくなった。

「そんな馬鹿な……私の百鬼夜行が……」

「はっ。いくら自分の分身を増やそうが数を揃えようが、本物の百鬼夜行には敵わないさ。これが本物の大将の器だよ」

「貴女の敗因は、酒呑を侮ったことね」

萃香と言うロリな元氣の良い鬼が攻めてきたから、勇儀や華扇を中心とした部下総出でフルボッコにして従え。

「貴女の姿に惚れました……どうか、私を弟子に……」

「なにこの子……可愛い……」

私に憧れて弟子になりたいと懇願してきた無口系黒髪美少女・金熊透花ちゃんを弟子にし（出会った瞬間に私を越えていたので私はお役御免となった）。

時には華扇の母性（完全に立場が逆転した）に甘え、時には勇儀の理由なき部下への暴力にビビり、時には萃香のヤンチャな行いを嗜め、時には金熊の可愛らしさに頬を緩め。

そうやって過ごすうちに、私達は日の本全土に知れ渡るほどの強大な妖怪組織へと成っていった。

組織も大きくなれば妖怪の数も増える。次第に末端の妖怪は把握できないほど人数は増え、管理も出来ないほど山に妖怪が溢れた。

私はこの組織を立てた時に皆に宣言した言葉がある。『人を殺すな。殺戮で恐れを集めるな。危害を加えるな。ただ、畏れられる存在

であれ』。

それは誓いの言葉だ。

盗みは良い。人を拐うのも良い。しかし、やり過ぎはいけない。それはその行為自体が目的なのであって、それが人から畏れを集めるための手段ではあつてはならない。

私は生涯で一度足りとも人間に危害を加えたことはない。

……そりゃあ、盗みの一つや二つ処か数えられないくらいやったけど。でも、それも人間達に気付かれない程度だ。バレたり反撃されたりしたら私は抵抗せずに逃げた。

え？ 私が弱いから反撃しないだけだろって？ ……ち、ちが

うわい！ いや、そうだけど！ でも違うから！ 理由があるから！

言つては悪いけど、人間は私達より遥かに弱い。ぶつちやけ一対一なら私でも勝てるくらいには人間は弱いぞ？

勇儀辺りなら一人で国の一つや二つ簡単に落とせるだろう。それくらい彼等は弱い。

だからこそ、彼等を侮つてはいけないのだ。弱いからこそ、人間を軽んじてはいけない。

私は弱いから、弱者の怖さを知っている。強いからこそ持つ矜持とか、誇りとか、そんなものは弱者にはない。

あるのは手段を選ばずにどんな事をしてでも目的を達成させる為の信念だ。

だから私は妖怪達に人間への危害を加えることを止めるよう注意し、この組織を使って人間達に危害を絶対に加えないと言う誓いを立てた。

まあ、その誓いも次第に忘れ去られてしまったが。人間へ危害を与える妖怪は増え、略奪と人拐いが後を絶たない。

それは噂となり、そして『妖怪の山』は悪名高い妖怪の巣窟と呼ばれるようになってしまった。処か、何もしていない私達の名前すら悪名ばかりが広まっていく。

次第に噂は飛び交い……『妖怪の山』は、最強最悪の鬼・酒呑童子を筆頭に、鬼の四天王である茨木童子、星熊童子、伊吹童子、金熊童子の四人を従えた最強の軍団として恐れられるようになってしまった。

そしてある日の事だ。今までは何とか越えていなかった境界を誰かが越えた。

とうとう私の組織の誰かが村を襲い、快樂のため殺戮の限りを尽くし村人全員を全滅させたらしい。そんな一報が私の耳に届いた。

「はぁ……………」

「どうしたの酒呑？」

「何か……………悩み事？」

華扇と透花を隣に侍らせて酒を飲んでいたが、先程届いた報告を思い出して溜め息を溢した。

せっかく可愛い女の子と一緒に酒を呑んでいるのに、お酒は不味くなる一方。溜め息の一つや二つ溢したくなる。

「ねえ華扇。私は、やはりこの『妖怪の山』の大将に就くべきでは無かった……………そう思わずにはいられません」

「なっ……………何を言うのよいきなり。酒呑はこの山最強の鬼なのよ？ 貴女以外に誰がやるのよ」

「(コクコク)」

私が溢した弱音に過剰に反応する二人。

でも違うのだ。私は彼女達を欺き、この地位にいる。何故鬼の四天王や山の妖怪達が私を最強と勘違いしているのかわからないが、やはり私は弱いのだ。

最初は良かった。まだ華扇と小・中妖怪だけなら私が頭でも統制が取れていた。

しかし今は違う。無いにも等しいメッキは剥がれ、私はこの組織の統制をまったく取れていない。

勇儀や萃香が好きに行動しているのが良い証拠だ。あの二人は人を殺すような事はしないが、それでも若い娘や気に入った人間を拐う。

身近な家族ですらこの始末。下の天狗や、末端の妖怪達が度を越した行いをしていても不思議ではない。

私は上に立つ資格がないのだ。

「皆に私の声は届きません。それが現状の妖怪の山では？」

「っ……確かにそうだけど……でもそれは酒吞が強く禁止すれば！」

「妖怪は基本欲望に忠実です。嫌なものは嫌とはつきり言うでしょう。現にあの二人にはそう言われました。例え強引に禁止しても、約束を固く守る鬼はともかく、他の妖怪は破るでしょう」

「なら罰すれば！」

「そのような権限は私にはありませんよ。良いですか華扇？ 罰を与える事とは、それが不当であると皆が認めたと上で行うもの。皆が認めなければ、それは私刑と一緒です。私個人が『妖怪の山』を作るときに立てた誓い。それを破るのは個人の自由なのですよ」

そう。結局のところ組織の誓いは私個人の誓いであって、掟ではない。皆に無理強いは出来ない。

むしろ、私が立てた誓いを律儀に守ってくれるこの二人が奇特なのであって、人に危害を加えるのは妖怪の本質なのだ。皆が悪いわけではない。

要は皆がついて来てくれる程の、妖怪の本質を覆すほどのカリスマ性も魅力も私が持ってないのが悪いだけなのだ。

「なんで………酒呑様は、人間に危害を与えない、の？ 妖怪は………人間に恐れられるものでしょ？」

透花の疑問は酷く真つ当なものだ。

そもそも何で私がこんな誓いを立てているのか。

多分、何も聞かない華扇も、ギリギリで私の誓いを守ってくれているあの二人も同様の疑問を持っているだろう。

「……透花も華扇も、この事は心に留めて置いてください。

この世には因果応報と言うものがあります。善行を繰り返せば良いことが訪れ、悪行を繰り返せば破滅が訪れる。誰かにした行為は巡り巡って自分に返ってくるものです」

「……酒呑は、人間が報復に来ると思ってるの？」

「わかりません。彼等は私たちから見れば弱いものです。しかし、弱いからと反撃しないわけではない……」。

覚えておきなさい。弱いものとは虐げられる者の事を指すのではありません。世界を知らず、自分を強者と驕った者こそが真の弱者なのです」

かつての私は間違えた。自分を強者と勘違いし、馬鹿みたいに馬鹿な行為を繰り返した。

私は弱い。例えどんなに力を付けようが、どんなに叡知を兼ね備えようが、どんなに秘宝を集めようが、どんなに配下の妖怪を増やそうが。

私はどうしようもなく弱いのだ。

そして遂に、あの日が訪れた。



## 来訪者

その日は何時もとまったく変わらない日だった。

妖怪の山に溢れる多種多様な種族の妖怪が好き勝手に生活し、まさに妖怪にとつての楽園だ。

河童は何やら鉄でできた物体を弄り、狸は化かし、天狗は拐い、鬼は略奪を繰り返す。その他の覚や猫又、土蜘蛛と言った妖怪達も思い思いに騒ぐ。妖怪にとつての楽園であり、周辺の村や都市にとつては悪夢の光景だ。

人間への被害はこの国の西部分全てに及び、特に天下のお膝元である平安京は、妖怪の山に最も近い大都市とあつてかその損害は計り知れない。

そしてとうとう人間達による『妖怪の山』首魁の酒呑童子討伐の命が下された。

「おい酒呑！ 聞いて喜べ。人間共がなにやら差し入れを持ってきたぞ！」

夕暮れの妖怪の山山頂に建てられた本堂。その一室で窓から見える夕日を肴に一杯飲んでいた酒呑の所に萃香がはしゃいで駆け込んできた。

酒呑は返事もなしに入ってきた彼女をやんわり嗜めた後、告げられた報告に眉を顰めた。

「……人が差し入れ、ですか？ 討伐か何かではなく？」

「ああそうだ！ アイツ等私達を恐れるあまり、とうとう献上物まで勝手に持ってきたのさ。たぶん、略奪されるのが嫌だったんだろうね」

献上された品の中に萃香の好きなお酒でも入っていたのだろう。水を入れるだけで無限に湧く瓢箪を持っていて癖に、それでも酒があれば喜ぶのは無類の酒好きの証だろう。

酒があれば酒呑も大喜びしてその場所に出向くのだが、しかし今回は喜ぶどころか納得のいかない声色で萃香に尋ねる。

「その人間達は何者ですか？ 格好は？」

「人間達は修行僧のようだね。まあいいだろ？ そんなことは自分の目で確認すれば良いさ！ それより早く行こう！ 勇儀が勝手に始めちゃうよ！」

未だ動こうとしない酒呑の腕を掴み無理矢理引つ張る萃香。その力に抗う術もなく、酒呑は仕方なく付いていくのだった。

連れられてやってきたのは山の中腹部。かつて勇儀と酒呑が戦った跡地の隣には天狗達の住みかとなる屋敷が立てられており、その中で住人の天狗や鬼と言った山の上位の者が集まり宴会を行っていた。

「ああ!!? おい勇儀！ お前勝手に始めたな!？」

「おお萃香、母さん。悪いけど先に始めちまったよ！ つつてもまだそんなに時間は経ってないよ。今からでも全然楽しめるさ！」

そんな騒ぎの中心でお酒を片手に騒いでいるのは見知った鬼の勇儀と、五人の見知らぬ人間であった。

鬼や天狗と言った上位の妖怪に囲まれているにも関わらず、人間達は笑顔を絶やささない。勇儀に気に入られたのか一人の人間は一緒に酒飲みすらしている。

その集団の輪から離れた位置には二人仲良く並んで騒ぎを見守る華扇と透花の姿が見られる。騒ぎには参加していないが、余程良い酒があるのか自前の食糧と共に自分達の分を確保している様子が見られた。

騒ぎの中に飛び込んでいった萃香を見送った酒呑は、離れた位置にいる二人の下に近付いた。

「華扇、透花。これは一体、どう言った騒ぎなのですか？」

「酒呑。来たのね。ご飯とお酒は酒呑の分も確保しといたわ」

「とつても美味しそう……酒呑様も早く食べよ……?」

「え、ええ。ありがとうございます。それで、彼等は……」

疑り深いとは言い難いが、それでも鬼の中でも常識的な考えに理解を示す華扇と、酒呑に師事しかつ普段は彼女の言葉があるまで待機する透花が、二人揃って疑問も抱かずに献上された物を食べようとして

いる。

それが酒呑には異様な光景に思えた。

「酒呑が心配してるような事は今のところ特にないわよ？ 彼等にい  
ただいた分のご飯やお酒にも毒は入ってないようだし」

「(コク) ……入ってたら今頃勇儀達は、倒れてる」

「そうですか……」

確かに酒呑の目から見ても貰った物に毒などの罊があるようには  
見えない。しかし、それ以上にこれほど豪華な食事とお酒を一介の修  
行僧が持つているだろうか？ 大した量ではないようだが、それでも  
質は極上。

一目見てかなり高尚な僧もいるとわかるが………だとしてもここ  
までの質を？

「二人とも、少し——」

「おお！ 貴殿があのお酒童子殿か！ お会いしたかった！」

酒呑が何か言う前に突然後ろからそれを遮る声が届いた。

振り返ればそこにはかなり年老いた人間が笑顔を浮かべて彼女に  
近付いて来ていた。

衣服や佇まいから見て、この山に訪れている僧の中でも一番偉い坊  
主だとわかる。

「ささやかな物ですが、我々の贈り物は気に入っていただけましたで  
しょうか？」

「……………ええ。これ程の量の食糧を集めるのに、貴方達も大層苦勞  
なされたでしょう。ありがとうございます。それで、どう言った要件  
でこの山に？」

酒呑はその男を警戒していた。

別に男が胡散臭いとか、態度がわざとらしいとかそう言う嫌な部  
分は今のところ見えない。

だが何故だろう。酒呑の今まで生きてきた経験が、気を抜くなど警  
報を鳴らしているのだ。

そんな酒呑の心情を知ってか知らずか、男の僧は唖れた声で身の上  
を話し始めた。

「我々は東の国からやって来た旅の修行僧であります。以前京の都に訪れた時、貴殿方の話を聞きこのような品をご用意しました」

「ほう……………私達の噂を聞きましたか」

「はい……………修行僧と言えど、我々も命が惜しい。ですが、旅を続けるためにこの山を越えねばなりませんでした。だから、せめて穩便に山越えを果たせるよう準備させて貰ったのです」

男は自分の身の上を話していく。

目の前にいる鬼の噂を話し、命を獲られなくなかったと馬鹿正直に語る。それは一歩間違えれば相手の気分を害すほどだ。自分達が恐いからと正直に話し、贈り物を送って媚を売る厚かましき。

しかしそれは実に鬼の好みでもある。自分達を恐れ、それを正直に話し供物を渡す人間。

他の鴉天狗や河童ではこうはならない。なにせ彼等にも誇りはある。鬼より弱いから恐い等と死んでも言う筈がない。

狸等は騙す為にそれくらい言いそうであるが、彼らの言葉が上辺だけだと鬼も理解している。

既に勇儀と萃香は人間達を気に入ったらしい。仮に献上物が無ければ拐う位の事はしたかもしれない。

「そうですか……………なら、早くこの山を越えて立ち去る事をお勧めします」

「そうしたいのは山々なのですが……………」

酒呑が遠回しに山から出ろと言えば、男は申し訳なきそうにお供の修行僧と勇儀達を見た。

そこでは飲んで食って騒ぐ阿鼻叫喚の嵐。鬼はともかく一緒に飲んでいる人間は、本当に修行中の身なのかと問いただきたい程鬼達と意気投合している。

その様子を見て、酒呑は今夜中に彼等を追い出すことを諦めた。

「はあ……………わかりました。貴方達の寢床は確保しておきますので、今夜は泊まっていきなさい」

「申し訳ありません。奴もまだまだ若輩の身なもので……………貴殿の御厚意に感謝します」

「気にしないで下さい。悪いのは此方ですので………ああ、そうだ。貴方の名前を聞いても良いですか？」  
「む。そう言えば自己紹介がまだでしたな。これは申し訳ない。私だけ貴殿方の名前を知っているのは失礼に値しますしな………私の名前は、源頼光。どうぞ、よしなに」

その後も宴は続き、末端の妖怪から続々と酔い潰れていく者が増える。酒に強い鴉天狗や鬼ですら思考を飛ばしかけている。

未だ酒に吞まれていないのは酒呑や鬼の四天王と言った力のある鬼や、鴉天狗の長だった天魔、大天狗、側近の者のみとなった。

そして驚くことにあれほど一緒に飲んでいた人間達も酔い潰れていなかった。

「お前さん達強いなあ。鬼にも負けない強さとは恐れ入った！」

「ああ、気に入ったよ。ここまで強い人間は初めてさ！」

勇儀や萃香すら認める程の上戸。彼女達のペース負けることなくここまで付いてきた。

そしてとうとうお酒も殆ど無くなり、そろそろ宴も締めとなる頃。

頼光が突然名乗り出て、宴を終わらせる前に少し時間が欲しいと願い出た。

酔った鬼達がなんだなんだと囁し立てる中、彼は荷物から大きな樽を持つてくる。

最後にと、ここまで飲まずに取っておいた極上のお酒。そう告げられた彼の言葉に皆が喜び湧いた。

「はっはあ！ 魅せるじゃないか頼光！」

「極上の酒とはなんなのだ!? 早く飲ませてくれよ！」

早く早くと急ぎ立てる鬼達に、頼光は冷静かつ迅速にそれぞれの盃に酌で注いでいく。

「これは八幡大菩薩様から授けられた『神変奇特酒』と言う物です。これは極上の味だけでなく、飲んだ者に力を与える素晴らしいお酒と言われております」

鬼や天狗の分を配り、最後に自分達の分も注ぎ終わる。

その一部始終を監視していた酒呑は特におかしな所は無いとわかり、配られたその酒を見つめた。

毒はない筈だ。あの樽に毒を入れた動作は見られなかったし、彼等も同じ酒を注いでいた。これで事前に毒を入れていた可能性も低いだろう。

だが自滅覚悟で私達を騙す可能性が無いわけでもない。いや、それなら最初から全ての献上物に毒を盛っていた筈だ。

彼等がどう言った思惑でこのような行為に及んでいるのか理解できない。純粹に好意を示したくて？ そんな馬鹿な。人間が妖怪に利益を与えるような事はしない筈だ。

飲むべきか飲まざるべきか……。

「華扇。貴女はその酒を一度百薬杓に入れてから飲みなさい。透花は、飲むフリをしてできるだけ飲まないようにしなさい」

「酒呑……？」

「いいからッ」

小声で隣の二人に注意を促す。それしか取れる方法がなかった。

今更場を盛り下げようような行為は出来ない。それをすれば二人以外の鬼達から反感を食らう可能性が高いから。

酒呑はこの酒に何か力を感じていた。それが彼等の言う力を与えるものなのか、それとも違うものなのか。

わからないが、何故か酒呑はこのお酒に親和性を感じていた。まるで身近にあるような、どころか自分に近い何かを感じる。

それが彼女の琴線に触れるのだ。

「さあ、最後の一杯だ！」

勇儀が音頭を取る。

その合図と共に皆が酒を飲んだ。

「ゴクツゴクツ………プハア！ なんだいこのお酒！ 滅茶苦茶美味いじゃらいか！ ヒック！」

「くうくうッ!! 強い酒だが、それ以上に、美味い!! こんらお酒が……ヒック。この世に、あつひやなん、ヒック………あ？」

外野が騒ぐ中、酒呑もお酒を飲み干す。

確かに美味しい。数々の量、数多の種類の酒を今まで飲んで来た酒呑だが、このお酒は中でも上位に食い込む程の美味しさ。

仮に勇儀の持つ星熊盃を使ってランクを上げれば、一番になるだろう可能性を秘めている。

しかし、なんだろう。美味しいには美味しい。ただ、何かが変だ。  
(なんででしょう？ 視界が揺れている気がする。身体が熱い……………考えが何時ものように、まと……………まらない……………？ ツ！ まさか!!)  
酒呑がお酒の異常に気付いたとき、既に彼女の頭は地面に向かっていた。

そして。

「なん、だあ……………こりや……………力が入ら、ない？」

「ぐっ……………鬼道丸？ 凱樓太？ おまえたち……………つぶれちまったのかい？」

「ば、かな……………一体何が……………」

先程まであんなに騒いでいた鬼や鴉天狗達はその酒を飲んだ直後に気絶したように床に倒れ、勇儀や萃香、天魔も意識はあるが身体に力が入らず這いつくばっている。

それだけじゃない。

「酒呑さ、ま……………？」

「……………」

酒を飲まなかった透花も、口が酒に触れただけでベロベロに酔ったように顔が赤く染まり、床に手を付いて倒れるのを何とか堪えている有り様。

隣の酒呑もフラフラと頭が揺れ、いつ意識を失ってもおかしくない。

一番まともなのは華扇か。酔ったように顔が赤いのは他と変わらないが、それでも意識はしっかり保ち今の状況に一早く気付いた。

「酒呑!? 透花!! 勇儀、萃香! …………… 貴様ら、毒を盛ったな!!」  
そんな彼女が睨む先。そこには妖怪達と違って全く酔った様子も見せず、自分達の荷物から甲冑や刀を取り出す五人の修行僧だった男達の姿があった。

「ふん……………馬鹿な妖怪達だ。我々人間が敵であるお前達に善意でこのような事をしていたと本気で思っているとは」

「ん、だと……………きんとき、テメエ……………」

「全ては芝居だとも気付かずにな。所詮畜生の鬼と天狗と言うことか」

武装しながら倒れた勇儀を馬鹿にしたように見下ろしているのは、最初に坂田金時と名乗った男。

他の男達も倒れている彼女達を侮蔑の目で見下ろしている。

「うそ、だ……………お前達は、私達の為に……………」

「そんな都合の良いことがあるわけないだろう。嘘偽りの行為だともだ気付かんのか」

「そんな……………お前達を、信じていたのにツ!!」

萃香は男達に騙されたことに悔しそうに嘆いていた。

彼女はこの宴で彼等と友人になっていたと思っていた。なのにそう思っていたのは自分達だけで、彼等は騙すために口八丁で友人になると嘘をついていたのだ。

僅かな時間とはいえ信じていた者に裏切られた事実が、萃香にショックを与えた。

「何故、だ……………我等はこうして身体が動かないのに、何故貴様ら……………」

「言っただであらう。あの酒は飲んだ者に力を与えると。ただ妖怪には猛毒に等しい、神から授かった神聖な酒だがな」

「くっ……………だからか……………」

天魔はまんまと罠に嵌められた事に己の迂闊さを呪った。

妖怪としての力も、独自に発現した能力も酒のせいでは使えない。身体が動かなくなった事も考えると、どうやら酒を飲んだ妖怪の力を奪う効力があるらしい。

段々、口を開くことすら難しくなっていた。



そして男達は完全武装すると倒れた鬼の四天王達の前にそれぞれ立った。

手に握った刀であれば、妖怪としての力が失われた鬼程度の首は簡単に落とせてしまうだろう。

この場で唯一、神酒を百薬枘である程度中和させた華扇は皆を助けるために動いた。しかし、

「こやつ、まだ動けるのか」

「くっ、どけえ！」

それは近くにいた渡辺 綱によって阻まれてしまう。

動けるとは言っても、強すぎる神酒は華扇の動きを阻害し続ける。

鬼としての力も大幅に落ち、加えて人の身の渡辺 綱は神酒を抜きにしても強かった。

助けるどころか、後退し遠くなる一方。

最後に源頼光が顔を俯かせた酒呑の前に立ち、鞘から刀を抜き放つ。

他の者も準備は整い、後はその刀で鬼の首を切り落とすだけ。

男達は首を落とすために、鬼達の身体を押さえ付けようとして――

「おい」

低く重い声が、男達の動きを止めた。同時に、酒呑の前に立っていた頼光は危険を感じてその場から飛び退く。

直後、彼が立っていた床が陥没し、畳が跡形もなく弾け飛んだ。

「汚い手で我等に触れるな」

いつの間に回復していたのか。先程まで神酒に意識をやられていた筈の酒呑が、珍しく表情を崩して怒りも露に男達を射殺すような目で睨んでいた。

そのかつて無い存在感に男達は四天王達の存在すら忘れて酒呑に目を奪われ、酒呑をよく知る四天王や天魔は彼女の初めて見た怒りに固唾を呑む。

（やべえやべえやべえ！ 酒呑ちゃんピンチ!! 頼光達めっちゃ武装して強そうだし、頼みの綱の勇儀達は倒れてるしで完全に詰んだあゝ……………!!

ああああああ!! もう、やっちゃまったよ私!! 皆が酷いことされそうだったからカツとなって怒ったけど……………やばみ。皆私のことと見てる。めっちゃや私注目されてる。絶対人間達に『なんだアイツ弱い癖にしやしやり出て…………』とか思われてるよ!! これだから慣れない事はすべきじゃないってあれほど…………怒ってるよね？ 空気読まないことして怒り心頭ですってか？ ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい。土下座するから！ 地面に額ぶち当てて靴でも何でも舐めて土下座しますから許してえええええ”え”え”え”）

そんな張り詰めた空気の中、酒呑だけは平常運転で一人勝手に焦っていた。

## 弱い鬼

悲報。ちよつと意識が飛んでたら完全武装してる人間達に滅茶苦茶睨まれてたでござる。

ヤバイわあ……あの人達マジでキチガイだよ。ちよつと怒つたら逆ギレして睨んでくるんだもん。そりゃあ私達鬼は人間達に酷いことしてきたけどさあ……それでも家族が殺されそうになったら怒るじゃん。人間だつてそうじゃん。普通じゃん。そんな目の敵にしなくたつて良いじゃん。

お前ら超短気かよ。あれだろ？ 名前間違えて呼ばれたら滅茶苦茶キレる性格だろ？

怖いわあ。ここ百年で勢力を伸ばしてきた武士だか何だか知らないけどさあ。そう言うの良くないと思うよ？ まずはお互い冷静になって話し合おうよ。刀とかそんな危ないものこつちに向けないで。平和に会話した方がお姉さん良いと思うんだ、うん。

あ、駄目ですか。そうですか……。

ああああああ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”殺さ”れ”る”う”う”う”う”う”う”う”う”う”う”!!!

「何故貴様は動ける……その鬼もそうだが、さっきまでのお前は神酒によつて力を奪われていた筈。なのに何故そんな平然としていられるのだッ」

さっきまで刀を持って私に近付いて来ようとしてた危ないやつナンバー1の頼光が私に問いかける。

てかやつぱりあの酒に毒が入ってたんだね。いや、毒と言うか……アホみたいに強い酒か。私が一瞬意識を飛ばしてたくらい強いお酒だから、相当な物だろう。

「当たり前だ。私を誰だと思っている。鬼の首魁、酒呑童子だぞ？」

だけどさ。その酒の中身つて、私が持つてる酒と同じやつでしょ？ しかも美味しい飲み物で割られてるから滅茶苦茶薄くなつてるし。

なんとなくなあくけど、いつもより力がみなぎってる気がする。

そうとわかれば彼等が言っていた、『その酒を飲むと力を得る』と言う弁も間違いではなかった。あの酒は私のような弱者が飲むと力が増す効力がある。元々弱い人間が薄まったあの酒を飲むのは全く問題ないのだろう。

ただその酒の力は私達にとっては毒だった。

あの酒は本当に猛毒だ。どんなに酒を飲んでも潰れることのない私が1滴で酔うほど。薄めた頼光達の酒でも皆が酔い潰れて動けなくなってる。現に私もちよつと酔ってるし。

ただ疑問なのは、なんで頼光達が酔ってないのかだけ………私の持ち物みたい特殊な器でも使って酔わない対策でもしてるのかね？ わからん。

それにしても、用意周到だよ。本当に。時間を掛けて私達を信用させ、最後に自分達に害のない毒を仕込む。しかも自分達の戦力を上げる二段構え。仮に酒が効かなかった者がいても、数人で囲えば勝てる。踏んだのだろう。

今のうちに、ね。

格好つけて名推理を解いたみたいに言ってみただけど、結局状況変わんないんだよなあ………

あー、どうしよ。

「なるほど………最強の鬼と呼ばれるわけだ。言うだけのことはある。だが、この人数差にさしもの鬼も勝てるか？」

「それを決めるのはお前ではない。私だ」

「ふん。強気だな」

唯一の救いなのが、彼等が私の事を最強の鬼と思っていていてくれる事くらいかな？

最強（笑）の私が酒の力で倒れなかったのは彼等にしてみても誤算だったんでしょうね。私と華扇以外の皆が倒れているのに襲ってこないのがいい証拠だ。

いくら武装しようが最強の鬼に勝てるわけがないと彼等もわかっているのだろう。

……………まあ、ぶっちゃけ私の方が弱いですがね。

だって勝てるわけないじゃん。何あの武器類。何かすつごく嫌な気配するんですが。絶対あれ、対妖魔の物だって。斬られたら助からないやつだって。

ねえ、止めてよ。その刀を私に向けないでよ。めっちゃ恐いんだって。そんなもの置いてさ？ 楽しくお喋りしようよ。そっちも会話を望んでるんでしょ？

考えてること、一緒。仲間。僕達、仲間。争い、良くない。仲良く、しよ。

「確かに今の状況は良くない……しかし、貴様がそのように悠長に喋っているのは失敗だったな」

そう思っていたけど、残念ながらそう都合良くいかないらしい。頼光さんったら現状を打開できる案を閃いてしまったみたいだわ。

頼光が周りのお供に目配せする。すると奴等はあるうことか勇儀や萃香達の首の真上に刀を添えた。

そして頼光自信も、持っていた刀の刃先を一番近くに倒れている透花に向ける。

「我等が貴様に殺されるなら、貴様の仲間も諸ともだ」

「ッ……………」

「鬼退治は出来なかったが、一矢報いることはできる。鬼の四天王三人に天狗の長を殺すことができれば、正義の為、人の為、目的は果たしたと言えるだろう」

まずい……………まずいまずいまずい!!

ああ、本当に最悪だ。さつきよりもっと質の悪いことになった。そんな事されたらどうしようもできない。私に止める術がないから、力を失った彼女達は簡単に殺されてしまう。

そしたら華扇以外に誰も私を助けてくれる人が居なくなってしまう

う。

「私がそれを止められないとでも？」

「見くびるなよ。如何に最強の鬼だろうと、我等の武具は神から授けられた者だ。貴様が我等を殺す内に無力な鬼の一匹や二匹程度殺して見せるとも」

頼光は覚悟を決めた口調で宣言する。

他のお供達も同様だ。皆、死ぬ覚悟でここにいるのだろう。その目に、覚悟の炎が宿っている。

一番まずい展開だ。このままでは皆が死ぬ。

これでは勇儀達が回復する作戦もおじゃん。時間を稼げばもしかしたら彼女達の力も戻るんじゃないかと言う淡い期待が失われてしまう。

彼女達が殺されれば必然的に次は私が殺される。

それは駄目だ。それだけは駄目なのだ。そんな事を許してはいけない。

「どうやら、この鬼共は貴様にとって大切な者達らしい」

「……………」

「凶星のようだな」

考えろ酒呑。どうやれば生き残る事が出来る？

泣いて土下座し、謝って懇願するか。草履を舐めれば逃がしてくれるだろうか？ それとも足の裏？ クツ……………おっさんの足を舐めるとか嫌だけど、背に腹は変えられない。やれと言われたらやるしかないッ（使命感）

「当初の計画とは違うが……………それでも気分は良い。こうして、悔しがる鬼達の命を我等が握っているのだからな」

「何が、望みだ」

「当然、貴様等鬼の殲滅だ」

……………彼等の意思は固そうだ。仮に私が土下座して足の裏どころか全身を舐め回して謝っても許してくれなさそう。

だけど、どうしよう。鬼の殲滅と言われてもそれは私も困る。それこそ私が今最も回避したい事だから。何とか妥協してくれませんか

ね？

……………無理そうだ。彼等の決意は堅いだろう。

チラリと右手に括られている瓢箪を見る。

これを……………飲むか？ いや、駄目だ。ただでさえ強いお酒なのだ。一舐めしただけで酔い、二舐めしたなら記憶すらも飛ぶ。そんな泥酔状態で、この複雑な状況をどうにか出来ると思えない。

万事休す。打つ手なし。終わった。

……………て言うかそもそもさ。何で私達こんな恨み買われているんですかね？ 何にも悪いことしてたくない？ 私とか、特に私とか、何もしてないよ？ そりゃあ……………お酒とか一度や二度じゃ済まないくらいやつちやつてるけどさ。でも、ここまで恨まれること絶対してないって。鬼違いじゃね？ 冤罪だ!! 冤罪良くない!

「貴様等は勘違いしていないか？ 鬼の殲滅……………大層な話だが、私達が一体貴様等に何をしようの。私は今まで貴様達の顔を一度も見ただけ、恨みを買った覚えもない。何処かの鬼と勘違いしてやらないか?」

「ふざけるな! 貴様等以外に誰が……………何の理由で周辺の村や里を襲い、あまつさえ皆殺しにしようのだ!!」

「……………なるほど。つまり、復讐か」

ああ、はいはい。復讐ね。金時だっけ？ そんなに怒らないですよ、怖いなあ……………。

それにしても復讐かあ。村里や街を襲い、人々を殺したねえ

……………

うーん……………

うん。それは……………アレだ。滅茶苦茶心当たりあるって言うか、最近聞いたことあるわ、ソレ。

ていうかぶつちやけ、私達のせいだわ。ゴメン。

いや、私は何もやってないよ？ てか華扇や透花はもちろん、勇儀や萃香だって人拐いこそしてるけどちゃんと無事に返してるし。取り返しに来た勇氣ある人間達も無事とはいかないけど殺してはいない。

だから、私達が一番悪い訳ではないんだけど……

でもなあ………やっぱり、駄目だよなあ。悪いよな。だってやってるやっつてない関係なく、私がこの妖怪の山の頭領なんだから。被害者から見れば、私が率先して命令してると思われてる筈だし。

どう考えても、責任は私にあるよねえ……

とうとう、来ちやつたかあ。私の監督不行届きと言うか、来るべき時が来てしまったと言うか………

ああ、なんだろ。いぎ、来るとわかっていた事が来たとなると、怖いものだね。人の感情とは恐いものだ。それは、昔からわかっていた事だろうに。

「理解した。確かにそれは私のせいだ。私の管理不備が産んだ悲劇だ………認めよう。責任は確かに私にある。貴様等に恨まれることも理解した。」

「………」

「だが、尚問おうではないか。貴様等が刃を向けている相手はその者達ではない筈だ。何せ、人間達への被害は四天王は関与していない」  
そう言つて私は立ち上がった。

頼光達の握る手に力を籠る。それをすかさず手で制し、何もしい仕草をしてからとある鬼達の下へ足を運んだ。

酔い潰れて暢気に寝ている鬼共。強面で私よりも圧倒的にドデカイ身体を投げ捨てて倒れている。

そんな鬼達を軽く見下ろしてから、一体の足首を持ち、そのまま軽く彼等の方に乱雑に放り投げた。

「……」最近人間達への被害を出しているのはその鬼と、私の近くで転



がっている鬼達だ」

コイツ等が犯人だと告げて、近くで倒れている鬼達を指差す。信じられないものを見る目で誰かに見られた気がしたが関係ない。

どうせいる必要の無い鬼達だ。

「先日にも里を襲った者達はコイツ等だ。また、他の人間達への無体も殆どコイツ等が行っている。どうだ？ 勘違いに気付いてくれただろうか」

まるで捨て石のように鬼達を売ったが、私の言っていることは本当だ。私は、人間達を殺した犯人をしっかりと覚えていたのだから。

私は妖怪の山に住む皆の意思を尊重するが、それでも私達の害になりそうな者には容赦しない。今回の事件を引き起こした原因のコイツ等が勝手に行動してきたせいで私達に被害が被ったというのなら、私は平気で仲間だった同族も敵に売ろう。

家族を守るためなら私は容赦しない。

「煮るなり焼くなり好きにするがいい。代わりに、その四人を解放しろ。そうすれば私はお前達に危害を加えない」

「……………その話が、信じられるとでも？ そもそもその鬼達こそが全く関係ない鬼で、貴様が我等を騙している可能性がある」

「こればかりは信じてもらおうしかないなあ……………鬼は嘘を吐かない。それは本当だ。」

私はこう見えて意外と冷酷で残忍なのだ。でなければこうして2000年以上の時を生きてはいないさ。

だから例え捨て石だろうと生け贄であろうと、私は見捨てる。必要の為に平気で仲間を見捨てる。

その覚悟だけは昔からあった。

「だが、どうしても信じてもらえないのなら仕方ない……………」  
「ツ……………来るか」

絶対に避けられない二択の選択を迫られた時、私はいつも考えている優先順位に従って二択のどちらかを取る。

勇儀や萃香辺りは強欲で強いからその場合は強引に二択とも取るのだろうけど、私は弱いからね。

だから、家族と自分の命を天秤に掛けた時。

「私の首を貴様等にやる。そうすれば信じてくれるだろうか？」

私は、家族のためなら命を捨てる覚悟が出来ている。

「なにっ？」

「な、何を言ってるの酒呑!？」

私の言葉に今まで一つも表情を崩さなかった頼光が驚きで顔を歪めた。

それだけじゃない。私の無事を見て抵抗を止めて今まで静観していた華扇や、聞いているどころじゃないだろうに、妖怪として力を失って辛そうにしている皆が驚いている。

まあ、私を知っている皆なら驚きは尚更だろう。だって、私はいつも臆病で自信が無く、自己保身に走る最低な鬼だから。

こんな風に誰かのために命を投げ捨てるなんて行為、私がする筈がない。

「私の命をくれてやる。だから………信じてくれないだろうか？ こうして文字通り命を懸けて訴えているのだ。人間達への被害については鬼の四天王と鴉天狗の長は関与していない」

でも、私は皆が好きだからね。皆に生きていて欲しいから、私は行動できる。

弱小妖怪だからこそ。ちっぽけな存在だからこそ、簡単に命を懸けられる。

「………俄には信じられん………鬼の頭領と謡われた貴様が、まさかこんな呆気なく………」

「それくらい、貴様等が刃を向けている皆は私にとって大事な家族なのだ。家族を守るためなら私の命程度、一つや二つ………いくらでもくれてやる………だから頼む」

私はそう言って頭を下げた。

許しを請うように、助けを求めるように。無様に額を擦り付けて、必死で頼む。

「皆を解放してくれ。この通りだ」

止めてと誰かが叫んだ。卑怯な者達に屈するなと呻き声が聞こえた。そんな姿望んでいないと掠れた声が鼓膜を震わせた。湿った声で私の名前が呼ばれたような気がした。

それでも土下座を止めない私に、誰かが足音を大きく鳴らして近付いてくる。

そして、床に付けた私の頭が勢い良く踏まれた。衝撃で視界が瞬く。

「ふざけるな」

呪詛のように重く低い声が踏まれる私の頭の上から響いた。

後頭部と額の痛みを忘れさせるほど、暗く冷たい声だ。

「今さら、都合が良すぎないか？ そんな詭弁、許せると思ってるのか？ 我等が受けた報いが、悲劇が、悔しさが………それだけで収まると思っているのか!!」

空気を震わせる怒りの声とは裏腹に、何故か胸を締め付けるような儂くて脆い泣き声のようだ。

「その足を退ける人間!!」

「行かせん!」

遠くで華扇達が争っている様子が聞こえる。

頭が痛い。額を切ったのがわかる。人間の大人一人分の重さが頭に乗っているせいか、頭蓋からミシミシと音が出てる。

「わたしは、ただ家族を守りたいだけ、だっ」

「何が家族だ! その家族を殺してきたのが貴様等だろうに!」

ああそうだ。これは私の責任だ。止められる立場にいながら、人に害為すことを咎めなかった私の責任だ。いつかこんなことが起こるんじゃないかと危惧しながら、それでも我が身可愛さで現状に甘えた私のせい。

許されないことだろう。それでも、私は受け入れることのできない未来を防ぐために、こうして頭を下げて頼むことしか出来なかった。

「お願い……します！　どうか、皆だけはッ……」

「ここまでしておいて何様のつもりだ！　一族全て、末代にまでその罪は消えることが無いほどの事をしておきなごら!!」

「お願い、しますッ……!」

「……どれだけ重い罪かわかっていないのか？　なんなら見せ付けてやろうか。貴様の目の前でこの鬼達をこ——」

何か割れる音がした。

嘆き喚く男の音が、突然途切れる。

直後に私の頭にのし掛かっていた足が離れ、そのまま一歩二歩と退がる音。

先程までの勢いとは裏腹に、いきなり静かになった彼に疑問を感じて顔を上げた。

「ッ」

男は……いや、周りにいる頼光達すらも何かを恐れた様子で此方を見ていた。

一瞬、私の後ろに何かあるのかと首を向けそうになるが慌ててそれを抑え込む。今は彼等に僅かでも隙を見せる訳にはいかない。

畳み掛けるならここしかないと本能が叫ぶ。

「……鬼に二言はない。原因の鬼と、元凶の私は素直に殺される。二度と妖怪の山が人里や都に被害も与えないと誓う」

「ッ……」

「だから貴様等も約束しろ！　私が死ぬ代わりに、他の者達には手を出さない。嘘偽りなく、ここで誓え！」

もう意地だった。何とか皆を助けなければならぬという意地で、痛む頭を無視し、額から流れている血を振り払い……震えそうになる身体を全力で押さえ付けた。

「……いいだろう。貴様の話が本当なら……貴様の首を跳ねることが出来たなら、我等は潔くこの場から去ろう。本当ならな……」

「くどい!!　我等鬼に、横道はないッ!　……例えどんなに卑劣で卑怯な行いをされようと、鬼の前にあるのはただの一本道。曲がっていないようにも、遠回りしようとも、そこには一本の道しか無いんだよ

！」  
恐怖を吹き飛ばすように大声で叫ぶ。目尻に溜まる涙を勢いで誤魔化し、ただ啖呵を切る。

怖くないわけないのだ。恐ろしくないわけないのだ。

いくらふざけようと、いくら長生きしようと、いくら人生に満足しようと。いくら家族のためを想おうと。

死ぬことが怖くないわけ無い。皆と会えなくなることが苦しくないわけが無い。

もつと生きたかった。もつと楽しみたかった。浴びるほどお酒を飲みたかったし、美味しいものを沢山食べたかった。

もつと皆と一緒に居たかった。

でも、仕方がないじゃないか。所詮、私は弱くて非力な雑魚鬼。天邪鬼程度の力しかない。そんな私が家族を守るために出きることなんて、自分の命を懸けるくらいしかない。

「さあ来い人間!! それとも、今更怖じ気づいたか!? 貴様等の覚悟はそんなものか!!?」

身に余る地位を与えられ、度々命を狙われ、部下の尻拭いで殺される。

こんな意味のわからない死に方なんてあんまりじゃないか

でも私は泣かない。泣いてやるものか。だって泣いたら………皆に余計な思いをさせてしまうから。

「ふはっ………」

笑え。

「はははっ」

笑ってやれ。

全てを。

「あはははははは、ははははははは!!!」

迫る凶刃。

それが私の首を断ち切ったとき、私は………。

私は………

私は……

「ここは何処ですか？」

空を地面で覆われた大地に、私は一人立っていた。

## 地底と幻想 星熊の後悔

「酒呑！・酒呑ッ！」

かつて妖怪の山一の美女と言われたその姿はもう何処にもなかった。

「グスッ……酒呑様あ……」

誰よりも強くて、鮮烈で、輝いていて。

なのに何処か儂げで、華奢で、消えてしまいそうだった。

「なんで……なんで、死んじまったんだよ酒呑ッ！　こんなんでお前さんが死ぬなんて……」

誰よりも鬼らしく。それでいて誰よりも鬼っぽくなかった母さん。

私や萃香、天魔といった並み居る妖怪を倒し、最強の鬼として妖怪の山に君臨していたあの母さんが……

人間に騙され、約束を破られ、卑怯な手段で殺された。

母さんの亡骸を華扇が泣きながら抱き締めている。遺体に縋り付くように透花の奴がすすり泣いている。ピクリとも動かない身体を見下ろして萃香は悲しそうに毒づいている。

もしかしたら寝てるだけかもしれない。何時もみたいにふて寝して、私達の呼び掛けにわざと応えないのかと。

それだけならどれ程よかったか。

なんで、こんな事になっちまったのか。

いや……理由はわかっている。私等妖怪の山が踏み越えてはならない領分を越えてしまったからだ。妖怪としての本分を越えて、人間たちに喧嘩を売ったからだ。

でも、こんな事になるなんて思ってたんだ。確かに求めていたのは戦いだ。人間達を拐って、それを奪い返しにやって来る強くて勇氣ある人間達の挑戦を受ける。それが望みだったのに……

こんな結末を望んでいたんじゃない。母さんが私達の責任を負う必要なんてなかったんだ。なのに……

母さんはピクリとも動かない。何も話すこともない。いや、何も話すことができないのだ。

華扇に抱き締められている母さんの身体。そこには、生きているものならず必ず付いている筈の首が無くなっていた。

鬼にとって首と頭は急所だ。例え身体に風穴が空こうが、四肢を失おうが、血を流し続けようが死なない。内臓を握り潰されようとも、心臓を破壊されようとも何とか生きていられる。

本来なら首も穿たれようと平気な筈なのだ。しかし、人間の妖刀でその首を絶たれたときだけは別だ。

私達妖怪にとって妖刀は最も忌むべき物の一つなのだから。

「……取り返さない」と

「華扇……？」

どうしようもならない現実には、どうしようもない現実には、ただただ呆然とすることしか出来なくて。

そんな時に華扇がポツリと呟いた。

「酒呑を取り返さないと……人間達から取り返さないと……じゃないと、酒呑に……私はッ」

「か、華扇？ 一体どうしたのさ……？」

母さんの亡骸をそつと床に置いた華扇は、立ち上がると、突然何処かへ歩き出した。そちらには山を下りる為に使う出入り用の門しかない。

そんな彼女の様子は、私が思わず声を掛けて気にするほど異様だった。

「人間から酒呑の首を取り返せば……」

「ちよいと。どこ行こうとしてんのさ華扇」

一番近くにいた萃香が、山から下りようとする華扇の肩を掴み、立ち止まらせようとして。

「触れるなッ!!」

「なっ……うぐっ!」



華扇は萃香の掴んだ手を払い退けると、その手を逆に掴み返して握り潰したのだ。

普段の萃香なら例え万力のような力を加えられようとも苦にもならない。しかし、妖怪としての能力を失った今の彼女に、鬼の力を回復させた華扇に抗う術はない。

ひしゃげ潰れる彼女の腕。

だが萃香の奴は一瞬苦悶の声をあげただけで、例え手を握り潰されようとも怯まなかった。

むしろ、ひしゃげた手を無理矢理動かしてもう一度華扇の肩をガツチリと掴んだのだ。

「痛てて………ったく酷いことしやがるなあ。ただ、何処行くか尋ねてるだけだつてのにさ」

「人間達の所に決まってるでしょ。酒香の首を持って来るのよ。邪魔をしないで」

「ああ、そうかい。でも、一人で都に行くことは無いだろう？ 都には妖怪退治専門の陰陽師がうようよいやがる。それに安倍晴明あべのはるあきと言う、かなり手練れの陰陽師がいるそうじゃないか。いくらお前さんでも一人で行くのは無茶だ」

先程の悲壮感は既に無くなっていった。

あるのは異様な空気に困惑する私達と、二人の殺気に似た威圧だけだ。

いや、華扇に関しては既に殺気を放っている。それこそ殺し合いを始めそうなほど。殺し合いにならないのは、萃香にその気がなくてただ華扇を止めようとしてるだけだから。

しかしそれは今だけで、放置していれば痺れを切らした華扇が萃香を殺しに掛かるかもしれない。それほど、彼女の殺気は濃密になっていく。

このままでは鬼の力をまだ取り戻してない萃香が殺されちまう。私は慌てて二人の間に割り込んだ。

「止めろ華扇！ 一体どうしちまったのさお前さん！ いきなりそん

な無謀な………いつものお前さんらしくないぞ!？」

「五月蠅い! 邪魔なのよ勇儀! 大体、お前はいつもいつも私の邪魔をしてツ……!」

頭を冷やせと訴えても、華扇の奴は頭を冷やすどころかどンドン苛烈になっていった。

完全に、火に油を注いだ形になっちまった。

「そうよ……い・ そうよ、そうよツ!! お前達がいるから酒呑はこんな目にあつたんだ! 酒呑の言葉も聞かずに好き勝手やって………お前らがいるからこんなことになつたんだ!!」

「ぐあっ!？」

彼女の妖気が溢れたと気づいたときには、私は近くの壁まで吹き飛ばされていた。

衝撃で肋骨の骨が砕け、肺に突き刺さりやがる。咳き込んでる場合じゃ無いってのに、気管に入り込んだ血が逆流する。

視界の端で華扇が其処らで寝っ転がってる鬼達に近付いてるのが見えた。

あいつらは、確か………母さんが人間達に差し出した鬼達である。

「コイツ等はずっと赦せない。こんな奴等のせいで酒呑は……」

「止める華扇!」

肉が潰れた音がした。

何度か聞いたことある聞き慣れた音。しかしいつもより生々しく、生命が潰えたようなおどろおどろしい音。

華扇の意図に気付いて止めようとした時には、既に彼女はその手を振り下ろしていた。

その手を休めることなく振り下ろし、確実に鬼達の頭を潰していった。

「本来なら、天狗や河童、四天王のお前達だつて殺してやりたいわ」

華扇の奴はそう言う空に上がった。

血走ったような目で上空を何処か遠いところを見つめ、危うい雰囲気

気のまま私達の傍から離れていく。

「大っ嫌いだったよ」

最後に一度だけ私達の方へ振り返り、華扇はそう言い捨てて去っていった。

「華、扇……」

彼女はそれ以降帰ってこなかった。

あの時何がなんでも華扇を追い掛けたかったが、妖怪の力を失っていた私達に彼女を追い掛ける力は残っていなかった。

ある程度回復して都に攻め入った時には、既に華扇の痕跡は欠片もなかった。

酒呑に続き華扇も居なくなつて悲壮感に包まれた妖怪の山だったが、残念ながら悲しみに暮れている余裕はなくなつていく。

あの日以降、人間達が絶えず山に攻め込んで来たのだ。

それも正々堂々ではない。陰陽師共が作つたらしい結界に力を制限され、力の無い小妖怪やまだ幼い妖怪を拐つては誘き寄せて罠に嵌める。

況してや我等は私達を完全に根絶やしにするために、私達妖怪の山以外で徒党を組む妖怪達と手を組みやがった。

妖怪の山は最強だ。自惚れでも何でも無い、単純な事実だ。

それでも敵対こそしないが、仲間にはならずひっそりと暮らしていた妖怪は山ほどれい。

我等は私達に……もつと言えば妖怪最強と誰もが認めた母さんに最初から敵わないと恐れたから。戦わずに逃げた臆病者達だ。

それでも、我等は虎視眈々と最強の座を狙っていたんだらう。

母さんが死んで、勝手に自分達が強くなつたと思ひ違いをした勘違い野郎共。我等は今が好機とばかりに妖怪の山以外の妖怪や人間達と手を結び合つて、攻め込んで来た。

勿論、そんな臆病者や卑怯者達に滅ぼされる私達ではない。全員返

り討ちにしてやったさ。

だが、私達の被害も甚大だった。弱い妖怪こそ前線に出ず死んだ奴は余りいなかったが、力に覚えのある奴等は大概死んだ。

妖怪同士の争いは醜いものだったさ。

頭を失った組織や元からいない集まりなんて、所詮有象無象、烏合の衆でしかない。

仕切る奴がいない集団の争い。戦争と呼ぶにはあまりにもお粗末な戦い。単なる殺し合いだ。

誰が味方で誰が敵かもわからないような戦場では多くの被害が出た。天魔が束ねる天狗達こそ善戦していたが、それでも全体から見れば数も少なく、所詮焼け石に水だった。

漸く馬鹿な奴等を殺し尽くした頃には、狙ったように今度は人間達が攻め込んでくる。

妖怪の山はボロボロになった。殆どの妖怪が死んだ。河童も鴉天狗も、鬼だつて死んだ奴より生き残ってる奴を数えた方が早いくらいに死んだ。

妖怪の山に新たな大将が必要だった。取り仕切る誰かが、現状を打破できる頭が必要不可欠だった。

そうしなければ母さんが作った妖怪の山は滅び、失われてしまう可能性があったから。

透花は強いが、群れを引つ張ると言う意味では消極的だ。鬼にしては珍しいほど、自己顕示欲がない。だから彼女は自分から辞退した。

萃香は最も適正のある鬼だったが、本人が大将になることを嫌がった。例え母さんの物だったとは言え、お下がりの、しかも自分自身が奪ったわけでもない物を貰っても嬉しくないからと。

だから、私になるしかなかった。天魔もいたが、他の鬼達が納得しない。なにより、全力も出さずに負けを認める天狗達の性格が、私達鬼には合わない。

百年が過ぎた。

相変わらず、妖怪の山の被害は増え続ける。どんどん私の知っている奴等は姿を消していく。

いなくなつた奴等の中には、鬼の四天王である透花もいた。

別に死んだ訳じゃない。ただ風の噂で華扇の話が出てきたときに慌てて妖怪の山から出ていったのだ。

元々あの二人は仲が良かったし、アイツが妖怪の山にいたのも母さんの力に惚れたから。目的もなく惰性でいただけ。切っ掛けさえあればすぐにいなくなつたさ。

人間達は卑怯な手段で私達を根絶やしにしようとしてくる。他の妖怪達も自分達より強い私達が目障りなのか、あの手この手で私達を陥れようと躍起だ。

どんどん減っていく同胞達。次第に対処出来なくなり始めた人間達の侵攻。

妖怪の山全体に不安と恐れが募っていくのを私は感じた。

そんな時だ。最近酒浸りになって常に酔っている萃香がフラフラとおぼつかない足取りでやって来たと思つたら、移住しようというそんな提案がされたのは。

「なあ勇儀。私の友人がさ、妖怪が楽しく過ごせる楽園のような場所があるって言うんだ。そこに私達も行かないか？」

……………あ”？

「だからさあ、楽園だよ。桃源郷つ言つてもいい。いつまでもこんな辛気臭い所にいないでさ、私達もいい加減この地から離れて楽園を目指さないか？」

それ以上聞いていられず、私は萃香に掴み掛かった。萃香は抵抗もせずあっさり私に組み伏せられながらも、何が楽しいのかヘラヘラし

ている。

萃香は私と馬が合う。一番仲の良かった母さんを除けば、次に仲が良いと言えるのは萃香だ。しかし、たまにコイツとは相容れない時がある。

「おい萃香。冗談はそこまでしておけよ。私は冗談が嫌いなんだ」

「私は好きだけどね冗談。ついでに言うとな今の話は冗談なんかじゃないよ。真面目な話さ」

「お前……言ってる意味を理解してるのか？ 移住ってことはつまり、母さんの大事なこの山を捨てるってことだぞ!」

「だからあ……そうだって言っただろ!」

鬼の中でも飛び抜けて力を持ち、知恵も回る。尚且つその反則的な能力は、妖怪の山でも1、2を争う実力だ。

何処か飄々としているが性格も明るく、親しみやすい。

私が今現在最も認める者。

しかし、萃香は鬼として異常だ。嘘は吐かないが冗談は言うし、本当の事を話しているのかわからないのかわからない時がある。

所々がキミみたいに飽きっぽく、そのくせ宴で酔っぱらって母さんをよく困らせていた。

つまりコイツは、鬼として誠実さに欠けるのだ。

そんな萃香が、母さんの形見とも言えるこの妖怪の山を捨てようと持ち掛けてきたのだ。キレないわけがない。

「前々から我慢してたけど、私も限界だよ萃香あ……お前さんに、母さんを想う気持ちがないのかい!」

「ある。勿論あるさ。当たり前だろう？ ま、私が想うのは対抗心だけだがね。」

私は拳を振り下ろした。

床は抜け、衝撃は柱を折り、建物を破壊する。しかし肝心の萃香には能力で逃げられ、私の拳はただ建物を破壊しただけで終わる。

そんな私を嘲笑うかのように頭上から萃香が話し掛けてきた。

「勇儀はさ……固い。固すぎなんだよ。真面目と言ってもいいか。とにかく意固地で、こうあるべきだと振る舞う」

「はあ？　そう言うことは華扇の奴に言つてやれよ」

「いや、アイツはアイツで結構緩い奴だよ。鬼の中でも一番頭が良いからかな。抜きどころはしつかりしている。人目を盗んでは、たまに酒呑に甘えていたしな」

まあ私にはバレていたが。

そう言つて萃香は懐かしそうに笑うが、私にはその笑みが嘘のよう  
に見えて仕方なかった。

「勇儀。お前さんは約束を破られたり、嘘を吐かれるのが嫌いだろう  
？」

当たり前だ。

「仲間を大切にしない奴は嫌いだし、裏切りはもつと嫌いだろうか？」

当たり前だ。

コイツは何を当たり前前の事をさつきから口にしてしているのだろうか。  
そんなもの嫌いに決まっている。許せるはずがない。私は鬼なの  
だ。約束を破るのも、嘘を吐くのも、仲間を裏切るのも全部嫌いに決  
まつてる。それが鬼の種族つてもんだ。

だというのに

「ほら固い。勇儀は頑固で融通の利かない鬼だ」

萃香はそんな事を言う。

別に固いだとか、真面目だとかが貶すような言葉ではないことはわ  
かる。義理堅い奴、鬼の中の鬼。よく誉め言葉として言われる言葉  
だ。

しかし、今だけは何故か馬鹿にされている様な気がする。

いや、実際馬鹿にされているのだろう。

「お前だつて嘘や裏切りは嫌いだろう」

「ああそうだよ？　嫌いも嫌い。大っ嫌いなさ。でも、好きなときもあ  
る」

「はあ!？」

もう萃香の言葉の意味が全くわからん。言っている事があべこべじゃないか。

「例えば、ある妖怪がこの山にいたとしよう。そいつは仲間だけにいるだけで妖怪の山に災いを起こす奴だ。もしそんな奴がいたら、勇儀はそいつを裏切つて見捨てるか？」

「……………するわけないだろ」

「まあ、勇儀はそう答えるだろうね……………。じゃあさ、昔いたアイツ等はどうなんだよ。酒吞が私達を庇うときに見捨てたアイツ等。止める暇もなく華扇が殺したアイツ等」

萃香の質問は要領を得ない。コイツは一体何が言いたいんだ？

確かにアイツ等は仲間だった。でも、アイツ等のせいで母さんは死んだんだ。母さんもアイツ等を悪だと断じて見捨てた。だから、華扇もアイツ等を殺した。

「裏切り者だよ。アイツ等は私利私欲で勝手に動いて、私達を陥れるようなことをした」

「違うよ勇儀。それは結果論であつて、アイツ等は私達を裏切つてなんかいない。むしろ、裏切つたのは酒吞や華扇さ」

……………は？

コイツ……………今、何て言った？

「……………おい萃香」

「確かに原因はアイツ等だけど、奴等はただ妖怪としての本能に従っただけさ。元々、人間達に手を出しちやいけないなんて規律は無かつたしね。まあ罪になるだろうけど、アイツ等は私達を裏切ろうとしたわけでも裏切つた訳でもない」

「……………萃香」

「むしろ勝手に見捨てた酒吞こそ裏切り者さ。華扇は……………まあ、酒



呑の命令だからってことで免除だけど。でも、酒呑は違う。元々禁止でもなかった事をしていただけなのに、人間達が攻めてきたからその責任をアイツ等に擦り付けた。ほら、立派な裏切りだ」

「萃香あああああああ!!!」

中に浮いている萃香を全力で殴り付ける。

霧状になって散ろうが関係ない。全てを殴り付ける勢いで奴をぶっ叩いた。

「ぐえっ!」

「ふざけるな萃香! 母さんが裏切りだと!? 母さんを侮辱するな!!」

散った空気ごと力で地面に振じ伏せる。

塵みたいに手応えは無いが、それでも辺りから苦悶の声が上がった。

ああそうだ。萃香は酔っているのだ。悪酔いしているから、こんな馬鹿みたいな事を宣いやがるんだ。

なら私が酔いを冷ましてやる。ぶっ叩けば酔いが覚めるからな。

「オラァ!」

「ぎぐうツ!! くそっ……そう何度も好き勝手殴られたりしないよ!」

私の拳と萃香の拳がぶつかり合う。

一瞬拮抗したがすぐに私が押し勝つと思っていた。当然だ。鬼の中で私に力で勝てる奴は、もういなくなってしまうただだから。

「侮辱してるのは………そっちだろうが!!」

「なツ!!」

しかし鬼随一と言われた私の力が。一度も負けたことのない私の拳が、萃香の奴に押されたのだ。

それだけじゃない。萃香は私の拳を押し返すどころか私の拳を弾き飛ばし、彼女の拳が私の頬に突き刺さる。

「うぐっ……っ!?!」

視界が真っ白に染まった。殴られた衝撃ではなく、単純に力負けした事実にはショックを受けたのだ。

「うそ……だ、ろ?」

私力が負けるなんてあり得ない。私はあの母さんに純粋な力で認めて貰ったのだ。常に鬼らしく、鬼として正しい筈の私が。

鬼の中でも鬼らしくあろうとした私が、一度とは言え力で負けた。「侮辱してるのはお前だろ勇儀!」

「ッ!?!」

体が跳ねる。何てことない、萃香の怒鳴り声に体が大きく反応してしまう。

「お前は今、アイツ等と同じことをしようとしてるって気付いてないだろ? 意固地になって、ここから離れなきゃ滅びるだけだ」

「……………逃げるってのかい? 鬼の私達が」

ようやく絞り出せた言葉は、やっぱり萃香が言うように鬼の誇りを守るような言葉しか出てこない。

くだらない、ちっぽけな誇りだ。

「ほらまただ。そうやって鬼らしくしようとするからいけないのさ。どうせここにいても滅びるだけだよ。仮にこの状況で酒吞がいたなら、まず間違いなく逃げ出すだろうね」

「鬼の母さんがそんな事…………」

「するわけが無いって? いいや、するね。酒吞は間違いなくこの環境から逃げる事を選択する……………勇儀は勘違いしてるんだよ。お前と違って、酒吞は鬼らしくあろうとしてるんじゃない。酒吞が起す事自体が、鬼の生き様に繋がるのさ」

言い返せなくなった私に、萃香はこう言った。

「勇儀は酒吞の代わりになろうとしてるようだけどさ……………お前さんが鬼としてあろうと振る舞う限り、何時まで経ってもお前さんは酒吞に近付けないよ」

結局、私は萃香に説き伏せられるような形で奴が言う『妖怪の樂園』を目指した。

そして確かにそこは妖怪の樂園だった。真つ昼間から妖怪が森に跋扈し、人間達は小さな集落を作つて怯えるだけで妖怪を退治するよ  
うなことは一切してこない。

たまに脅かすだけで畏れを得られる者達にとつて、まさにそこは樂園だろう。

しかし、鬼にとつてそれは樂園でも何でもない。ただつまらない仮初の樂園だった。

自信を持つて勧めてきた癖に、期待していた物じゃなかったとわかると掌を返すように謝つてきた萃香。

『でも実際妖怪にとつては樂園だっただろ？ だから嘘は吐いてない』なんて悪びれもせず舌を出して謝るその姿は、やはり鬼にしては異端と言うべきだろう。

本当なら約束を破つたとして激怒するべきなのだが、彼女のお陰で妖怪の山が滅びる命運を回避できたのも事実なので、私は怒るに怒れなかった。

そして数百年ほどその地にいた私達だが、結局その地は鬼の肌に合わせてその地から離れることになる。

最近、地獄が縮小して地底の世界が空き巣になつたらしい。元々私達とは別の鬼達が住んでいたため、地底は鬼にとつてここより住みやすい土地と前々から聞いていた。

私達鬼は最近幻想郷と呼ばれるようになったこの地から、嫌われ妖怪として生きづらそうにしている妖怪達を集め、地底の底へと移住した。

あれから何年経つたか。地底の旧都に移り住み、その元締めとして居続けて長い時間を過ごした。

地底の管理とか言う面倒な役職はさとり奴に投げた。始めこそ私がやっていたが、やはり私は向いていないのだ。特に萃香との喧嘩以来、私はそう言うトップの座は向いていないことに気づいてしまったから。

元から一緒に来なかった天狗や河童と言った妖怪達は勿論のこと、いつの間にか萃香の奴も何処かへ消え去ってしまった。

もう嘗ての『妖怪の山』と、そこに君臨し続けていた酒呑を知っている者は殆どいない。

最近、母さんがいた頃をよく思い出す。

私は酒で皆と騒ぐのは好きだ。いつも酒を飲めば皆と朝まで騒ぐ。そんな宴が大好きだ。

だけど、一番好きなのは母さんと二人つきりで一緒に飲んでいた時だ。飲み勝負をしようと誘い、強いくせに飲み比べが好きでない母さんを強引に引っ張って、宴の席から離れた縁側で一緒に飲む。

それが一番好きだった。

昔母さんと一緒に二人きりで飲んでた時、母さんは言っていた。

『こうして皆の賑やかな喧騒を離れた位置から聴きながら、ゆっくりと穏やかに飲む……とても素敵だと思いませんか？』

『あん？ …………… 私はそうは思わないけどね。酒を飲んでは大騒ぎ。それが酒の美味しい飲み方じゃないかい？』

『そうでしょうか？ 確かにそれも楽しいでしょうが……………こうして遠くの喧騒に聞き耳を立てつつ、縁側から見える夜の景色を愛で、お酒の入った盃の重みと感触を堪能し、ツンと突き刺さる刺激的な匂いを楽しみ、それら全てを呑み干し尽くす……………』

『……………そんな風に酒を楽しむ奴なんて、母さんくらいだよ。大体、そんな飲み方私には似合わない』

母さんは鬼ではあり得ない不思議な感性を持っていた。

騒ぎは好きだが自分からは騒がない。最も腕っぶしが強いくせに腕試しなんかでは絶対力を誇示しない。

強い奴や弱い奴を差別せずに、それでいて平気で仲間を切り捨てる

覚悟があつて。

思慮深い癖に、だけどやつぱり仲間のためなら単純なくらい向こう見ずで、簡単に自分の命を張る。

鬼のようで鬼じゃない。

今思えばそんな不思議な母さんだからこそ、鬼の中でも異端と呼ばれる私達鬼の四天王達や、普通なら反りの合わない天狗や河童と言つた妖怪達をも引き連れる事ができていたのだだろう。

誰もが魅了され、認め、従う大将の器。

そんな母さんだからこそ、私は酒呑と言う最強の鬼を尊敬していたのだ。

それこそが母さんの魅力であり、力だったのだ。

……私にはそんな魅力も力も無かつた。だから鬼の四天王や他の皆が付いてこなかつた。

ごめんな母さん。私には母さんが守ろうとした妖怪の山を守る力がなかつた。母さんが認めてくれたような鬼としての器も、魅力も、力さえも無かつた。

母さんの愛娘の華扇も行方不明のまままだ。透花も安否がわからな。萃香の奴もどつかに行つちまつた。

だからこそ思わずにはいられないよ。母さんがあの時生きていてくれたらどれだけ良かったか。身を呈して妖怪の山を守つた母さんを否定するようだけど……それでも、あの時母さんは私達を見捨てても生き残るべきだった。

そんな意味の無いことをずうっと考えてしまう。

もう何年経つたんだろうか。

母さんが死んでからもう千年以上は確実に経つた。私は相変わらず酒を飲んで賭博や宴、そして大喧嘩で日々の暇を潰している。退屈で死にそうなくらいだけど、それでも一応私はまだ退屈死とやらで死んではない。

まあそれも時間の問題かもしれないな。最近、どんなことに対してもつまらなく感じてきたのだ。

幻想郷では何やら騒がしい事態が色々起こっているらしいが、正直どうでもいい。結局地底から出られない私達には関係のない事だから。

ああ……………退屈だ。退屈で死にそうだよ。

何か、私を驚かせる様なことは無いかねえ。まあ、今の私にどんなことが起きようとも驚かない自信があるが。

「勇儀姐さん！」

「……………あ？」

退屈で殆ど飲むか寝るかして日々が過ぎ去っていく中、何時ものように其処らで昼寝をしていた時のことだ。

ドタドタと騒がしい足音を立てながら、部下の鬼の一人が部屋に転がり込んできた。

「弥吉イ……………お前さん、私の昼寝を邪魔するつたあどういことだ？」

「ひっ……………いい、いえ！ 姐さんの睡眠を邪魔するつもりはなかったんすよ！ ただ、とても大変な事があって……………」

「大変なこと……………」

鬼の弥吉の奴が慌てて部屋に入って来たと思えば、何やら大変なことがあってそれを報告しに来たらしい。

どうせ、どっかの馬鹿共が喧嘩して手がつけられなくなったとかそんな事だろう。

そんな小さい事で私の昼寝を邪魔するんじゃねえと怒鳴り付ければ、弥吉は焦ったように弁明してくる。

「違うんすよ姐さん！ 本当に不味いことになっちまって……………俺達じゃどうすればいいかわかんねえから、ここの元締め勇儀姐さんに指示を仰ごうと思って……………」

どうやら何時もの喧嘩ではない大事らしい。

一体、なんだろうか。私の仕切る賭博場で問題が起きたらしいが、

胴元側が惨敗でもして賭博の金でも尽きたのだろうか？

それはそれで面白い。私は一体何が起こったのか弥吉に確認せず、自分の目で確かめようとするくらいには興味が湧いた。

賭博場は常にない活気を露にしていた。と言うのも、普段ではあり得ない宴がその場所で起こっていたからだ。

「おいおい……こりゃあどうということだ？ まだ宴の時間には早いだろう」

時間もまだ真つ昼間。そもそも賭博場を仕切る私がいけない間に勝手に宴を始めるのはご法度だ。私が楽しめないから。だから普段は私が降りてくるまで宴はやらないのが暗黙の了解になっているはずなのだが……。

賭博場は飲めや歌えやの大騒ぎとなっていた。

「ああ、勇儀姐さん！ 良いところに！ 俺達じゃ止められなくて……」

「おい。これは一体どういうことだ。誰がこんなことを始めやがった」

私は先程の楽しさが一転して怒りを募らせる。だが心では怒りより興奮の方が勝っていた。

……私を差し置いて宴を始めるとは良い度胸だ。一体、どんな馬鹿がこんなことを始めやがったのか。

この状況を作った元凶に興味が沸いた。

「あ、あの鬼です！ あの鬼が現れてからこんなことに……」

私の子分の鬼が指差す先には、一際騒がしい集団があった。

どうやら奴さんは騒ぎの中心にいるらしい。女を侍らせて酒を飲む後ろ姿が見えた。

一瞬、女好きで欲望まみれのクソ野郎かと疑ったが、近づくに連れて女達で埋もれていたそいつの様子に気付いて私は驚く。

なんとそいつは女なのだ。男とも女とも見える微妙な長さのザン

バラに切られた髪だったから、最初は男だと思っていた。

その上更に驚いたことに、その女の隣には私の友人のパルスイの姿もあった。このルールも知っているのに、まさか一緒になって飲んでいるとは思わなかったのだ。

このルールを無視して宴を始めるその度胸と、あのパルスイすら手込めにする何かを持つ鬼の女。私の興味が最高潮に達し、あと少しでその肩に手が届くと言う距離で。

その女は振り返った。

「？ ああ。勇儀じゃないですか……………ここに居たのですね。まったく、酷いですよ。起きたら誰も居ないから、一体どうしたのかと……………でも丁度良いところに来てくれました。ちよつと人手が欲しくて、一緒に手伝ってくれませんか？」

千年経とうと未だに色褪せることのない記憶。どんなに時が流れようと忘れることのないその姿。

かつてその強さに惚れ、憧れ、また私の前に現れることを願い。

結局諦めることで想いを断ち切った妖怪の山の大将。

亡くなった筈の酒呑童子<sup>母</sup>が、そこに存在しているのが当然とばかりに私の前で酒を呑んでいたのだ。



## 目覚め

暗い闇が広がっている。

—— また死んじやったのかしら？ 貴女も懲りないわねえ。

一寸先も見えない闇。

—— え？ 好きで死んじやいないって？ まあ、それはそうかもしれないけど……そうね。貴女も好きであんな体になったわけでもないものね。

でも私は言った筈よね？ まだ彼処に手を出すべきでは無かった。私の忠告も聞かずに特攻した貴女がいけない。自業自得よ。

声だけが、聴こえる。

—— まあ、良いんじゃないかしら？ 肉体に縛られないこの世界でなら、貴女は昔のように力を行使できるわ。

—— ……貴女って頑固よねえ。まあ、貴女がそう言うなら良いけどさ。でも、次に復活するのは相当遅いわよ？ 多分、千年近く戻れないんじゃない？

闇が広がっている。

▽▽▽

「ここは、何処でしょうか……？」

見渡す限りの青空——ではなく、見渡す限りの土、土、土……  
巨大な洞窟？ それとも空が土色に染まってるのか？

まるで地底世界のような空間に私は一人いた。

と言うか、もしかしなくても私地底の世界にいない？　なんか地面の所々から溶岩が流れているのが見える。おかしいよね？　なんで？

確か土蜘蛛辺りが地下に住んでる妖怪な筈だけど。間違えて彼等の巢に入り込んでしまったとか……いや、どんだけアイツ等巨大な穴掘ってんだよ。スゲエな土蜘蛛。

「うむむ……それにしても暑いですね……」

てか暑くね？　いや、熱くね？　熱中症とかいうレベルじゃねーよ。気温高すぎじゃない？　高過ぎ君じゃない？　肌が火傷すんだけど……え、死ぬ。死ぬって。特に足の裏が凄く熱い気がする……「……あちゃあ!?!」

うおおおおお!!?!　草履が燃えてる!!　ちよまつて!!　この岩盤熱せられ過ぎだろう!!　ふ、服に、服に燃え移るうう!!!

……

……

……

ゼーハーゼーハー……

アブにやかかった……まじ、焦った……。丁度良く熱から身を守る結界用の仙術が無ければ焼けて火だるまになるところだったよ……。

てか、なんなんだよここは！　ふぎけんな！　起きて早々焼死とか何処の地獄世界だよ！　こんなん、生活に支障をきたすわ！

はあ……疲れた。ちよつと横になる。はいそこ、起き抜けでまた寝るとかだらしがない、なんて言わない。

うむむ。やっぱり空が土で覆われておるでおじや。地面も凡そ人が生活できる環境じゃないし。救いは、溶岩が露出して土の世界なのに明るいつて所かな？　それ以外にも空の土の至るところでなんか光ってるし。まあ、全体的に薄暗いのは変わり無いけどさ。

本当に何処だろう。私はこんな世界知らない。来たこともないし、

そもそも来る方法も知らない。

どうやって私はここに来たんだ？

確か……私は昨日、何時ものように宴会でお酒を飲んではお力に抱きついて、お酒を飲みつつ馬鹿鬼二人を酔い潰して、あの子を愛でつつまたお酒を飲んで……宴会が終わって自室に向かって、それから……どうしたんだ？

うーん……駄目だ。確かに自室にいた記憶はあるんだけど、その後の記憶が思い出せない。多分寝たんだろうけど、寝る前の記憶って意外と覚えて無いんだよねえ。

でも、絶対外出してないのは確かだ。うん、これは間違いない。

ってえーとお……アレですか？ 私、誘拐されました？

いやあ困っちゃうなあ。確かにい？ 私ってよく鬼の皆には美人だよ可愛いよって言われてるけどさあ？ でもお、やっぱり勢い余って誘拐されてもお（撫声）

……はあ、死にてえー。

どうせ私は可愛くないですよ。よくお世辞で華扇とかに誉められるけど、所詮お世辞だから。てかむしろ怖がられてるから。部下達に言われたこと無いから。

あー、でも誘拐されたのはマジかも。なにせ私、一応妖怪の山の頭だからね。恨まれるようなことはしてないけど、それでも命を狙ってやって来る奴とか数えたらキリがない。自慢じゃないけど、寝首を掻かれそうになった数は多分私が一番だと思ってくらいだしね！

うん。自分で言ってる悲しくなったわあ。

……ひっぐ……ぐすっ。ツライ……ツライよお……。なんで誰もいないの？ 華扇どこお？ ぶっちゃけ一番怖いけど、それでも頼りになる勇儀はあ？ ヤンチャだけど、なんなかなで優しい萃香がいない……。癒しの透花を抱き締めたいのにできない……。

「……………」

駄目だ。

私、皆がいないと何にも出来ない……元から知ってたけど。

皆がいないとやる気も起きない陰気な野郎なんだ……千と五

百年も前から知ってたけど。

私は使えないゴミ屑なんだ……………当たり前のように知ってたけど。

……………卑屈だな、私。

「……………よっこいしよ」

取り敢えず暗いこと考えるのは一旦止めよ。まずは先に現状をどうにかしないと。大丈夫。私はあの子達と会う前は一人でやって来たんだから。何度も、一人でやって来たんだ。

長い間、ずっと一人で。

それこそ、数えられないくらい。

……………おりゆ？　なんか、今変なこと考えてなかった？　おかしいな……………私が一人きりの状況なんて、今まで一回しかなかった筈なのに……………

まあ、いいか。

数え間違いでしょ。よくあるよくある。

それよりさっさとこの場から離れよう。なんか変なんだよねここ。見渡してみたところ、結構荒れてる感じなんだけど私のいる場所だけ整理されてるっていうか。

それに、私が今いた場所。木で出来た箱の中にいたんだけど……………まるで棺みたい。

うええ……………考えただけで気持ち悪い。なんで私ここで寝てたんだろ。マジで誰かが誘拐してここに移したんだとしたら洒落にならないから。ソレに気づかないくらい爆睡してたって事だから、本当に死んでみたいに見えるじゃん。

早く離れよ。なんか、上に続いている道があるし、行ってみようか。見た感じ地下の出口じゃ無さそうだけど……………もしかしたら、誰かしら妖怪か人がいるかもしれない。

ああ……………暑い。日ノ本の真夏以上の暑さだ。ちよつと歩いただけで汗が凄く出てくる。いくら足下の熱を遮断できるって言つたつて、気温自体はどうにも出来ないからね。

何処かで水分補給しないとだ。このままじゃ干からびちゃうや。

確かお酒が懐に……………。

……………アレ？ おかしいな……………私の見間違いかな？ なんか、お酒の入った陶器が全部粉々になつてるように見えるんだけど。ヤバイ、暑さで目がやられたか？

ゴシゴシ（ノ―へ。）

よしこれでどうだ（、・ω・）

……………うん。何度見ても、かつてお酒が入っていた物達の碎け散つた残骸だけしかないや。

……………

……………

……………

なしてえ……………。なして、お酒の入った入れ物が全部壊れてるのぉ……………

誰だよ壊したやつ。悪質だろ。おかしいでしょ。なんで壊れてるのさ。私の秘蔵コレクションだよツ？ これ全部集めるのに私がどれだけ苦労したと思つてるの!？ そんなのありかよおおおおおおおおおお!!!

「……………ガクツ」

あまりの事実に打ちのめされた。項垂れるしかない。

ああ……………私のお酒え……………

「ちよいとそこのお姉さん」

「お酒……………お酒え……………」

ふええ……………お酒え……………私の大切な、お酒え……………。

もう駄目だ。お酒が無いと生きていく気力すらなくなっちゃう……。私にとつてお酒が全てなんだ。それを、何処の誰だか知らないけど……ちくせうツ……

「お姉さんどうしたんだい？ そんな踞って。聞いてるかい？ お、ね、え、さ、ん！」

もう全てが嫌だ。死にたい。お酒が無い生活なんて死んでるのが同じだ。耐えられない。

ああ……私の秘蔵コレクション達。あれだけ貯めといて、飲んであげられなくてごめんよお。

「お姉さん！」

「ツ!？」

ぶへらっ!？」

な、な、ななななんじゃない!? いきなり横っ腹をどつくでない! びっくりするじゃないか!

「ゲホツゲホツ……なんなんですか一体」

突然横から受けた衝撃に噎せる私。悪態を吐きながら、私の腹をどつてくれた正体を確かめるために振り向くと。

そこには、何やら面妖な少女が一人プンプン怒ったように立っていた。

「全く。こつちが親切に声かけてやったつのに無視とは酷いじゃないか」

「……………」

「また無視かい!？」

「ああ、いえ……ごめんなさい。ビックリしていたもので」

その少女は黒の下地に何やら緑の模様の入った奇妙な服装をしていた。今まで一度も見たことがないような服。明らかに日ノ本や大陸の者達が着ていた服とは違う……数回ほど見たことのある西の海の者達が着ていた服に近い。

深紅の髪を両サイドで編み込んであり、前髪は切り揃えられていて可愛らしい顔によく似合っている。

そして一番注目すべき点は彼女の頭の上に付いた耳だ。ぶつちや

け、これを見て私が固まってしまった原因でもある。

なんと彼女、猫耳だ。ふさふさと柔らかそうな毛並みの猫耳が頭の上にちよこんと乗っているのだ。

可愛い。滅茶苦茶触りたい。

「失礼しました。先程までとても落ち込んでいたので……少し、周りを気にする余裕が無かったのです。気に障ったのなら謝ります」

「少して済むレベルじゃなかった気がするけど……まあ、いいさ。あたいもそんな気にしてないしね！」

おお。中々懐の深い人物だ。見た目からして元気があると言うか、陽気な感じがする。表情もコロコロ変わって見ていると飽きないし、なにより愛嬌のある人懐っこい笑みが良い。顰めっ面と不細工な笑みしか出来ない私の顔とは大違いだ。

「それで、お姉さんはなんでこんな辺鄙な場所で落ち込んでいたんだい？」

「それが……私の持っていたお酒が全部無くなって……それで、もう死のうかかって……」

「……………ふむふむ」

「……………」

「……………」

……………

……………なんだろ。この間は。

「……………えっ？ それだけ？」

「……………」

なんで聞き返したの？ とても重大事件でしょ。その反応おかしいって……………ちよ、待てや。なんだその顔は。聞かなきゃ良かったみたいな顔するなや。

「え、まじで？ ホントに？ ……うわあ。本当なんだね……………思ってた以上にしようもなかった。心配して損したよ」

——は？ キレそう。いやごめん。キレたわ。

「なんですつて?! お酒は私にとって命みたいな物なんですよ!! とても重大な事なんです!!」

「へっ?。——わっ、にやっ、にやああああああ!。お、落ち着いて。揺さぶらないで!」

ふざけるな。何てことを言うんだこの猫耳娘! 人が凄く落ち込んでるって言うのにッ…………。お酒は私にとって命の次に大事なもののなんだよ! なのにそんな事言うなんて酷い!!

私にはお酒しかないんだ! お酒が無きや! 生きて!! いけな  
いッ!!!

…………客観的に見て質の悪い呑兵衛ですね。屑だわあ、私。

猫っ娘ちゃんに不満がある程度ぶついたら少しだけ元気が出たし、凄く冷静になれた。

同時に私のどうしようもなさに気付いて再び落ち込みかけたけど、それよりも前に、目の前で目をクルクル回している猫っ娘ちゃんだったのでそれどころじゃなくなった。

「目があああ……………」

「ぐ、ごめんなさい!」

マジ、申し訳ねえ。

「にやあ…………まだクラクラする…………」

「本当にすみません…………」

「まあ、あたかも悪かったさ。お酒の事で鬼相手に絡むもんじやないからね。私がどうかしてたよ」

うむむ…………本当に申し訳ない事をした。彼女は親切で私に話し掛けてきたと言うのに、ちよっと酷いこと言われたからって八つ当たりして…………。いや、やっぱりお酒の事だし…………怒るのは当然のことか?



「……やっぱり、お姉さんも鬼なんだねえ。酒の一言でここまで取り乱すなんて………雰囲気は鬼のそれとは違うから、気付かなかつたよ」

「ふむ………貴女は私の同族を知っている様子。この世界には私以外にも鬼がいるのですね?」

「ありや。鬼のお姉さん新人さんかい? どうりで見ない顔だと思つたよ。妖怪の賢者もこんな場所に放り出すなんて、さてはお姉さん相当嫌われてるね」

? この猫っ娘ちゃんがさつきから何言ってるのか全然わからない。一人で納得してうんうん頷いてるし。新人? 嫌われもの? なんのこっちゃ。

「未だに要領を得ないので………もしよければ、ほんの少しで良いので貴女の知っている事を私に教えてくれませんか?」

「……お姉さん、本当に鬼っぽくないねえ。喋り方も丁寧だし、なりに謙虚だ………気に入ったよお姉さん。あたいがこの地底について教えて上げる!」

「ありがとうございます」

なにやら気に入られたらしい。腰を低くして尋ねただけでこの対応………この娘、チヨロイな。

まあ私としては教えて貰えるなら何でもいい。情報は大事だからね。頭の一つや二つ下げるくらいで貰えるならいくらでも頭下げちやうさ。

でも、その前にだ。

「教えてくれるのはありがたいのですが………まずは場所を移しませんか? ここは暑くて………」

「ん? ああ、すっかり忘れてたよ。いいよ。この道を登ればさとり様にも会えるし一石二鳥だからね」

私は移動を提案した。

この場所は凄く熱いんだ。正直、干からびる一歩手前です。さつきと離れないと酒だけじゃなくて全身の水を失いかねない。

猫っ娘ちゃんに案内されながら、私は上へと繋がる道を登ってい

く。

「そういえば自己紹介がまだだったね。あたいはお隣っていうのさ。鬼のお姉さんの名前は？」

「私は酒呑と言います。呼び捨てで良いですよ」

「ふーん。酒呑って言うんだねえ……………ん？ その名前、どつかで……………」

私の名前を聞いた後に、何かを思い出すように唸るお隣ちゃん。一瞬、妖怪の山の頭だとバレたのかと思つて焦ったけど、流石にこんな地下深くにまでたかか妖怪の組織ごときの存在が伝わっている筈が無いと意識を改める。

うんうん。知ってる筈無いさ。自意識過剰だから私。恥ずかしいよ？ だから落ち着こう。私の首を狙う妖怪がいるかもしれないだとか、皆の影に隠れて虎の威を借る事が出来なくなったとか、守つてくれる存在が誰一人いなくなったとか……………そう言うマイナス的な思考は止めよう！

ガタガタガタガタ

お、おかしいな。冷や汗が止まらねえや。体の震えも治まらないし……………か、風邪かな？

「それにしても地底についてかあ……………何処から話したもんかねえ。教えるつてお姉さんに言つちやつたけど、あたいたい口下手なんだよ」

うんうん悩んだ様子で考え込むお隣ちゃん。彼女の様子を見て私は申し訳ない気持ちでいっぱいだ。なにせ、この世界の事について教えてくれと頼まれれば、誰だつてどうやって教えれば良いかと悩むだろうから。

「ふむ……………なら、この地底には何か法律やルールと言つたものはありませんか？ 知らないところで何か粗相をしたり罪を犯してしまつたりしたら嫌ですからね」

「ん？ そんなに怯えるような事はないよ。なにせここは地底だからね。『地上に出ない』以外はなんにもないさ」

？ 変な決まりがあるもんだ。何故地上に出てはいけないのだろうか？

なんだろう。不安と言うべきか、物凄く怖いと言うべきか。  
悪い予感しかしない。

「……それは何故ですか？」

「えー……………お姉さん。ホントになんにも知らないんだね。そんなの当たり前さ。この地底は地上で嫌われた者達ばかりが集まった場所だからさ」

はっ？

「だからって訳じゃないけど、地底では強さが全てさ。弱肉強食。弱さが悪ってね。それこそお姉さんが言うルールと言えば、『腕っぷしの強さ』がこの世界のルールだよ」

## 地底世界

「さあお姉さん、着いたよ。目の前の建物が地底の管理者であり、私のご主人様であるさとり様が住む地霊殿さ！」

坂の道を登り歩き、漸く目的地らしき場所に辿り着いた。

先程私が目覚めた場所よりは幾分か暑さが和らいだが、それでも溶岩は地上から露出し、まだまだ汗が止まらないほど熱く住みづらい立地の上にその建物はあった。

……………とうとうやって来てしまった。

「まだお姉さんは新人だから、一度さとり様に挨拶しないと。さとり様は書斎にいるかな？」

私の様子に気付いていないのか、お隣ちゃんは建物の入口らしき扉を開けると、どンドン中に突き進んで行ってしまう。

私はそんな彼女の後をおっかなびっくり付いていく事しか出来なかった。

お隣ちゃんの話聞いたとき、私は周りの熱さも忘れるほど頭が真っ白になった。

お姉さんは鬼だからその辺はあんまり気にしなくて良いんじゃないかい？　なんて気休めにもならない言葉にすら反応できず。

気付いた時には話が勝手に進められていて、私はこんな物騒な世界の管理者に会うことになっていたのだ。

怖い。怖い。

一体どんな人物なのだろうか、そのさとり様と言う人は。

私の知っているさとりとは『覚』妖怪の事を指すのだけど、正直違うと思っている。なにせ『力がルール』だとか言うこの世界の管理者が、あんな心優しく良い子達の覚達に務まるとは思えない。

大体、覚妖怪の名前がさとりって安直過ぎるでしょ。覚がいっぱいいる中で名前を呼んでも誰を指してるのかわからなくなるわ。

妖怪最強とも名高い鬼が住んでいるらしい地底。そんな世界の頂

点？ に君臨して世界を管理する者。

きつと、筋肉ムキムキで顔も厳つくて、性格も横暴で屑で最低な野郎なんだろう（偏見）。

ああ……私はどうなってしまうんだろう。無事に以前の場所に戻るのだろうか。

「さとり様あ。いますかー？」

『いるわよ』

日ノ本では見掛けることのない洋風な扉をお隣ちゃんがノックする。

返ってきた声は扉で遮られていて僅かにしか聞こえなかったが、それでも女性の声だとわかる。

私の中で想像していた恐ろしい男性像が崩れていくが、それでも緊張は抜けることはなく。お隣ちゃんに促されてぎこちなく挨拶しながら扉を抜ける。

「あら、これは珍しい。鬼のお方が一体わざわざこんな場所に何の用かしら？」

中は思った以上に広い部屋であった。

日ノ本では御目にかかれないカーペットが床に敷き詰められていて、壁には沢山の書物が入った本棚。中央にはちやぶ台程度の高さの四角い大きな洋風机に、添えられるように鎮座した大きなソファ。

そして部屋の奥には私の下半身を越えるくらいの高さのこれまた洋風な机。そしてその向こう側にちよこんと座る少女が一人。

「……………」

「あれ？… どうしたのさお姉さん」

女の子が一人、ちよこんと大きな机の前でふんぞり返って座っている。

「……………小さくて悪かったわね」

「あ、お姉さん。さとり様は覚妖怪だから変なこと考えない方がいいよ」

どうやら世界が世紀末らしい地底。その管理者を名乗る人物が、こ

の小さな少女。

「…………お燐。一体この鬼はなんなの？ さつきから人の話を聞かないで失礼な事ばかり考えてるのだけど」

「あれえ？ おかしいですねえ……………おーい！ お姉さあん！」

お燐ちゃんから聞いていたから、一体どんな筋肉ガチムチ屈強世紀末野郎かと思つてたけど。

「な、なんて想像してるのよ。お燐……………貴女、この鬼に何を言ったの？」

「へっ？ ……いやいや！ あたいは特に何も言つてないですつてさとり様！」

「じゃあなんでこんな事になるのよ……………ねえ、そのどなたかわからない鬼の方。いい加減私の話を……………」

めつちや可愛いやん。

「し…………へっ？」

可愛いやん。てか可愛いやん！

何この子！ 滅茶苦茶可愛い！ なんなのこの愛くるしい見た目は！ ああ！ 子供時代の華扇みたい！ もしくは透花！ 凄く可愛いよ！

「えっ、ちよっ……………そんな目で見るのは止めなさい！」

さとりつて名前も良いわあ。まさか名前同様に本当の覚妖怪だったなんてね。

まんまやん。覚妖怪まんまやん。でも逆にそれが愛らしい。

「お初に御目にかかります、地底の管理者殿。私は鬼の酒呑と言います。どうぞよしなに」

「おおっ？ 元に戻った」

「いや、おかしいでしょ貴女！ 思考と言動が全く一致してないわよ！？」

はー何言つてんだこのロリっ子。可愛いからつて言動が不思議ちゃんだと皆から嫌われちゃうよ。ま、私は嫌わないけどね。

「先程はすみません。まさか、こんなに可愛らしい方が地底の管理者とは思いませんでしたので。驚いて固まってしまいました」

「そうだったのかい？ ま、確かにさとり様の見た目はパツと見て偉い人だとは思わないけどさ」

「嘘よー。この鬼、嘘を吐いてるわ！ いや、言ってる事自体は嘘では無いけど……でもやつぱり違うわー！」

ぐへへ………それにしても柔らかかそうな肌してるぜ。ペロペロしたいな。

「ひっー！」

「まあまあ。そんな気を立てないで。ほら、仲直りの握手」

「絶対目的が違う!？」

むむむ………さつきからこの子はどうしたのだろうか。私の超☆社交的会話術に一切傾いてくれない。

……あ、そっか。目の前の子は覺妖怪だった。なら別に声に出して言わなくても直接伝えれば良いんだよね。

えー……酒呑です。よろしくね☆ 私と仲良くしてくださいな。

「出てって！ ここから出ていきなさい！ 私の前から……私の視界からどっか行ってえ!!」

いやあく………てつきり嫌われた者達が集まる世界ってどんな地獄かよって思ってたけど、全然そんな事無さそうで安心したわ。

お隣ちゃんは良い子だし、なにより管理者のさとりちゃんは可愛い！ 最高ですわ。

ただ会ってすぐに放り出されたのが残念だったけど………まあ、体調不良なら仕方ないか。なし崩しで出てきたからお隣ちゃんにもちゃんとお礼出来無いのは申し訳ない。

まあ、いいか。今度また会いに行ったら時にすれば良い。一応挨拶はしたしね。

挨拶ついでに、ついお酒を盗んでしまったけど……

いや、本当に申し訳ねえ。ちよつと魔が差したっていうか……アルコールが切れてたからさ。禁断症状が、ね。

あん？　なんだよ。あんだけ可愛い可愛いって言ってたさとりちゃん達から酒を盗むのは良いのかって？

………仕方がなかったんだよ！　だってお酒だよ!?　ちよつと洋館から出るときにフラフラしてたら丁度よくお酒が目に入っちゃったからさ！　それに今の私はお酒ゼロ！　お酒の無い私なんてそれはもうただの『呑』じゃん！　存在が半分欠けてるじゃん！

大体私は悪くない。

私だって我慢したよ？　確かに私はお酒が欲しいなあ。いいなあ。つて考えてたけどさ。ちゃんと見て見ぬふりをしてた筈なんだ！

そ、それが気付いたら私の手にお酒があったただけなんだもん！　わざとじゃないんだもん！　私は悪くねえ!!

………罪悪感が半端無いけどね。あんないい子達の家からお酒盗むとか、マジ屑なのは認めるよ……。

ま、そこは鬼だしさ！　種の本能と言うか、存在意義と言うか………見逃してほしいな！

今度会ったら謝ります。ごめんなさい。

……と、取り敢えずだ。お酒をゲットしたからには、次に寢床を探さねば。

特に何も尋ねずに出てきちゃったから行く宛も無いし………まあ、この場所からちよつと離れた位置に、誰かしらが絶対住んでそうな建物が並んでる巨大な都市が見えるから、そっちの方に進んでみればいいと思うんだけどね。

………それにしても、さとりちゃん。私の知ってる覚妖怪と似てい



たなあ。妖怪の山でも数少ない私の友達だったから一目で似てるってわかった。もしかして親戚の子供なのかな？

ああ言う子達が今から向かう場所にもいっばい居てくれたら嬉しいな。鬼とかマジ勘弁だわ。アイツ等、害悪でしかないし。

妖怪の山で言うなら、河童とかかなあ。物造りに必死になってるのが見えて可愛い。あと、天狗の子供。白狼天狗は毛がフカフカでコロコロしてて可愛いし、鴉天狗は『しゅてんさまあ〜』ってワラワラ寄ってくるのが凄く可愛い。

そう言えば、ついこの間も鴉天狗の子供と遊んだな。確か、百年に一人の天才だとか天魔が言ってたっけ。可愛さに才能とかどうでも良いけど。

確か、射命丸 文って名前だったかな。自分の後継になるのはこの子だって、あの時の彼女は柄にもなく興奮していた。

皆、今頃どうしてるかな……………妖怪の山の頭目って立場は凄く嫌だったけど、妖怪の山自体は好きだったから。こうして離れてみると寂しいものね……………。

なんて柄にもなく感傷に浸ってみていたら着いてしまった目的の都市。何やら街の奥から喧騒が聴こえてくるから、誰かいるのは確実だね。

さて、一体この街にはどんな可愛い子達が——

「テメエ！ やりやがったな!？」

「んだとゴラア！ 俺様と殺るってのか!？」

「喧嘩だ喧嘩あ!!」

「どんな可愛い娘達が……………」

「窃盗だあ!」

「待て貴様！ その商品置いてかねえならその首捻じ切るぞ!」

「建物が倒れるぞお!!」

「どんな……………」

「おう姉ちゃん。そんな身なりじゃ、夜は寂しいんじゃないか？ 今

夜俺と……」

「死ね」

せ、世紀末だ……。この世の、終わりだ……。

なんじやこの世界。どこに可愛い娘がおるんねん。

骨が巨大化したがしや鬮髑とか、蜘蛛の体に虎の手足とかよく分らない生態系の土蜘蛛とか……。そして最も見たくなかった妖怪 No. 1の鬼共がうようよと蔓延つてやがるッ……。

ふざけるな！ 私は可愛い子達が溢れ返るようなメルヘンチックな世界を予想していたんだよ！ それがなんでむさ苦しい鬼達の世界になるって言うんだ！

くそつ、こんなところ居られるかッ……

離れよう。すぐここから離れよう。善は急げだ。戻つてさとりちゃんとお隣ちゃんに癒されよう。

さらば！

「おいそこの女あ」

「ぴい?」

うぎやあああああああああ!!!?

びっくりした！ びっくりした！ びっくりしたあ!!!?

あ……ありのまま 今起こった事を話すぜ。私はこの危険な街から離れようと振り返った。と思つたらいつの間にか私の後ろに巨大な肉塊があつたのさ。

な……何を言っているのかわからねーと思うが (ry)

「デメエ……見ねえ顔だな。どうやら鬼みてえだが、どこの鬼だ？」

「ッ……」

最悪だよ！ 目の前に超危険生物と名高い鬼がいやがる！ 絶対、ロクなこと起きないよ！ だって鬼が居て良いことがあつたなんて一回も無いんだから！

鬼の私が言うのもあれだけどね！

「ふむ……別嬪だな。どうだ姉ちゃん。今夜俺と良いことしねえか？」

てかこいつさつき蜘蛛の女性にフラれてた鬼じゃん！ 節操な  
しか！

くそ！ ここでチンタラ油売ってたら私の貞操が不味い。  
早くここから離れねば！

「あつ、こら！ 待てや!!」

フハハハ！ 待てと言われて待つ馬鹿がいるか！ ばーか！

ばあか！ ヴぁー

ズンツ！

「逃がしやしねえ」

ちよつ!? 跳躍で追い越すとかありか!? ふぎける！

「お前はもう抱くと決めた！ 俺に抱かせる！」

ひいひいひいひいひい！

なんでこいつこんな執念深いんだよ！ さつきフラれたときは普  
通に落ち込んでたくせに！ 弱気な女には強く出るくせに強気な女  
には弱気になるとかヘタレじゃないか！ このクズ！ 甲斐性なし  
！

どうせお前なんて粗○野郎だからフラれたんだろ！

くそつ………何もない場所に逃げても追い付かれる。

こうなったら背に腹は代えられない。建物が建ち並ぶ街の方に逃  
げるしかない！

「まてえー！」

ふによおあ!? 危ツ、突っ込んできた!?

ギリギリで避けたけど、今の当たってたら無事じゃ済まないよね  
!?! 抱くとか抱かないとか以前の問題として、私の体が木っ端微塵に  
なるよ!?!

だああああああああああああああ!!!

これがあるから、鬼は嫌なんだ！ サノバビッチ！ ○ね！ 地獄  
に落ちろ！

数十分の追いかけてこの末、私は漸く〇〇野郎を撒く事が出来た。ただの追いかけてこと侮るなかれ。私は命懸けの……マジもんの鬼遊びから生還することが出来たのだ。

全力疾走し続けたための疲れや、逃げ切った達成感、そして見事生存する事が出来た事による感謝などでごちゃ混ぜになった私の感情。

そんな状態だったから私は気づかなかった。私があゝの鬼を撒くために逃げた場所がどんな場所かなんて考える余裕も、気にする余裕も無かったのだ。

「ねえその貴女……そんなところで何やってるのかしら？」

「ッ！」

またまた後ろから掛けられる声に私はビビった。まさか、あの野郎に見付かったのかと思ったからだ。

慌てて振り返り、その顔面を思わず確認して……私は密かに安心してしまった。

だって、見るからに声を掛けてきた人物は男ではなく女の人だったから。

「……………」

「見たところ鬼のようだけど……見ない顔ね。鬼の貴女がどうしてこんな庭の片隅にいるの？」

金髪に翠色の目、特徴的な耳をした女性だ。外見ではわからないが、人間でないことは確実だ。また、鬼の象徴とも言える角も生えていないから、確実に鬼ではない。

なんの妖怪はわからないが、見た限りだとこちらの話を聞いてくれそうな良識のある妖怪に出会えたことに私は感謝した。

「……………実はしつこいストーカーに遭遇してしまいました。あまりにも気持ち悪く、思わずここに逃げ込んでしまったんです。貴女は、ここに住む方なのでしょうか？ でしたら不法侵入して申し訳ございません」

「鬼が逃げた……？ それに、随分と丁寧な言葉遣いなものね。貴女の

ような鬼は見たことがないのだけど……もしかしてその角は偽りか作り物じゃ無いでしょうね？」

「いえ、私は歴とした鬼ですよ。まあ変わっているとはよく言われませんがね。我が角に誓って、嘘は吐きません」

「そう。随分と変わった鬼なのね。妬ましい……」

彼女は私をジト目で見ながら親指を噛んでそう言った。

妬ましい……？ 彼女は鬼が羨ましいのだろうか？ 悪いことは言わないから止めておきなさい。鬼になっても強さで序列が決まってしまう縦社会が待っているから、半端な鬼になって虐げられるだけだよ。

……まあ、例外はあるけど。

「さて……ストーカーから逃げきれたことですし私は出ていきます。いつまでもここに居ては迷惑でしょうから」

妬ましい妬ましいと呟き続ける彼女の前にいるのに段々耐えられなくなり始めたので、私は踵を返してその場から立ち去ろうとした。

「あ、待ちなさいよ」

しかし突然復帰した彼女が私の肩を掴み待ったを掛けてきたのだ。

「なんですか？」

「この敷地は私の住処ではないわ。ここはある鬼が仕切る賭博場なのよ。さんざん負けて持ち金が無くなったからここにいただけだし……妬ましい」

「賭博？」

「そう。だから私の顔を伺って去るような真似はしなくていいわ。そっちの方が逆に気分悪くなる。……何なら貴女もやって行くかしら？」

なにやら聞き慣れた単語に反応してしまう私。

賭博。つまり賭け事。それは鬼として生きるには、切っても切れない関係である。

「それならそうと早く言ってくださいよまったく……。ここが賭博場だと言うのなら遠慮は要りませんね。何処から入ればいいですか？」  
「えっ？ ……な、なんか急に凶々しくなったわね貴女。妬まし

い……………つて言うより、目が怖いわ。見かけによらず貴女も鬼なのね」

おっと。賭け事と聞いてちよつと興奮してしまった。いや、すいませんいきなり。結構勘違いされるんだけど、実は賭け事は大好きなんですよ私。

大人しい……………とか、俗世に興味無さそう……………とか言われがちだけど、そこはやはり鬼。平和主義を掲げる私でもやつぱり刺激は欲しいと言うか。刺激は欲しいけど命の危機に陥るのは嫌と言うか。

そういつた意味では、安全で尚且つ刺激が貰える賭け事は最適とも言える。

つまり何が言いたいのかと言うと……………

賭け事、酒呑大好き!!

「ほら、何をポーつとしてるんですか。早く行きましようよ。賭け事が私達を待ってますよ」

「わ、私が案内するのは決定事項なのツ？ あ、ちよつ、こら！ 引つ張らないでよ！ ………………クツ、油断したわ。やつぱり見た目はあれでも、中身は鬼なのね。妬ましい……………」

ほらほら行くぜ行くぜ！ さっきまで追われてたせいでストレスが溜まってたからなあ！ ……ここで一気にパアツと発散するぜえ!!

……………あ、そう言えばまだ自己紹介してなかったわ。

忘れてた。ごめん。

## 賭博の鬼

庭をぐるツと回って歩いてみると、そこにはこの豪華な建物に似合う大きな門が見えてきた。その門で立ち塞がるように立っているのは、門番に似合う屈強な鬼。

普段の私なら速攻回れ右するところだけど、既に私は門の内側にいるので余裕で屋敷の中に向かおうとする。

塀を乗り越えて入ったからね。当たり前である。

残念だったねえ？

「ここが入り口よ。因みにちゃんと門番のところに行って許可を取っておきなさいよ。じゃないとバレたときに殺されるわ」

「え」

おいおいマジかよ。聞いてねえぜパルスイさん。それは詐欺つてもんじゃないかい？ ええ？

因みに彼女の名前は水橋パルスイと言うらしい。さつき聞きました。

橋姫と言う種族で、確か嫉妬を司る妖怪だったか。妖怪の山にも、川に掛かった橋に河童と一緒に住んでいた覚えがある。

さて、そんな余談はさておき最大の関門だ。どうしようか。どちらかと言うと私はあまり鬼に関わりたくないのだ。

先程まで散々なことを言っていた私だが、私は本当に鬼が嫌いな訳ではない。私自身が鬼なのだから、それは絶対だ。ただ、一つの動作で生死が分けられるというか、ドンチャン騒ぎが苦手というか………

認めよう。ぶっちゃけ怖い。

同種族だというのに会話ですら恐怖でドキドキしてしまう私。そんな私が不法侵入している屋敷の門番に賭博したいとか言えると思うか？

言えるかよちくせう。

「？ 何をしているの？ 早く行きなさいよ」

「い、いえ……おこられないかなあと」

「そんなの知らないわよ。ほら！早く行きなさい！」

わわわ！　ちよつ、押さないで！

油断していたところを突然強く押されたのが運の尽きだった。つまり勢いよく飛び出た私は、その門番の鬼の前にこの身を思いつきり曝してしまった。

屈強で、かなり年老いた鬼だ。厳つく融通の利かなさそうな顔。皺枯れていて、それでも鋭く衰えを感じさせない眼光が私を貫く。

端的に言つて、ぼつちし目が合つてしまったという事だ。

「なんだ貴様は……見ない顔だ。貴様、何処からここに侵入した！」

「あ、えつと……」

ふぎゆううう!!!　怖い怖い怖いイイイ!!!

ほらやつぱり怒られたあ！　だから言つたじゃん！　めつちや怒鳴られたじゃないですか！　つうか見ない顔見ない顔うるさいんだよ！　私今日何回その言葉聞いてると思つてんだ!!　聞き飽きたんだよそのセリフ!!（逆ギレ）

「ここは認められた者しか入れない場所だ。どこの鬼か知らないがここに入ることは儂が許さん！」

「……………」

「何か言つたらどうなんだ。ああ？」

それに声が大きい。うるさい。もうこれだけでこの鬼が私の嫌いな典型的鬼であることがわかる。しかも年寄りの鬼は大体ここから説教染みた長い話が始まるのだ。

「ダンマリか……ここ最近の若い鬼は駄目なやつばかりだ……鬼の誇りと言うものを理解しておらん。大体貴様は何者なのだ、名乗りもせず……儂の記憶には貴様のような鬼は……」

予想通りと言うか、私の年寄り臭い鬼が年寄りらしく説教をし始めたなあと思つた直後の事だ。

私の顔を覗き込んでまじまじと顔を見られていると、突然鬼の様子が変わる。

「……………ばかな。あり得ない……………いや、だがここまで似ている



なんて……？」

なんだコイツ。急に焦り出したんだけど。てか顔近い。離れろ。

「突然何ですか貴方は。人の顔を覗き込んできたと思っただら勝手に焦りだして……そんな貴方に説教される覚えは無いんですよ私は」

「うっ……」

怒鳴ってきたかと思えば説教し始め、人の顔を見ればまるで死んだ者の幽霊に出会ってしまった様に驚く鬼。

そんな目の前の鬼の態度に、私は段々気分が悪くなっていた。

もう勢いだ。いい加減溜まりに溜まったこの悪感情を一度吐き出さなければと思っていたし、この際この鬼には色々言っただけ。

「大体、私はそのこのパルスイさんに誘われたんです。さつき聞きましたが、彼女はここの支配主のお得意さんなんでしょう？　彼女の機嫌を損ねるような真似して良いんですか？」

「なんかしれっと責任を私に押し付けてきたわねコイツ。まあ確かに私が誘ったのは事実だけど」

とりあえず勢いで責任をパルスイちゃんに押し付けてみました。後悔はしてねえ。

あ、ちよ……そんな目で見ないで。そんな侮蔑の目で見られると変な性癖に目覚めそうになっちゃうから。嘘だけど。

「な、なんだと？　パルスイ……貴様が誘ったのか」

「成るように成れ、ね……ええそうよ。勇儀には私が言っておくから、そのこの鬼を許可してあげて。私が責任を持つわ」

言いたいことを言い切つてあとは全てパルスイちゃんに任せたら、なんかいい感じに彼女が話を進めてくれた。

わーいわーい。なんかゴリ押ししたらパルスイちゃん（マブダチ）が庇ってくれたよ。ラッキー！　これで漸く賭博場に入れるね！

仮に駄目でも、責任は全部パルスイちゃん（親友）が背負ってくれるらしいし！

……なん？　なんか今、私の知り合いの名前が出なかった？　気のせいかしら？

「……わかった。貴様がそこまで言うなら僕は何も言わん」

「問題は解決したみたいですね。それじゃあ早く行きましょう。パルスイさん」

「もう何も言わないわ……………。妬ましいって感情すら出てこないわよ」

許可をもらったので私は溜め息を吐く。パルスイちゃんの手を引つ張り、屋敷の中に入っていく。後ろから、『他人の空似か？ ……しかし、でもまさか…………』とか気持ち悪く呟く年寄りの声が聞こえたが無視した。

さてと……………。

やって来ました賭博場！ いやあ、大いに盛り上がってるねえ！  
いつちよ遊んでやるぜ！

その鬼は不思議な存在だった。

「パルスイさん。あそこに行ってみましょう。とても面白そうです」

そうやって私の手を引つ張るのは、先程知り合ったばかりの酒呑と名乗った鬼。

彼女はとても不思議な鬼だ。物腰も柔らかく丁寧で、見た目も豪快な鬼とは思えないほど綺麗に着飾ってその美貌を晒している。その癖、見た目から想像できない程の行動力と鬼の豪快さもまた持ち合わせている。

「貴女、お金は持ってるの？」

「一応持ってますよ。先程私をストーカーしてきた鬼から偶然財布を盗ることが出来たので。軍資金はバッチリです」

「そんなに余裕があるならわざわざ不法侵入なんてしなくても良かったじゃない。妬ましい……………」

彼女は争いが嫌いらしい。先程まで追いかけられたというストーリー相手にも手を出さなかったのだとか。その癖、しっかり相手の持

ち物を盗むのだから抜け目ない。

さっきのやり取りもそうだ。

彼女は確かに不法侵入をした。それがバレて追い返されそうになったときも、私が冗談で言った言葉を聞き逃さず言い訳に使われてしまった。言い訳に使われるつもりで言ったわけではないが、言ってしまったことは事実。否定出来ない。

しかし、そんな嘘も同然のような発言を平気でするなんて鬼らしくない。私が冗談で言ったと言えば彼女は嘘を吐いたと言うことで、門番の鬼に襲われていただろう。

嘘か本当かで言えば限りなく嘘に近い本当。そんなことを平気で告げる彼女。その後も一切詫びることなく平然としていることから、鬼の剛胆さも伺える。

鬼らしくないのに、何処か鬼らしい。矛盾しているようで成り立つ存在。それが酒呑と言う鬼だった。

長いこと地底に住んでるけど、私は一度もこんな鬼は見たことがなかった。

「丁半博打……あそこにしまししょうか」

「まあ、シンプルだけど人気な賭け事よね。やったことはあるのかしら?」

「無いですね。でもやり方は知っています。」

やったことはない。そう言う彼女だがその表情に一部も気負う様子はなく、相変わらず何を考えているのかわからない無表情だ。

会ったときからそうだった。ずっと表情を変えず、その癖、行動力は人一倍強い。良い意味で目立っており、悪い意味で危なっかしい。

兎にも角にも彼女から目が離せず追ってしまうのだ。一緒にいて気が休まらない。

それならさつきと離れると言われるかもしれないけど、自分でも何でこんなめんどくさい鬼と一緒にいるのかわからないんだ。

私の腕を握る力は弱く、簡単に振りほどける。なのに何故か彼女の世話を焼こうとする自分がいて、彼女の拘束から逃れる気を起こさせ

ない。

まったくもって、妬ましい。

「なるほど。参加に1両、賭け金も1両からですか。高いんですね」

「むしろ参加者を絞ってるんだからそれぐらいするわよ。それで？」

その盗んだ財布にはいくら入ってるの？」

「……………2両と三文」

「ギリギリ一回参加できる程度ね。ま、下町に住む奴の財力なんてそんなもんか」

財布の中を覗いてみたが、本当にギリギリ一回賭けられる程度しか持っていなかった。と言うか、酒呑は自分のお金を持っていないのだろうか？ 今までどうやって生活してきたのだろう。

そう思っただけを見ていたが、酒呑はその場から動かず一向に博打に参加しようとしなない。ずっと丁半博打の様子を見ているだけ。

最初はやったことがないからとルールを確認するために観察しているのかと思っただけがそうでもない。そもそも、丁半博打なんて二つのサイコロの目の合計の数を丁偶数か半奇数かで賭ける簡単な物だ。

当てれば賭けた分の倍、外せば流れる。何回も確認するほど難しくない。

「ねえ、いい加減参加しなさいよ」

「……………まだです。まだその時ではありません」

焦れつたくなって声を掛けてもそんな返答が返ってくるのみ。

いい加減待つのが飽きた私は酒呑を急かそうと更に声を掛けようとして。

「そろそろですね」

それより前に彼女が動いた。

負けて落ち込んだまま帰る土蜘蛛と交代するように酒呑は賭博の中に入っていく。

「おっ。今度は別嬪な嬢ちゃんじゃねーか。良いねえ」

胴元の鬼が嬉しそうに声を掛ける。それにつられて他の妖怪達も彼女を見て色めき立つ。

「見ない顔だな。嬢ちゃん、ここは初めてかい？ なんなら俺らが手

取り足取り教えてやるぜ。色々とな……」

「それは結構よ。私がついているから余計な心配はしなくていいわ」  
「あん？ ……ちつ、パルスイかよ。ってことはお前さんの連れか？ つまらんねえ」

その中でも鬼達は同族と理由でか酒呑に声を掛けてきたが、私の顔を見るなり嫌そうに離れていった。

一瞬気分が悪くなるが、彼等から伝わってくる嫉妬に私は溜飲を下げた。ここで怒っても仕方がないし、彼等の嫉妬が痛いほどわかってしまうから。

「……………」

「ほら、さっさと賭け金出しちやいなさいよ。参加したからにはいくら喚こうともその1両分だけなんだし」

「そうですね」

私たちのやり取りを不思議そうに見ていた彼女に発破をかける。

なんと言うか……この子には知って欲しくないと思っただの。私の予想だと、彼女は今まで旧都に住んでいない。そう思わずにいられないほど、このルールを知らなすぎる。

そんな彼女に今の旧都の……もつと言えばこの地底に蔓延る陰鬱とした現状を知って欲しくないと思っただの。

参加者達全員が1両を出したのを確認した胴元は、二つのサイコロが入った壺を振る。そのまま勢いよく振り下ろし、サイコロに蓋をするように畳の上に叩き付けた。

「さあ張った張った！ 丁か半か!!」

胴元の声に従って右回りに参加者達が各々の予想を告げながら賭け金を上乘せしていく。

その間ずっと無言で彼等の様子を見続ける彼女は相変わらず何を考えているのかわからない無表情。あまりにも堂々としすぎていて、逆に私がソワソワしてしまう。

最後になつて漸く酒呑の番がやって来た。

「さあお嬢ちゃん。どっちに賭ける？」

「そうですね……………では、3・5の丁で」

「……………ふん。丁側が足りねえな。おい誰か、もつと賭け金を上げねえか！」

全ての予想を聞き終えた胴元は賭け金の額を合わせるために、丁を予想した者に声を掛ける。

丁半は基本参加者側の賭け金で回っている。一方のお金が足りなければこうして胴元が声を掛け、更に賭けさせる。

今の場合だと丁側が50両程足りていないのだ。これでは賭けが成立せず始まらない。

しかしもつと出せと言われても、丁側の妖怪達も既にかかなりの額の賭け金を出している。これ以上更に上乘せすれば、彼等の生活にも響くかもしれない。

どうしたものかと丁側に賭けている者たちは渋い顔で考えている中、私の前にいる酒呑が胴元に声を掛けた。

「すいません……………賭け金が足りないんですよね？」

「ん？ ああ……………なんだ？ 嬢ちゃんが出してくれんのか？」

「ええつと……………掛け金は無いですが……………これで代用できませんか？」

彼女は突然懐に手を入れると、一体何処に仕舞っていたのか検討もつかないほどの大きさの酒瓶を取り出した。

一瞬、50両分も代用できるお酒があるかとツツコミそうになったが、その銘柄を見て私の開きかけた口が閉じられる。

「おいおい……………そりゃあ『幻月』じゃねーか。どうやって手に入れたんだ？」

「つい先程、地霊殿に用事があった……………その時にさとりさんからこのお酒を拝し……………戴いたのです」

「なに!? あ的地霊殿の主がお酒を!?!」

胴元の驚きの声が響く。

声こそ漏らさなかったが私も同じ気持ちだ。何せあ的地霊殿の主が他人に、しかも鬼にお酒を渡すなんて到底思えない。

まさか酒吞が地霊殿の主の知り合いだとは夢にも思わなかった。しかし、だとしたら何故今まで誰も彼女の事を知らなかったのだろうか。

「それでどうなんです？ このお酒では掛け金になりませんか？」

「あ……ああ………良いだろう。仮に文句があるやつがいれば、此方で換金すれば良い」

「そうですか。なら勝負成立ですね」

「そ、そうだな………では始めるぞ。皆の者、準備はよろしいか？」

胴元が蓋をした椀に手を掛けた。

当たれ、と願う者。お酒に興味を向ける者。ただ楽しそうに眺めている者。

皆の注目を浴びながら、胴元の鬼は勢いよく椀を開けた。

「3・5の丁!!」

次の瞬間、幸運に顔を緩める者と悪運に落ち込む者で別れた。

「ふう………」

酒吞が勝ったのを理解した私は溜めていた息を吐き出し、今さらになって緊張していたことに気付く。

まったく、普段より心臓に悪い賭けだった。あの地霊殿の主から貰った物を平気で賭けるとか、この鬼は阿呆なのだろうか。仮にそれがバレたとき、一体彼女やそのペット達からどんな仕打ちを受けるかわからないと言うのに。

「まあ結果オーライね。これで軍資金も出来たことだし、次は今のよきな冒険はしないことね」

「いえ、まだです。このお酒がチップになることはわかりました。ならこれからもこのお酒は使うべきです」

………はっ？

「本当の博打はこれからですよね」

えっ？ えっ？ なんて？

ヤバい、気を抜いていた。彼女の発言の意味を理解できなかった。  
お酒を、使う？ 何の？ ……まさか、見た目とは裏腹にとんでもない爆弾が括り付けられているそのお酒を賭けると言う意味じゃないわよね？

最悪、地霊殿の連中が報復に来るかもしれないレベルの爆弾を

……………

この鬼は今、どうすると言った？

「じよ、冗談よね？」

「冗談ではありませんよ。今の私ならなんだか行ける気がします。次も全賭けで」  
オール・ベット

『……………はっ？』

貯まったお金とお酒を目の前にドンと置く馬鹿。

その光景を見て、他の連中も呆然と声を漏らした。

「これで百両分ですよね。さあ次の賽を振って下さい。私の予想では3・4の半だと思っうんですよ」



誇りか埃か

うひゃひゃひよひよーい。(。▽。)

これだから博打は止められねーぜ!

見よ! この貯まりに貯まったお金達!

千両? 二千両? それ以上かっけてくらの金貨が私の目の前に

!

「貴女、なんでこんなに強いなのよ……………未来でも見えてるの?」

後ろで驚いているパルスイちゃん。ちよつと前まで私は博打に弱いと思われていたから、こうして見返せて嬉しい。

あ、お酒が無くなった。

「ちよつとそこで落ち込んでる土蜘蛛さん。申し訳ないのですが、その辺りでお酒を買って来てくれませんか?」

私は地霊殿で盗み……………もとい貰ったお酒を呑み切ってしまったので、先程私の横で見事に予想を外した土蜘蛛に声を掛ける。

実はさっきまで賭けていたお酒のだが、流石に金貨が増えすぎて全賭け出来なくなってしまったのだ。

まあ、今のところ私にお金が集まっているからね。総じて他の皆はお金が減るよね。ごめん。

てわけで呑まないのも勿体無いからそのお酒を呑んでいたわけだけど……………こんなお酒一本で足りるはずがないって。

「…んだと? お前、人の金巻き上げといて良い度胸だなあ……………鬼だか知らねーが、舐めてると痛い目見るぞ!!」

「あ、百両は貴方が貰って行って構いませんよ。取り敢えず千百両分のお酒をお願いします」

「待ってろ。すぐもってくる」

さて。土蜘蛛さんにお使いを頼んだからお酒は良いとして……………なんだろう。後ろから私を批難するような視線が……………うん。私は気にしないよ。

それよりお酒の目処は立った。後は賭けの方き。

……賭けに参加していた周りの殆どの妖怪達が悲惨な状態になつている。多分、次は私以外誰も参加しないと思われる。

「……うーん。どうしましょうか。正直、私はまだ賭け事を続けたいのですが……」

俯いたままぶるぶると首を振る彼等。そうですか無理ですか。わかりました。

まあこの通りなわけよ。さっきからどんよりとした空気が漂いかけていたけど、今の勝負で皆手持ちが死んだらしい。

周りで見てる人達もビビって賭けに参加する様子が見えないし……やべ、詰んだ。

「……………」

その時、視界の隅で他人事のように負けた妖怪達を苦笑しながら眺めている胴元の鬼のおっちゃんに気付いた。

そう言えば、この賭博場は丁半以外の賭博は無いのだろうか……いや、あるだろ。向こうで花札や他にも色んなゲームが行われているのが見える。

「すみません胴元さん。」

「ん？　なんだ嬢ちゃん。それにしてもあんた強いな。一体、どんなトリックを使ったんだ？　よかつたら俺にも教えてくれよ」

胴元のおっちゃんに話しかければ、彼は面白そうに応じてくれた。実に親切だ。やはり会員制と言うのも相まって、鬼でも客相手にはこうして気前よく応じてくれるらしい。

よし、ならこのまま要望を言ってしまうおう。

「いえ、特に何かしたわけではないのですが……それより、ここつて『大小賭博』ってありますよね？」

「あん？　……………そりゃあ、勿論あるが……」

「次はそれをお願いします」

私が要望を告げると、その瞬間に何故か私の周りが静かになった気がした。

いや、気がしたじゃないわ。静かになつてゐるわ。だって他の賭け場

所だと大いに盛り上がってるのが聴こえてくるのに、ここだけ騒ぎ声どころか物音が全くしないんだもん。

え？ 私何かヤバいこと言った？

「……………つ、ちよつとアンタ止めときなさい」

「？ 何故ですかパルススイさん？」

「何故って……………アンタが何してるか知らないけど、さっきのと今からやろうとしてるのとじゃ、状況が全然違うのよ？」

……………？

駄目だ。パルススイちゃんの言っている意味がわからない。何？

どういう事？ なんてただ博打を続けようとしてるだけなのに止められるの？

……………謎だ。他の場所では普通に賭け事が行われているって言うのに。さっきから静まり返ってる事と関係があることは何となくわかるけど……………

大小賭博ってそんなにヤバいゲームだっけ？

「……………いいぜ嬢ちゃん。お前さんがやりたいってんなら俺は止めねえ」

なんか突然の針の筵状態にどうすればいいかわからなくなっていたら、胴元のおっちゃんも助け船を出してくれた。

良かった。別に『大小』が禁止な訳じゃないんだね。

「だが、わかってると思うが、俺等相手にイカサマは禁止だ。これはこの決まりであり『約束』だ。それがわからない訳じゃねえよな？」

「ええわかってますよ。イカサマは禁止。当たり前ですわね」

イカサマとは『嘘』の行為であり、相手を『陥れる』行為でもある。そんな真似、鬼の私がする筈がない。

確認のためだと思い、そう告げられた言葉を復唱する。

……………が、何故か胴元おっちゃんが好意的だった顔を止めて睨み付けてきた。

え、なして？

「テメエ……………良い度胸だ」

鋭い目を私に向けたまま、おっちゃんは懐から二個の賽を取り出し

て、合計三つの賽を器に入れた。

いや、だから目が恐いつて！ 何急に!? 情緒不安定なの!?

なんなのさホント！ こう言うところだよ!! なんか気に入らない事があるところやつてすぐキレるから鬼は嫌いなんだよ！

おっちゃんが器を叩き付ける。以外にもその大きな音に私の体がちよつと跳ねた。

「勝負だ……」

「あ、はい」

おっちゃんに見られながら……いや、なんか色んな周りの人達にも注目されながら掛け金を前に置く。

「大に、十両……」

「……」

無言だ。私とおっちゃん以外に誰一人として物音立てずにこのやり取りを眺めている。

凄く居心地が悪い。さつきからマジで何なんだ。や、どんだけ見ているだよ。ここは賭博場だよ？ 観戦してるだけじゃなくて賭けしろよ。

私の心の声など誰にも届くはずがなく、皆が注目する中でおっちゃんは蓋を開けた。

中にあつた賽の目は……3と2が二つで合計7。つまり私の負けである。

「あー……駄目でしたか」

「……ふん」

思わず声が漏れると、胴元のおっちゃんは私が負けたのが嬉しかったのか勝ち誇ったような顔を向けてくる。その顔もさつきまでの張り詰めたような怖い顔つきではなく、ちよつと怖いなあ程度の顔付きに落ち着いていた。

「まだやるか？」

「ええ。まだまだこれからですよ」

冷えきった空気はいつの間にか無くなっていた。

周りにいる妖怪達から話し声がし始め、段々騒がしくなっていく。

その間も何回か賭けが行われ、私が勝ったり負けたりしていると何人かの者達も参加するようになった。

「ダブルに100両」

「おいおい、賭けに出たな嬢ちゃん」

いつの間にかやら丁半賭博と同じくらい気安く話し掛けてくれるようになったおっちゃんや、勝負が決まる度に一喜一憂する参加者の妖怪達で大いに盛り上がるようになっていた。

「1が一つと、4が二つ……ちっ、悪運の強い嬢ちゃんだな」

今回の賭けは私の勝ち。ダブルで百両賭けたので11倍になって返ってくる。つまり、先程の百両に加えて千両私の持ち金が増えたのだ。

良い調子だ。段々勝てるようになってきた。やはり賭博は勝てないと面白くない。

……うん。もうやり方はわかかった。

「さあ勝負！ 次は何の数字を賭け——」

「11にオールベット」

あまりにも楽しくなりすぎて思わずおっちゃんの言葉を遮ってしまった。

ちよつと焦り過ぎた。でもしようがない。このゲームでは初めての全賭けだ。ちよつと緊張しているんだ。しようがないほうがいい。

……だからさ、そんな怖い顔しないでよ恐いから。声遮ったのは悪かったさ謝る。ごめんてマジで。反省しているから。だから急に真顔になって黙るの恐怖だから止めて。

「………ッ！ バカ!! 何考えてるのよ!? アンタ、自分が何しようとしてるのかわかってんの!?!」

「? 私はずだこの賭けを続けようとしているだけですが……?」

「そういう事言っただけじゃない! 何してるか知らないけど、それを

「今やるのは——」

「うるせえー!」

突然、胴元のおっちゃんの怒鳴り声が私達の会話に割って入って強引にパルスイさんを黙らせる。そのまま彼は勢いよく蓋を開け、結果の内容を確認した。

「……うん。やっぱり、勘の通り11だ。」

「お前……」

勝つには勝った。でも、どうもその勝ちを喜べる雰囲気ではなかった。

それもその筈で、胴元のおっちゃんの声色は優しさや親しみとはかけ離れた、先ほどのような……いや、先程以上の恐ろしい雰囲気があったからだ。

いや、だからどんだけ心狭いんだよこの鬼。地雷がわからんわ。

「……………何でしょうか?」

「何もクソもねえ! テメーやりやがったな……このシマで、しかも俺達相手にイカサマを仕掛けるとはいい度胸じゃねーか!! 殺される覚悟はあるんだろうな!!」

「……………はあ?」

何言ってるんだこのオツさん。誰かイカサマしたのか? 私には誰もイカサマしてるようには見えなかったぞ? 見間違いでしょ。やめて欲しいわ、冤罪で罪を着せようとするの。

見た感じまだそこまで歳を取っているようには見えないけど、やはり耄碌していたか。変なところで怒るとは思っていたけど、そこまで頭がヤラレてるとは思わなかった。

とは言え仕方ないかも知れないけど。この耄碌ジジイに疑われるようなことをしたソイツも悪いよ。見ればわかるじゃん。この鬼、絶対面倒くさい奴だつて。

まっ、疑われるような事をしたソイツが悪いね。諦めて叱られな。私だったら絶対に嫌だけど。年寄りほど頑固で説得の難しいモノは無いからね。

さてさて、一体何処の妖怪がそんな可哀想な事になってしまったの

か……………

……………おん？

あれ？　なんか、私見られてない？

「こつちを見ろ！　これ以上シマ荒らすってんなら貴様をひん剥いて回すぞ！」

は？

え？　なに？　これ、私が疑われてるの？　この耄碌ジジイに？

……

おいおいおいおいおいおいおいおいおいおい。

ヤベー奴だとは思ってたけど、確信したわ。コイツ、サイコパスだよ。よくこの可憐で清楚で清く正しい酒呑ちゃんにそんな疑い掛けられるな？　真性のキチガイじゃん。

何も悪いことどころか怪しいことすらしていないのに疑うとか有り得なくね？　冤罪ダメ！　仮に私が怪しく見えても私は一切怪しくないからこれは完璧向こうが悪い。どんな状況でも冤罪を掛ける方が100%悪いんだよ！　知らねーの!？」

「貴方は何か勘違いしています。私はイカサマなどしていません」

「だったら今の結果や前のお前の勝ちをどう説明できるんだ！」

「そう言われても……私はただ己の勘に従っただけですが。賽の目が11だと勘に従ったら勝った。それが賭博と言うものでは無いですか？」

常識を疑うような質問をしてきたので、馬鹿にでもわかるように当たり前のことを告げた。

そしたら更に耄碌ジジイはキレた。いや、逆ギレするなよ。お前が質問してきたんだろが。

「キレたぜ……………ここまでコケにされたのは初めてだ。女だからと調子に乗りやがって！」

ジジイは怒り任せに床を叩いた。当然ただの畳が鬼の力に耐えられる筈もなく、畳の床は陥没。どころか穴を開けていた。

ふう……………そうか……………

うん。まずい事になった。

あばばばばば。お怒りでござる。超怒ってまする。やばい。冗談抜きでヤバイ。

なんなの!?! なんであのクソ鬼ガチギレしてるの!?! 情緒不安定なのもいい加減にしろよ! それで胴元任された鬼か!?! 老害ほんと○ね!

「少し落ち着いてください。確かに私は賭けに勝っていますが、それも偶々私の運が良いからです。それに私がイカサマをしている証拠が無い」

「しらばっくれるな! こんなに勝っておいて運だと!?! あるわけ無いだろうが!! 嘘も偽りも程々にしとけよ……じゃねーと、その嘘で塗り固められた偽物の角をへし折るぞ!」

……あ?!

「今、なんと?」

「その角へし折ると言ったんだ偽物! 鬼が嘘を吐くわけがない。そう思わせるのがお前の目的だろう? 騙されたぜ。だが、もうお前が鬼じゃないことははわかった。その目障りな角、さっさと外せ!」

何言ってるの? いや、マジで。

鬼じゃない? 角が偽物? 誰のが? ……私の角が?

ああそうだ。確かに私は鬼っぽくは無い。それは認めよう。力は無いし、強いわけでもない。鬼と言われれば首を傾げるのもわかるし、鬼じゃないって勘違いされるのもわかる。

そもそも私は鬼が嫌いだしね。弱者を虐げるような行為をナチユラルにやるからホントに嫌いだ。

だけど、私が鬼であることに変わりはない。いくら私が鬼っぽくなくろうが、鬼を嫌おうが、それは揺るぎのない事実だ。否定しようのない絶対だ。

だからこそ私にも私なりの鬼の誇りはある。鬼としての生き様がある。それを否定され、馬鹿にされるのは私でも我慢ならない。

命の危険を感じ始めたからもうそろそろ止めてこの場から去ろう



かなって考えてたけど……流石にムカついたわ。こつちが下手に出ればこの老害、調子に乗りやがって。

いいだろう。私に喧嘩を売ったこと、後悔するなよクソオヤジ。後で泣いて謝っても私は絶対に許さないからな。

「お前は能力か何かで、この器を透視して中の賽の目を見てるんだろう?」

「なら話は簡単だ。その両目を今この場でくり抜け。そうすれば貴様が本当にイカサマをしていないと信じてやる」

嘘。うそうそ。嘘です。申し訳ございません。マジ冗談つすよ。

あはははは本当に冗談キツイなあ旦那あ。それにしてもいい髭してますね。何処の剃刀屋で剃ってんすか? よつ、男前!

だからそんな怖いこと言わずに仲良くしましょうよ、マジで。私、旦那のこと尊敬してるんすから。

ねえ、止めて。マジで許して。ひい! 近づかないで!! ごめん調子に乗った! 身分不相応な立場で生意気言つてさーせん! 何だよ鬼の生き様って、食えんの?(笑) 誇りとか埃の間違いだろwww  
ww

いや、ホントに勘弁してつかーさい。私、痛いのが駄目なんです! 指に出来たささくれとかでも泣いちやうような可愛い乙女なんですう! そんな可哀想な女の子に両目くり抜けとか、どんな鬼畜野郎ですかあ! ……あ、そうですね。確かに鬼でした。

こ、殺されるうううううううう!!!

## 逆転の鬼

「両目をくり抜け」

思い掛けない言葉だ。長いこと生きてきた妖生でも一度も言われたことのない言葉だ。

『両目をくり抜け』

いやいやいや。馬鹿。

なに急に言いだすのさ。やめてよ、もー。

ガタガタガタ。

「貴様のソレ、覺妖怪のように目が関係しているのだろうか？ 天狗の中にも千里を見通す眼を持つ者がいると聞いたことがある。予想だと『物を透視できる程度の能力』だと踏んでいるが……なんでも良い。その目をくり抜けば能力も使えまい？」

使えまい？ じゃねえ！ なに名推理しましたみたいなドヤ顔しとんじゃワレえ！ 思いつきり外れてんだよ推理もお前の中身の無い頭のネジもなあ!!

「待ってください。そもそも私がイカサマをしている証拠なんて……」

「いいや証拠は持つてる。お前の能力の性質上、透視させる物を見なきゃいけないんだろ？ 賭ける直前、お前はいつも器を凝視している。特別な目を持つ妖怪の特徴だ」

いや、そんなん見るに決まってるやん。何言うとんねんこの駄アホ。

もういいから家に帰って出直してこい。その恥ずかしい妄想を晒すな。

「色々言いたいことはありますが………なら、私は見ないで賭ければ良いことです。後ろを向いて賭けますので、目をくり抜く必要は無いですよね？」

「いや駄目だ！ 貴様の目が複数の物すら透視できるかもしれない。なら、貴様自身すらも透視して背後を見て賽を確認できてしまうだろ

？」

怖!?! 何その理論、やっぱアホだよコイツ! 目ん玉裏返せってか!?! 発想が突飛過ぎて意味わからん!

てかその理論だと私が器を凝視する云々関係ないじゃん! ｸソっ。コイツどんだけ私の目くり抜きたいんだよ!!

はあー……もういいや。まだ遊び足りない気分だけど、気分は満たされた。

止めよう。これ以上ここにいたら命が危ない気がする。そもそも目ん玉くり抜く時点で安全も何も無い。

私はお金程度で済むリスクの掛かった火遊びがしたかっただけなんだ。ストレスの発散が出来るような、ほんのちよっぴりな刺激が欲しかっただけ。

なのにそれが、いつの間にかに自分の目ん玉をくり抜くとか言う謎のリスクを負うことになっちまった。

やってられるか! 私は帰るぞ。危険も何も無い筈の賭博で誰が好き好んで自分の身体売ってまでするかっつての!!

「帰ります。そんな理不尽な話、許せるはずがありません。まったく……ここの品位を疑いますね」

「逃げるのか?」

ツ……コイツ。一々私の気を逆撫でにするような事言いやがって。ふうー……ふうー……。落ち着け私。この男にどう思われようと

別に良いじゃないか。私の誇りは、私と私の大切な者達が知っていればそれでいい。こんな赤の他人……もとい他鬼なんてどうでもいいのさ。

よし。帰ろう。

「……………」

「逃げると言うことは嘘を吐いたって事で良いんだな?」

「お前がそう思うのであれば、どうぞご勝手に。お金もいりません。どうぞお酒を買うのが目的だったので」

「そうか……………」

土蜘蛛さんが買ってくるであろう500両分のお酒があれば当分は酒に困らない筈。元々そこまでお金に頓着している訳ではないので、こんな大金あっても困るだけだ。

もうここに用は無い。私は立ち上がりここから去ろうと後ろを振り返った。

だけど。

「はいそうですかで逃すわけねえだろうが!!」

「あぐっ」

いつの間にか後ろにいたらしい二人の鬼に阻まれ、どころか思いつきり突き飛ばされてしまった。

「ここまでコケにされたんだ! 金だけじゃ足りねえ……………それ相應のモンを思い知らせてやる! おい!」

男の声に呼応して、後ろの方でバタバタと騒がしい音が聞こえてくる。その中に聞き覚えのある声も混じって私は慌てて振り返った。

「くっ、放しなさい!!」

「パルスイさん!」

見ればパルスイさんが他の鬼に捕らえられていたのだ。

何故、どうして。関係ない筈のパルスイさんが捕らえられているのかわからない。

私は鬼の男を睨んだ。

「何のつもりですか」

「前々からパルスイは鬼でもなくせに姐さんに近付いてて目障りだったんだ。だが、不正を働く無作法な輩を招いたとありやあ、姐さんもコイツを嫌うだろう」

あおもう! 私は何もイカサマしてないってのに好き放題やりやがって! コイツ本当にいつペンシメたろか!? そんな力無いけどさ…………。

それよりもまずいなあ。完全に逃げるのが出遅れてしまった。あっちがシツコイなら最悪、追っかけっこでもして逃げるつもりだったけどパルスイさんが人質に取られたらそれもできやしない。

鬼の癖にやり方が陰湿だ!

「……私に何をさせるつもりで？」

「何、そう難しい事じゃ無い。お前が俺達に？を吐いたって言う納得の証が欲しいだけだ」

鬼の男の意地の悪い粘着質な性格。それが垣間見えた時、私の中でその鬼に対して不快感と共に違和感があった。

しかしそんな考えは後だ。今はそれどころでは無い。なんだか危ない気がするんだ。凄く嫌な流れ……例えるなら閻魔の奴に判決を下される直前。今すぐにこの場から離れたい。

そして私の思った通り、理不尽な命令判決が下された。

「そうだな。お前がその額に付けた角を折れ。それで泣いて土下座しろ。お前が偽物の鬼であることをこの場で証明し、謝罪してもらおうか」

鬼の角とは単なる付属品では無い。むしろ鬼の中では命の次に大事な身体の一部と言える。私はお酒の方が大事だけど。

では何故鬼の角がそんなに大事なのか。それは角が最も妖力が集まる部位であり、角こそが鬼を表す上で欠かせない物だからだ。むしろ、角が無ければその者は鬼と認識して貰えない。

力のない私でも、この角がある限り皆が私を鬼だと認識してくれるのだ。実際、地底にいる妖怪達は皆私の角を見て鬼と認識してくれた。

それほど角は大事な物。鬼の象徴と言っても過言ではない。

だから鬼に角を折れと告げるのは、鬼にとって最大の侮辱である。それは自分が鬼である事を否定することだから。鬼の誇りを、意義を、存在事態を捨てる事と同義だから。

冗談でも絶対に言っではいけない最大の禁句だ。

それを目の前の鬼は私に言った。

到底許せることではない。

「……………」

「どうした？ 鬼に？を吐いた事実を証明するのが怖いのか？ 安心

しろ。俺の言う通りにすれば殺すのだけは勘弁してやる」

怒りで声すら出ないとはこの事か。なるほど。今まで一度も言われたことが無かったから始めての経験だ。

角を折る？ はっ……するわけ無いだろう!? 認めるはずがないだろう!? どこまで私を侮辱すれば気が済むのだろうかこの鬼はッ!

「ふざけないでください。冗談でも笑えませんか？ 鬼に対して角を折れだなんて……鬼である貴方も言っている意味はわかりますよね？」

「偽物風情が言うじゃないか。ああわかってるさ。お前が鬼じゃないただの雑魚妖怪ということがな」

……オーケーオーケー。まだ慌てる時じゃない。私は至って冷静だ。私は普通の鬼と違って短気じゃないからね。それに雑魚なのは事実だ。

怒って短絡的になれば命はない。私はいつだってこう言った危機を冷静に対処してきたんだ。

「まあ、見栄えばかり意識したそんな華奢な角、折った処で何の価値もないがな」

はっ？ なんだとこの野郎！ ぶち殺すぞ！

私の角はな、お前のブサイクな角と違ってメチャクチャ価値ある角なんだぞ！ お手入れにどんだけ時間を掛けてると思ってるんだ！

おいそれと折って良い角じゃ無いんだよ！ 張っ倒すぞ!?

あーもう！ ストレス溜まるわ！ 今すぐにでもここから逃げ出したい！ パツパとここから立ち去ってお酒が飲みたい!! でも無理だよパルスイさんを人質にするなよ逃げられないじゃん!!  
フーツフーツ。

……よし。落ち着け私。状況は複雑なようで至ってシンプルだ。

まず、私が逃げ出さなければパルスイさんは今のところ危害を加えられる様子はない。つまり、今私が求められているのは二択の内一つ

だけ。

両目をくり抜いてイカサマをしていない事を証明し、私の誇りと存在を守り抜くか。

角を折ってイカサマを認め、誇りと存在を否定するか。

最悪だよ。なんだこの理不尽な二択。馬鹿じゃねえの？

まず両目をくり抜くのがあり得ない。絶対痛いよ。激痛で死ぬわ。死なないにしても、両目を失ったら今後の生活に支障が出るわ。

じゃあ角を折るか？って言われた……………無理だね。痛いもん。こっちも激痛です。知ってつか？ 鬼の角って硬くて頑丈だけど、その分敏感なんだぜ？ 折れたら多分痛いじゃ済まないレベルで痛いんだぜ？

それに誇りはともかく、鬼としての象徴を折るのは流石の私も許容出来んのだ。

どれぐらい受け付けなかったって言うと、そこら辺の気持ち悪い男に股開いて○○○させられるくらい無理。生理的に受け付けられないレベルです。

おいおいおい、やってらんねーよなあ？ なんてただ賭博を楽しみに来ただけなのにこんな理不尽な二択を迫られているの？ どっちも選べるわけないじゃん!!

「どうした。さっさと決めろ。瞳を潰すか、角を折るか。なんなら俺が決めてやろうか？」

あああああああ!!! 時間制限とか聞いてねーよ!

早くしないと。じゃないとコイツに決定権が委ねられてしまう。そんな事になれば片方どころか最悪両方の選択をさせられるかもしれない。

でも決断できねえ!! いや、ぶっちゃけどっちにするかは決めてるけど! でもそれを実行する為の決意がまだ固まってないというか……………

早くしないとまずいのはわかってるけど、でも自傷行為なんて早々できないからね!?

「あと10秒で決めろ。10……9……」

「うおおおお!!? カウントダウン始まったあ!!」

「8……7……」

うるさいわ! こっちは必死に覚悟決めようと頑張ってたんだよ!!  
なんなん!? 本当になんなん!?

あーもう! 酒が足りない!! 酒を寄越せいつまで時間掛かっているのさあの土蜘蛛は! こんな決断、飲んでなきややってられないってのに!!

「6……5……」

OK、もう知らん! こうなったら秘蔵中の秘蔵である私のお酒を呑んでやる!! いいんだな!? どうなっても知らんぞ!!?

「4……3……」

と、取り敢えず栓を開けて……と、取れないいい!!!

「2……」

あとちよいで栓が取れ……って危な!? 勢いで栓に付いてる分のお酒が飛び散る所だった。このお酒は一雫落とすだけでも勿体無いんだから、危ない危ない……。

「1……」

って1秒切ってる!? 今から一雫分正確に取ってたら間に合わないよ! ど、ど、どうしょ!?

「0」

栓に付いたやつ適当に舐めるしかねええええ!!!

ひっく



「おい。もう10秒たったぞ」

ん……………おあ。ようやくですか。

ふあ……………ツ、ツと……………よく寝ました。

しかし……………それにしても、随分待たされた……………。まさか、ここまでは……………。

いやはや、あの女神が言っていた事もあながち間違いではなかったですね。

「おい！ 聴いているのか!!」

ん……………？ ああ……………忘れてました。そう言えば、今はこっちの私がピンチでしたね。

起き抜けなものだから、ちよつと寝ぼけていました。

「ん……………はい。聴いてますよ」

「ふん。ならさつさと答えろ、まったく……………本当に鬼の風上にも置けない奴だ。たかが栓に付いた酒の水滴まで舐めるなんてな。卑しい奴め……………さあ、もういいだろ。決断は終わったか？」

なんだコイツ。うざい奴ですね。ブツ飛ばしてやろうかしら？

……………おつと、そう言えば今は賭博中だった。危ない危ない。

「……………わかってないですね貴方は。お酒は一滴残さず飲み干してこそでしょう？ ………………本当に貴方はお酒を……………もつと言えば鬼と言うものをわかっていない」

それにしても、先程の様子からわかっていた事ですが……………この鬼、駄目ですね。

こっちの私が嫌うわけだ。見た目こそ年老いて見えるが……………まだまだ若輩かな？ 精々500かそこらでしょう。まあ、数万年を生き

た私にはどんな輩もガキだが。

まったく……鬼も堕ちたものです。いくら地底に引き籠もってるからとは言え……流石に落ちぶれ過ぎでは？

「煩い!! 貴様に鬼のなんたるか等わかったような口を利くな!! いからさつさと決めろ!」

「そう怒鳴らないでいただけますか……。煩いのはともかく、面倒くさい鬼は嫌われますよ?」

はあ……もういいですか。こんな堕鬼は無視しましょう。時間が勿体無い。

さて、なんだったか。両目をくり抜くか、角を折るか……ふん。まったくしようもない命令を突き付けられたものです。こんな物無視しても良いですが……一応、あつちはこの仕事を仕切る胴元だから。ルールには従わねばなりませんか。

だいたい、こつちの私も悪い。流石にあればやり過ぎだ。いくら能力の影響だからとは言え、少しぐらいは能力を自分でコントロールしてもらいたい。ま、そう仕向けたの昔の私の所為なのだが……。

おつといけない、脱線してしまつた。これだから中途半端な解放は……ああ駄目だ駄目だ。すぐ脱線してしまふ。

さつさと用事を済ませねば。

「ん……。両目をくり抜けばイカサマをしていないと証明できるのでしたね?」

「ああ。貴様にそれが出来る根性があればな。もつとも、偽物のお前には無理だろうが」

「そうか。ならばいいです」

男の話を聞き流しながら、私は目に指を添えてゆっくりと指先に力を込めていく。

ブチリと小気味良い音が頭の中で響いた。

ああ。心地いい痛みだ。眠気がよく取れる。

「なっ!？」

「まったく……お気に入りの一張羅が汚れてしまう」

おっと片目じゃ駄目でしたね。もう一つもか。

「ッ……………」

「なにをそんな驚いているのですか？ 両目をくり抜けと言ったのは貴方でしょう？ まったく……………まあいいです。さあ、これで私がイカサマをしていないのは証明できました。続きと行きましようか」  
勿論これで終わらせるつもりはない。こつちも参加料として両目を支払ったんだ。それ相応のたいかはこの賭博場から貰おうじゃないですか。

「ほら、続きを。さっさと賽を振って下さい……………つと、その前にパルスィさんを解放してからにしてくださいね」

「まだ……………やるってのか」

「当たり前です。でなければ割に合わない」

「……………」

何を黙っているのでしょうかね。さっさと振って欲しい。時間がないんですから。

「……………いいだろう。だが、パルスィの奴はそのままだ」

「何故？」

「決まってるんだろ。お前を逃がさねえ為だよ!!」

カランコロンと音がした。どうやら胴元の鬼が賽を振ったらしい。

ふむ……………今更ながら、目が無いととても不便ですね。

「さあ！ 勝負！」

さてさて。賽の目はなんでしょうね。大か小か。ダブルかトリプルか。10？ 11？ それとも……………5かな？

「5に千両」

「ッ……………ばかな……………」

さあ大博打だ。1の目が一つに2の目が二つか、1の目が二つに3の目が一つ。

1 / 36の確率です。当たれば賭け金の30倍が返って来ますね。さて、どうなる？

「……そんな自棄な賭けが……当たるとでも？」

「当たると思っているからこうして賭けているわけですが？ それに今の私に千両なんて端金です」

「……そうかよ」

さつきまでの私なら全賭けでもしたんでしょうかね？ あの時は博打大好きな生粋の狂ギャンブラー人ですから……どうなるか私でもわからないんですよね。

ま、私は所詮常識的な鬼なので、精々細々と賭けていきますよ。

「さあ。結果は？」

さあさあ。どうなる？

「……………残念だったな。3・5・1の9だ」

「ふむ……そうですか。それは残念です」

そうか、外れましたか。

残念ですね。本当に。

ま、仕方の無い事ですがね。所詮賭博は運。豪運を持っているよう  
が、外れる時は外れます。

仮に何かしなければ。

「あと一個1の目が出れば当たってたのですが……。ふむ、本当に残念です」

「……………」

「残念。本当に惜しかった」

「何か、言いたげだな」

落ち込んでいると、なにやら胴元の鬼から声を掛けられました。

表情は目が無いので見えないが、彼の声色は何処と無く硬い。それに、何か言いたげと言われても私はこれといって言いたいことは無いのに……………。

私には、むしろ貴方が何か言いたそうにしているように感じますが

？

「いえなにも。それより早く続きをお願いします」

「……………ツクソ!!」

苛立ちのような声が聞こえたのと同時に、なにか硬いものが床に叩き付けられる音が私の耳に届きました。多分、彼が賽を振ったのでしよう。

さて、次です。どうしましょうか。さっき負けたので、ここは少しでも勝ちに行きたいですね。

この手の賭けは大か小かで賭けるより比較的揃いやすくまあまあ倍率も良いダブルなんかは負けないと私は思っています。まあ、持ち金が多くて長く続ける前提の話ですけど。

だから、負けないようにするならダブルなんですよね。

「ふむ……………」

「……………」

そういった事を含めて私が次に予想する目の数は……………。

「15に三千両」

「……………ぬぐっ!」

勿論大穴狙いに決まっていますね。

だって私は生粋の賭博師キャンブラーですからね。

「さあ、結果は?」

「クソツ……………お前っ、本当は見えてるんだろう!? 見えてるからまだ続ける気なんだろう!!」

「はて、何のことですか? もしかして……………当たってましたか?」

「な……………いや違う! 2・4・5の11の目! はずれだ!!」

突然の振動と共に、目が無い私に見えている等と見当違いな叫びを上げる胴元の彼。

もしや当たったのかと思ったが……………なんだ、当たるどころか掠りもありませんでしたか。残念。

まあ、私の持ち金はさっきの全賭けのお陰でまだ三万両程ありま

す。気長にやりましょうか。

「13に五千両」

「……外れだッ」

「6に三千両」

「外れだっ！」

「11に一万両」

「……………クソッ、クソッ！ 外れだっつてんだろ!! 大外れだよ!!」

ふむ……なかなか当たらないですねえ。気長にやるとさつきまで言ってましたが、残りが一万両近くになってしまいました。ちよつと考えなし過ぎましたか。

「はあっ、はあっ」

それにしてもどうしたんだろうか。胴元の鬼の様子がどんどん悪くなつていつてる気がしますね。息も荒い。

私には関係ないので無視しますが。

「お前……一体なにが目的だッ。なんでこんなッ……………」

「はい？ そんなの、賭けが好きだからに決まってるでしょう？ 大穴狙いの大博打……考えただけでゾクゾクしませんか？」

楽しいなあ。利益が出るかもわからないことに代償を払って挑むこの行為。賭けとは本当に面白いものです。

でも……駄目ですね。なんだか飽きてきてしまいました。お金が少なくなつてきてしまいました。所詮こんなお金は泡銭。思い入れも何もないので、今一緊張感に欠けますね。

……………ああ、そうだ。

「まだ、やるのか」

「ええ、勿論。あ、それと胴元さん。少し良いですか？」

「……………なんだ？」

ううん。やっぱり声が硬い。とても悲しいことですね。酷い……  
こんなにも私は誠実であろうとしているのに……。

「私、なんとなくまだ貴方に疑われているってわかるんです。目が無くなったせいかな……貴方の感情がいつもより少しだけ強く感じるんです」

「……ああ、そうだ。俺はまだ貴様がイカサマをしようとしているんじゃないかと疑っている。いや、確信している！」

ううん。正直ですね。正直なのは良いことだ。

でもやっぱり残念ですね。私は楽しく賭けをしたいと思つているのに、私だけしか今のところ楽しんでいない。

やっぱり皆んなで賭博は楽しみたいでしょう？

「だから提案があるんです。私がイカサマなんてしてないって証明するための提案が……これを聞けば貴方も私を認め、楽しく賭博が出来るでしょう」

「……なんだ、その提案ってのは」

「次の賭けに私の覚悟を賭けましょう。手持ちのお金全てに……  
鬼の誇りにして象徴でもあるこの角。それらを賭けます」

さあさあ、楽しもう。私の全霊を以って、今この瞬間を。

そして賽は投げられた。

「角を……賭けるだど？」

「ええ。そうでもしなければ貴方は私を信じないでしょう？」

場が騒然となる中、儂は目の前の現実が信じられなかった。

輝く黄金の髪。人形のように美しく冷たい顔立ち。遊女が着るような、金と黒の色彩が施された煌びやかな振袖。そこらの女より比較的高めな身長と発達した身体は、高嶺の華とも呼ぶべき花魁を思わせる。

そこらを歩いているだけで男なら放っておかないだろうほどの美しき。

記憶にあるあの方と同じ姿。

最初は他人の空似だと思っていた。容姿は同じでも、全くの別人だと。そういう事もあると、そう思っていた。

なにせ、千年だ。数年、十数年とならばいざ知らず……かつての記憶が色褪せるほどの長い年月が経った今、諦めを通り越してその事実を心から受け入れるようになっていた。

最強の鬼、酒呑童子様は死んだ。

その事実が意識せずに当たり前と感じたのはいつか。それほど年月。むしろ、もう一度その姿を目にする事など絶対にあり得ないと結論付けていた。

だから、最初は似ているだけだと思った。気にはなったが、所詮他人だと。

だが賭博場から異様な雰囲気を感じ取った時、儂の脳裏にはあの鬼の姿が自然と思ひ浮かんだ。

懸念は興味へと変わり、しばらく経つ頃には居ても立つても居られず、儂はこの賭博場の門番を任されてから初めて任務を放棄した。

賭け事を何度も続け、その度に勝っていくあの鬼の姿はやはり似ていた。かつての酒呑童子様も争い事のみでなく、賭け事でも最強だった。



たから。

だがそれでもまだ儂は疑念が拭えない。たまたまだ。もしかしたらイカサマをしているのかもしれない。……………実際、周りの者達皆がそう思っただろう。明確な方法がわからずともあそこまでツキが彼女に付くなら、それは運ではなくイカサマだと思う。

しかし、だがそれでもツ……………!

かつてのあの方は持つていた。イカサマなどと言った矮小な存在が使う小細工や卑怯な手段など物ともしない。稀にいるおかしな力や能力を持つ輩とも違う……………あの方の存在自体が勝利なのだ。突きつけられるような、自然の理にも近い何かがあの方にはあった。

賭けは変わり、大小賭博へと移る。最初こそ勝ったり負けたりを繰り返していたあの鬼だったが、ある時から一転して勝つだけに変わる。

我々としても地底一と呼ばれる賭博場を預かっている身だ。それに加えて、鬼の四天王の一人である星熊勇儀様が仕切る場。イカサマは勿論、名も知れぬ鬼一匹にいいようにされるなどあつてはならない。

胴元をやっている弥助もそれは百も承知だろう。

だから奴は脅した。二度とイカサマなんて真似が出来ないようにわからせるためにも、理不尽な要求を突き付けた。

大抵の輩はこれで諦める。泣いて許しを乞い、この賭博場から去っていく。

だがあの鬼は違った。目をくり抜けと告げられても動揺一つしなかった。流石に一度こそ去ろうとしたが、パルスィの奴が人質にされれば抵抗せずその場に落ち着き、鬼として最大の侮辱を受けようとも怒りを鎮め……………。

そして己の両目を躊躇いもなく潰した。

儂は確信した。どう言った理か、因果な関係かもわからないが……………あの鬼は本物だ。かつてのあの方の生き写しなのだ。

千年の時を経て、かつての酒吞童子様が復活した……………なんて夢

物語はとうに捨てた。だが、この世は不思議なことも多い。

私はあの鬼の姿に確かなあの方の魂を見たのだ。

勝負は続く。相変わらずあの鬼は出目当てをしている。

それも当然か。なにせ、本当にあの方の生まれ変わりなのだとしてら瞳を失おうが関係ない。勝利の女神すらも踏み越えるあのお方に、そんな小細工は無意味なのだから。

蓋を開け、目を見開く弥助。目が関係ない事に気付いて慌てているのだろうか？ なにせ、アイツはイカサマの正体が目であると勘違いして何の関係もない彼女の瞳を抉らせたのだから。しかも、証拠もないのがあると嘘を告げて。

鬼が鬼に対して嘘を吐く。それは、どんな形であれ褒める行為にはならない。罰すべき行いだ。

さらにその前には角を折れなんて暴言まで吐いたのだ。どんな鬼でも許さないだろう。弥助は殺されて当然の事をしでかしたのだ。

彼女はなんと言うのだろうか。一般的な鬼なら弥助を殺すだろう。しかし、酒呑童子の生まれ変わりかもしれないあの鬼は一体なんと……。

儂は予想もしない展開が起こるだろうと期待していた。

だが弥助の奴が驚いた表情から一転して口元を眺めたのを見て、儂の考えも期待も、あまりにも外的外れだった事に気付かされた。

なんと、弥助の奴が賽の出目を変えて彼女に嘘の出目を告げたのだ。

鬼がどうこう以前の問題である。その行為はこの賭博を仕切る側として絶対にやってはいけない行為だ。周りで観戦していた妖怪達も弥助の行いに驚愕している。勿論この儂も。

いや、驚くなどと言う話ではない。そんな次元の話ではない。

「ふざけるな……」

これは怒りだ。

怒りという言葉すら生ヌルい……この感情をどう言葉で表せよ

うかッ。

「ここを何処だと……思っているッ！ 自分の立場を、何と心得ている!？」

ここは現鬼の大将、勇義様が統治する賭博場。そんな場所でイカサマをするというのは、勇義様の顔に泥を塗るような行為だ。

それに、仮にも賭博の一つを任されている身でありながらそのような行為、許される筈がないのだ。

「弥助!!」

儂は奴を怒鳴り付けようとその賭けの中に割って入ろうとして

「そうですか。それは残念です」

彼女の一声でその場に足が縫い止められた。

「あと一個1の目が出れば当たったのですが……本当に残念です」

まるで感情が一つ残らず失せたような、抑揚の無い声色で呟かれたその言葉。

儂は久ぶりに悪寒と言う名の寒さを感じた。それを感じたのは儂だけでは無いだろう。

いや、特別何かが変わったわけでは無いのだ。元々あの鬼の女は感情の起伏が見られず、儂が知っている限りずっと冷たい雰囲気纏っている。

では何が変わったのかと言うと……わからない。わからないが、儂は……儂らは何か不味い事に巻き込まれてしまったような、そんな予感を感じたのだ。

賭けは続く。先程の連勝が嘘のように、彼女は負け続ける。

いや、違う。彼女は勝っているのだ。だが、弥助の奴が当たる度に出目を変えている。

彼女の目が見えない事を利用して。見えていないのに見えていると思われている彼女が、いつ無い本性を現して抗議してくるのか待つために。

目が無いのに出目の結果を改竄されたと物申せば、それを理由にイカサマをしていると言う口実が出来る。

そうすれば弥助の行いも免罪符だ。イカサマを見破るために仕方

なくやっただと言いつけができる。

しかし弥助の顔色は悪い。何故なら、彼女は全く動揺もなく賭けを淡々と続けているのだから。ただただ、弥助が卑劣な行いをしていると言う結果だけが現れ続けているのだから。

イカサマを仕掛ける輩を追い込むための行動が、気付けば自分の首を絞めるだけの卑劣な行いに成り下がっていた。

そして。

「この角を賭けます」

曖昧だった悪寒は過ぎ去り、儂はあの鬼に明確な恐怖を感じた。

何故今さら角を賭ける？ 何度も負けているこの状況で、鬼の命とも呼べる角を何故？

そもそも彼女は弥助の行動を理解しているのだろうか？

わからない。わからないが不味い事になったのは確実だ。

彼女の行動は……形はどうあれ身の潔白を表すものだから。この賭けに全力で挑むと示している。

これでももし彼女が出目を当て、弥助が先程のように出目の結果を改竄したのなら……。

客の信用を、少なくともこの場で観戦している者達からは確実に信用を失う。

あの鬼がイカサマをしているかどうかの問題では無いのだ。鬼の角を賭けた相手に、我々が卑劣な行いをしたと言う事実が問題なのだ。

我々の信用が失われるのはまだ良い。だが……この賭博の、引いては勇義様の信用を失うことがあってはならないッ……。

「さあ、胴元の方。賽を振ってください」

儂の恐怖など関係ないとばかり、あの女は弥助に賭けを催促する。本能が警報を鳴らしている。早く止めねばと。なのに、儂の足はなぜか動かない。

「ま、まて！ 角を賭けるだど!? お前のような偽物の角を賭けたところで俺の角と釣り合う筈が無いだらう!!」

腕が動かない。声が出ない。体が震えて、動かない。

「はい？ ……何を勘違いしているのですか？ 私が貴方の角欲しさに、大事な大事な角を賭けるとでも？」

——身の程を弁えよ、小僧」

儂は、あの方の怒りを恐れた。

「なっ……!!」

「私が角を賭けると言ったのだ。一二束三文で買える貴様の角などいらん。私が狙うのは………この賭博場を仕切る鬼。その鬼の角だ」

本気だ。

本気であの方は我々を潰そうとしている。

「ば、バカな………それこそ釣り合うわけが無いだろう!？」

「たしかに、そこらの木っ端鬼が賭博場を仕切る鬼の角と同じ対価だとは思いません。ですが………賭けの相場次第では成り立ちますよね？」

「ま、まさか……」

冷や汗が止まらない。彼女と直接相対しているわけでもないのに、震えられずにはいられない。

大小賭博の最も相場の高い出目。冗談やらふざけて賭けることはあっても、誰も当てられず当たるとも思わせない賭け方。

「二の目が三つ。それに私は一万両と己の角を賭けましょう。単なる賭け事ではありませんよ？ これは私から貴方達への挑戦。」

さあ、地底賭博の方々。貴方達はこの挑戦、受け取りますか？」

相場にして180倍。確率にして1/216。

最弱にして最悪の挑戦を叩き付けられた。

「ぬぐ、ぐっ……」

酒呑と向かい合う弥助という鬼は困惑していた。

最初は見目麗しい鬼の女だと思っていた。それがイカサマをされた事で怒りと、そしてその償いをさせるためにどう辱めてやろうかという欲望で興奮していた。

弥助はこの女が鬼だと疑っていない。同族なら見た目ではなく勘……同族意識とも呼べるような親和性を感じることが出来る。

イカサマをした事には驚いたが、別に珍しいわけではない。強い鬼はその強さ故に鬼の特性に強く締め付けられているが、弱い鬼はそうでもないのだから。

妖怪とは普通、その妖怪の本質に近ければ近いほど強い。この妖怪はこうあるべきだという人々の無意識な思いが妖怪の強さだ。人々が思う妖怪に近ければ近いほど、その妖怪は強い。

星熊勇儀は最も鬼という種族の在り方を体現しているだろう。武器を持たず、喧嘩好き。荒っぽくも仲間想い。約束を守り、嘘偽りや卑劣卑怯を許さない。

まさに鬼そのもの。鬼の種族の中で勇儀はまさしく最強だろう。

だからこそ伊吹萃香は異端と呼ばれる。

あれほど鬼として矛盾した在り方をしているのに、勇儀と同等かそれ以上の強さを持つ彼女は普通ならあり得ない。彼女程鬼として破綻しているならば、小鬼どころか天邪鬼位には弱くてもおかしくないはだろう。

だから彼女は例外中の例外。普通の鬼は嘘を吐けば吐くほど弱く脆い存在になる。

弥助も目の前の鬼の女は弱い類の鬼だろうと思った。イカサマをされたことには怒りを露わにしたが、心の奥底では怒りよりも突然降って湧いたチャンスに心躍っていたのだ。

無理難題をぶつけければ泣いて許しを乞い、助けてくれと頼む筈だと。後は助けてやる代わりに自分の女になれと言えばこちらのもの。下卑た考えだが先に卑劣な行いをしたのはあっちだ。自分は悪くな

い。

先の展開に弥助は下卑た笑みを止められない。

なのに。

「早く賽を振ってください。それとも挑戦を受けませんか？ それもいいでしょう。まあ……あなたの方が偽物と罵るこんな矮小な女の挑戦すらまともに受け入れられないなんて……ふふっ」

「このっ、言わせておけば……ッ！」

弥助は自問自答する。何をどう間違えたのだろうか。この女をそこらの木っ端鬼と侮ったことか。目も見えないはずの女相手に卑怯な行いをしたからか。

いや、例え鬼でも目を失えばこの地底では生きていけない。この無法地帯で目の消失は死と同義だ。地底に住む妖怪なら絶対に行かない。失明ならまだしも、ただの鬼に失った体の一部を再生する力は無いのだから。

出目の改竄も、元々イカサマをしている酒呑が抗議すると考えたから弥助は行った事だ。目の無い酒呑が抗議すれば何故わかるのだと逆にイカサマしていることを見破れる。金を失っていけばいつかはシビレを切らすだろう。

追い詰めていたのは自分だった。

なのに。

なのに、なのに。

今、自分は崖つぶちに立たされている。

「……覚悟はいいのか？ そんな、博打とも呼べない……己を投げ捨てるような賭けをするのか？」

当たるわけがない。絶対に当たるはずが無い予想。そもそもまだ

サイコロを振ってすらいのないのに賭けるのは狂気の沙汰だ。

ではイカサマをするのか。だがそれはない。何故なら酒呑は自分が鬼だという事実を誇りに思っているから。平時ならいざ知らず、鬼の誇りを賭けたこの戦いにそれを侮辱するような真似は絶対にしない。

「はい」

なのに酒呑は何の躊躇いもなく応じる。当たると信じているから？

そうではない。彼女はいつだって、本心では自信がない。どんな時でも自分が弱者だと理解している。

ただ彼女はこの勝負に勝てるかと確信していた。

「ぐ……………う…………ツ」

「さあ、早く。振るのか降りるのか」

「やって…………や…………」

サイコロを持つ弥助の手はこれ以上ないほど震えている。いっそ、可愛そうになるくらいに。

降りることはあり得ない。それをすればこの賭博場に泥を塗り、弥助の居場所は無くなるから。

だが勝てるのか。今まで出目をピッタリ当ててきた酒呑が外すとは思えなくなっていた。当たれば、少なくとも先程のような卑劣な真似は挑戦を受けた立場で出来ない。酒呑が勝てば、責任を取らされるのは弥助だ。

この賭博を仕切る鬼に、『賭けで負けたから角を折ってくれ』だなんて死んでも言えるはずがないだろう。

弥助は恐怖していた。例え万分の一だろう起こるかもしれない自分の未来に。そしてそれを引き起こす目の前の酒呑に。

だが、彼には残された道は一つしかないのだ。

「やってやる…………」

弥助は、サイコロを固く握った。



「やってやるぞおおおおおおおおおおおおお!!!」

握り締めた拳を大きく振りかぶり、投げる。

そして。

「——ブヘッ!」

弥助の体は天高くに吹き飛ばされるのだった。

## 衝撃

「今までの非礼を詫び申します！　どうか、どうか我等に恩情を頂けないでしょうか！」

オツス、オラ酒呑！　無理難題突き付けられたから自棄飲みして気付いたら強面の鬼に土下座されてなあ!!　オラ、なんだかワクワクすつぞお！

……………あー……………何があった？

「貴女様が憤るのも無理はありません。それだけの事を我々はしました。儂等の命をどう扱おうと構いやしません……………ですが、どうか大将の角だけのご勘弁を!!　酒呑様!!」

もうおじいちゃんって言ってもいいくらい高齢の鬼の方が恥も外聞もなく土下座している。てか、よく見たら最初に賭博場の門であった門番の鬼じゃん。

いつから居たんさ。

「や、止めてくれ豪児様！」

「アンタは何も悪くねえってのに！」

あ、門番の鬼の方は豪児って言うのね。

てかなんだこの光景。三文芝居か何か？　お涙頂戴みたいな展開になってるけど、ついて行けてねーし。てか、何に対して謝ってるの？　角折るか目え潰すかについて謝ってるの？

いや、許すわけねーだろ。メチャクチャ怖かったんだからな!?　お前ごときが謝ったところでなあ？　私の恐怖は薄れねえーんだよ!!

謝罪の気持ちがあるなら酒待ってこい酒え!!

「黙れ貴様ら!!」

はいごめんなさい調子に乘りました許してください!!

……………あ、私に言ったんじゃなくて周りの鬼達に言ったのね。それならそうと言ってよ。

ま、まあ許してやらないでもないかな。その代わり私のこと殴らないでね？　本当に。まじで頼む。謝るから。

「貴様等、この方をどなたと心得ている！」

豪児さんの怒声に、ビビって黙っていた鬼達の身体がさらに震え上がる。私も一緒にビクビク震える。

恐れ……。

「貴様等の目の前にいるのはかつて地上にて我々鬼を束ねていた酒呑童子様だぞ!!」

ちよ、鼓膜破れるからそんな怒鳴らないでよ。本当になんで鬼はこう、すぐ怒鳴るかなあ……。

ん？ まって？

いま、なんて言った？

「貴様等が罵倒すれば、それは返って儂等が大将を冒瀆するも同じ！」

恥を知れ!!」

いや、まって。

私は知らんぞお前等みたいな存在。なんの話をしているのさ。

見なよ、他の鬼の人達も怖がるのも忘れてポカーンとしてるよ。え

？ この弱っちそうな女が？ みたいな顔してるから。止めて一人で勝手に盛り上がって妄言吐くの。私も恥ずかしいから。

「……そ、そういうえは聞いたことがある」

おっとここで怒られてた鬼の中から声が上がったぞ。

なんだ？ 否定でもするのか？ いいぞ言ってみてやれ！あの妄言吐

き散らかした鬼を黙らせてやれ!!」

「黄金に輝く髪に二本の角……それに、常に右手に持った不気味な瓢箪…………知恵の神・八意思兼神すらも超える頭脳と、武神・須佐能乎命を振じ伏せる最強の鬼がいるって……まさか！」

お、おおう……なんだその合ってるようで結局肝心な所がまったく合っていない伝説は。知恵は娘の華扇に負けるし、力では勇儀の足下どころか爪先にある埃にも及ばない底辺中の底辺に定評のある私がどうしてそうなる？

あれか、嫌味か。いや、私が皆んなから勘違いされてるのは知って

るけど、それでも誇張され過ぎじゃない？　そういうのは、それこそ鬼一の知恵を誇る華扇や力こそ正義の勇儀。戦いになれば常勝無敗の透花とか、個人戦力最強のチート能力のある萃……香……

あ、萃香じゃんそれ。

「あの……それつてもしかして萃香のことじゃ——」

「なっ!?　萃香様を呼び捨てだど!?　や、やはり伝説の鬼!!?!?!」

うん、五月蠅え。話を遮るんじゃない。

んー……でも今の反応で大体わかったわ。確定だね。

やっぱその伝説の鬼、萃香のことだ。

金の髪に二本の角。加えて常に手に持つ瓢箪。知恵も力も最強のチート鬼。

それに、私以外に酒吞童子を名乗っていた鬼って言ったらあの子以外いないし。

そもそもの話。酒吞童子って名乗り始めたのは私からじゃなくて勝手にそう呼ばれ続けたからそうなっただけだし。皆が酒吞童子様、酒吞童子様って呼ぶから仕方なく名乗ってただけで、私の本当の名前は酒吞だもん。

もともと酒吞童子を一番最初に名乗ってたのは萃香だから。

懐かしいなあ。なんでか知らないけど幼名だった萃香って名前を改名して酒吞童子になってから暴れ始めたんだよねあの子。萃香がその名前で暴れる物だから、彼女の武勇伝が巡り巡って名前の似ている私の武勇伝に変わってしまったんだよ。

そりゃあ紛らわしいよね。だって、普通は酒吞と酒吞童子って同一人物だと思っちゃん。誰だっと思っちゃん。

実際萃香はマジで強い。ルール有りな決闘とかなら透花に軍配が上がるんだろうけど、ルール無用の死闘なら十中八九萃香が勝つ。な

にせ萃香は個人戦力最強だからね。

かつて萃香が私達妖怪の山に攻めてきた時、彼女は一人で戦い抜いたんだ。

それこそ並み居る鬼や、四天王には満たなくても大妖怪クラスの鬼の数名、現四天王の華扇や勇儀に加え……。

四天王と同等の天魔や、鬼に及ばなくても群れとして強い精鋭の天狗達。

それら全てを相手に萃香はあと一步のところまで追い詰めたのだ。そりゃあ、伝説になるよ。

この鬼達は、そんな萃香が気まぐれか何かで一時期配下にした残党なんだろう。それで捨てられたと。

あの子は放浪主義だから仕方ないね。

「なるほど……つまり、貴方達はかつての酒吞童子の配下だと仰るのですね」

「はい。思い出して頂けたでしょうか？」

豪児さんが地に頭を付けて応える。私を元酒吞童子の現伊吹萃香だと勘違いして。

なるほど。全てを理解したよ私は。

これは使える（ニヤア）。

「ならば尚更許せませんね。いくら賭博を仕切る側だと言えど……いや、むしろ仕切る側だからこそ貴方達は責任ある立場の筈。なのにこの体たらくとは……。呆れて物も言えません。私が仕切っていたなら絶対にしないでしよう」

彼等にはずっと勘違いしてもらおうじゃないか。そっちの方が都合がいい。

いや、別に騙そうとしてるわけではありませんよ？ 嘘だって吐いてませんしい？ ただあつちが勝手に勘違いしてるだけだからね。

私は悪くない（断言）。

「私はあなた方などまったく知りません。故に、落とし前を付けるのになんの躊躇いもない」

高い立場に胡座をかいて相手を脅す事の何と気持ちいいことか。やめられないね。

山の大將って立場は仲間や家族を騙しているみたいで気が引けてたけど、私を酷い目に遭わせてた奴らが平伏するのは見ていて楽しい。見る。土下座している豪児さんなんか地面に額を付けながらブルブル震えている。他の鬼達も彼の姿を見て顔を青くして慄いている。

あー楽しいなー。

「そうですね……私もしかすれば角を失っていたかもしれないからね……ここを仕切る鬼さんには落とし前として角でも折って

——」

風が私の顔面を叩き、何かの破片が私の頬を掠める。

切れた頬から血が垂れるのを感じ取りながら、私は目の前で土下座する男を見る。

彼は先ほどと同じ体勢で土下座しているが、その頭が先程より地面にめり込んでいた。よく見れば手に付いた床もその力に耐えられず木の板が砕けている。

ひえ……

「——は、冗談だとしてそうですねこの場を貸し切って宴会場にするってのはどうですかうん」

やっぱ自分がされたら嫌な事を相手に押し付けちゃ駄目だよな。それが仮に怖い思いをさせられた相手だとしても。やっぱり、誰かが折れなきや負の連鎖は終わらないんだなって。

「皆さん聴いてましたか？ 宴です……私の奢りですので、どうぞ楽しんでってくださいー！」

強引に話を進める為に傍観者に徹している他の妖怪達に声を掛ける。

するとただ酒を飲めると聞いたせいとか、静まり返っていた賭博場が

少しずつ色めき立ち、気付けばその盛り上がり様はもはや收拾のつかない状態になっていた。

「ッ……………やはり、貴方様はかつての酒呑様だ。きつと貴方様を見れば儂らの大将もお喜びなされる」

豪児さんが何かブツブツ呟いていたが怖いので無視した。

なんか色々あつたけど取り敢えず揉め事は終わった。

豪児さんは弥助とか言うあの鬼をこつ酷く叱り、今は宴の準備の為に色々な妖怪達に指示を出している。

私と言えば待っていると言われたので只今待機中だ。本当は準備なんてどうでも良いから早く酒飲ませろと言いたいんだけど、流石に後が怖いので言うのを控えている。

あ、そう言えば今更だけど…………パルスイちゃんは大丈夫かな？ 自分の事に必死すぎて忘れてたけど、あの子もさつきまで鬼達に押さえられていた筈だ。

キョロキョロ辺りを見回して探せば、ちよつと離れたところで一人ポツンと立ってる彼女の姿を見つけた。周りが忙しく動いているのですぐにわかった。

見た感じ特に怪我とかも無さそうだ。彼女の安否が確認できたので、巻き込んでしまった事を謝罪するために彼女の方に寄る。

「パルスイさん」

「酒呑……………貴方一体、何者なの？」

「勘違いされやすい放浪鬼ですよ。それより、先程は申し訳ありませんでした。貴女を巻き込んでしまつて…………」

「それはいいのだけど……………いえ、それより——」

「酒呑様！ 宴の準備が出来ました！ どうぞこちらに……………む、貴様はパルスイ。そういうえばお前さんはこの方の友人であつたな……………ならば、お前も一緒に来るがいい」

パルスイさんから謝罪を受け入れる言葉を貰えれば丁度よく宴の

準備が終わったらしい。

待ってたぜ。もう我慢の限界だったんだ。

私はパルスイちゃんの腕を取って与えられた席に向かう。

さあ、宴の幕開けじゃい！

「ほう。このお酒は美味しいですね」

「あ、男は近付かなくて結構です。むさ苦しいんで」

「え？ もう少しペースを落としたりどうだ？ 問題ありませんね。私、まだ1ミリも酔ってないので。それよりも貴女、美しいですね。お名前はなんと？」

宴だ宴だあー！

美酒に美食に美女！ これぞ贅沢の極み！ 酒池肉林とはこのことだね！！

はっはっはっ。美味しい飯を食べながら美女にお酌をしてもらった酒は美味えぜ！ これだから宴は止められないのだよ……………。

「ゲスね」

あーあー。キコエナイ。

っていうかパルスイちゃんだっっちゃっかり私の分のご馳走食べてるじゃん！ むしろ私のお陰でこうして美味しいもの食べてるのはそんなこと言うのは酷いんじゃない!?

まあ、私も下衆だと思ってるけど。

「わかってませんねパルスイさん。こうして最高のシチュエーションで飲むお酒が一番美味しいんです。全ての欲が詰まったようなこの瞬間を着に、お酒を呑む……………んく、んく……………ぷはあ。止められませんよ。もっとお酒の飲み方を知った方がいいですよ。」



ところでパルスイさん。そこにあるお酒、注いでくれませんか？」

「一瞬パルスイちゃんの顔が般若みたいになったのは気のせいだろうか？ い、いや気のせいだろう。あの可愛いパルスイちゃんが鬼みたくない顔で私のことを睨むはずないもんね……………自分で注ぐか。」

「まあ酒呑殿。お酒が欲しいなら妾達に言ってくだされば……………いつでも注ぎますわ」

「ん。ありがとうございます」

伸ばそうとした手は酒に届くことなく誰かの掌に遮られてしまった。

とは言えそれは悪意があつての事ではなく、酌をしてくれる為だったので素直にお礼を述べる。

目の前にいるのはこの地底に住む歓楽街の遊女達。豪児にめいれ……………お願いしたら呼びつけてくれた。

流石は遊女達だ。お酌の仕方も上手いし、お酒を飲ませるのが上手い。彼女達に乗せられてどんどんお酒が私の胃に収まっていく。

「ふう……………」

お酒を一気に煽り一息吐いてから周りを見渡す。

こうして見ると宴会場と化した賭博場には沢山の妖怪達で溢れていた。鬼は当たり前として、土蜘蛛や蛇女、がしや髑髏に珍しい鶴瓶落としなんかもある。

種族問わず皆が楽しそうに騒いでいるのは何度見ても飽きることはない。結局、みんな仲良くが一番なのだ。平和が一番いい。

そんな時。感慨深く周りを見ていたからか、私はこちらに食事を持つてくる蛇女の少女の姿を捉えた。

彼女に特別何かあるわけじゃない。ただ、華奢な体格では持ち運ぶのがキツイだろう量を手に持ってフラフラと近付いて来るものだから気になったのだ。

それでもなんとか私の下までやって来て、後は配膳するだけ。私の心配は杞憂に終わりそうだったが。

「おい。これはどういうことだ」

蛇女の少女は突然身体を固めたかと思えば、手が滑ったのか手に持った食事を私の目の前の床にブチまけてしまったのだ。

皿が次々に割れる甲高い音が宴会場に響く……………響く？

うん？ おかしいな。さっきまであんなに騒がしかった場が、今はすごく静かだ。

ううん…………それよりブチまけられてしまった食事を先になんとかしないとだ。少女も呆然とした表情で私の方を向いて……………いや、みるみる内に悲壮感溢れる表情が変わっていく。多分、粗相をしたせいで自分が怒られるって思ったのかも。

大丈夫だよー。わざとやったわけじゃないって知ってるから。そもそも悪いのはこんな小さい子にこんな大量の物を持たせた奴だ。誰だこんな小さい子に無理強いらした奴。

前のめりになってブチまけられた食事達の具合をしてみる。

汁物系は駄目そうだけど、固体物はいけそうだ。そもそも大江山を仕切る前はよく拾い食いしてたからね、私。忌避感なんてこれっぽっちも無い。

悲壮感漂う少女を安心させるために、私は彼女に顔を向けた。

そこで彼女が私ではなく私の背後を見て怯えていることに気づいたのだ。まるでこの世の終わりを見たかのような、そんな絶望の表情をしている。

誰か私の背後にいるのだろうか？もしかして、この子にこんな量の食事を持たせた責任者か？だとしたらこの子が怯えているのもうなずける。多分、というか絶対鬼だろう。

この子に変わって文句言ってやるか。

私は思いつき振り返った。

「……………」

振り返れば……………しかし、そこには想像していた筋骨隆々な鬼の身体は無かった。

どころか華奢で、それでいて私をも超える丸みを帯びた二つの大きなお山が……………衣服を押し上げる女性の胸が目の前に飛び込んできたのだ。

「??」

予期せぬ事態に、私は思考が付いて来ないながらも目の前の正体を  
知るために顔を上げる。

柔らかそうな唇。意志の強そうな目。凛々しくも整った顔立ち。

そして、額から伸びる星の模様が散りばめられた角……………って。

「ああ。勇儀じゃないですか」

私の頼りになる大事な家族の一人、星熊勇儀がそこにいた。

いや。勇儀がいた、じゃねえわ。お前どこ行ってたんや。

「ここに居たのですね。まったく、酷いですよ。起きたら誰も居ないから、一体どうしたのかと……………」

まったくう！ 起きたら全然知らない場所で一人ポツンと居たんだから寂しかったんだゾ！ プンポン!!

や、冗談じゃないんだけどね。割とガチで命の危機を感じました。マジで起きたら知らない場所とか恐怖以外何物でもないから。

まあ、勇儀一人の責任じゃないのはわかってるけどね。うん。これは皆の責任だ。勇儀一人の責任じゃなくて、私が寝ている間に移動していることに気づかなかった妖怪の山みんなの責任だ!!

「でも丁度良いところに来てくれました。ちょっと人手が欲しくて、一緒に手伝ってくれませんか？」

取り敢えず一緒にこの散らかった食事をどうにかしてくれたら許す。

「かあ……さん？」

「はい。そうですよ？」

「そんな……だって、ありえない」

そう思つて声を掛けたのだけど……勇儀の様子がおかしい。

メチャクチャ私の事をガン見してくる。こんな所で会うなんて思つてなかったのかな？ いや、私もこんな地底世界で勇儀に会うと思つてなかったんだけど……てか私に黙つて賭博場で何してんのさ!!

でも、そんな冗談を挟める余裕は無かった。

だつて勇儀の表情が……まるで、二度と会えない人に出会つたかのような、驚きと悲しみが緋い交ぜになつたような顔をしていたから。

私が拉致されたことを相当心配してくれた事がありありとわかつてしまった。

「あー……勇儀？」

「ツツ!!」

彼女らしからぬ、怯えたような反応。顔も私が覚えてるより窶れていて、心底疲れ切つたような様子は以前あつた覇気のカケラもない。

私の事を相当探してくれたのだろうか……。

私も驚いたけど、みんなから見たら私が突然居なくなつたんだもんね。心配するよね。こんな……どれくらい離れてるのかは知らないけど、見知らない地底まで探しに来てくれたんだから。きっと、沢山探してくれんだろう。

とても、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

それなのに……私は一体何やつてたんだ。

起きてみんなが居ないことに気付いたのに、私は秘蔵の酒が無くなつたことに悲しんで……可愛い少女の家からお酒をクスねて……挙句の果てにこんな、賭博して遊んで宴を呑気に楽しんで……。

私は何をやっていたんだ!! うおおおおおおお!!

「ごめんなさい」

「えっ……………」

気付けば、謝罪の言葉が漏れ出てしまった。

ごめんね勇儀。苦勞かけてごめんなさい。貴女が私を探してくれてる間、呑気に遊んでてごめんなさい。宴を満喫しててごめんなさい。お酒の絡み酒が怖いとか思ってたごめんなさい。こないだ美味しいお酒が飲みたいからって隠してた勇儀のお酒、勝手に星熊杯に注いで呑んだの黙ってたのも許して。ごめん、ほんとごめん。

そんなに寢れて…………頑張ってた探してくれただろうに。いつも大切にされているのに、わたしから貴女になにも返せなくて…………貴女に見返りが無くてごめんなさい。

「私が不甲斐ないばかりに迷惑を掛けてごめんなさい」

「そ、そんなことはない! 母さんはいつだって正しかった! 迷惑を掛けたなんて、そんな…………」

「いいえ、そんなことはあるのです。私は何があつたのか詳しくは知りませんが…………貴女がそんなに疲れ果ててしまうくらいには、大変だったんでしょう? 貴女をそうまで追い込んでしまったのは私の落ち度です」

私の言葉に勇儀はハツとした表情で己の顔を触った。気付いて無かったんだろうか?

1日2日そこらでこんなになるわけがない。相当、根気よく探してくれたんだ。自分の体調も気づかないくらい頑張ってたんだ。

それなのに私ってやつは…………。

私ってやつは…………。

一体何日間爆睡していたんだよおお!!

アホか私！ 拉致されてんのに呑気に寝てた挙句、そこから何日も爆睡してたつてことでしょ!?

こんなのバレたら………私は呆れられるだろうか？ 見捨てられるだろうか？

いや………失望されてしまうかもしれない。

嫌じゃああ！ 見捨てられたくない！ ギクシヤクした関係になりたくない!!

「おいで、勇儀。頑張りましたね」

うん。誤魔化そう。ここはどつぷり落ち着いた様子で、待つてましたとばかりに勇儀を迎え入れよう。そうしよう。

と思っただけで、どうしたんだろう？ 勇儀が俯いて私の方によつて来てくれない。いつもなら私の背骨を折らんばかりの勢いで抱きついて来るはずなのに………。

「………勇儀？」

「………ごめん。ごめんよ母さん………私は、それに応えられるような立場では無いんだよ」

ああ………やめて。そんなに自分を責めないで。私のために頑張ってくれたのにそんなこと言われたら………相対的に何もやってない私がクズになるじゃん。

もう許して。自分の存在そのものを嫌いそうになるから許してあげて、私を。

「私は、ダメな奴だよ。母さんが思ってくれてたような、自慢出来る鬼じゃ無かったんだ」

うんうん。やつぱり、落ち込んでると自分を卑下しちゃうよね。でも大丈夫！ 鬼の才能でいったら私なんて勇儀の万分の一にも満たないから！ むしろ、勇儀が自分を否定するたびにミジンコな私が可哀想になってくるから！

「私のせいで母さんが大切にしていた物を……台無しにしちまったッ。私は、取り返しのつかないことをしちまったんだッ」

あー……まあ、たしかにどれもこれも一級品以上の、私の大切な秘蔵のお酒達が台無しになったよね（絶望）。中には一滴も口を付けずに消滅した物まであるし………うー（血涙）。

でもそれも勇儀のせいじゃないよ！ 私を攫った人達が悪いのさ！ だから気にしないで!!

「母さんが命を懸けて守った、託してくれた妖怪の山を守れなかったんだ！ 私のせいで妖怪の山が壊滅しちまったんだよ!!」

そうかそうか。守れなかったかあ。壊滅しちやったのかあ、妖怪の山。まあ、仕方ないよ、うん。それも勇儀のせいじゃないさ。

それにしても無くなっちゃったんだ妖怪の山。それは悲しいねえ………。

えっ？

……

……

うえ!?!?!?

無くなっちゃったの妖怪の山!?!?

はあ!?!?!?

## 肅清

「いい景色ですね。ここからならこの街を……地底全土を一望できそうですね」

賭博場の屋敷、というよりもはや城かつてくらい高く建てられた建物の屋上にある一室。その部屋の窓から見える景色を眺めながら、私は左手に持った盃の中身を飲み干す。

気付いた時には塀の内側にいたので頭上のことなんてわからなかったけど、いやはや驚きである。まさか10階建の建物だったとは。鬼の建築は妖怪随一と知っているけど、私の知ってる常識から随分とかけ離れたもんだ。

「はあ……まさか、千年とは……」

恐ろしく長い時間の経過を感じながら、私は空いている手で太腿の上でスヤスヤと眠る勇儀の頭を撫でた。

あの後、私は勇儀に詳しく話を聞かされるためにこの部屋に案内された。まだ十分に楽しんでいなかったけど宴は後日にまたやるとの事で私は我慢することにした。

まあ、あんな事実を聞かされた後では宴を楽しむ事も出来ないのだから渡りに舟だったのは事実。

勇儀と二人つきりになって、私はようやく事の次第の全てを知ったのだ。

まさか……

まさか。

誘拐された私は呑気に千年間も寝ていたなんてッ！　いくら妖怪が長寿だからって寝過ぎだよ！

しかもそんな私の為に華扇と透花が責務を放り出してまで探しに出てくれて……ううう……

「母親想いの……師匠想いの子達を持ったものですね、私」



何されたか知らないけど、千年も寝てたとか意外と私って危機感無いのかも？ いや、そんな事は無い……筈……。

でもなあ、いくら私が居なくなつたからってそんなに大事になるなんて思つてなかつたんだよね。よくフラフラする時あるから、正直1日かそこらで探索とか打ち切りになるかと。

でもそれが鬼の四天王二人を欠くきつかけで、妖怪の山崩壊の始まりにも繋がるのだからわからないものですなあ。

駄目だよ華扇も透花も。いくら私が大事で可愛いからって職務を放り出したらあかんのよ！ そのせいで勇儀が責任おつてるじゃん……：勇儀は粗暴だけど何だかんだ妖怪の山一の誠実さで有名なんだから!! 見なよ、重圧で押しつぶされてるよ!?

「私の居ない間に……：はあっ……：……」

記憶よりも痩せた彼女の頬を撫でる。

こそばゆいのか身動きするが、精神的に疲れているのだろう。一向に起きる気配がない。

この千年間、どれほど勇儀に負担が掛かっていたのか。

姉御肌の頼りになる勇儀がここまで寝れてる姿を目にしてしまうと、どうしようもなく自分の不甲斐なさを呪う。

私の探索に加えて、華扇と透花の失踪。加えて妖怪の山の運営やライバル妖怪に人間達の攻撃もあつたらしい……：……抗争に関しては全部華扇とかに丸投げにしてたから知らなかったけど、相当キツかつたんだらうな。

てか立場的に最高幹部っぽい筈なのに自由過ぎない鬼の四天王？

華扇も透花も！ 勇儀に全部任せちゃ駄目じゃない!!

しかも残つたのは萃香とか……：誠実のカケラもないあの子が勇儀を支えられるわけ無いんだよねあ（諦め）。天魔もいただらうけど、彼女は身分的に勇儀の下だからいざと言う時の決定は勇儀がするしかないし。

頑張ったんだねえ（感動）

全てを話し終えた勇儀に感極まった私は彼女を思わず抱き寄せていた。しばらくそのままではいられず、やはり疲労が溜まっていたのだろう。いつのまにか勇儀は寝てしまった。

ふっふっふっ………まあ、私の母性力は折り紙付きだからね。伊達に千年の間華扇の母親を務めてないさ。まあ、途中からどっちが母なのかわからなくなるくらい私の方が面倒見られてたけど。

「これは久しぶりに華扇には説法を説く必要がありそうですね」  
思わず小さい頃の華扇の姿を思い出してしまう。

あの頃はまだ未熟だった華扇を何回か叱ったものだ。基本いい子だけどたまにやらかすからねあの子。意外と油断ならなかった。

でも怒る度に目に涙を溜めてウルウル泣きしてた華扇はかわい………良心が痛んだものだウン。でも怒る時には怒らないと駄目だもんね。

ちなみに最後の決め文句は、そんなに悪い子でいると華扇のこと嫌いになっちゃうからね、だ。

それ言うと華扇は号泣して私の足に縋り付いて来たな。良い子にするから見捨てないで、嫌いにならないでって。

………ゾクゾクしちまったぜ。

「今後の課題は、鬼の四天王達を探す事からでしょうか」

その為には一度この地底から地上に上がらないといけないか。その時にはこの旧都を牛耳ってる勇儀とは離れないといけなくなるのかな。

もしそうなった時の事も考えながら、私は未だ膝の上で眠る勇儀の頭を優しく撫で続けた。

本日も晴天………かどうかは土に覆われたこの世界ではわからないが。

私は今日も元気に戸惑っています。

「さて。それじゃあ始めようかねえ」

「ああ、クソツ……なんでもこんなことになっちまったのかな」

「往生際が悪いぞ弥助。お前は、私の下にいる上で絶対にやってはいけないことをしたんだ」

沢山の鬼達に囲まれながら諦めの表情で黄昏ているいつかの胴元の鬼を目の前に、私は横にいる勇儀の様子にビビりながら土の空を仰いでいた。

勇儀こえく……。

さつきから私のこと睨んでくる弥助が可愛く見えてくるぜ。いや、ゴツいから実際に可愛くはないけど。

「姐さん……確かに俺あ、鬼としてやっちゃならない事をした。罪も認める……だが、その女を俺は認められない！ 何故そんな奴を!?!」

「母さんは関係ないだろ。私が豪鬼や他の鬼に聞いた………恐喝に虚言、加えて盲目な相手にイカサマ………これだけでも許せないのに、まさか母さんにソレをやるとはな」

昨日ボロ勝ちする私を妬んで虐めてきたあの鬼が処刑される瞬間を、特等席で見せられている私は一体何なんだろう。

せつかく宴が再開されると思っていたのに何故こんな胸糞悪い瞬間に立ち会わないと行けないのだろうか？

まあ被害者だからと言われればそうなのだけど………私はお酒を飲みたかったよ。

あ、ちなみにですけど別に弥助とか言う鬼が可愛そうだとか微塵も思っていないですう。むしろ死ぬ。屍を晒せ。私にあんな恐怖を与えた奴が生を懇願するとか厚かましいんじゃない。

「勇儀。早く終わらせましょう」

「ああそうだね。じゃあ、始めるか」

勇儀はそう言って立ち上がった。

周りの妖怪達から視線を一身に浴びながら、彼女は弥助への死刑宣告を告げた。

「弥助は最悪の禁を犯した。これにより、コイツには決闘してもらおう」

可愛そうだが仕方のないこと。私を酷い目に合わせたのが運の尽きだよー。

……あり？ 決闘？

え？ 死刑じゃなくて？

「我等鬼は強さが正義だ。最も強い奴がルールを決める。なら、ルールを破った弥助が残された道は一つだろう？」

いや、知らないよ。

「気に食わないなら下剋上すれば良い。認められないなら、覆せばいい。もともと、お前が始めた事だ。否定したいなら倒してみな……ま、お前如きがどうこうできる相手じゃないけどね」

あー……

なるほど。

やっぱり勇儀のような強い鬼が考えることは理解不能です。

何故わざわざ自分が倒されるかもしれない危険を冒してまで罪人にそんな措置を与えるのか。

まあ鉄槌を下す側の勇儀が強いから、この処刑方法が成り立つんだろうけどさ。

私は関係ないからどうでもいいか。

「今までは逆らう者に私が鉄槌を下してきた。ただ、逆らわなくても不満を持つ者は多くいたと思う。当然だな。だって、数人を除いてこのルールを作った奴の実力を誰も見たことがない」

……うん？

なんか今、勇儀が変なこと言わなかった？ ルールを作った奴の実力を知らないって言ったよね？ え、勇儀が作ったわけじゃ無いの？

勇儀が作ったんじゃないなら、じゃあ誰が作ったって言うのさ。

この地底を管理する、さとりちゃん？ でも彼女は鬼じゃないし

……。

…

……

……………なんでだろう。

無関係な筈なのに……………嫌な予感がする。

「だがついに母さんが帰って来た!! 喜べお前等! 本当の大将が真の強さを示してくれる!!」

……………

……………ふう。

「……………勇儀」

「さあ母さん。母さんにセコイ真似したアイツにお灸を据えてやりなよ」

……………OK OKえ。よくわかったよ。いや、わかってないけどさ。

要はアレだろ? いつものアレだろ?

勇儀……………貴女は勘違いしていますよ。

多分、私が弥助くんを自らの手で殺せって事なんだろうけどさ。

一对一の、鬼の決闘。うん、それはね。

私に対しての死刑宣告なんですよ?!

「ふん。澄ました顔しやがって」

「貴方は私が余裕のあるように見えますか?」

だとしたら医者に行け。目の専門のな。私の絶望顔をよく見ろ。もう泣きそうだよお姉さん。

いやだあああ……………死にたくないいい……………

なんでこんな酷いことするのおお……………

「やはり、こんなこと止めませんか? 貴方が反省の色を見せてくれるなら、私はもう気にしないのですが」

「もう決まったことだ! こんな状況で今更、否定する気も無い!

俺の死は決まっている！　ならお前を否定した後、潔く姐さんに殺されてやる！」

いや、なら今殺されるよ。私を道連れにするな。説得も弥助には届かず一蹴される。

彼の言う通り、周りを妖怪達で囲まれた擬似決闘リングのような空間で既に私達は向かい合っている。決闘を止めることは出来ないだろう。

つまり、私の死が確定したと言うことだ。

ああああああああ………

「それでは、決闘始め！」

「行くぞ！」

私の絶望なんてとくに気にした様子もなく、勇儀の死刑宣告が高々に告げられた。てかお前本当に私のこと慕ってるの？

そして私の気持ちなんて関係ないとばかりに勢いよく飛び掛かってくる弥助。

その巨体に見合わないくらい素早い動きに、私は彼の動きを視認出来なかった。

凄い音がしたと思ったら、彼は既に目の前にいたのだ。

「オラー！」

その瞬間。まるで世界が止まったように迫る拳がゆっくりと私に向かって来た。

よくある、死ぬ間際に脳が活性化して思考速度を高めるアレだ。別に本当に世界が止まったわけではない。

それを証明するかのよう、私の生存本能が脳に直接警報を鳴らしている。

避ける。避ける。でなければ死ぬぞ。

警告に従って本能的に上半身を捻る。身体はゆっくりとだけど着実に弥助の拳を避けていく。

そして、私の真横を凄い力が通り過ぎた。  
「!!!?!」

「ぬう！」

危機一髪。当たれば私の身体は木っ端微塵に砕け、私の軽い命はゴミカスのように吹き飛んだ事だろう。そんな当たり前に起こる筈だった運命を奇跡的に回避できた。

まさか避けれると思わなかった。避けれたことによる驚きと、死がすぐそこまで迫っていた驚きで、一瞬の間だと言うのに心臓がバクバクと凄い速さで鼓動している気がする。

でも、いくら奇跡的に鬼の一撃を避けれたからってまだ終わりじゃないんだ。

「ふん！」

目前まで迫る追撃の拳。彼にとってみればさして特別な事をしていない当たり前の拳。

対して私は奇跡的に運良く回避した直後だ。しかも、体を捻ったために無理な体勢。

避けれるはずがない。

避けるのは無理。

わかっていた。二度はない。

加速した時間の中で私の身体は地面に傾き、弥助の拳がゆっくり私に迫る。

ギリギリ体を庇うように右手を掲げるのが間に合ったけど、その右手はなんの障害物にもならないとわかる。

うん。死んだわ。

「グッ」

そして。

アイツの拳が右手に持つ瓢箪に突き刺さり、殴られた衝撃で私の身体は宙を滑るようにぶっ飛んだ。

「ツツツツツツツ!!!」

イデエエエエエオああああアアアアアアアあ  
腕が!! 肩が!! 右半身の骨が折れタア!!!?

痛い痛い痛い!! ひんギョエエええええええ!!?

「なんだ……今の手応えの無さは………緩和、された?」

あがががが!! 死ぬ! しぬう!!

無理無理無理むりむりむり! 痛い! ホント痛い! 泣きそう

! てか泣いた!

アイツどんだけ容赦なく殴んの!? マジで走馬灯が見えた! てか衝撃で一瞬気絶してた気がする! 痛みですぐ起こされたけどな

!!

おおおおお………私の腕と肩があ………

「貴様……やる気があるのか!」

痛いよお………たしゆけて……

あ!? なんか言ったか!? うるせえ! お前の相手なんかしてる

余裕ねえんだよ!! こっちは痛みでそれどころじゃ無いんだ! 殺

すぞ!!

「……ツツ」

ヤバい。声出さだけでも痛い。叫びたいのに、痛みでそれすら出来ない。歯を食いしばってないと頭がどうにかなりそうだ。

背中どころか全身から変な汗が吹き出てる気がする。気が滅入っちゃう。

「何故戦おうとしない!!」

だけど、どんなに私が痛みで苦しんでいたとしても。

いつまでも呑気に痛がついていられる余裕は無かった。

何故か知らないけど、平気でか弱い女を殴り殺そうとする鬼が怒りを私に向けているから。いつまた飛び掛かってくるかわからないほど、彼は怒気を露わにしている。

まずい。なんとかしなくちゃ。じやなきや死ぬ。



震える膝に力を入れて立ち上がる。今すぐにも倒れて寝たいのを我慢して大地を踏みしめる。

今のところ、勇儀も助けてくれる様子はない。当たり前だ。彼女は私が強いと勘違いしているから。

助けは無い。自分でなんとかしなくてはならない。でも、今の状況を覆す力は私の身体にはない。

絶対絶命というやつだ。はいそこ、コイツよく絶対絶命になるなとか言わない。

しょうがないじゃないか。元々私は弱小妖怪。鬼に勝てる実力なんて無いんだから。

てかむしろあんな屈強な鬼に殴られてよく無事だったな私!? いや、無事じゃないんだけどね！ 右手と右肩は骨が逝かれてるし、衝

撃が胴体まで届いたからか右半身が全体的に痛い!!  
でも私の身体が粉々にならなかったのは、どうやら私の右手に括り

付けられてた瓢箪が奴の拳の勢いを緩和してくれたからみたいだ。  
流石何百何千年も私と連れ添ってきた相棒。鬼の一撃を受けてな

お、見た感じ無傷なのだから素晴らしい。できればその硬さを私に寄せ。

「貴様は俺を侮辱するか！」

ふう……………いい加減アイツ五月蠅いな。怒鳴り声が怪我に響くんだけど。

弥助の拳が恨めしい。あんな拳、私の瓢箪に当たった時に砕け散れば良かったのに……………あ、いや、まてよ……

……………そうだ。

忘れてたよ。なんで気付かなかったんだ? テンパってたから気付くのが遅れたけど、私はまだ終わっていないじゃん。

「……………私は別に、貴方が死刑になろうがどうでも良いのです。私に迷惑がかからない限りどうでも良かった」

「なに……………」

そう。本当はどうでもいいんだよ、お前の命なんて。私の命を脅か

さなければ興味すらない。

「だけど、どうやら私はお前を倒さなければならぬらしい。そうしないといけない流れになってしまったから。お前が凶に乗って、私に對して危害を加えようとするから。」

「今謝れば許してあげます。今ならまだ遅くない」

「……上等だ。反撃もせず逃げてばかりのお前に何ができるって!？」

「なんで忘れていたんだろう。私にはコイツがある。私の本当の力。鬼をも超える圧倒的な力。」

生涯を共に過ごしていつも私を支えてくれたコイツ。摩訶不思議でありながら、私を絶対に裏切らない私だけが唯一扱える力。

私の絶対的信頼を一身に受けるお酒相棒がいるのだ。

絶対絶命？ 命の危機？

何を言ってるんだ私は。コイツが在る限り、私が負けるはずが無いじゃ無いか。

私はピクリとも動かさなくなった右手を激痛覚悟で動かし、その手に括り付けられた瓢箪の栓を左手で掴み、

そして目の前の鬼に宣言する。

「お前は今から私に指一本触れる事叶わず私に敗北します」

「なっ!？」

そして私は真の力を解放するため、掴んでいた栓を思いっきり引き抜く。

「……………」

引き抜く。

「……………」

引き、抜く……

引きぬツ……………

引き……………引き……………

「あり……………？」

栓が引っこ抜けない……………おかしいな。いつもなら……………こう、すっぽりと……………

クツ……………抜けるツ……………!

なんで抜け……………痛たたたた!!? 右手が駄目だ! これ以上力入れたら腕げる!!

なんで抜けないのよー。なに? 反抗期? お母さんは貴方をそんな風に育てた覚えは無いわよ! 育てた覚えもないけど!!

「……………」

ふと周りから視線を感じて辺りを見回した。

そして、私に注目するように妖怪達の視線が向いている事に気が付いてしまったのだ。

一度、状況を整理しよう。

目の前には負ければ己の死が確定する背水の鬼。

周りに瀕死の私を誰も助ける気のない妖怪と私の家族<sup>勇儀</sup>。

手には絶対の信頼を受けながらも全くウンともスンとも反応しないお酒<sup>相棒</sup>。

そして、そんな状況下で背水の陣覚悟の鬼を散々イキリ散らして煽りまくった私。

……もう誰も信じない（泣）

## 謝罪

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

許してください。なんでも……は、しないけど。ホント、マジで許して。

ああまずいまずい！ 本当にもまずい！！

ちくしょう！ この裏切り者！ なんで開かないんだよ！ おかしいでしょ！ こう言うピンチの時に飲まないでいつ飲むつてのさ！！

「なんだ、来ないのか!? あんだけ大見得切ったんだ！ 掛かって来てみるー！」

ぬうん………来てみろつて言われても。いや、たしかに大層な挑発しちゃったけどさ……

でも無理なんだよ。動けない。動きたいし、ぶっちゃけ言えば早くこの場から逃げ出したいけど、体の怪我が痛すぎて動けないんだ。立ってるのもやつとつてか………立つ時に力入れ過ぎて座ることも出来ない。

正直、さつき瓢箪の栓を抜く為の力で私の全てを振り絞りました、はい。

「来ないならこっちから行くぞ!!」

ギャーギャー!! こないで！ こっちに来ないでこの変態!!

どうしょ。アイツ私があんなこと言っちゃったから怒りが限界突破してる………早く何かしないとまずい。ホントに死んじゃうー！

なんであんなこと言っちゃったんだよ私ッ………こんな事なら無言

で飲めば……いや、そんな事考えてる時間ないって。

早くかんがえないと。

あー……何かないか、何かないか……。

「チツ……死ねえ!!」

そうだ! 仙術! 仙術があつた!

て、わああああ!!! もうこつちに来てる!? くそ! 何でもいいからなんか打て私い!!

「仙法・幻術『水面月』」

パツと適当に思い浮かんだ言葉を口にした瞬間、私の目の前に透明な水とも言えない……ガラスで作られたような球体が出現した。

その球体は重力に引かれて地面に落ちると、割れる事なく地面に薄く広がる。

私の足裏を呑み込み、どんどん円形に広がり続け……半径二メートルほどの極薄い水溜りのような膜が出来上がった。

その直後、弥助が私に向かって拳を振りかぶる。

「これで終いだ!!」

そう言つて彼は本気で振りかぶった拳を、私の……。

……そのすぐ真横の地面に振り下ろした。

「なっ!」

驚いたような声が隣から聞こえる。

しかしそれに構つてられる余裕は私にはない。何故なら衝撃で舞い上がった極小な石飛礫が私の傷跡に突き刺さつて凄く痛い思ひをしているから。グスン。

そんな私とは裏腹に膜の表面は水のように波を立てるも、拳の衝撃で吹き飛ぶような事にはならずただユラユラと揺れている。

「クソツ何処に消えやがっ……ッ!」

キョロキョロと見回して、すぐ真横にいた私の存在に気付き、彼は私……からちよつとズレた位置を睨み付けた。

ふむん……………

この様子を見るに、どうやら仙術は成功したようだ。ちよつと心安心。

「チョロチョロ逃げまわりやがって……認めてやるよ。確かにさつきより速度は上がったみたいだが、逃げてばかりじゃあなあ!!」

そして彼は再び私の位置からちよつとズレた辺りを殴り出した。

当然何もないとを思いつき殴り付けて空振りした彼は、体勢を崩し前のめりによるめく。もう一押しすればすつ転びそう。

というわけで……。はいそこ、『縛』!!

「ぬおっ!?!」

タタラを踏んでいる軸足に仙術の基本術『縛』で拘束する。

拘束は一瞬だけど、それでも踏み出そうとした足を引つ掛けるくらいには役に立つ。

両足とも前に出せない状態で前のめりになった彼は無様に上半身から転じた。ざまあ。

「な、くっ!!」

慌ててすぐに立ち上がり、また辺りをキョロキョロする弥助。そんな彼の様子が滑稽だったのか観戦している他の妖怪達から野次が飛んだ。

「おいおい何やってんだ弥助!」

「決闘中に転ぶなんて、喧嘩慣れしてねーのかよ」

その野次を聞いてか彼の顔は真っ赤に染まる。上擦ったような声色で私に向かって怒鳴り付けた。

「クソツ!! いい加減にしろお前! 何故真面目にやらん!! 俺を馬鹿にしてるのか!?!」

そう睨み付ける彼はやはり、私から少しズレた位置に顔を向けていた。

ちなみにだが私はさつきから一步も動いていない。いや、何度も言

うように動けない。何故なら動く痛いから。

では何故彼が私からズレた位置に攻撃してはまた別の所を攻撃すると言う行為を繰り返しているのかと言うのだ。

それは私が放った仙術『水面月』のおかげである。

今もこの術が私の足下を中心にを展開し続けている。いや、正確に言えば私の足下と周りに漂っている見えない粒子がある。

この術に私が覆われている限り、彼は……この外にいる何者も正確な私の位置を見る事ができない。膜の上に映る私の姿を本物の私と誤認してしまう。そして一度その幻が殴られれば、もつと言えれば一定に流れる術の流れが掻き乱されれば、元あった幻とは別の幻が違う場所に映し出される。

彼等からしてみれば弥助が殴りかかった直後に一瞬で少し離れた位置に移動したように見えるはずだ。

唯一の欠点として、この術を掛けている限り私は一步もこの場から動けない事だけど……さつきみたいに私には他の仙術があるから関係ない。

ちなみにこの術の詳しい仕組みは私も知らない。私にこの術を教えた仙人はこの薄い膜を『美しい月を映す湖の水面』を表していると言っていたが……よくわからん。師はいつも無意味に着飾った言葉を言うからな。

私にわかるのは、広がる波が収束する膜の部分……そこに私の幻が写ると言うことだけ。

つまりこれがある限り、私に向かって放たれた筈の攻撃は私がいる位置とは違う場所に向かっていくと言う訳だ！

「こつちを向け！ 俺を無視するな！」

彼は私の目の前を横切るように通過していった。また私の幻影を殴ろうとして勢い余って通り過ぎちゃったんだろう。

はっはっはっ。無駄だ無駄だ。いくら殴ろうとそれは私じゃないんだよ。教えないけど。

本当に猪みたいだなコイツ。何度も馬鹿みたいに突っ込んできてさ。ほら、そこに地面がツルツルになる仙術を掛けてやる。





メチャクチャ顔面の近くに拳が通ったんだけど!?

それから、何分経ったのだろう。

弥助は懲りずに何度も殴り掛かって来ては私に触れられず無駄に体力を消費させ。

私はあどれなりんとか言うやつが切れたのか、右半身の痛みが洒落にならないくらい痛すぎて術式を必死に維持するのがやっとだった。

いや、まずい。本当にキツイ。最初の頃は調子に乗ってたけど、やっぱり実力の違いがあり過ぎる。私は怪我に加えて高度な術式の維持で限界に近づいて言うのに、向こうは己の身体に物を言わせた物理攻撃。場合によっては何日も延々と喧嘩する程タフネスな鬼が、弱小な私に小難しい技を使う事もないから集中力なんて関係ない。

まるで終わりの見えない目標に向かって永遠に走り続けているかの様だ。

私は限界を感じていた。傷は治るどころか奴が殴る余波でどんどん悪化し、ボロボロだ。振袖に隠れて見えないうけど、布を脱げばグチャグチャになった私のないすばでーが頭になるだろう。

しんどい。もう、目の前がチカチカして世界が揺れている。目眩つてやつだ。

あと少しで私の術式も無くなる。そうなれば、弥助の容赦ない拳が私を襲うだろう。もう、死にかけている私が一発でも拳を貰えば、死ぬ。絶対に死ぬ。それは確かだ。

ああ……私は良くやつたよ。褒めてやりたいね。なにせ、あの妖怪最強と名高い鬼相手にここまで粘ったんだから。

でも、もう駄目だ。いくら私が逃げ回ろうと、私から相手にはなんのダメージも与えられない。勝てる方法を私は持っていないのだ。

これが弱者だ。自分では何も出来ない。何も残せない。どんなに頑張ろうと、上の者を超えることは出来ないんだ。

それこそ上の者に媚び諂い、助力を願うくらいの事をしなければ勝

てない。

「助けてください」

だから私は簡単に助命を請うた。

「助けて……あげてください」

私を。こんな無様で弱い私を助けてあげてください。

痛みでどうにかなりそうなのを我慢して必死に身体を動かす。安いプライドをかなぐり捨て、両手を地面に付き、頭を擦り付ける。

「もう、止めにしませんか？　こんな弱い者いじめをして、楽しいのですか？」

「かあさん………？」

「勇儀。貴女の言い分はわかります。ですが、もう良いではないですか」

もう十分私はボコボコにされたでしょ？　悪かったよ。千年間も居なくなつて悪かった。憂さ晴らしはもう十分でしょ？　だから助けてよ。

このままじゃ私が死んじゃうよ？　私が死んでいいの？

「母さんは……それでいいのかい？」

「………貴方なら、わかっているでしょう？　私はまだ終わらない。

私はここで止まっただけは駄目なのです。それが私の願いであり、私のために集ってくれたかつての妖怪の山の悲願でしょう？」

やっちゃつてよ勇儀！　私の代わりにこのアンポンタン野郎を倒してくれ！　私にやつて来た事を倍返しにして返してやれ！

そうでなくても、私を一旦休ませてください！　じゃないとこの間の二の舞だよ!?

「………ッ。まー　待ってくれ!!　俺はそんな事望んでいない！　まだやれる!!　いや、やらせてくれ！」

土下座までしてようやく助けて貰えそうだったのに、後ろから待ったを掛ける弥助の声が私に届いた。

いや、殺らせてくれてお前………どんだけ私に対して殺意高いんだよ。怖いよ。私、貴方にそこまで恨まれる様な事しましたか!?

確かに、今思えば私もやり過ぎたとは思ってるよ。何にも考えずお金を稼いでたけど、奪われる側からしたらたまたまったもんじゃないからね。

でももういいじゃん!! 許してくれよ! なあ!?

「もう十分でしょう? 結果は目に見えてますが?」

「まだだ! 俺はまだアンタから一撃も貰っていない。決着はついていないんだ!!」

ああ、もう………クソ野郎。いい加減にしろよコイツ。

何が一撃も貰っていないだ。互いに殴り合ってどちらが強いか比べようってか? 私の身体はお前の一撃でボロボロ。誰がどう見ても決着はついているだろ。

「そこまで、決着を付けたいのですか? それが死であつても?」

「ああそうだ!!」

「そうですか………」

はは。コイツどんだけ私を殺したいんだ本当に。そこまで一途に想われると、嫌悪を通り越して呆れてしまう。

加えて、周りからも否定的な感情が伝わって来た。他の妖怪達から、殺せだの、戦えだの、野次が飛んでくる。皆が、私のプライドを捨てた土下座を拒絶したのだ。

この血気盛んなバトルジャンキー共め。そこまで私を殺したいか。なんで、こんなにも私は嫌われているのだろうか? 昨日はあんなに持ち上げてくれたのに。酷い………酷い、酷い! あんまりじゃないか。私、知つたんだからな! 弥助に虐められてた時、誰も助ける素振りすら見せてくれなかった事! 豪児さんも、本当のギリギリまで助けようとしてくれなかった事!

「もう………いい」

もういい。私がこんなにも頼んでるのに、助けてくれないなんて……。私はただ死にたくないだけなのに。

「勇儀」

「なんだい母さん？」

もういい。なら、私も容赦しない。

「この場にいる鬼の者全てを、今ここで殺しなさい」

やっっちゃえ勇儀!! 私の代わりに皆やっつけちゃえ!!

私の言葉に弥助のやつ、ポカーンとしたアホ面を晒した。

鬼や他の妖怪達も何を言われたかわからないみたいなお顔してる。は？ お前、決闘どころか俺達にまでそのチート野郎をぶつけて来るの？ プライド無いの？ みたいな顔してる。

そりやそうだ。だってさつき土下座して命乞いしてた奴がいきなり逆上して子供みたいな我儘を言うなんて思わないだろう。

「……母さん？」

勇儀からの視線が痛い。彼女も、まさか決闘の交代どころか子供のような憂さ晴らし目的で配下の鬼全員の殺害を命じられるなんて思わない。

でも私は撤回しないぞ。

「私の命令は絶対。そうでしょう？ 勇儀」

「いや、それはそうなんだが……え？ はっ？」

突然で混乱している勇儀はいつもと違って要領を得ないような返事だった。まあ、彼女は仕方ないか。勇儀は賭博のこと知らないもんね。なんでこんな命令をされたのかわからないのも理解してる。

でも私はみんなに虐められたんだ。逃げようとしたら押さえつけられて、しかもパルススイッチを人質にまでしやがった。許せるはず

がない。

「勇儀」

「わ、わかったけど……」

「なっ!? 勇儀姐さん!」

周りの鬼達が驚いてる。はっ………自分は関係ないと思いましたが。残念だったな。私はお前達に対しても恨みはあるんだよ。許して欲しけりや首を垂れる。私に傅け。

それに、ゴリ押しで勇儀から言質を取る事が出来た。これで怖い物は何も無い。勇儀は基本自分勝手だけど、私の命令には忠実だ。やれと言われればやる女。それが勇儀。そこに痺れる憧れるう。

「さて………さてさて! アンタは何を言ってるんだ!」

まるで物分かりの悪い小さな子供みたいに誰が喚き散らしているな………と、思ったらまたお前か弥助。私の話を遮るなよ。早くやることやって帰りたいってのに長引かせるなんて………本当に嫌なやつだなお前。

「貴方が決めたことですよ? 私はあんなにも懇願したのに、それを拒絶しているのは弥助、貴方でしょう? 何を今更………」

「皆は関係ないだろう!?! それに、そんな………だって、アンタが懇願したのは俺の為じゃ………」

「はっ?」

何言ってるんだコイツ。私がお前の為に助命を懇願した? 馬鹿なの? なんてあんなにも酷いことされた私がお前の助命を懇願しないとならないだよ!

か、勘違いしないでよね! 私はただ自分の命が危ないと思ったから土下座したただけだからね! もう痛い嫌だからとか、決闘とかどうでもいいから早く帰ってお酒飲みたいとか………これっぽっちも考えてたんだからね!!

「何故………私がお前の為に土下座までしないとならないのですか?」

「だ、だけど。あの時はそれしか……」

「身を弁えろよ痴れ者が」

もうお前、本当に痛いよ。イタイ奴だよ。賭博の時は変な謎推理かまして来るわ、そのせいで上司に怒られるわ、挙げ句の果てにこんなきやわいい小鬼ちゃんを殺そうとするとか………畜生の外道以下だな!?

早く逃げないと。こういうサイコパスはマジで何して来るかわからん。もう仙術も出せないほど疲弊してるから、さつきみたいにならないし。

私は足を引き摺りながら出来るだけさつさと勇儀の元に向かう。全力で勇儀の庇護下に入らないと。

出来るだけ会話で時間を稼ぐんだ!

「理解していないのなら全ての者に伝えましょう。そもそもあの場で誰もお前を止めなかった時点で同罪なんですよ。しかも、何人かの鬼はパルスイさんを人質にしました」

それさえなければ私はトンスズラ出来たのに。

大体、酷すぎる。圧倒的に弱い私をあんな風に逃げる事すら許さずに虐めるなんて、なんて残酷な奴等なんだ。しかも、こんな土下座姿まで晒して命乞いしてるの!!

「それなのに他の者は関係ない……? 呆れて物も言えませんか。無

知もここまですぐと怒りや呆れを通り越して興味すら失せそうです。

これも、貴女の罪ですよ勇儀?」

「なっ………姐さんを馬鹿にするな!!」

「いいえ、します。確かに彼女の頑張りは認めますが………今回の原因は貴方達を統制しなかった勇儀にある。それが長の責任というものです。そうですよね勇儀?」

実際その通りだよ勇儀。貴女がちゃんとコイツらのこと教育してないからこんな事になったんだよ? ちゃんと教育してよね!?

妖怪の山の教育は？ いや……………あいつら私より強いから…………。口答えしたら逆に殺されそうじゃん。私は悪くねえ。

「……………ああ。そうだね。確かにそうだ…」

ほら勇儀もそう言ってる。罪を認めたな？ よっしや、これで何も怖くない！

調子に乗ったな弥助エ。お前が私の殺害に拘るからいけないんだよ！

「どうです？　これがお前が下した決断の結果です。避けられた筈の間違い。」

……………私は弱い者を痛ぶる行為は嫌いだ。やられる者は惨めでみっともなく、その上悲しいくらい不様な姿を晒すから」

今の私のような!!　ボロボロの身体に鞭打って、精一杯会話で時間を稼いで、安全な所に遅い足取りで逃げようとする。こんなツライ事なんて嫌に決まってる!!

なのに、なのにイ！

「それなのにお前は……………ツ。」

稚児だ。ガキだ。やってる事がつまらないんだよ。だからこそ、今の薄暗い地下でジメジメと陰気に居続けなければならぬ」

「ツツツ!!」

あーもう、畜生！こんな事になるならこんな場所に来ずに我儘言つて部屋で引き籠もってれば良かった!!　本当は私だって自由気ままに外に出たいのに……………。

クソツ。お前のせいだよ。お前みたいな奴がいるから私達弱者は隅っこでこそそこそ隠れながら生活しなきゃならないんだ。

責任転嫁?……………うるさい、わかってるわ!!　わかってるんだよ!

「鬼は深く考えずに力で物を言うべし?　それもアリでしょう。策略を練らず、力押しで相手を負かす?　素晴らしい。鬼として満点の正解だ。私もそう思います。力こそが鬼の証だと……………」

だから負ける。だからこそこうなる。



己の力を過信し、本当の力だと勘違いをし……………気づいた頃には  
摂理に負け、世界を覆せない。それを行えるのは強者だけ。本当の運  
と力を兼ね備えた強者だ。弱者は常に抗うために努力しなければな  
らない」

うううあ……………そうだよ。わかってる。本当は私にも悪いところ  
はあったんだなって思ってる……………今思えば私は本当に調子に  
乗ってた。お金がガツポガツポ稼げるから何も考えず意地悪し  
ちやったし、豪児のおっさんが何でもかんでも私のお願ひ聞いてくれ  
るからメチャクチャな要求しちゃったし、一悶着ありそんな処刑の現  
場も勇儀がいるから大丈夫だって……………運と他人の権力を過信し  
過ぎた!! 調子に乗っちゃった!!

「弱い。弱い。弱い。」

強者に負けるのは弱いからだ。一人じゃ勝てない。簡単に打ち負  
かされる。

この地底に追いやられたのがいい証拠ですね。これが現状。これ  
が、負け犬の鬼の姿だ」

惨めだ。何でこんな惨めなんだ私は……………たった一匹の鬼にこん  
な……………私は勇儀に頼らないと何にもできないなんて……………本当に  
私って負け犬じゃん……………

もう愚痴が止まんねーよ。何なんだよホント。ツライわあ……………  
本当にツライわあ……………

でも、私は私なりに頑張ったよ? ね、勇儀。貴女も頑張っただろ  
うけどさ。私もここまで頑張ったの。聞いてたからわかるよね?

私も貴女の頑張りを褒めた。だから、勇儀も……………私をたしゆけてえ  
……………

「勇儀」

「なんだい母さん?」

近くで勇儀の声が聞こえる。どうやら、ようやく彼女の下に辿り着

いたみたいだ。もう視界が真っ白で、何も見えないから……………うん。私はもう倒れるね。

「まだ、向かって来るなら……………全てを終わらせて。それが、ケジメです……………でも、私の助けを願うなら……………全て貴方に任せます。私のお願い、任せましたよ」

足下の地面が急に無くなったような……………気持ち悪い浮遊感……………。真っ白な世界から一変して、暗く……………抗いのない暗闇……………。

ああ……………本当に……………

「疲れました……………私は少し寝ます、ね……………」

次の日。私は地底の鬼達から熱烈な声と共に地底の大將に持ち上げられた。

え、もしかして殺されそうになった恨みで敢えてツライ役職に!? すいやせん!! やめてください死んでしまいます!!

## 鬼の襲来

### 東方地霊殿、始まり。

「ほえー……これが地底世界ですか！ 思ったよりも明るいですね」

「天井にくっ付いてるあの光が原因なんじゃないか？」

「んな事どーだっていいわよ。さっさと異変の元凶を祓って地上に帰るわよ。私はあの温泉を使って参拝客を増やしつつ賽銭を巻き上げる準備をしなきゃなんだから」

「それ、諦めて無かったのか……」

とある日の事だ。突然地底の天井に大きな穴が出来た。

何が原因でそうなったのかは不明のまま。しかし地底の者たちはあまり気にしていなかった。

いくら天井に大穴が開こうが、それで彼等に何の支障もない。どうせ地上には行かれないのだ。いや、地上に行ったとしても嫌われ、差別され、結局何処かの誰かに祓われる。

誰も地上に期待を抱かない。関係ないから。

騒ぎ立てるのは精々が何も知らない木端鬼くらいのもだろう。

地上から嫌われ、いつの間にか無いものとして忘れ去られた地底の世界の妖怪達。

そんな嫌われ者達を追いやった地上から、三人の少女達が現れた。

「この世界の何処かに異変の首謀者がいるのよね？」

「ま、そうだろうな。とりあえず聞き込みから始めるんだぜ。てわけで、お先だ！」

「えっ？ あ、ちよ、魔理沙さーん!？」

白と黒色の装束に黒い尖り帽子。その下にある金の長髪を輝かせた快活そうな少女が、手に持つ箒に跨り天へ飛び出した。

魔理沙と呼ばれたその少女は緑色の髪をした少女の制止も聞かず

に、地底の旧都の方へと飛び去っていく。

小さくなつていく彼女を、珍妙な巫女姿の二人の少女が見送った。

「ありやー……魔理沙さん行っちゃいましたよ霊夢さん。どうしますか？」

「別に好きなようにすれば良いじゃない。元々私一人で異変を解決する気だつたんだから、別に早苗もどつか行つていいわよ」

この3人に協調性というものは無いのだろうか。その場に第三者の者がいればきつとそう思つた事だろう。

霊夢と呼ばれた、腋が開いた白と赤の巫女衣装を着た黒髪の少女は、早苗と呼ぶ少女をその場に残し、彼女も魔理沙を追いかけるように飛び去っていく。

「二人とも居なくなつてしまいました……神奈子様二人を監視するよう言われて来たのに……あれ？ 私、どうすれば？」

残された早苗は一人途方に暮れた。

これは地底から地上へと溢れ出てきた悪霊を止める為、それらを任された地上代表の3人の少女達による『地霊殿異変』解決の話。

そして後にこの三人の誰かが、地底を……そして幻想郷をも巻き込む大事件を起こす話でもある。

「地上と地底の不可侵条約？」

「ああ」

場所は変わつて旧都の最も高い位置にある酒呑の部屋に、部屋の家主と勇儀はいた。

圧倒的な実力を見せつけ、彼女のカリスマ性と勇儀の号令によって旧都の支配者が酒呑に代わつた。その代替わりは数多くの反発こそあったが……しかし、勇儀の命令と配下の鬼たちによって決定することとなつた。

誰も頼んでいないのに。

酒呑は数日間動けない身体で日々を過ごし、止める隙も与えられずこうして旧都の支配者になった。

そんな彼女は今、与えられた役職をすぐにでも辞めようと地上への移住を計画している真つ最中である。

「……………私はそんなこと知りませんが」

「まあ気持ちはわかるが……………こればかりは鬼の約束だしなあ」

「地底の管理者にお願いしても駄目でしょうか？」

「絶対無理だね。覚のやつは首を縦に振らないだろうし、そもそもこの約束は地上と地底の妖怪達が結んだものだ。当然、上にいる幻想郷の頭の固い連中……………あー、賢者達が許さないだろうさ」

「……………せっかく、地上への穴が空いたのに…」

そんな移住計画は計画を立てる前に頓挫したわけだが。

悲しい事に酒呑はこの地底の世界から逃れられない。それがこの世界のルールというもの。移住出来ないという事はつまり、彼女はこの荒くれ者蔓延る地底の世界に一生住まなくてはならない。

いや、それならまだ彼女にとって良いことだろう。本人は良くないと声を大にして言うだろうが、まだ良いのだ。

しかしその条約がある限り、妖怪達は幻想郷と地底を行き来できない。つまり、何をしても住む世界の違う者同士では会う事は出来ないという事。

それは、地上に在るであろう華扇、透花と一生会うことができない事と同義。

鬼の四天王召集を兼ねて地上の探索をしようとしていた酒呑にとって、明かされたその事実はまさに青天の霹靂とでも言える事実かもしれない。

……………と勇儀は思っていた。

「私は……………どうすれば……………」

「私もアイツらを探したいのは山々なんだが……こればかりはなあ……」

二人がいる部屋に重苦しい雰囲気漂う。

勇儀は残りの家族に会えない事実打ちのめされているだろう酒呑を見てただだ己の無力感に苛まれた。

勿論勇儀だって他の四天王達との再会を望んでいる。しかも酒呑が帰ってきた今、地底に引き籠もらずに地上に出るのも吝かではない。むしろ、酒呑の下に四天王を再集結させ、新たな妖怪の山を再結成したいとすら思っている。

そして酒呑もまた考えは大体一緒だった。

いつ殺されるかもわからないこの恐ろしい地底からさっさと抜け出して、己を守り世話をしてくれる家族と再会し、静かな場所でひっそりと酒を呑みながら、自堕落で穀潰しな生活を満喫しようと願っていた。

二人の想いはとりあえず一致している。

なのにそれが出来ない。

「………しばらく様子を見るしかないね」

重苦しい空気に耐えかねてか、勇儀は努めて朗らかに語り掛けた。「ああでも、そんなに悲しむ必要はないさ。現状どうしようもないけど、打つ手はある。萃香が帰ってくればアイツは喜んで母さんの手伝いをするだろうさ」

勇儀の口から出てきたのは、現状ここには居ない萃香の名前だった。

しかも勇儀の口ぶりでは、まるで彼女が居れば地上に出れるようではなかったか。

何故？ 酒呑の中で疑問が生まれる。

いや、そもその話……萃香は今何処にいるのか。酒呑が勇儀から聞いた話では、地底に来る際は彼女も皆と一緒にいつて来たらしい。なら、地底の何処かにいるのか。

「そうです勇儀。今、萃香は何処にいるのですか？」

「それは私にもわからないな。地底の何処かにいるのか、地上にいるのか……あいつは掴み所がないからね」

「そうですか……おや?」

ふと、部屋の外から何やら騒がしい雑音が酒呑の耳に届いた。どうやら屋敷内からではなく屋敷の外で騒がしい様なのでそこまで気にすることでは無いのだが……次第にその騒音が大きくなっていく。

それは普段は喧騒をあまり気にしない勇儀ですら気になる程の騒ぎであった。

「ん? 表の様子が騒がしいねえ。何かあったのか……ちと見てくるよ。母さんも来るかい?」

「……………いえ、喧嘩なら貴女一人で事足りるでしょう。任せました」

「了解だ。じゃあ行ってくる」

そう言つて勇儀は部屋から去つた。一人残された酒呑は窓の外に目を向ける。

ここ最近の彼女は部屋に籠りつきりで、一人になれば必ず窓の外を眺めていた。元々あつた屋敷を建て直して新たに作られた酒呑の部屋。勇儀の傘下にいる賭博場の鬼達、特に弥助が罰として作らされたこの部屋は、酒呑の要望通り地底の殆どを見渡せるようになってくる。

酒呑は騒がしい場所に目を見遣つた。

「なんだこの人間!? 強え!」

「へっ! やるな人間! 今度は俺が相手だ!」

「いい加減にしなさいよ。何匹いるのよ? もうまとめて掛かつて来なさい、めんどくさい。丸ごと祓つてやるから」

眼下では珍妙な巫女姿の可愛らしい少女が鬼共相手に無双していた。

「……………  
ふう」

それは中々ぶつ飛んだ光景だった。筋肉の塊達が少女に迫る様子もアレだが、それをバツタバツタとなぎ倒す少女の姿は異様である。

その珍景を眺めながら酒呑は無言で酒を煽った。

「いいからさっさと首謀者を出しなさい！ どうせこの馬鹿みたいに高く建てられた屋敷の頂上にいるんでしょ！」

「首謀者って何のことだ!? 頭は今お疲れなんだ！ お前の事なんか相手してるほど暇じゃねーんだよ！」

年相応の少女らしい高らかな声が響いた。

むろん酒呑の所までその声は届かなかったが、彼女が腕を上げて酒呑がいる部屋に指を指そうとしていたのを見て彼女はスツと身を引く。アレは関わってはいけない気がする。酒呑の長年の勘がそう告げていた。

なにやら何処ぞの誰かと勘違いされている気がするのを酒呑は感じながら、それを否定してくれた弥助の野太い怒声を心の中で応援して……………やはり懲りずに酒を煽った。

「うへえ……………うじゃうじゃいるな。倒しても倒してもキリがない。萃香もそうだったけど、鬼つてのは黒いアレみたいに暗いところで繁殖するものなのか？」

『おい魔理沙。ヒック……………私等鬼をあんな気持ち悪い虫と一緒にするな。大体、私のは分身だぞー』

「どっちでもいいわよ。て言うより魔理沙も手伝いなさいよ。鬱陶しいのよこいつ等」

「断るぜ。そもそも私の魔法は多人数を想定して作ってないし、そーゆー肉弾戦相手と相性悪いんだ。まったく……………興味本位でこんな『弾幕ごっこ』も知られてない田舎に来るんじゃないや無かったぜ」

鬼達相手に無双し続ける霊夢を観戦しながら、宙に浮いている陰陽の模様が入った玉とお喋りをする魔理沙の姿があった。

一目散に旧都に向かった魔理沙だったがその先で一悶着あったのか途中で霊夢に追い付かれたらしい。今は追いついて来た霊夢に面倒事を投げてゆつくりしていた。



『にしても本当にうじゃうじゃいるなあ。ひい、ふう、みい、ヒツク……あの騒ぎ大好きな連中がこんなにも必死になって騒ぎを収めようとするもんかねえ？ 勇儀の身に何かあったか？』

浮いている玉……幻想郷の賢者である八雲紫が霊夢達の為に地底をよく知る者のアドバイスを得られるよう配慮した、通信機能がある陰陽玉である。

その玉から鬼達の様子に違和感を感じ取った少女の声が上がった。それは、毎日のように鬼達と接していなければ分からない様な些細な違いなのだ。

まあそれもその筈で。

通信先にいるのが鬼の伊吹萃香だからなのだと言うだけなのだが。

むしろ、よく知っているからこそ八雲紫は彼女をアドバイザーとして選んだのだろう。

「おいおい。騒ぎがあるってんで駆け付けてみりゃあ、知っている声  
が珍妙な姿になって私の安否の心配だあ？ 気持ち悪いったらあ  
りやしないね」

だからこそ、幻想郷の賢者は判断を間違えたのかもしれない。なぜなら彼女が地底世界について詳しいという事は、逆もまたあると言う事なのだから。

彼女の姿は魔理沙の目にもはっきりと見えていた。明らかに他の鬼とは存在感が違う。鬼を正しく突き詰めればこのようになるのだろうと思わせる鬼の中の鬼。

人から産まれた華扇や、極めて特殊な条件で発生した透花と違う。

鬼の中でも例外とされる萃香や、その弱さたるやある意味で鬼の常識を遥かに圧倒的なまでに逸脱した存在である酒吞とも違う。

真つ当な鬼として現れ、順当に鬼の力を上げ、生粋の鬼として最強に成り上がった鬼。

星熊勇儀がそこにいた。

「勇儀姐さん!!」

「ふーん………あんたがこいつ等の親玉かしら?」

「あん? 私か? 馬鹿言っちゃいけないよ。それより、人間のくせに随分と強いねえ。いいじゃないか。喧嘩しよーぜ?」

好戦的な笑みで勇儀は霊夢に目を向けた。獰猛で、何もかもを屈服させる暴力的な覇者の気配に彼女は勇儀の力量を推察する。

強さ的にかつて霊夢が戦った萃香と同等か。勇儀を見て霊夢は、地上から来る前に萃香から聞いていた、自分と同等の力を持った鬼が1人いると言う言葉を思い出していた。

他人の言葉など普段は一切気にしない霊夢ではあるが、この時ばかりは霊夢も多少の警戒は覚えた。

「なるほどね。あんたが萃香が言ってた、鬼の四天………なんたらつてやつね」

「四天王だよ。そこまで言ったなら最後まで言いなよ、ったく………まあいいや。鬼の四天王が一人、力の勇儀とは私のことってな。………それで人間。お前の名は?」

霊夢に名前を尋ねながら構える勇儀。

出会ったばかり、名乗りあげたばかりだというのにもう戦闘態勢。今にも飛び出して霊夢に襲い掛かりそうな程だ。いや、霊夢が名前を告げれば一目散に飛び出し襲い掛かるだろう。それをしないのは鬼の流儀に反するから。

名乗ったら喧嘩。鬼とはそう言うものだ。

「喧嘩っ早いわねえ。物騒な事」

「お前だけには言われたくないぜ」

「うっさい魔理沙………まあいいわ。そっちの方が都合が良いし」

霊夢も勇儀に応える様に手に持つお祓い棒を構えた。

「でも、そうね………これから祓う妖怪に教える必要がある? 意味ないじゃない。一銭の価値にもならないわ。教えても死ぬんだから」  
「無作法なやつだなあ………ま、いつか! その強気は気に入った! 名前はお前さんが命乞いしてる時にでも聞いてやるよ!」

喧嘩の売り文句に買い文句。どちらも相手に負けるどころか殺し

合いそのものにすら忌避感を感じさせない。

霊夢の全く物怖じしないその態度が戦い前の高揚感を勇儀に与えた。

我慢も限界だとばかりに勇儀は霊夢の挑発に乗って飛び出そうとした。元より戦うことは前提である。安い挑発、戦い前の駆け引き、大歓迎だが結局のところ早く喧嘩したい。むしろそれが全て。

彼女はその思いのままに飛び出そうとする。

だが、飛び出そうとした直前で勇儀は自分に飛来する何かに出鼻を挫かれるのだった。

向かってくる何か。それは一際輝く星だ。

魔力の塊が星の形となって勇儀に飛来し、着弾。瞬間その星を中心に爆発が起こり、勇儀を呑み込んだ。

「何よ魔理沙。アンタの手助けなんて要らないわ。引っ込んでなさい」

「引っ込むのはそっちの方だぜ霊夢。漸く大将のお出ましなんだ。私に任せろって」

勇儀に奇襲を掛けた魔理沙は箒に乗って悠々と空を飛んでいた。

勇儀の喧嘩に割って入る等と言う愚行、地底の誰であつても……：それこそ彼女の上である酒呑であつたとしても、恐れ、心の中で泣き叫びながらその場から逃げ出すだろう行い。

そんな行為を起こした魔理沙は全く気にした様子もなく、その顔にただ自信アリと言つた表情で霊夢に引っ込めと宣つた。

「じゃあ勝手にすれば？ どうも勘だところは違うっぽいし、私は先に行くわ」

そして、霊夢も魔理沙を助けるわけでもなくそのまま勇儀を任せて去っていく。

そんな、今のやりとりを見ていた鬼達は青ざめた。あの人間達は何をやっているのだと。

近くで観戦していた野次馬の妖怪達はその場から一目散に逃げ出

した。巻き込まれて殺されると。

ついでに陰陽玉を通してこの場から離れた地上の場所で眺めていた萃香は爆笑した。

「はあ……何のつもりだい？ 萃香………久しぶりに会ったと思ったから、私の喧嘩の邪魔をするなんて。人間に偽装するつてのも許せないのに………返答によっちゃ、ただじゃおかねーよ？」

土煙が漸く晴れて姿を現した勇儀に傷一つ付いてはいない。

ただ苛立ちを露わに萃香の声が聞こえる魔理沙を睨んでいた。

「私をあんなガキみたいにな奴と一緒にするな」

『私をこんな黒白と一緒にするなよ。ヒック……いくら勇儀でも怒るぞ？』

「あん？ なんだい二人分の声が聞こえるな。どういう………ああ、なるほど。その陰陽玉か。はっ………鬼の四天王とも言われたお前さんが随分人間と仲良くなったモンだな」

勇儀の顔が嫌悪感で歪む。

当たり前だ。何せ、勇儀はあの一件以来人間が大っ嫌いなのだから。そんな大嫌いな人間とツルんでいる萃香が許せないのだ。

その殺気だけで人を殺せそうなほどの気迫。直接向けられていながそれでも彼女の迫力を前に、修羅場をいくつか超えてきた魔理沙をして僅かに足を引いた。

『はっはっはっ！ まだそんな事言ってるのかい勇儀！ 相変わらずだなあ………ホントお前は変わんない奴だよ。良い意味でも………悪い意味でもな』

「おい止めろよ。私が相手なんだからもう茶化すな」

そんな勇儀の殺気を画面越しとは言え直接浴びせられているのに萃香はそよ風を吹きかけられた様。むしろ火に油を注ぐ様な挑発を行う始末。彼女にしてみれば………鬼にしてみればこれくらい口の喧嘩、日常茶飯事だ。

何年もの月日が経とうが今更それは変わるまい。

「………はっ。お前さんも相変わらず変わんないなあ。いつもいつも私を苛立たせようとしやがって」

『…………おっ』

ただ一つ変わった事と言えば、その口喧嘩に勇儀が乗らなかつた事だ。怒りがさらに湧き上がるどころか、さつきまでの殺気だった様子すら消え失せ、彼女の顔には余裕すら感じさせた。

「なあ萃香。お前は変な奴だよ。羨ましいくらいに自由だ……………だけど、今回は裏目に出たな。私はお前が可哀想で仕方がない」

『あつ？ なんだと？』

「幻想郷の支配下にいるお前には教えるつもりは無いよ。でも、そうだな……………」

いつもと違う勇儀の様子に驚きながら、突然の理不尽で屈辱的な哀れみの感情を向けられて少し苛立つ萃香に、勇儀は挑発的な笑みを送った。

「帰ってきな萃香。もしかしなくても、お前がビツクリすることがあるかもだぞ？」

直接的で竹を割ったような性格。曲がった事が大っ嫌いな勇儀。

そんな彼女が曖昧で、よくわからない言葉を返してきた。

その事実が、博麗神社で映像を肴に酒を飲んでいた萃香の顔を最も歪ませた。

その顔は、隣で一緒に観戦していた萃香の古い友である紫が、ここ数千年は見たことがない程の表情だった。

『…………なあおい。私を無視するな』

「ん？ ああ……………そう言えばお前さんにはあの巫女との喧嘩を邪魔されたんだつたな」

萃香との会話に集中していたのか、忘れ去られていた魔理沙。

いくら彼女達にしか知らない話で蚊帳の外だとは言え、魔理沙本人を目の前にしてここには居ない者に意識を割かれるのは気分の良いものでは無いだろう。

まして、今存在に気付いたとばかりの勇儀の反応は、元々負けず嫌いで自信家である魔理沙が怒るのに十分だった。

「私の名前は霧雨魔理沙。鬼の四天王だかなんだか知らないけど、私

がすぐに倒してやるぜ！」

「お前、強そうには見えないんだけどなあ………まあ、いいか」

魔理沙は高度を取り、彼女が持つ魔法道具『ミニ八卦炉』を勇儀に向ける。

勇儀もそれに呼応して拳を固く、硬く、堅く握り

——勇儀は駆けた。

鬼達が脇に寄って開いた道を一目散に駆け抜ける。力任せなその突撃は空気を裂き、土埃が上がるよりも早く宙を跳び——そして彼女は音を置き去りにした。

怪力乱神。かつて酒呑によって称えられたその力は、物理を壊し、理を超え、世界を乱す。

「後悔するより早くに殺してやるよ」

一瞬にして空中にいる魔理沙の目の前に現れ、その固く握られた拳を彼女に向かって振り下ろした。

ある日、緑髪の女の子に、出会った。

私は今、現状を把握しきれしていない。

「あつ、お茶をいただけますか？」

突然屋敷の前が騒がしくて道の方に目を向ければ、人間が鬼を千切っては投げ千切っては投げ。

「美味しいですね。これ、なんて名前のお菓子なんですか？ 最近此方の世界に来たのでこっちの事は余り詳しくないですよ……」  
かと思えばその人間は見下ろしていた私に気付いて恐ろしい殺気を向けてきて。

「ふう……ここから見る景色は綺麗ですね。あの二人が戦っているお陰で星が一杯飛び交ってます」

勇儀が事を収めてくれるかと思ったら、意外や意外……まさか、もう一人の人間が勇儀に勝負を挑むとは……命知らずで無知な人間だ。

だけどそれ以上に驚くべきことがある。それは……

「よし、お菓子も食べ終わった事ですし……貴女、鬼つて言う妖怪ですよ？ 退治しちやいますね？」

「貴女、横暴だつてよく言われませんか？」

私の部屋に突然窓から飛んで入って来たこの緑髪の少女が、私を殺そうとしていることである。

アポイントメント無しに来訪。お菓子やお茶が欲しいと恐喝し、食ったら食ったで殺人予告。ぶっ飛んでやがる。

これだから地底は……

「じゃ、やりましょうか!!」

「待ってください、アホですか。そもそも貴女はどこから来た」

うん。まずは落ち着いて話し合おうか。とりあえず自己紹介から。お菓子あげたでしょ？ そんな、虫も殺さないような優しい笑顔で私を殺害しようとするんじゃないやねえ！ 恩を仇で返そうとするな恩知ら

ず者ー!!

「それで……………早苗さんは地上から来たんですか。なんでまた人間の貴女がこんな地底の世界に？」

「実は地底側から地上側に悪霊達が流れているんです。その原因を突き止めて解決する為に私達が来たんですが……………」

「悪霊？」

はて……………正直私はまだこの生活に詳しいわけではないけれど、悪霊なんて地底に居ただろうか？ まあ、彼等も結構な嫌われ者達だ。居ても不思議では無いのだけど……………なぜ、地上に？」

「神様達のお知り合いである紫さんのお話では、元々地底は悪霊達を封印する役割があるそうなんです……………何処かの方が封印を解いちゃったらしいんですねー」

「へえ……………悪霊の話は初耳です。それと残念なのですが……………やはり、ここ旧都とは関係なさそうですね。悪霊なんて居ませんし、現に私が初めて知ったくらいなんですから」

目的がここに無いことを告げると早苗ちゃんは悲しそうに項垂れた。心なしか髪飾りのカエルも落ち込んでるように見える。可愛いな。

それにしても突然地底の天井に空いた穴に、まさかそんな事実が孕んでいたなんて驚きだ。それに、地底に悪霊が住んでいた事も。

やはり地底は恐ろしい。そんな事実を聞いたからには益々地上への移住計画を早めなければならぬじゃないか。

「まあ、ゆっくりしてってください。もう少しすればこの世界をよく知る家族が帰ってくるので。彼女が居ればそんなのすぐ解決ですよ」

「あ、いえ。私は別にこの異変を解決するために来たんじゃないんですよ」

「えっ？」

「……………あつ、これ言っちゃダメなんだった」



なんかとんでもないカミングアウトされたぞ。事件の解決の為にきたんじゃない？ だったらなんで来たの？ 観光ですか？ いや、この様子は絶対違うな。酒呑ちゃんの勘がそう言ってる。

てか早苗ちゃんあからさまに視線逸らして誤魔化そうとするのな。可愛いか!! 可愛い!!

「えつと……………今のは無かったという事で」

「無理でしょう」

「あう…………」

天然だなこの子。私にはわかる。多分、考えるより先に口が出る子なんだろう。

「ふむ……………やはり、会ったばかりで私を信用できませんか」

「えつと……………そうじゃなくてですネ……………」

おや頑なですな。そんな言いたくありませんかいそうですかい。

正直、彼女が地底に来た真の目的なんてここから去ろうとしてる私にはどうでもいいけど、ここまで延ばされると逆に気になるな。でも、こうして彼女とお喋りするのは楽しいから強くは出れないし。そうだな……………ここは一つ私が大人な対応をしてやろう。

「そうですか……………でしたら、私の話を聞いてくださいませんか？

今、ちよつと困っている事があって……………」

「困ってる事、ですか？」

「そうなんです……………じつは……………」

相手を信用させるには己を曝け出させてな。

私は彼女に昔の事や現状の事について話した。

家族の事。生き別れた事。地底にはつい最近来たのだが、ひよんな事からここのお偉い役人的な職業を押し付けられて不安な事。移住したい事。そして、地底に住む者は地上には出られない事。

私の野望はちよつと脚色して話した。流石に自堕落な生活したいなんて初対面の人には言えないからね恥ずかしい。

でもとても家族が大事だつてことはちゃんと伝えた。鬼の四天王なんて仰々しい名前で呼ばれている彼女達だけど、私にしてみれば掛

け替えのない家族だから。命に代えても守りたい大事な家族。

正直皆強すぎてあんまり心配してないけど、勇儀の例もある。地上に行きたいのも自分の命が懸ってるからって理由が殆どだけど、それでもまだ会えてない家族に会いたいんだ。

だから――

「なんて……………なんて酷い！ 昔の人に妖怪に対しての情は無いんですか!! 掛け替えの無い家族を離れ離れにさせるなんて!!」

ちよつと家族愛を語り過ぎちやつたわ。

どうやら早苗ちゃんは他人から影響を受けやすいみたいだね。情に訴える話し方したらメチャクチャ私に対して親身になってくれたよ。対面時の横暴行為が嘘みたいだ。

ちよつと脚色しすぎたか？ まあ私は被害者なのでこれくらいは許されるだろう。

「人間は悪です！ 居ない方が世の為です!!」

「貴女も人間でしょう？ もう過ぎたことですから別に良いんですよ」

「む……………酒吞さんがそう言うなら……………」

あれ？ なんか私の言うこと嫌に素直に聞くな……………なんだこれ？ 同情させるどころか、なんか早苗ちゃんに懐かれてない？

ええ……………いいの？ 貴女さつきまで殺意満々だったじゃ無い。こころ意図かわりすぎじゃ無い？ 逆に怖いよ。それに親御さんとかいるって聞いたよ。心配しちゃうよ。こんなホイホイと知り合って間もない妖怪についてっちゃダメだよ。

これはしようがないなあ……………仕方がないから早苗ちゃんが何処ぞの誰とも知らない鬼に連れてかれないうよ、私が保護してあげちやおうかなあ？ (ゲス顔)

可愛い人間の女の子ゲットだぜ。勇儀は飼うこと許してくれるかな？

「早苗さんは、何か悩みとか無いんですか？」

「えっ……………私、ですか？」

「ええ。妖怪だろうが人間だろうが、神様だろうが。皆、誰しも悩みはあるでしょう……………。貴女は優しい子です。でも、優しくして誠実な子ほど一人で抱え込んでしまう」

「酒吞さん……………」

「さあ君のターンだ。私は腹を割って話したよ。君も洗いざらいぶち撒けちゃいなさい。ここに来た本当の理由とか、とかとか。

「じゃないと私、気になって夜も眠れません！ 昼寝はするけど！

「……………酒吞さんって不思議な人ですね。妖怪の人なのにとても暖かい」

「そうですか？ まあ私は昔、鬼神と言う鬼の神として人間の方達から祀られた事もありますからね。純粋な妖怪ってわけじゃないのかも」

「なんですかそれー」

「はいここで実体験込みの小意気なジョーク！ 和やかな会話で相手から事情を引き出す秘訣だよ！ ちよつと真剣な話ほどユーモアを忘れてはいけないッ。

「でも……………思い出してみれば懐かしいね。私も大陸にいた頃は神としてブイブイ言わせてた時期もあつたからね。結局、めっちゃくちゃ似てる他の鬼との勘違いだったけど。でも百年くらいはその里を繁栄させたからちゃんと使命は果たした。

「そのせいで華扇的外れとも言えない勘違いを否定できなかつたのが辛かつたんだけど。」

「……………わたしも」

「ん？」

「おつ、なんだ。話す気になりましたかい？」

「私も酒吞さんの気持ち、ちよつとわかります」

「……………おや？ おやおや……………これは、もしかして。」

「私も元々は幻想郷の外にいた人間なんです。こつちに引越して来

たのも最近で………最初は未知の世界だ、わーいって思ってたけど……もし、諏訪子様や神奈子様が居なかったら。お母さんやお父さん達のように居なくなってたらって思ったら不安で………」

キタ——(？▽？)——！！

これは堕ちた!! 堕ちたな!!

まさかのここに来た理由よりも重そうな身の上話が来ちゃったよ!! やふ——! 正直私の話は結構盛つてるところあつたから申し訳なくて仕方がないぜ! 変なテンションになっちゃったよ!

「二人だと、私はこの世界に独りなんだって勘違いしちゃいそうになるんです。外の世界と幻想郷は全く常識が違って………一緒に来た霊夢さんと魔理沙さんと仲良くしてるんですが、やつぱりちよつとズレがあるんです」

霊夢と魔理沙つてのは、一緒にいたあの二人のことかな? どっちが霊夢ちゃんんどっちが魔理沙ちゃんなんだろう? わからん。わからんけど最初に見た早苗ちゃんと同じ変な巫女姿の女の子は確かに常識無さそうだわ。大量の鬼相手に無双しながら、こっちに意識向けてくるとか化物やん。

もう一人も大概だろうね。今も勇儀と戦ってる筈に乗った女の子も頭おかしいよ。まあ流石にあの勇儀相手には苦戦してるようだけど。てかむしろ苦戦で済んでる方が意味わかんないけどね。

あんな二人に囲まれてたら、そりゃあ常識に差が出てくるでしょう。いや、この子も初対面で殺そうとしてきたから大概だけど。

「頑張つて二人と合わせようとしても上手くいかないんです………本当だったら貴女ともあの二人のように会って早々弾幕ごっこをしなければならなかったのに」

あ、違った。おそらくですけど話的にその二人の入れ知恵っばいわ。

止めろよ！　こんな頭緩くて良い子そうな女の子に変な常識教えるなよ！

「もし、神様達と一緒に居なかったらと思うと……………そう思ったらいつも二人に頼ってばかりで。だから今回は勇気を出して神様達から離れてみたんですが、やっぱり一人だとちよつと不安なんです」

「早苗さん……………」

そうでしょうそうでしょう、不安でしょう。そりやあ会って間もない私にこんな簡単に身の上を話すくらいなんだから、メチャクチャ不安でしょう。わかります。地底は怖いでもんね。鬼とかいっぱいいるし。私も毎日が恐怖です。

ごめんね。厚かましくて頭のおかしい危険な子だなんて思って。そうじゃなかったんだね。やっぱり慣れない土地で一人だと不安になつちやう可愛い女の子だったんだね。

あれ？　でもこの子、ナチュラルに部屋の窓から押し掛けてきたよ  
うな……………しかもお菓子とお茶を強請って……………

うん。ズレてるのは多分元からだわ。

「早苗さん」

「はい？　えっ……………あの？」

でも良いじゃないか。多少こちらの人と感性がズレていたとは言え、それは人間の話。個性豊かな私達妖怪に比べたら些細な違いではない。むしろ、そんな人とは少し違う天然なところがむしろ可愛らしい。

彼女は、自分が受け入れられないことを恐れているのかもしれない。新しくなった環境に自分だけ取り残されるのが怖いのもかもしれない。だから彼女は親元を離れて、友達になれるかもしれない二人と仲良くするために彼女達について来たのだろう。

正直、私はまだ彼女の人のなりを知ってるわけじゃないから想像の域を出ないけど、彼女が不安がっているのがわかる。

自分らしさを抑えて周りに合わせるよう努力する。

それはなんと人間らしく、それでいて美德であるのだろう。

でも彼女はわかっていない。いや、幻想郷と言う場所に行ったこと

が無いからわからないけど、それでも話に聞いた妖怪が蔓延る理想郷なのだとしたら。

個性しかない妖怪の世界では、個性こそが美德なのだ。

というか、他者に合わせるなんて気にしてたらキリがない。種族だって違うし、価値観や強さだって個体差がある。それこそ個性ばかり揃った話の聞かないあの家族達と私は長く付き合っただけなら居られないさ。

不安なら受け入れればいい。

人も妖怪も本来なら大差なんて無い。人も個性だ。鬼との違いも角があるか無いかの差だろうか？

「酒吞……さん？」

「貴女は頑張り屋さんです。立派です。慣れない環境にやって来て、仕方が無いからと腐る事なく一人立ちしようと努力する………親元から離れてこんな危険な世界にまで足を踏み入れた。誇っていい」  
彼女の華奢で小さい身体を包み込む。私の両腕にすっぽりと収まる早苗ちゃん。よしよしと頭を撫でて、私の温もりが伝わるようにっそう心掛けて彼女に触れる。

「私と友達になりました？ 私は他の人間と違うことに悩む、そんな健気な貴女が気に入りました」

「ゲホッ………痛ッッ………たあ………」

『魔理沙!? 大丈夫なの!?!』

「余計なお世話だぜ………って啖呵切れれば良かったんだがなあ………」

建物が軒並み倒壊した旧都の道の真ん中で、ボロ切れのように倒れる血塗れの魔理沙の姿があった。

怪我自体こそ見た目ほど酷いわけではない。しかし彼女の筈は根元から折れ、両足は捻挫か骨折したのか酷く腫れてまともに起き上がるのは無理だろう。

お気に入り帽子は戦闘の余波で吹き飛んだのか何処にも見当たらず、彼女の周りには無残に引き千切られた西洋風の人形が散らばっていた。

「動けない……」

『クツ………私の人形達が』

『化物ね………魔理沙に掛けた魔法の護りも、アリスの自動防御人形も全部壊された。まさか、レミイ並の妖怪がこんな地下の奥底で燻っていたなんて』

地面に落ちていいるヒビの入った陰陽玉から苦虫を噛み潰したような声が響いた。萃香の声ではない。

陰陽玉の通信先で、先程まで魔理沙にサポートをしていた彼女の知り合いであるパチュリー・ノーレッジ。そしてその横で焦った様子のアリス・マーガトロイドである。

二人は魔理沙達をサポートする為に八雲紫によって呼ばれた者達だ。三人が地底に出発する前にそれぞれが守りの結界と身代わり兼サポートにも役立つ人形を憑かせていた。

二人のサポートは万全だった。幻想郷でも類稀なる力を持つ魔法使いであり、『動かない大図書館』と呼ばれるパチュリーと『七色の人形遣い』の異名を持つアリスの二人が、それぞれの分野で最高の補助を彼女達に施したつもりだ。

重ねて魔理沙には付きつきりでサポートをしていた。

それが今のような結果。それら全てを正面から破られて、魔理沙はボロ雑巾のように地面に伏している。

いや………むしろこのくらいで済んでいる方が奇跡と言えるかもしれない。

なにせ魔理沙の相手はあの星熊勇儀なのだから。彼女相手に人の形を残している事がもう偉業と言えるだろう。

「初めてだよ。私と正面からぶつかってここまで粘った人間は。鬼で

も私相手に10秒立っていられたら英雄視されるってのに……………  
傷付けられたのは鬼以外だと天魔とやり合った以来かな」

私が勝者だと言わんばかりに魔理沙を見下ろす勇儀。

そんな彼女は魔理沙以上に傷を負っていた。身体の至る所に火傷を負い、肩や腹の肉が抉れ、着ている服は魔理沙以上に血で赤く染まっている。

人間ならまず重傷だ。しかし、鬼の中でも圧倒的に生命力の優れた勇儀にとってこのくらい全く問題ではない。どころか既に治りかけている箇所すらある。

いくら皮膚が焦されようが、肉の皮が持っていかれようが、所詮薄皮一枚程度の怪我。彼女の命には一生届かない。

「あぐつ……………この、肉体お化けめ。弹幕ごっこなら負けないってのに」

「あ……………そういえば上では今そんな遊びが流行ってるんだってな。私は興味ないけどね。喧嘩ってのは拳でやるもんだよ。まあ、確かにその遊びでやってたらお前さんの勝ちだったろうな。恨むなら、私の邪魔をして本気にさせた自分を恨みな」

その戦いは圧倒的な蹂躪だった。

弹幕ごっこで培った魔理沙の戦闘技術は一級品だ。火力の高い魔法に、逃げ場を与えない弹幕技術、箒を利用した高速移動と回避力。並の妖怪なら相手にならないだろうし、大妖怪と呼ばれる存在とも僅かであるが渡り合える。

そんな魔理沙だからこそ勇儀は最悪の相性だった。

鬼の肉体に物を言わせた勇儀の戦い方。回避の難しい磨かれた技術だろうが追尾の魔法だろうが関係ない。いくら攻撃を浴びせられようが問題ない。当たるなら避けなければいい。

魔理沙が放つ魔法の嵐の中、勇儀は平然とその中を突っ切り彼女へと襲い掛かった。何度も何度も。その一撃が当たるまで何度も。

「昔の私ならお前さんを気に入っただろうけど……………悪いな。随分前から私は人間が大っ嫌いなんだ」

「はっ……………動けない相手にトドメを刺すなんてな……………酷い奴だ



ぜ」

「ああそうだな。私の信条に反するよ。でも、殺すって決めてんだ」

これまでも幾度も命を絶ってきたその拳を勇儀は高く挙げ。

「母さんが殺された、あの時からな」

魔理沙の顔面に振り下ろし。

「ちくしょう——」

どちゆり。

肉の潰れる音と共に、勇儀の顔に飛び散った鮮血と肉片が付着した。

## 絶望

「はっ?」

勇儀は自分が今行ったことに対して、何故そうなったのか何が起こったのかわからなかった。

左手に激痛。掌が潰れ、手首は折れひしゃげている。

そして、左手を潰したのは己の拳だった。

勇儀の左手は確かに倒れている魔理沙の襟を掴んでいた。逃げないよう抑え付け、狙いを定め、右手を彼女の顔面目掛けて振り下ろした。

なのに、右の拳は彼女の襟元を掴んでいたはずの左手首にぶち当たったのだ。

「このっ!」

「ぬっ……」

覆い被さるように立っていた勇儀の胴に魔理沙の蹴りが入る。本来ならただのひ弱な人間の蹴りなどビクともしない勇儀なのだが、蹴られた事で呆気なく彼女の視界は揺さぶられ、体幹が崩れ落ちる。

「なん……だ?」

何故、自分は今倒れた?

有り得ない事態に勇儀は益々混乱するしかなかった。

そんな隙を魔理沙は見逃さない。

「マスタースパーク!!」

「ツな——」

高らかに叫ぶ呪文。それはそこらの妖怪なら影も形も残らない、大妖怪だろうと直撃すれば大ダメージ必須の魔法。

次の瞬間、魔理沙のミニ八卦炉から魔力が極太の光の奔流となって放たれる。気づいた時には、勇儀はもう既にその巨大なレーザーに呑み込まれていた。

「マスタースパーク!! マスタースパーク!! マスタアアアスパークツツツ!!!」

何度も何度も巨大なレーザーと化した魔力の塊が勇儀がいる場所

を呑み込む。膨大な魔力が無防備となった勇儀の体を焼き続ける。

「マスタースパアアアアクウ!!!」

ダメ押し最後の魔法。

限界まで魔理沙の身体から絞り尽くした魔力を魔法に換えて放つ一撃。旧都の街道を抉り、街並みを破壊し尽くす。

そして魔法を放ち終わった魔理沙は限界とばかりに膝を付いた。

「ゼー……ゼー……もう無理だぜツ………！ これ以上やつたら私が死ぬツ！」

『……そりゃあそうでしょう。相変わらず馬鹿げた威力……人間には過ぎた力だわ』

『でも出し尽くした甲斐はあったんじゃない？ 見てみなさいよ。あの鬼、倒れてる』

陰陽玉から聞こえたアリスの言葉に魔理沙は顔を上げた。

それは凄惨な光景と言えるだろう。全身から煙を上げ、露出した皮膚からは爛れた火傷の痕が離れている魔理沙からでもはつきりに見える。無事な場所を見つけるのが困難なほど投げ出された勇儀の身体はダメージを負っている。

勇儀は仰向けになったままピクリとも動く事はなかった。

「ゼー……ゼー……ツ、ショックだぜ……あんなにやったのに、火傷程度なんて」

『流石の生命力という事かしら。あれで原形を留めているなんてレミイだって無理なもの』

『ホントにギリギリだったわね。まったく………もしアレの効き目がほんの少しでも遅れてたら死んでたわよ。確実に、ね』

「うるさい、ハア……奴らだ………少しは、劳いの言葉を、だなあ………」

称賛の声すら送らずに、通信越しから高みの見物とばかりにズケズケと酷評ばかりしてくる二人に、魔理沙は悪態を吐くもいつもの元気はそこに無い。

「嘘だろ……姐さんが、やられた？」

「馬鹿な!!? そんなはずあるか！ 姐さん！ 起きてくれ姉さん！」

「あんな、人間なんかにはやられる筈が無いだろう!? そうだと言ってくれ姐さん!!」

その結果は今まで被害の及ばない場所で観戦していた鬼達に衝撃を与えるものだ。

彼等は勇儀の強さを知っている。だからこそこの現実を信じられないわけがない。鬼の頂点とも言える存在が、たかがにんげんの小娘一人にやられるなんて現実があるわけがない。受け入れる………受け入れられる訳がない。

だか、どんなに彼等が勇儀に声を掛けようとも彼女からは返事一つ返って来なかった。

「そんな………ッ」

「す、すぐに頭を呼べ!! 幻想郷の奴等が攻めてきたって伝えろ!!」

「一大事だ!!」

鬼達は一目散にその場から離れる。

戦闘が始まってから、彼女達は鬼達の屋敷からかなり遠さがってしまっている。急いで戻らなければ。

幸いにも魔理沙は魔力と体力を酷く消耗していると鬼達もわかっている。ならば急げば大丈夫だ。

その思いから鬼達は一斉に屋敷へと向かったのだ。

『あら、かかって来ないのね。まあその方が此方も都合なのだけど』

『まあ来ても私の人形達の餌食になるだけけどね』

陰陽玉から告げられた声と共に、一斉に瓦礫の山から西洋風の可愛い人形と星のマークが付いた陰陽玉と似通った球が飛び出してきた。

『おいおい………人形も魔法も無くなったのは嘘だったのかい?』  
今まで黙ったままずっと観戦していた萃香が非難めいた声を上げる。

どうやら耳聴く先程の会話を萃香は聞いていたらしい。命懸けの戦いにズルも何も無いと言われるかもしれないが、これでも彼女は異

端とは言え鬼だ。嘘を見つければ反応しないわけにはいかない。

だがそれを二人は否定した。

『嘘じゃ無いわよ。さつき言ったこと覚えてないの？ 護りの魔法も、自動防御の人形も全部壊れたって』

『……………ああ。なるほどね。手札は使い切ったわけじゃ無いってか。コイツは一本取られたよ。まさか、距離も関係なしに魔法を行使できるなんてなあ！ やるじゃないか！』

萃香は勘違いしていた。二人は事前に魔理沙に魔法を掛けるか、自動で動く人形を持たせるかしか援護できないと。

そんなわけがなかったのだ。ならば二人はサポートとして呼ばれる筈が無い。

『見事に引つ掛かったね。私も、そして勇儀もな。じゃあ、勇儀が魔理沙にトドメを刺す瞬間におかしくなっちゃったのもお前さん達のおかげって事だな？ おかしいと思ったんだ。勇儀があんな簡単に負ける筈が無いからさ』

「おい、まるで私一人じゃ負けていたみたいな言い草だな。見てなかったのか？ コイツを倒したのは私だぜ？」

萃香はアリスとパチュリーを見事と褒めそやす。実際、彼女達が行った事は称賛されるべき事だ。

何故なら実際に戦いに赴いたわけでも無いのに、あの鬼の四天王である星熊勇儀を無力化したのだから。

だが萃香の言い分を聞いた魔理沙は不満気だった。それもその筈で、確かに二人のお陰で勇儀を倒せたのは魔理沙もわかっているがトドメを刺したのは自分だ。自分の魔法があつてこそ勇儀を倒せた。それだけは譲れなかった。

でも、

『事実だろ魔理沙。お前さんは一人じゃ何もできない。現に今も死にそうだったじゃ無いか』

萃香は魔理沙の言い分を否定する。

「おい萃香。喧嘩なら買うぜ？」

『弾幕ごっこで、だろ？ 別にいいけど、あんなの暇つぶし程度のお遊

びだ。いくらお前さんがそれで強くても、実際の命のやり取りになん  
の力も発揮されないんだよ』

『なっ………ちよつと言い過ぎよ貴女。鬼だかなんだか知らないけ  
ど、魔理沙だって………』

『いや、お前さんもわかっているだろ？ こいつはただの人間だ』

萃香は魔理沙に対してバツサリと言い放った。

『正直言わせてもらうけどさ。霊夢といつも一緒にいるから相手して  
やってるけど、誰もお前なんか強いと思っでないよ。お前は弱いんだ  
から、もうちよつと身分って奴を弁えた方がいいぞ』

さつきまでの魔理沙は本当にギリギリだった。ギリギリの勝利。  
負けず嫌いの彼女は決して表には出さないが、勇儀と戦うのが自分一  
人だけだったら絶対に負けていたと彼女も気付いている。

仮に本当に己一人でこの地底の世界に来ていたら………  
一瞬よぎった自分の死の光景を振り払うように魔理沙は首を振っ  
た。

幻想郷で生活している分、魔理沙だって危ない橋を渡ることだつて  
あるし、命の危機を感じることも少なくない。西行妖の時はさつきよ  
りも死の危険を感じ取れるほど脅威だった。

しかし、あの時は霊夢が居た。そして、今回もアリスとパチュリー  
がいる。

魔理沙の師匠である魅魔の所で修行をして力を付け、ガムシヤラな  
研究で魔法使いとしての力量を上げて………結果、名のある大妖怪  
達にすら弾幕ごっこではあるけれども、それでも勝ち続けて来れた。

だからこそ魔理沙は無意識の内に察してしまった。  
力のある妖怪や修羅神仏………化物達と関わるようになって漸  
くわかってしまったのだ。己の限界に。

所詮弾幕ごっこは決闘と謳ったお遊びでしかない。いや、魔理沙は  
真剣だけれども他の者達にとってはそうでは無いのだ。

今は妖怪達にこの流行りが受けて弾幕ごっこが決闘のルールみた  
いになっているが、この流行もいつ終わるのかわからない。妖怪は気

まぐれだ。力のある大妖怪の誰かが飽きてそのルールを破った時、魔理沙のアドバンテージは失われてしまう。

実際は八雲紫がその辺りを考慮して色々対策を加えているのだが、魔理沙はその事を知らない。

魔理沙はただ一つの異変が終わる度に気付かされていくのだ。彼女がライバルだと思っている博麗霊夢との差に。一つ一つ解決するごとに、努力ではどうにもならない彼女と己の間にできた才能の壁がどんどん高く分厚くなっていく。

「……………はっ。萃香。お前は私を見くびってる様だけど、この現実を見てみるんだぜ。そこでぶっ倒れている鬼を怯ませたのは二人がやった事だけど、元々その薬を作ったのは私だぜ？」

『へー。そうなのかい？ そういえば気になってたけど、一体何で途中から勇儀の様子がおかしくなつたんだ？』

それでも魔理沙は腐らない。

圧倒的なまでの才能の差？ そんなもの知るか。魔理沙は心の内で吠えた。才能に差があるならば努力すればいい。その為に魔法使いになつたのだから。

地道な努力と研鑽、長い時間をかけた研究と発明が魔法使いの強さに繋がる。

見ろ、その結果が今の光景だ。確かに手伝ってもらつたのも事実だが、その方法が己の手で作り出したものならいつかは一人で出来るのだ。

魔理沙が今の光景を噛み締めて次に向けた目標を己の中で確立させている中、萃香の質問に答えたのはアリスだった。

『あれは魔理沙が魔法の森で見つけた可笑しなキノコ類に薬草を混ぜた薬のせいよ。それを私の人形がこつそりアイツに注射して動きを混乱させたわけ』

『私の魔法も、ね。常時熱で気化させた薬をあゝの鬼の周りに散布させ続けるの大変だったんだから』

『わかつてるわよ。まあ実際、殆ど効いてなくて焦ってたんだけど。一滴含めば即効で目眩、吐き気、全身の弛緩及び痺れに混乱作用や幻





れぐらいの大妖怪の力を一時的にでも抑制する力があるなら……それは伝説級の秘薬でしょうね』

この時、誰もが勇儀は負けてしまったと勘違いしていた。それが悲劇なのだ。

『まずい……まずいなそりやあ。おい魔理沙、悪い事は言わないからそこから早く逃げな。出来るだけ遠く、出来るだけ早くに。勇儀が起きるよりも前に……って、もう遅いか』

「はあ？ 何で私が逃げないといけないんだ。私は勝者だ——」  
甲高い音が響いた。

固い何かが割れた様な音。魔理沙のすぐ横。そこを何か礫のような物が魔理沙の目では視認できないほどの速さで通り過ぎていった。

「——からむしろ堂々と……あ？」  
飛来した何かに気づいた魔理沙が慌てて振り向いた。

彼女の目には、八雲紫によって作られた特別性の陰陽玉が粉々に砕かれ、漏れ出た妖気と共にその破片が宙に霧散して行くのがくつきりと映し出されていた。

『に——ザザツ……魔理……——ザザー……ツ!!!』

既に通信機としての役割は完全に失い、不協和音の中から時折聴こえる誰かの声らしき物が魔理沙に届くのみ。

「なんだ……？」

「薬を盛ったつてのは、本当かい？」

状況が掴めない魔理沙に後ろから声が掛かる。

ビクリと彼女の体が跳ね、まるで壊れたブリキ人形のように動きがぎこちなくなる魔理沙。

ガタガタと身体は小刻みに震え、ギツギツと音がしそうなほどゆつくりと振り向く。

声色でわかっていた。声の方向から、彼女以外いないことはわかっていた。

だから、当たり前のように魔理沙の目の前には星熊勇儀が立っ

る。

「意識はあつたさ。まだ目眩はするし、身体も怠い……………でもちやんと聞こえてた」

「嘘だろ……………私の最大威力の魔法だぜ？ そんな、簡単に……………」

服はボロボロでかなり際どく、異性の目に毒な扇状の格好と言える。そのために無情なほど魔理沙に現実を叩きつける。

服の合間から見える勇儀の肌には一切の傷跡が残っていない。多少火傷で肌が赤くなっているとは言え、それも火照っているように見えるくらいのもの。

いくら生命力に満ち溢れた勇儀と言えども、致命傷の怪我を負えば回復にかなりの時間を要するだろう。しかしこの短時間で傷が全快したということは……………つまり、魔理沙の攻撃は全く効いていなかった事を意味する。

その現実が魔理沙を地獄へと叩き落とす。

「あつ……………」

「私はさ、何だかんだ認めていたんだよ。人間でもこうも真つ向から向かってくる奴は初めてだって感心していたんだ。だから、私はお前に尊敬の念すら抱いてた」

「ひ、あつ……………」

先程から、震えが止まらない。止められない。どうしようもなく身体が凍えるような怖気を感じていた。

原始的な恐怖。取り繕うなどと出来るはずもない程の圧倒的な死が魔理沙に向いていた。

勇儀が一步魔理沙に近づく。直後、魔理沙の周りに漂っていた人形や魔法の球が彼女を守ろうと前に出た。盾になろうとしたのか、それとも勇儀を倒そうとしたのかわからない。

「邪魔だ」

しかし勇儀が続け様に大きく踏み出した一步が地面に付いた瞬間。地面が爆発し、空気が震え、妖気が振り撒かれ。

魔理沙を守る盾達の尽くが一瞬で壊された。

「そんな……………」

嘘だと、声にならない悲鳴が彼女の胸中を覆い尽くす。

魔理沙は今まで勘違いしていた事がある。それは、彼女が本当に命を狙われるような戦いをした事があると思っていたこと。いや、実際に命の危機などはあったのだろう。死ぬかもしれない事件に、その好奇心旺盛で負けず嫌いな彼女の性格が何度も顔を突っ込ませた事だろう。

でも彼女に明確な……………怒りや欲望などと言った純なる感情から来る殺意を力のある妖怪から向けられたことは一度も無かったのだ。

レミアアは一貫して霊夢に想いを向けていた。魔理沙は見向きすらされなかった。

西行妖ではただ周りに死を振りまかれただけだった。決して魔理沙だけに向けられた訳ではなかった。

萃香は元々異変を楽しみただけ。てゐのトラップはアリスが対処していた。

人は死に鈍感だ。車の事故と一緒に。明確に人体を破壊する物が普段から身近にあってもそれを恐れない。目の前に脅威が迫って漸く気付く。

「く、来るな。来ないでくれ」

「お前は私の逆鱗に触れたよ。まさか、そんな卑怯な手段を取る奴だったなんてな」

「あぐっ」

勇儀が近づく度に無意識に後ずさって逃げようとしていた魔理沙だが、震える身体は小石に躓き倒れてしまう。

すぐに起き上がって走らなければ。そう思うのに身体は言うことを聞かない。恐怖で身が竦んでいるせいもあるが、彼女の身体は既に限界なのだ。彼女には走る元気も無ければ、目の前の恐怖に対して立つ理性と気力も無い。

己の身体が縛られた状態を想像して欲しい。目の前でリボルバー式の銃を見せられ、一発の弾丸を見えないように込められる。そして、無防備な己にその銃を突き付け……………引き金を引かれる。

いつその弾丸は放たれるのだろう。引き金が引かれる度に、無機物な音が響く度に身体は勝手に跳ねる。跳ねてしまう。

勇儀の歩みそのものが引き金だ。いつ襲われるかわからない。次の一步で襲ってくるかもしれない。殺されるかもしれない。

勇儀が近づく度に、魔理沙の顔が歪んでいく。

「こ、来ないで……………」

そして魔理沙は見てしまう。今まで下を向いて怒りに震えていた勇儀の顔を。見上げたことで初めて目にする狂気と殺意の鬼の顔。

「うわああああアアアアアアアアアアアアああ!!!」

魔理沙の理性が恐怖によって決壊した。

なりふり構わず魔理沙は逃げ出す。背を向けて、地面を這って、手足を無様に動かして。汚物で服を汚そうが関係ない。恥も外聞もなくだだ己の生存の為に魔理沙は逃げ出そうとした。

それを勇儀は許さない。

「おぶっ!」

勇儀は逃げる魔理沙にすぐに追いつき、彼女の柔らかいお腹を蹴り上げた。

ボールのように簡単に蹴り飛ばされた魔理沙は、何度も何度も陥没した地面とぶつかりながら数十メートル離れた位置で漸く止まった。

「うぶッッ、ぶ、ぐ……………ッげえええ!!」

わずかの呻き声を発した後、血が混ざった吐瀉物を撒き散らす魔理沙。

手足を投げ出したままうつ伏せで倒れ、何度も苦しそうに咳き込んでいる。

地面にぶつかった衝撃なのか、恐怖に吞まれようとも離さなかった

ミニ八卦炉を持つ腕は、通常ではありえない方向に曲がっていた。頼りのミニ八卦炉も腕が折れた時に何処かに行ってしまった。

誰が見ても魔理沙の負けは確定している。彼女に抗う術は残っていない。もう、今の魔理沙は死に怯える幼い少女でしか無い。

だけで、

「どうせまだ汚い手段でも残してるんだろ？ いいだろう。使ってみなよ。私はその尽くを力で振じ伏せてやる」

勇儀は一切容赦しない。怯えているのは演技だと油断せず、まだ何か術があると疑わない。

「私はあの時から、お前みたいな卑怯な手段を用いる奴の為に特訓してたんだ。毒を打ち負かすのに多少の時間は掛かるし、その間私は無防備だけど………どんな攻撃も私なら耐えてやる。もうあの時みたいに、無様に這いつくばったまま見守る事しか………護られるだけの足手まといじゃ無いんだよ」

「あぐっ」

勇儀は未だ咳き込む魔理沙の右足を踏み付けた。なんとか逃げ出そうと魔理沙ももがくが、万力のような力で押さえ付けられてその場に縫い止められて動けない。

そんな魔理沙に、勇儀は踏み付けた脚に更なる力を込めていく。

「ぎぐっ、 あイイいガアアアアあああああああ!!」

「おらー！ 見せてみる！ この『力』の勇儀、卑怯な手段も怪しい術も母さんから貰ったこの名に懸けて全部振じ伏せてやるよー！」

「ひぎいっ！ いやあ!! やめ、やめてええ!!」

込められた力に、踏み付けられた太腿から血が滴り落ち、肉の下の骨から人体から決して鳴ってはいけない音が響く。

このまま力を込めれば肉が潰れ、骨は容易く砕かれるだろう。それでも反撃してこない魔理沙に勇儀は呟いた。

「私の……私達の怒りがこれで収まると思うか？ 私達がどんなに叫んでも、許しを乞うてもお前達人間は………母さんを殺したのに!!」

そう言うと勇儀は踏み付けた魔理沙の太腿の先にある足首を掴む



## 即堕ち魔理沙

「おーい。霊夢ー」

魔理沙の日常には大体霊夢がいる。というより、霊夢の日常に魔理沙が入り込んでくるのだ。

魔理沙は元々霊夢の事が好きではなかった。いつも周りに興味を持たず、同じ年であるにも関わらず悟りでも開いたかの様に年齢に合わない達観した姿が魔理沙は嫌いだった。

最初は霊夢を驚かしてやろうくらいの気持ちだったのだろう。しかしそれが次第に霊夢に興味を持たれたいと言う想いに変わり、何度も何度も彼女に突っ掛かった。

そして魔理沙は霊夢を目標とするようにまでなっていた。

魔理沙は霊夢を友人であると思っている。しかし己の生涯のライバルだとも思っている。

お前は特別な人間なんかじゃない、私と同じ普通の人間なんだって。お前を超える奴はいくらでもいるんだって思い知らせてやりたい。

だけどそれを理解させるには思った以上に大変で。

見返してやりたい。負けたくない。あの天才の霊夢に認められたい。

いつの間にか彼女は霊夢への対抗意識と認識欲求に突き動かされていた。

「おい霊夢。無視するなよ」

今日も魔理沙は霊夢に会いに行った。いつものように神社の参道を箒で雑に掃除する彼女に声をかけた。

だが変だ。霊夢の様子がおかしいのだ。いつもなら迷惑そうに追い払って来るのに。嫌そうでも、それが人間味のある反応で妙に嬉しく思っていたのに。

「霊、む……………？」

振り返った霊夢は無機質で感情の見えない能面の顔をしていた。何度も呼び掛けたのに、自分の存在を認知してないかの様な。

自分に興味が無いとばかりに、冷たく機械的だった。

「……………ああ。魔理沙か。どうしたのかしら。また異変？」

「えっ？ あ、いや……………そうじゃ無くてだな」

「じゃあ帰って貰える？ 私は暇じゃ無いの」

軽くあしらう様ないつものセリフ。なのにそれはいつも通りじゃ無くて、感情の見えない事務的な返しだ。

いつもと違う霊夢の様子に魔理沙は焦った。これでは、昔の様では無いかと。幻想郷の管理者である博麗の巫女そのものだと。

私が入りにいるその他大勢の扱いを受けている。

「霊夢!!」

「……………まだ用事でも？」

嫌な考えが過ぎった。そんな筈はないと否定したくて、なのにその予想がぬぐい切れない。

「霊夢……………久々に私と勝負しないか？ その……………弾幕ごっこで」

「嫌よ」

別に拒絶されることは構わない。いつも魔理沙の誘いに断る霊夢だ。これくらいなら動じない。

だけど。

「弾幕ごっこ？ 今もそんなお遊びやるのアンタくらいよね魔理沙。

ああ……………そういえばアンタが唯一出来たのって、アレくらいだったわね。たかがごっこ遊び程度であんなに必死になって。無駄な努力ご苦労様」

「えっ？ ………………あっ」

こんな風に拒絶されることは無かった。唯一霊夢に対抗できた決闘が、今になつては誰もやらない古いお遊びと化すなんて思いもいなかった。

今更になつて魔理沙は思い出す。弾幕ごっこなんて随分昔に流行了ったゲームじゃないか。友達でいられたのは。ライバルでいられたのは。



私が強く在れたのは、ほんの一瞬程度の仮初の幻想だったじゃないか。

魔理沙は霊夢に事実を突きつけられて漸く気付いたのだ。

「大体、その身体で戦える訳ないじゃない」

そして魔理沙は見て見ぬ振りをしていた現実に戻る。

魔理沙は突然右足に力が入らなくなり、地面に倒れ込んだ。どうしたのだと右足に目を向ければ、そこにはある筈の脚が太腿先から引き千切られて血が溢れ出していた。

「ああ……………」

いつの間にか愛用の箒は二つに折れ、いつも手にしていたミニ八卦炉は消え失せて腕はあらゆる方向に折れ曲がっている。

痛い。痛い、痛い痛い。

今更になって漸く痛みが魔理沙を襲う。五臓六腑が飛び出るんじゃないかと言う程の吐き気と、どうしようもない程の抗う事の出来ないお腹の痛み。燃えているんじゃないかと勘違いするほどの皮膚が裂ける感覚。頭が真っ白に染まり脳が焼き切れる程の抗う事のできない肉が千切れる苦痛。

痛みとトラウマが魔理沙に何が起きたのかを嫌でも思い出させた。

負けた。完膚なきまでに。自分の全てを出し切ったにも関わらずそれは全く無意味で、相手をただ怒らせただけだった。

そしてそこから始まった蹂躪。妖怪の力に圧倒され、恐れ、不様に逃げ回り。あまりの苦痛に女性として、人間としての尊厳を失いながら泣いてあるうことか妖怪に命乞いをして。

それから……………」

「わたしは……………こんな……………」

「早く里に帰ってくれる？ 弱いヤツに言い寄られても迷惑なのよ」

「え……………あつ。ま、待ってくれッ。待ってくれよ霊夢!! 霊夢!!」

魔理沙が地面に倒れて打ち拉がれている間に、いつの間にか霊夢は魔理沙から離れて何処かに向けて歩き出していた。

それに気づいた魔理沙が、言い様のない焦燥感を感じて声を上げる。

何故止めようとしたのか魔理沙自身もわからない。だけど今霊夢を止めなければ、彼女が何処か遠く手の届かない所に行ってしまうだろうだと思つたから。もう見向きもされず、自分が霊夢にとつて人里の皆と同じ何処にでもいる誰かに変わってしまったと思つたから。

必死に手を伸ばす魔理沙。

しかしその思いは届かず、誰かの脚が彼女の手を踏み付けた。

「なっ、うぐう?!」

踏み付けられた痛み思わず手を引つ込めようとした。が、己の手を地面に縫い付けるその足はビクともせず手を逃してくれない。

なんとか手を引つ込めようと格闘する魔理沙に、上から声が掛かった。

「おい人間」

ビクリと魔理沙の身体が跳ね、そしてそのまま硬直する。まるで子供が大の大人に怒鳴られたかの様に、声の主に恐れた様子で震え出した。

魔理沙はその声の主を知っている。当たり前だ。何故ならその声の主は己の身体をこんな風にした張本人なのだから。

「お前の事を気に入ってたんだ。真正面から向かってくる気持ちの良いやつだつて。なのに……………」

「ひ、あっ……………」

「私を失望させやがって!! お前は私の想いを踏みにじつたんだ!!」  
「はぐっ?!」

慄く魔理沙に、声の主は彼女の首根っこを掴み持ち上げる。

その力は簡単に魔理沙の首を絞め、息を吸うことも吐くことすらも許さない。

「お前も彼奴らと同じだ! 同類だ! コソコソと卑怯な手段で私達を陥れる事しか考えていない負け犬だ!! そんな奴等に、母さんが殺されて良い筈ないだろう!!」

「ツヤあ……………いやあ……………っ」

「許すものか!! 絶対に、母さんを殺させてなるものかツ!!」

美しい顔立ちを憤怒の形相で歪ませて、額から伸びる角は魔理沙にトラウマを植え付けていく。

必死にもがき苦しむ魔理沙など知ったことでは無いとばかりにその鬼、勇儀は魔理沙に呪詛を吐く。魔理沙に理解の出来ない言葉を並べ、その度に首を絞める力は強くなる。

「おっっ、ぎ、あっ……………」

訳がわからない。勇儀が一体何を言ってるのか、何にそんな怒ってるのかまるで理解できない。

理不尽なまでの八つ当たりに近い怒りを魔理沙は向けられるも、最早それすらどうでも良いくらいに魔理沙に余裕が無くなっていく。

顔が涙や鼻水や涎で汚れようと構わない。女性としての尊厳が保てなくなるくらいの醜態が晒されようと今なら気にしない。する余裕がない。

——れ、霊夢ツ。

離れていく霊夢に魔理沙は必死に手を伸ばした。

——た、助けて。霊夢ッ!

だが彼女は振り返らない。

魔理沙の瞳に絶望の影が射す。友達だと思っていたのに、ライバルだと思ってたのに。

価値が無くなれば見向きどころか助けてすら貰えない。

——誰か、助けてっ!! 助けてえ!!

魔理沙は必死に助けを求めて空に手を伸ばす。

それでも誰も彼女の手を取るものは現れず、魔理沙の手は地に向かって落ちるのだった。

「はっー！」

閉じていた目を限界まで開いて、勢いよく起き上がる魔理沙。

身体の上に乗っかっていた何かを吹っ飛ばし、それに気づくことなく彼女は過呼吸にでも発症していたかの様に空気を求めて何度も荒い呼吸を繰り返した。

「はひっ——ヒュッ、ハヒュッ、ヒュッ——」

頬から伝う汗が顎先に集まり、水滴が彼女の手に滴り落ちる。

そのまま何度も何度も息を吸っては吐き、吸っては吐きを繰り返して……魔理沙は思わず自分の首に手を当てた。

「はっ……はっ……」

手の皮膚に伝わる感触は己の皮膚、ではなく布に近い感触だった。そして触れた事で今まで気付かなかった首の痛みが脳を刺激する。

「い……生きてる……」

それらの出来事が放心状態だった魔理沙に己の生の実感を与えた。そこで漸く周りの様子がわかる程度の余裕が魔理沙に生まれる。

遠く離れた場所で聴こえてくる騒ぎの声やら何か硬いものを叩く無機質な音。自分の下に敷かれた布団の感触に、真新しい畳から香る井草の匂い。鉛を口に打ち込まれた様な鉄の味と、控えめながらも豪華な装飾の施された金の壁が視界に入ってくる。

先程見た五感が狂った様な体験と、今の五感が正常に働いている状態。現実味に欠けた夢と現実味のある現が魔理沙に僅かな安心を与えた。

「——ああ……そうだ。夢……だ。ははは……変な夢見ちまったんだぜ」

全身が汗でびっしょり濡れているのを感じながらも、それすら現実の証だと思える程に魔理沙は生きている事の嬉しさを噛み締めていた。

夢。そう夢だ。あんなおそろしいことなんか無かった。死にかけてた事も全部嘘。自分の気の迷いが生んだ幻だ。

そう思った。そう思いたかった。

「夢……夢………ああ——夢なら、良かったのに」

心に余裕が生まれて気づく足への違和感。嫌でも感じてしまう喪失感。

意識を失っている間に何処かの部屋に移動させられたのだろう。眠っていた魔理沙の身体を掛け布団が覆っていた。上半身こそ今は起き上がっているので関係ないが、布団を下側から押し上げる魔理沙の身体のシルエットが見える。

本来なら右足がある布団部分も盛り上がっている筈。なのに、魔理沙の目からはそこだけ盛り上がっている様には見えない。

いや、そもそも魔理沙は右足に布団が掛かっている重さすら感じていなかった。右足になんの感触も感じていなかった。

「嘘だ………嘘だ嘘だッ。嫌……嫌だよ。嫌ア……」

魔理沙は頭を抱えた。髪を掻き上げて強く掴む。そのままグシャグシャに髪を掻き塗り、顔を布団に押し付けて現実から目を背ける。

いつの間にか目から涙が溢れていた。布団はどんどん湿り気を帯びていき、くぐもった嗚咽の音が勝手に吐き出される。

「なんで、わだじはッ。ちくしょう、ちくじょう!! ちぐつ、あヴヴう……—ふっ、ふっ、ううう、うつウウうウウウヴヴヴうううう!!」

悲しいのか怒りたいのか、はたまた両方か。魔理沙自身も訳がわからずただ涙が勝手に溢れて、無茶苦茶な声と嗚咽が漏れてしまう。

我武者羅に暴れたい衝動とそれすら惨めに思えてしまう理性が闘ぎ合い、どうしようもない後悔とやるせなさが魔理沙の感情を破壊していく。

魔理沙の目から涙が枯れ始めて絶叫に近い嗚咽が鳴り止んだ頃だ。

トツ、トツ、トツ。

部屋の外から足音と共に、誰かが部屋に近づいて来る気配を魔理沙は感じた。

慌てて目に残る涙を限界まで濡れた布団で拭い、魔理沙は姿勢を正

して部屋の外に繋がる襖を見た。

そうして彼女の準備が丁度よく出来た直後に開かれる襖の扉。

魔理沙は現れた人物を見て目を大きく開き……………恐怖の表情で固まった。

目に飛び込んできたの黒を基調とした煌びやかな金の刺繍の入った振袖だった。豪華でありながら何処となく落ち着いた雰囲気を感じるさせるソレは一目で高価な物とわかる。

そしてそんな高価な服に似つかわしくない無骨で年季の入った瓢箪。女性らしい華奢な腕に括り付けられたその瓢箪は、見る者の目を惹きつける。

しかしそれらの見た目など魔理沙から見ればなんの価値も無かった。それらを身に付ける人物が、輝く金の髪と額から伸びる角が生えていればそんな副次的な物なんてなんの気休めにもならない。

「ひっ——」

「ああ、起きたのですね」

もはや魔理沙には勇儀はトラウマになっていた。鬼がトラウマというより、星熊勇儀その人がトラウマだった。

だから勇儀と同じ色の髪を持ち、数は違えど勇儀と同じ額から伸びた角があるその姿は勇儀を思い起こさせる。

そしてそんな恐怖で震える彼女の様子に、やって来た酒呑は魔理沙が起きたことを知るのだった。

「ご気分はどうですか？ 何か痛いところは……………いえ、それどころじゃないですよね」

「あつ……………ああ——」

可哀想な程震えている魔理沙に酒呑は小さく溜息を吐いた。

別に魔理沙に対して溢したのではなく、魔理沙が震えている原因のここにいらない勇儀に対して吐いた物なのだが、魔理沙はそれを自分への物と勘違いしてしまった。

「やつ、来るな！」

機嫌を損ねた。それだけで魔理沙は恐怖に吞まれ正常な判断を失ってしまう。

慌てた様子で自分がいつも持っている愛用の箒とミニ八卦炉を構えようとして……手元にそれらが無いことに絶望する。

身を守る手段が無い。誰も助けしてくれない。自分を殺そうとする鬼が近付いてくる。

「落ち着いてください——」

「助け、助けてっ！ 誰かッ！ 誰かあ!!」

布団を剥いで酒呑から後ずさる。

頭ではこんな事無意味だってわかってるのに、恐怖が勝手に身体を突き動かしている。どうしようもないほど、目の前の存在が怖い。

どんどん後退り壁際に追い込まれた魔理沙。もう逃げる事は出来ず、身体を丸めて恐怖を凌ぐ事しかできない。酒呑が一步足を出せば丸めた身体は跳ねて、手が近付けば震えは大きくなる。

もう駄目だ。また苦痛が始まる。酷い事をされる。

(ど、どうせ死ぬなら………ッ)

どうせ殺されるなら自分で死のうか。魔理沙の頭の中にそんな考えが浮かんだ。またあんな激痛を味わうくらいなら。手足を引き千切られて、胴体を引き千切られて、最後に首を千切られて死ぬくらいなら舌を噛んで死んでやる。

魔理沙は恐る恐る舌を出した。

噛めば死ぬ。多少の痛みはあるがまだ楽な死に方が出来る。

(噛んで、死ぬ………死ぬ、死ぬんだ。私は、死んでしまう………)

でも死にたくはなかった。魔理沙はまだ幼い少女だ。まだ成人もしていない魔理沙が死ぬ覚悟なんてすぐに出来るわけがない。

だから、そんな死ぬかどうか躊躇ってしまった魔理沙は、自分の死に意識が向いて酒呑が近付いている事に気付くのが遅れた。魔理沙の意識の隙間を縫う様にぬるりと伸ばされた酒呑の魔の手。

酒呑は怯える魔理沙の頭に手を乗せて、そっと触れた。

瞬間、魔理沙の身体に侵入してくる異物。己の魔力とは決定的に違う何か、手に、足に、全身に浸透してくる。

しかし嫌悪感を魔理沙は感じなかった。いや、最初こそ嫌な気配を魔理沙は感じたかもしれないが、その何かを頭を覆ったような気がした時には、もう既に嫌悪感は失われていた。

暖かいお風呂の中に浸かっている様な安心感が魔理沙の心を満たす。ぼわぼわとした温かい心地よさと、ふわふわと浮いている様な気持ち良さ。

魔理沙が気付いた頃には、己の心を蝕み支配していた恐怖心が無くなっていた。

「落ち着きましたか？」

「えっ……あつ、ああ。落ち着いたぜ……」

優しく掛けられた言葉に、魔理沙は漸く目の前の相手をしっかり捉えることが出来た。

金の髪は勇儀と同じストレートだが、その長さが異なっている。額から伸びる角も見た目は全く違うし、更には本数も違う。

雰囲気も勇儀と違って荒々しさは何処にもなく、むしろ物腰柔らかそうな印象すらあった。

今更になつて魔理沙は、髪の色が似ているだけの全く違う鬼に恐怖で震えていたことに気付く。生娘みたいな悲鳴を上げて、泣いて、怯えて。終いには諦めて自殺しようとするらしていた。

さつきまでの自分を客観的に思い出したのだろう。魔理沙の顔が赤く染まる。

「わ、わたしッ……」

「大丈夫です。何も怖がることも恥ずかしがることもありません。ゆっくり『深呼吸をして』……ほら、吸ってー……吐いてー……」

しかし酒呑の言葉に魔理沙は羞恥心すら上塗りされて、再び心地良い安心感に満たされてしまう。彼女の言葉に従って深く深呼吸を行えば、また夢心地に似た幸福感が全身を覆った。



視界はクリアなのに、思考に霧が掛かる。先程まで嫌と言うほど記憶にこびり付いていた勇儀へのトラウマが、目の前の美しい鬼の姿で上書きされていく。

頭に異常が起こっているのに、その判断が出来なくなっていることにすら魔理沙は気付かない。

『じつとしていてください』ね。すぐ終わります。なんの心配もありませんから」

眠りに落ちる心地良さは魔理沙の意識を奪う。例え酒呑に身体を触られようと、服を脱がされて生まれたままの姿を見られようとも不安は感じない。むしろ触られたり見られたりする事で、不思議と気持ち良さが生まれてくる。

「ア……」

「ふむ。お腹の怪我はほぼ治りかけてますね。腕の骨もちゃんとくっついた様ですし。首の怪我はまだ完治に時間が掛かりそうですけど直に治るでしょう……。流石、万病に効くと言われた大陸の秘薬……ですが、こちらだけは……やはり駄目そうですね……」

「んツ……」

無い方の足を触られても一瞬身体が跳ねるだけで痛みを感じない。何度も確かめる様に身体を弄られ、その度に言い様のできない安らぎが魔理沙の心を満たしてくれる。

気付いた頃には、魔理沙は服を直されて元の状態で酒呑と向き合わされていた。

「傷は大丈夫な様ですね。しばらく首に痛みが残るでしょうが、それもすぐ良くなります。申し訳無いです。どうやら家族の勇儀が貴女に酷い事をしてしまったようです……」

「……ツ。そうか、お前ツ」

酒呑の一言が彼女の頭を現実に戻す。再び押し寄せる悲しみ、怒り。目の前にいる鬼が自分をこんな状態にした鬼の身内だと分かり、魔理沙の感情が爆発しそうになった。

よくもやってくれたな。私の足を返せ。そんな思いと共に罵詈雑

言の嵐を酒呑に浴びせたくて仕方がない。

しかし同時に、自分にも非があると落ち着いた今なら判断できてしまう。

元々魔理沙は色んな知り合いに地底の異変に参加すると言われていた。特に八雲紫からは何があっても自己責任だと冷たい言葉を吐かれた。

それらの忠告が魔理沙に反発感を抱かせてしまった。まるで自分が弾幕ごっこ以外能の無い人間だと言われているようで嫌だった。例え弾幕ごっこが無くても、自分だって霊夢のように妖怪達とも戦える。それを証明したかったのだ。

今になれば意固地にならずにちゃんと忠告を聞いていればと思う。

魔理沙は自分が弱い事なんて知っている。だから足りない力を魔法の研究で補い、才能の壁を努力と時間で覆してきた。

だけど他人にそう指摘されるのは我慢ならない。プライドが無い人間は腐るだけだ。人間は弱いのだからと言われて、はいそうですかと納得出来るものか。だったら最初から人里を出ていない。あの集落で常に妖怪に怯え続け、妖怪が作り出した仮初の平和に甘んじて日常を享受していただろう。

負けず嫌いな性格があるからこそ自分は勝つことができている。

でも、今回ばかりはそれが裏目に出てしまった。あんな惨めで辛い思いをするくらいなら、もつとちゃんと考えて行動すれば良かったと後悔している自分がいた。

「……………私の足は」

「ん？」

「私の足は……………治せるの……………？」

吐き出された言葉は、酒呑に対する怒りでも自己否定でも無かった。もう喚く程の元気もなければ、これ以上みつももない姿を晒したく無いと言う思いだけだった。

「……………難しいですね。現状、地底にあるものだけでは貴女の足を治すことは不可能です」

「そっか……………」

魔理沙も覚悟していた事だが、改めて事実を突き付けられるとそれ以上の言葉は出てこなかった。

本当は癩癩を起こして暴れたい。だけどそれは目の前にいる鬼のせいではないと魔理沙の理性が思い止まる。確かに足を奪ったのはこの鬼の身内だが、意識のない自分を治療してくれたのも目の前の鬼なのだ。

お門違いと言うつもりは無いが、治療してくれた相手に無茶な要求をするのも失礼だろう。

「いや、良いんだぜ。治らないものは仕方が無い。にとりの奴にでも義足を作ってもらおうさ」

「……………ぐめんささい。貴女の足を奪ったのはこちら側なのに。茨木の升が有れば良かったのですが……………」

「本当に気にするなって。それよりも私はお前をなんて呼べば良い？

私の名前は霧雨魔理沙だ」

「ああ。自己紹介を忘れていましたね。酒呑と言います」

悲しいし、辛い。でも魔理沙はだんだんとそれを受け入れる準備ができ始めていた。それも、魔理沙が酒呑と話すたびに精神が安定していくのだ。

何故か酒呑を見ると魔理沙の心は落ち着いた。出会ったばかりの筈なのに、ずっと話していたいとすら魔理沙は思った。自分でも異常だとわかっているのだけど、酒呑の事を思うとどうにも魔理沙の意識が彼女に引っ張られてしまうのだ。

まるで、酒呑を好むよう洗脳を受けているみたいに。

「……………そう言えば酒呑は異変がどうなったかとか、霊夢の奴がどこ行ったかとか知ってるか？ あ、霊夢ってのは私と一緒に来た巫女姿の奴のことなんだけど……………」

「……………その、実は早苗さんから聞いています。霊夢さんと言う少女は、その……………何と言いますか」

余裕が出来た魔理沙は漸く思い出した様に今回の異変と霊夢の事について酒呑に尋ねた。元々彼女達は異変解決の為にわざわざ地底

までやって来たのだ。勿論、異変もそれを解決する為に別行動することになった霊夢も気になるのだろう。

しかし、どう言う訳か酒吞は歯切れの悪い返事を返した。

「……………ああ。なるほどな。霊夢が解決してもう異変は終わったんだな。で、あいつは私を放置して一人帰ったと」

「……………」

彼女の態度に魔理沙は全てを察した。

どうやら霊夢は一人で異変を解決させたようだった。そして、霊夢は魔理沙を放って一人地上に戻ってしまったと。

早苗から霊夢と魔理沙が友達だと伝えられて、なのに大怪我をした魔理沙を置き去りにして霊夢が帰った事実を、酒吞はどう告げるべきか迷ったのかもしれない。

普通なら言い難いだろうと魔理沙も思った。

しかし相手はあの霊夢だ。魔理沙もそれはわかっていているので苦笑してしまふ。霊夢のあの無頓着さはもはや病気だ。諦めもつく。

「気にするなだぜ。そう言う奴なんだ霊夢は。一人で突っ走って気付いた頃には独りで物事を解決しちまう……………私も似た様な物だけだな」

他人を顧みない。魔理沙もよくやる事だがその本質は全く違う。魔理沙は意地や負けず嫌い、天邪鬼な気質がそうさせるのであって、霊夢はただ他人が興味がないし必要ないからそうしているだけ。

以前もそう。今回もそう。そしてこれからもずっと霊夢はそう在り続けるだろうと魔理沙は思った。全部一人で終わらせる。自分は今回で足を失う様な大怪我をしているのに、彼女は今日も無事傷一つなく事を終わらせたのだろう。

やはり霊夢は天才だ。才能がある。幼少の頃から次代の博麗の巫女として育てられただけあって、普通の人間とは掛け離れた実力を持っている。自分とは違う。

ああ、本当にズルい。なんでも才能があるから。何があっても博麗の巫女だから。強いから、実力があるから。だって霊夢だから。

魔理沙にとつてうんざりする程聞き飽きた言葉。その言葉を並べ

るだけで皆が納得し、安心する。その癖、霊夢自身は別に努力した事がないのだと言うのだから尚更ズルい。

「ああ、本当に霊夢はズルい。ズルくてズルくて。そして——  
「羨ましいんですか？ 彼女が」  
「……………はっ？」

告げられた酒呑の言葉に、魔理沙は一瞬だけ酒呑が誰に声を掛けたのか分からなくなった。

そして自分に声を掛けたのだと気付いて、益々訳が分からなくなる。

「おい。お前は何を言ってるんだ。羨ましい？ 誰が、誰を？

……………もしかして、私が、霊夢を？」

「？ はい。そう感じましたが……………違うのでしょうか？」

「馬鹿を言うな。何で私がアイツを羨ましがらないといけないんだぜ。ま、逆なら考えてやらなくもないけどな」

酒呑の発言を馬鹿にした様にあしらう魔理沙。彼女の態度とは裏腹にその心臓は激しく脈打っていた。

一体自分は、今の一瞬何を考えようとしていた？ あり得ない。

「大体、私と霊夢は弾幕ごっこで互角なんだ。羨ましがる事なんてないね」

「ふむ……………。でしたら悔しくはありませんか？」

「それこそ有り得……………いや、悔しいな。今回の異変主役の座を全部持ってかれちゃったんだぜ。悔しくない筈が無い」

自分で発言して、これだと魔理沙は思った。悔しい。そうだ、悔しいのだ。今回の異変全てを霊夢が解決させてしまった事が悔しい。

そうに違いない。

「いいえ、違います。魔理沙さんは今回の事件が霊夢さんによって解決したのが悔しいのではありません」

しかし直後に酒呑が魔理沙の言葉を否定した。魔理沙の心を覗き込んでいるかの如く、違うと断言する。

「……………なんだよ、お前。なんなんだよさつきから」

煩わしい。魔理沙はそう思った。

さつきから己の琴線に触れる様な発言ばかりしてくる。これが知り合いのアリスやパチュリー達ならまだわからないでもないだろう。肯定は絶対にしないと魔理沙は断言できるが、お節介な彼女達ならそんな事も言う可能性はある。

しかし酒呑はまだ初めて出会ったばかり。お互い何も知らない筈なのだ。だと言うのに、自分の事を知った様に話してくる。魔理沙にはそれが鬱陶しくて仕方がなかった。

先程の酒呑に対する好意は全て消え失せ、魔理沙の中で怒りが募る。

「知った様な口を利くなよ！ お前が私の何がわかるって——」

『怒らないでください』『落ち着いて、ゆっくり話しませんか』

「——言う……………」

……………ああ、そうだな。いきなり怒鳴ったりして悪かったぜ」

しかし酒呑の一言で爆発しそうになっていた怒りは何処かに霧散してしまった。

『安心してください』。ほら、素直になった方が楽ですよ？」

「あ、ああ……………確かに酒呑の言う通りかもしれないぜ。うん、素直になるよ」

魔理沙の目から陰が抜けていく。瞳が虚になり光が失われていく。

そして心此処にあらざと言った放心した様子で酒呑を見る魔理沙。酒呑と同じ無表情なその顔は、精巧に作られた無機質な操り人形の様

だ。

そして何かに操られる様に、彼女は酒呑に求められるままに己の思いを言葉にしていった。

「何故、貴女はそんなにも強く霊夢さんを？」

「……………最初は、いつもつまんなそうにしている霊夢が気になって、自分は他と違うって線を引いているアイツが特別じゃないって教えてくれて始めた事だったんだ……………」

「そうですね……………優しいですね魔理沙さんは」

「……………でも、だんだん私はアイツに認められたいって思ったんだ。追いかければ追いかけるほど普通の奴と違う事に気付かされた……………だったら、私がアイツの側に寄ってやろうって……………」

普段の魔理沙なら絶対に言わない。むしろ考えすらしないだろう。己の心中を吐露し、自分の弱くなった部分を見せるなんて絶対にあり得ない。

「ただ魔理沙は止まらない。」

「駄目なんだ。差が開く一方で、どんどん私は霊夢から離されていく……………それが悔しくて、悔しくて……………」

「そしてそんな才能が羨ましいと」

「……………嫉妬だぜ。目的が純粋な強さに変わっていったんだ。強さを求めるからこそ、私は霊夢の才能がどうしても欲しくなった」

魔理沙の知り合いが見ていたならこの魔理沙に似た人間は誰だと言った筈だ。こんな魔理沙じゃないと否定した筈だ。

いや、そもそもこんな思考に陥ってる時点でおかしいのだ。いくら勝負に負けて一生後遺症が残る大怪我をして意気消沈しているとは言え、こんなにも卑屈な考えに至るだろうか。魔法は日々の研鑽と努力を胸とし、才能を成果で覆す事を信条とするものの筈なのに。

絶対におかしい。

心の奥底で、誰かがそう叫んだ気がした。だけど、それも泡のように破裂して消える。

「私は、悔しい……………霊夢が、羨ましい。嫉妬している」

「なるほど……つまり、魔理沙さんは力が欲しいのですね？ 霊夢さんに認められるような力を。彼女を超えるような力を」  
「……………」

魔理沙は返事を渋った。

本能が返事をしては駄目だと叫んだ気がした。戻って来いと、今すぐ此処から逃げ出すんだと警告している気がする。

「貴女が良ければ力を授けますよ？ 人間なんて目じゃない……………それこそ鬼すらも超えるような力を。欲しくはありませんか？」  
「えっ……………でも、それは……………」

唐突な酒呑の提案に、正常な思考が出来ずとも魔理沙は受け入れることを躊躇った。

魔理沙が欲しいのは自分自身で勝てる力だ。力を借りる事に頓着する魔理沙ではないが、それは借りるだけ。借り物の力を手に入れても、それは本当に自分の力と言えるだろうか。そも、力を奪う事はあっても与えられる事は魔理沙のプライドに反する。

しかし、もし酒呑の言葉が本当なら……………それはなんて魅力的なだろう。霊夢に勝てるかもしれない力。それは、魔理沙にとってどんな甘美な誘惑より優る。喉から手が出るほど欲しい。

そんな欲求が酒呑の提案を断ることを拒み、魔理沙を躊躇わせてしまった。

「紛い物の力だと思いませんか？ ですがそれは間違いです。確かに私から与えられた時点では、その力の功績は私の物かもしれませんが、その後に授ける力をどう使いこなすかは貴女次第なんですよ魔理沙さん」

「私、次第……………」

「人間は誰だつて最初は力を与えられるものです。初めから全てを持っていてる者なんて妖怪くらいですよ……………人は知識を貰い、生活を貰い、安全を貰う。そして成長の場を設けられて漸く力を持つ。霊夢さんだって巫女としての力を最初から持っていなかったのでしょうか？ 貴女が私から力を貰うのと何ら違いはありません」



「それは、そうかもだけど……………」

そしてそんな曖昧な態度でいれば、口八丁でこの世を生き抜いてきた酒呑に簡単に説き伏せられてしまうだろう。

「要は貰った道具を貴女がどう扱うか、です。貴女も道具を使って戦いますよね。それと同じですよ」

「確かに、そうだな……………」

歯切れは悪いが、魔理沙の意識はどんどん力を貰う事に傾いてしまっている。

もう、断る考えは魔理沙の頭には無かった。断ると言う選択肢を酒呑に消されてしまった。

「……………もし、一方的に力を貰うのが気に病むなら、魔理沙さんも私に何かくれませんか？　そうすれば力を与えられたのではなく、貴女は私から交渉して力を得た事にできます」

「……………私が、酒呑に？　私は何をあげればいいんだぜ？」

そしていつの間にか魔理沙の頭は酒呑から力を貰う事が前提となっていた。押し付ける様に力を与え、あまつさえそれに対する対価を酒呑は貰おうとしている。

誰も魔理沙を思い留まらせる事は出来ない。まるで詐欺の様な手口で、酒呑は魔理沙にお願いを口にした。

「簡単な事です。私を地上に連れて行き、とある人物を探すのを手伝ってください。そうすれば私は貴女に力を与えるだけでなく、その無くなった足も治してあげることが出来ます」

## 幻想郷に降り立つ

異変解決後の博麗神社は妖怪同士の宴会でいつも賑わう。それが最近の幻想郷の認識だった。

新しい博麗の巫女が就任してから何故か始まったその習慣。今回も例に漏れず、誰もが神社は宴会で騒がしくなると思っていた。

「……………」

しかし神社に集まった今回の異変に関係する妖怪、神、そして異変を解決した霊夢の間で重苦しい雰囲気漂っていた。

アリスは上海人形を胸に抱き寄せて不安そうな顔をしている。パチュリーは普段通りに本を読んでいるが一刻前から1ページも本を捲っていないかった。

魔理沙と勇儀との戦闘中に通信手段を壊され、自分達の魔法も壊された。そして、断片的に聴こえた魔理沙の悲鳴が今もなお二人の不安を掻き立てる。

そして今回の異変の原因になった、いわば黒幕とも言える早苗の保護者達。八坂神奈子と洩矢諏訪子も普段の様子から考えられないくらい気が立っている。

神奈子は畳の上で胡座をかいて膝に頬杖を突くと、その心情を表すかのように空いた手の指で膝を何度も叩いている。普段の明るくて気さくな彼女からあまりにもかけ離れている。

一方諏訪子は相方と違ってジツとしていた。神奈子の隣に正座で座り姿勢を正している。目を瞑り、何かを待っている姿は特におかしなところはない。が、普段の彼女なら常に陽気に笑っている筈が、今は全く笑っていないかった。

今回の主犯は神奈子だ。地底にいるさどりのペット・霊鳥路空に己の八咫鳥の力を与えた事が原因だった。

彼女の力を基にして核融合のエネルギー資源を得るため、地底の底にある旧地獄を核融合炉として活用しようとした。残念ながらそれは霊夢によって阻まれてしまったが。

己の計画が失敗したことは神奈子もまだ許容範囲だった。計画はまた他の事を考えればいい。多少機嫌は悪くなるだろうが、諦めも付くだろう。

ただ、監督役として自分達の大切な家族である早苗を一人送り出して帰ってこないのが、彼女達の機嫌が悪い最大の原因だった。

力を与えた眷族がいるから大丈夫だとタカを括っていた。なのに蓋を開けてみれば地底には鬼が住んでいて、今も地上に帰ってこない。

神奈子が焦れて暴れ出すのも時間の問題だろう。

そして霊夢もまた普段と様子が違っていた。テキパキと宴会の準備をする様子は何処か投げやりだ。準備に集中して気を紛らわそうとして、それを意識し過ぎて逆に気が散ってしまっている。そんな様子。

「おい霊夢う。ヒック……地底の連中はまだ来ないのかあ〜？」

普段通りなのは宴会がまだ始まっていないのに既に酔って出来上がってる萃香くらいだろう。

「……………うるさいわね。私を知るわけないじゃない」

「えー、なんでだよ。お前さんしか帰ってきてないんだからあ、しっかりしてくれよー」

大人数での宴会が出来る程の広さだけあって萃香の声がよく響いた。同時に室内に不穏な空気が流れる。

そんな周りの様子など知った事かとはかりに、萃香はマイペースに声を大きくして不満を漏らす。

「なんだよー。紫はどっか行っちゃったし、霊夢は冷たいし……………ヒック」

「……………」

「そうだ。どうせなら烏の奴等でも来ればいいのに、ヒック……………せっかくの大会事が起こったんだ。弾幕ごっこ始まって以来、ルール無視で鬼が人間殺害!! こんな大きな話題を逃さない手はないって」

室内の不穏な空気が更に際立った。

アリスやパチュリーは変わらない様子だが、神奈子は目に見えて機嫌が悪くなった。いや、悪くなっただけじゃなく、苛立った様子で彼女は霊夢に話しかけたのだ。

「なあ博麗霊夢。お前、本当に二人が無事だって知ってたよな」

「知らないわよ。私は地底の連中に尋ねたら、魔理沙と早苗はまだ地底に残るって聞かされただけだもの」

「知らないのと一緒じゃないか。なんで確かめないんだ」

「なんで私が一々面倒見ないといけないのよ。私は子守じゃないのよ？ 勝手にくっついて来た二人の責任じゃない」

神奈子の言葉の端々から殺気が漏れる。霊夢の返答にいつ彼女が癩癩を起こし、霊夢に襲い掛かるかわからない程だ。それどころか今すぐ地底との不可侵条約を破って、神社から飛び出し地底に突撃しそうな勢いだ。

それをしないのは八雲紫から釘を刺されたからだろう。

今、幻想郷と地底の間で緊張感ある関係が続いている。

異変は地底側から悪霊が漏れ出したのが始まりだが、それを行なったのが幻想郷にいる神奈子によるものなのが事態をややくしくしていた。

幻想郷と地底は不可侵である。それを先に破ったのは幻想郷側で、しかも被害を受けたのが地底の管理者のペットである。被害が出たのがそこらの木っ端妖怪だったのなら別かもしれないが、地底のトップのお気に入りに出されたのであれば、地底側も黙ってはいまい。しかし幻想郷側もはいそうですかと言いつ分を受け入れるわけにはいかない。異変であるにも関わらず、人と妖怪で殺し合いが起きたのだから。

一応、地底も幻想郷の括りだ。弹幕ルールは適応される。なのに今回の事件が起こった理由が地底側の統制ミスだと言うのだから地底側にも責任はあるだろう。

幻想郷側が発端となれば、それを解決するために人間を送り出したと言う理由も筋は通るし、邪魔をしたと責任逃れも出来る。しかしそれを地底側は許さないだろう。

八雲紫が現在この場にいないのは、それらに対処する為に他ならぬ  
い。

だから神奈子には両者間の関係をこれ以上拗らせない為に釘を刺  
した。

「八雲の奴はまだか。いつまで私を待たせるんだ。早くしないと、気  
が狂いそうだったのに……………」

神奈子は恨めしそうに襖の開けられて見える外を睨んだ。当然、睨  
まれたからと言ってすぐに八雲紫が帰ってくるわけでは無い。

が、直後に神奈子が睨み付けていた場所に黒い影が勢い良く落ちて  
来た。

「ツッ……」

神奈子、パチュリー、アリスの3人は勢い良く、そして感心なさそ  
うにしていた霊夢もまた影の方向に目を向けた。

「……皆さんお揃いですか？　もう騒いでいますか？」

「……どうも、私です。清く正しい射命丸文です！」

黒い影。落ちて来た人物が鴉天狗の射命丸文とわかった瞬間、そち  
らに目を向けていた者達は落胆し、そして鋭い目付きで彼女を睨む。

「貴女、一体何の用……………って聞かなくてもわかったわ」

「流石アリスさんわかってますねえ。ええええ。取材しに来ましたと  
も。それで……………なぜ私はこれ程まで皆さんに睨まれてるんできよ  
うか!？」

睨まれた文は過剰反応と言える程仰々しく驚く。余りにもオー  
バーなりアクションにアリスは溜息を吐くしかなかった。

黒髪ボブカットとわかりやすい特徴以外は基本天狗装束の姿。し  
かし他の鴉天狗と違い、文は人妖怪問わず様々な者達から煙たがられ  
ている。

丁寧語こそ使ってはいるが普段からうざったい態度で、取材の時な  
ど騒がしい上に美味しいネタとわかれば嫌になる程しつこい。

取材目的！　と言う態度が全面的に表面に出ていて、それを表すように鴉天狗の象徴とも言える葉団扇はどこにも無い。代わりに河童製の撮影機を手に持つ姿は、かつて日の本を恐怖に陥れた妖怪の山の鴉天狗とは思えぬ程に貫禄もクソも無かった。

「今回の異変はどうやらいつもと違って、ネタがてんこ盛りな予感がビンビンします！　さあさあドンドンぶちまけちゃってください！」

普段は感心事を示さない霊夢ですら、祓ってやろうかと本気で考えたウザさ。この烏は空気が読めないのだろうか？　いや、読めていて敢えて煽っているのだろう。もしかしたら既に魔理沙と早苗が帰って来ていない事も知っているのかもしれない。

だと言うのに敢えて人の神経を逆撫でにして聞いてくるこのスタンス。

引つ叩きたいこの笑顔。

そうして、どうやってこの天狗を追い出そうかと何人かが意思疎通を始めた頃だ。

突然文の背後から声が聞こえて来たのだ。

「ちよいと待ちなよ。その天狗様じゃないが私も気になってるんだ。追い出すのは後にしてさっさと教えておくれ」

その言葉と共に文の背景が歪んだ。

歪みはゆっくりと広がり、人の大きさを保った辺りで波が止まる。すると、外の景色が映っていたその場所から青と緑の色が現れ始め、歪みが止まって輪郭がしっかりした頃には一人の少女が立っていた。

「……つてにとりじゃない。アンタ、この異変に関わることを拒んでいた癖に今更なによ」

「やあやあ霊夢さん。やあー実は、もう知ってると思うけどその神様と核融合炉の件で異変自体には関わっていたんだよ。それで、その件についてどうなったのか聞こうとしてただけど……これが早苗、早苗の一点張りでさー」

そう言って緑髪のとりにと呼ばれた河童の少女は神奈子を指差し、文句を垂れた。

実は文もとりも、この異変解決の手伝いをするよう紫から頼まれ

ていたのだが二人は断っていたのだ。特ににとりは首謀者側と言っても良い。既にある程度の異変の事情は知っているし関わっている事になる。

つまり彼女達は何かしらの事情で異変解決まで待ち、終わった頃に事の顛末を聞いてあわよくば宴会に参加しようという魂胆なのであった。文は自分の新聞の記事に出来て一石二鳥。にとりはお咎め無し。あまりにもズルい。

それを察して、地底に向いて異変を解決させた現在一番の功労者である霊夢は青筋を額に浮かべた。

「…………アンタ達、良い性格してるじゃない。そんなに聞きたいなら、ほら。そこで呑んでくれてる鬼が詳しく話をしてくれるわよ」

「えっ」

「んく、ヒック。なんだあ霊夢う…………お！　そこにいるのは天狗と河童じゃないか！　えへへ、異変の事でも聞きに来たのかあ？　ヒック…………ならこっちに来い！　私が詳しく教えてやる」

萃香に呼ばれて嫌そうな顔をする文にとり。立場的に上司であり、しかもそれが最高幹部と言っても良い存在。加えて性格的に乱暴で絡み酒とくれば何をされるかわかったものではない。

二人は助けを求めて周りに目を向ける。しかし誰も目を合わせない。どころか面倒事を一遍に丸投げした霊夢に笑顔を向けた。

「…………まだ来ないのか？　その地底の連中は」

文にとりが萃香に捕まり、もう半刻ほど経った頃。いい加減待つ事にシビレを切らした神奈子が唸り声を上げる。

散々酔った鬼の相手をさせられて疲れ切った二人は、神奈子の声に逃げる口実が出来たとばかりに反応した。

「あやややや。地底の妖怪達からは誰が来るんですか？　やっぱり鬼の方の他には、土蜘蛛とか覚妖怪なんですかねえ？」

「えー。土蜘蛛が来るのお？　勘弁して欲しいなあ。アイツらがいる

と河が汚れるんだ……そうだ、土蜘蛛専用の殺虫剤なんか作ってみるのもアリかも」

反応したとは言え文は特に興味なさそうに告げ、にとりは萃香にかなりの量の酒を飲まされた事で若干酔った様子で愚痴を溢した。

特に指定している訳ではないが、大まかな集合時間は地霊殿の主から地底の妖怪達に伝わっている筈だ。もうそろそろ来てもいい筈。

そして漸くその時は訪れた。

ザリツ、と砂利を踏む音が暗く静まり返った神社の参道によく響いた。立て続けに複数の砂利を踏む音と共に、霊夢達のいる室内の外が騒がしくなり始めた事で来訪者が来たのがわかった。

「うにゆ、思ったよりも小さいお家だねーお燐」

「地霊殿と比べちゃ殆どの建物は小さくなっちゃうよ。勇儀様のお屋敷くらいじゃないかい？ や、もうお姉さんのお屋敷か」

集団の先頭を地獄鴉と火車が歩く。

「ヤマメ見て。いっぱい妖怪がいる……首を切つてもいいかな？」

「いや、流石にそれは止めておきなよキスメ。ただでさえ今は地上側と関係が悪化してるんだから」

ヤマメと呼ばれた土蜘蛛がキスメと呼ぶ釣瓶落としを手に持ちながら、夜の影から姿を現す。

「はあ……最近、本当に意味がわからないわ。たまたま拾った鬼がまさか勇儀の母で、全ての鬼を従えらとんでもない女だったなんて。地底の環境が変わるわ、人間が上から降ってくるわ、訳がわからない……妬ましいわ」

橋姫が相変わらず妬ましげに誰かを妬みながら砂利を踏んだ。

「はあ……全くめんどくさい。あれもこれも全て勇儀さんが悪いんですからね。大体、なんですか。地底の権利をその鬼に渡させて……意味がわかりません。ただでさえ、あの鬼とは関わりたくない



のに……………」

「そう言うなってー。私とさとの仲だろー。大目に見てくれよー」

「大目に見るどうこうの話じゃないから言ってるんですよ。大体、私は誰とも仲良くありません」

「でも母さんと仲良さそうじゃないか」

「あれはあつちが勝手にっ」

地霊殿の主である覚妖怪と、かつて旧都の支配者だった鬼が神社の中を我が物顔で闊歩する。

地上側の皆と違って、地底側は特に何かある事もなくいつも通りであった。敵地であるにも関わらず気負った様子もない。悪霊を地上に放ち、弾幕ごっこのルールを破っておきながら何の気概すら無さそうに霊夢達は見えた。

萃香を除く、皆に緊張感が生まれる。片や知り合いが殺されたかもしれない。片や家族を拉致されたかもしれない。片やかつて横暴の限りを尽くした鬼がいて、自分達が嫌い拒絶した妖怪達がいる。

僅かであれ、皆が思うことはあるだろう。

しかし、勇儀とさとの後ろを遅れてゆっくり歩いてくる3人の人影を見ることで、その緊張は吹き飛ぶ事になる。

「——足は、大丈夫ですか？ 魔理沙」

「ああ——じゃなくて、はい……………抱えてくれてありがとう、ごさいます」

「いいんですよ。困った時はお互い様です。助け合いましよう」

「むー……………怪我してるから仕方がないけど、魔理沙さんばかりズルいです。私も構ってくださいよー」

「ふふっ。そうですね。早苗も、まだ親が寂しい年頃ですからね」

皆が愕然とした。その一言に尽きるだろう。

アリスとパチュリーは魔理沙の姿を見て、目を見開いた。

まずすぐに気付いたのが、彼女の片足が無くなっていると言う事実。身体の所々に包帯が巻かれた箇所が離れた位置からでもわかってしまう。

さらに驚くべき事に、そんな重傷の怪我を負わされておきながら、重傷を負わせた側の妖怪になんの躊躇いも無く抱えて貰っている事が驚きだった。

横抱きで抱えられているのもそうだが、安定しない体勢とはいえ魔理沙自身がその鬼の首に両腕を巻き付けている。そして、あまりの光景に二人は気付くのに遅れたが、魔理沙の格好もいつもと違っていた。

黒白こそ同じだがいつもの魔法使いの装束ではなく、霊夢や早苗と似た巫女姿の衣服を纏っていた。髪留めには鬼の象徴でもあるかのような瓢箪の髪飾りが使われているのだ。

その光景は魔理沙をよく知る霊夢と、そして最近関わりがあったにとりすらも彼女の性格を知っている分驚きに染まる。

神奈子と諏訪子は早苗を見て、驚きと共に悲しみの刺が心を突き刺した。

神と言う存在だからこそ二人は早苗の姿を見て気付いてしまった。自分達の神としての加護。そこにある筈の無い違う加護が混じっている事に。

そしてその加護の持ち主が、現在早苗が腕に擦り寄っている鬼だとわかり、更に心を脅かした。

文と萃香はその鬼の姿をその目で捉え、己の大切な物である撮影機のカメラや酒呑から託された瓢箪を落とした事すら忘れて凝視し続けた。

最後にその姿を見たのはもう千年も前のことである。文はまだ人間で言う成人を迎える前の幼かった頃。萃香は自分を庇い、人間達に討たれたあの瞬間。

殺され、それから何年も経った。この千年間一度もその存在が生き  
ている所を見たことがない。当たり前だ。何故なら死んだのだから。  
その死んでいる筈の妖怪が、かつての姿をそのままに千年経った今  
になって生きた状態で現れた。己の目を疑い、頭を疑い、正気を疑っ  
て固まるのも仕方のない事だろう。

「しゅ、てん」

思わずと言った様子で萃香の口から彼女の名前が漏れた。

呆然とした様子で口を半開きにしたまま固まる。すると彼女の身  
体が突然震え、小さな手にギュツと拳がつくられる。感極まった様子  
で、ただ酒呑を見続け。

「酒呑!!」

呆けた口が裂けるかと見間違う程に三日月の笑みを浮かべ、獯猛な  
目で爛々と酒呑を睨んだ。

萃香の声が届いたのか酒呑が萃香に気付いた様に目を向ける。そ  
れに萃香は気を良くしたのか更に笑みが増す。しかし彼女のその表  
情は家族に向ける様な顔ではなかった。

獲物を狙う、捕食者の笑み。決して仲の良い相手に向けて良い代物  
ではない。

今にも飛びかかりそうな萃香だったが、しかしそれよりも早くに萃  
香の横を何かが突き抜けて酒呑に迫った。

それは巨大な柱だ。御柱と呼ばれる、六角柱に切り出された木の  
柱。神気を帯びたそれが神奈子によつて掴まれ、酒呑に向かって振り  
下ろされる。

担がれた魔理沙諸共潰さんばかりの勢い。当たればただの人間な  
らぺしやんこにされるだろう。

「おっと」

「ッ!!」

その柱を、割り込む様に酒呑の前に移動した勇儀が拳で受け止め。

あろうことか簡単に叩き折った。

「危ないじゃないか。母さんは今両手が塞がってるんだ。悪いけど、母さんに手は出させないよ」

「ちいつー！ そこをどけえ!!」

柱を壊された事で一瞬間が空いた神奈子であるが、すぐに御柱を二柱手に出現させる。それだけでなく、背後にも同じ大きさの二柱が宙に浮いた状態で現れた。

近くにいた早苗を巻き込まない様にと加減した先程の柱とは違う。先端に複数の紙垂が巻き付けられた柱は何倍もの神気を帯びていた。それを神奈子は勇儀に向かって叩き付けた。

「ぬぐ……………おお?」

「ツ……………コイツー!」

柱を腕で防げば衝撃で骨が折れる感触を、身体で受け止めれば内臓を傷付けられた痛みを勇儀は実感した。それだけでなく、僅かにだが己の身体が後ろへと後退したのだ。確かに力を入れて踏ん張っていた筈の足が砂利を擦りながら後ろに滑る。

身体の痛みよりも力で押された事に勇儀は驚いていた。

そして神奈子もまた勇儀の実力に驚愕していた。殺す気で殴った筈が腕や身体に直撃しておきながら簡単に受け止められた。空の彼方に吹き飛ばすつもりが、僅か五寸ほど敵を後退させただけで止まった。

相対する勇儀が明らかにそこらの妖怪と違うと理解させられる。

「その角……………そうか、お前も『天』のと同じツ」

「はあ。悪いけど、引いてくれないかい? 私も闘いたい気持ちはあるんだが、間が悪くてねえ……………さつき母さんとさとの奴にドヤされたばっかなんだ」

今も尚怒り狂った様に酒呑に向かおうとする神奈子に、勇儀は申し訳なさそうな様子で神奈子を抑え続けた。

局地的な暴風が神社に起こる。神奈子の柱と勇儀の拳がぶつかる度に、神社周りの木々を薙ぎ倒し、博麗の結界で守られた建物に歪な音が漏れた。

「そこを退きなよ鬼の分際で！」

「そう、言わつ、れて”も”、あぐつ、……かああああ!! 鬱陶しいし痛いなあ! こんな強い奴と喧嘩できないなんて……あー、やつぱ慣れない事はするもんじゃ無いねえ!」

一発一発がこの辺りの地形を変えそうな程の威力を全て受け止め続ける勇儀。

しかし涼しい顔で神奈子を抑える勇儀だが、彼女も意外と余裕は無かった。なにせかつて神奈子は軍神と呼ばれる程に名を馳せた神だ。幻想郷の信仰心がまだ集まりきっていないとは言え、その力は勇儀を確実に追い込んでいった。

このまま勇儀が殺されれば、地底と地上の関係はもう修復のできない所まで亀裂が入る。それがわからない筈がない神奈子であるが、今の彼女は一切止まる様子がなかった。怒り狂ったかの如く、神奈子は勇儀に猛威を振るおうとする。

「止めなさい」

「っ!!!」

だがその一言で、あれ程大暴れしていた神奈子の動きがピタリと止まった。

特別大きな声でも無ければ、もっと言えばハッキリと通る声でも無い。透き通った様な綺麗な声で神奈子を止める様な代物ではない筈の声。

しかし、酒呑の声に反応して突然現れた鬼達が神奈子の腕や足を押しさえつけければ、嫌でも彼女は止まるしか無かった。

「い、いつの間にッ……くそつ。ええい、離せ!! 離せこの筋肉達磨共!!!」

ジタバタと暴れて拘束から逃れようとするが、流石の神奈子も鬼の中で上位の、しかも普段と比べても明らかに力が増して異常な事になっている豪児や弥助と言った鬼達に、単純な腕力で勝てる訳がな

い。冷静な判断を失っている今の神奈子は、ただ咆哮を上げて酒呑を睨む事しか出来なかった。

そんな神奈子を虫けらの如く一瞥すると、酒呑は危ない奴からの視線に晒されない様隣にいた早苗を自分の背後に庇った。親が危険な人物から子を守る様に。

「貴様ツ……貴様あああああああ!!」

そんな光景を見せつけられて、神奈子が激怒しない筈がなかった。鬼達の拘束に蹴きながらも、人をその目だけで殺せるんじゃないかと思えるほどの憎悪を宿らせて、酒呑を子の仇の様に睨む。

先の行動が如何に彼女を侮辱し貶す行為なのか。酒呑はそれに氣付いていないかの様に、彼女を無視して目の前で血塗れになった勇儀に労いの言葉を掛けた。

「ご苦労様です、勇儀。この百薬酒で怪我を治してください」

「……あ、ああ。ありがとう母さん」

神奈子の剣幕と、彼女を煽る酒呑の行動に流石の勇儀も困惑を隠しきれなかった。

配下の鬼達も神奈子の暴れ具合にかなり苦戦している。押さえ付けられなくなるのも時間の問題かもしれない。加えて拘束が解かれれば再び襲いかかって来るだろうに、当の狙われている本人は火に油を注ぐ様な行為をした上で、自分は関係ないとばかりに彼女を無視している。

敵である筈の神奈子に哀れみを抱く程、彼女は今貶められ、辱められていた。それ程までに神奈子と酒呑の間に対立があるのか。少なくとも現状の神奈子の怒り具合とそれに対する酒呑の対応から、何かしらの関係があるのか明らかだろう。

「はあ……あのアホは何をやっているのか……」

とは言え敵から見ても今の神奈子は哀れみの対象なのだ。

だから当然、彼女の家族が黙って見ている訳が無い。

突然、神奈子の頭の上に今まで霊夢達の近くで座って現場を眺めていた諏訪子が現れた。

「ぬっ！ 何処から現れたこの童め」

「少なくともアンタ達より歳とつてるよ。それより神奈子を放してやっておくれ」

いきなり目の前に現れた少女に驚きの声を上げる豪児。その発言を軽く流しながら諏訪子は神奈子の頭の上で器用に胡座をかいてお願いした。

豪児の目から見て諏訪子が見た目通りでない力のある何かだとは気が付いていた。しかし未だに神奈子は荒ぶっている。このまま拘束を解けばまた先程の様に酒呑に向かって飛び出すだろう。

神奈子を押さえ付けているのに精一杯の豪児としてはそれを拒絶する他ない。

「それはできんな。このまま放せばまた先程の焼き直しだ」

「わかってるって。神奈子は私が抑えるよ。ほら神奈子、いい加減冷静になりな」

諏訪子は神奈子に声を掛けた。直後、神奈子の手首足首に鉄製の輪が生み出され、神奈子の四肢に巻き付く。

同時に今まで散々蹴っていた神奈子の動きが止まり、そこから一切動かなくなった。

「ッ………諏訪子、止めるな！おい、コラ!!」

「ほら、もう大丈夫だ。さっさと神奈子から離れてよ」

「しかし………」

確かに先程までの暴れ具合が嘘の様に動きが止まったが、まだ安心できなかった。豪児も、それに弥助もいつ再び暴れるかわからない為力を抜く事が出来ない。

「いいですよ豪児、それ弥助も。ご苦労様です。もう離れて良いです」「む。わかりました」

しかし酒呑に声を掛けられ、2人は呆気ないほど手を引いた。

そのまま2人は酒呑の後ろまで下がり、護衛の様に少し離れた位置で止まる。

神奈子が解放されて満足した諏訪子は酒呑を見る。そしてその傍で放心した様に神奈子を見ている早苗に声を掛けた。

「迷惑をかけたね……………早苗も脅かせてごめんね？」  
「……………えっ？ あ、ッ……………いえ、私は大丈夫です」

名前を呼ばれて漸く驚きから解放された早苗だったが、その顔は何処か複雑そうだ。家族の一人が突然親しくなった友達に襲い掛かって来たのだから、その驚きも仕方のない事かもしれない。

驚きは早苗だけではない。地上側の者達はある程度こうなる事も予測していた為に驚きは少なかったが、地底側はそうでは無かった。荒事に慣れている者は突然襲われた事で最大の警戒を地上側に向けている。深い事情を知らされていないお燐やお空は早苗と同じ様に固まっているし、妖怪としての力が高くないヤマメやキスメは今の戦闘を見て怯えていた。

「とは言え、だ。神奈子の気持ちも私は痛いほどわかる。何故こんな真似を？」

「？……………はて。こんな真似とは？」

「あくまで白を切るつもりかい？」

「ふむ……………何を言っているのかわかりません。私達は地上側から宴会のお誘いを受けて来たまで……………なのに、謂れない罪を着せられて……………まして、こんな待遇を受ける筋合いはありませんが？」

酒呑が纏う柔らかな雰囲気鋭いモノへ変わった。勇儀を怪我させたことから、明確な敵意と怒気を地上側に向けている。

それだけで酒呑と対面している諏訪子の頬に冷や汗が伝った。地上側の何人かは彼女の怒りを目の当たりにして顔を青褪めている。

怒りの視線を感じながら、それでもこの場にいる地上の者達は酒呑の主張を白々しいと思わずにはいられなかった。

何が謂れない罪だろう。魔理沙や早苗の様子が明らかにおかしい。絶対に何かかされているのだとわかる。それを隠しもせず堂々と挑発し、更には争い事が起きると分かっていたかの様に護衛まで付けている徹底ぶり。

神奈子でなくとも、魔理沙や早苗のどちらかと深い関係を持つ者達だって怒らない訳がないのだ。



それでも、全員が己に強い自制を掛けた。

陰陽玉で姿は確認していなかったが、初めて酒呑を見た者達はあれが地底のトップだと理解する。

勇儀もさとりも、確かに大妖怪と言える気配がある。どちらも何かしらの組織のトップと言われれば簡単に納得するだろう。強いとは思えても、決して弱いとは思えない。

しかし強者の風格すら霞ませるほどの特別で、不気味で、強大で、神聖さすら感じる王者の風格が酒呑にはあった。カリスマ性と呼ばれる圧倒的存在感。

さっきの神奈子と勇儀の攻防も、皆が固唾を見守る中で一人何の変化も無く眺めていた。自分の命が狙われていると言うのに、まるで他人事の様。強者特有の余裕がそこにはあった。

魔理沙と早苗を何らかの方法で縛っているのもあの鬼が原因なのだろうと皆が予想した。でなければ巻き込まれる様なあの場に、危険となればすぐに逃げ出す魔理沙や無駄に対応力のある早苗がずっと無防備で酒呑に捕まっているはずが無いのだから。

「それともこれが幻想郷のもてなしと言う事でしょうか？ もしそうなら………宴の『う』の字も知らない様な野蛮な方達なんでしょうか」挑発し、更には人をコケにして馬鹿にした酒呑の言葉。

それでも酒呑に飛び掛かろうとする者はいない。安易に飛び出せば先程の神奈子と同じ末路を辿る。

そうでなくとも、明らかに強者である鬼共や勇儀を従わせる酒呑の未知数な実力に下手に動くことができない。

しかし、酒呑の言葉や態度が魔理沙や早苗と近しい者でなくとも癪に障るのも事実。

「うるやいわ」

そうならばどんな相手であろうとも喧嘩を売る霊夢が動かない訳が無い。

明確な敵意の言葉と共に、衝動的に身を任せて霊夢は勢い良く外に出る。そのまま諏訪子達の間を割って入る様に酒呑の前に躍り出た。

「さつきから人の家でごちやごちやと……………迷惑なのよね」

「……………ああ、貴女は確か……………博麗霊夢さんでしたね」

「れ、霊夢……………」

見下ろす様な形で宙に浮く霊夢に、酒呑は特に気にした様も無く穏やかな様子で彼女に声を掛けた。

しかし霊夢は酒呑を無視して魔理沙を見る。右足を太腿から無くして、すっかり酒呑の腕の中で大人しく縮こまっている魔理沙を霊夢は睨んだ。

「魔理沙。アンタ、そんな所で何してるのよ。いつもならこう言う面倒ごとに首突っ込む癖に、何そんな奴の所でブーツとしてるの？ ふざけるのもいい加減にして、さつきとこっちに帰って来なさい」

「……………いや、私はそつちに戻らない」

ボロボロな魔理沙を悲しむでもなく、同情するでもなく。霊夢はただ己の苛立ちを彼女にぶつけた。しかしその言葉は怒りと言うより、操られている魔理沙に向けた激励の様な言葉だった。

「ただ魔理沙は、珍しく感情を剥き出しにして声を掛けた霊夢を拒絶した。」

「はあ？ ………………ああ、そうか。アンタ、自分が操られてる事に気付いてないのね。だからそんな奴の言いなりになって大人しくしてるのか」

「……………違う。私は操られてなんかいない」

「はっ。操られている事にすら気付かないなんて重傷ね。いいわ。その鬼を今すぐ祓ってアンタが今どんだけ恥ずかしい状態なのか気付かせてあげる」

不器用なりに激励する霊夢。そしてそんな彼女を意固地になったかの様に拒み続ける魔理沙。

霊夢は今の魔理沙に何を言っても埒が明かないと判断し、すぐに切

り替えて酒呑を睨む。その手にはすでにお祓い棒と巫女の札が掴まれている。完全に臨戦態勢だ。

明らかに向けられた敵意。しかし向けられている酒呑は、やはり先程と変わらず構える事もない。

そんな酒呑に嘗められていると勘違いした霊夢は苛立ちが更に募った。

「構えないわけ？ 嘗められてるのかしら？ 言っとくけど私をこちらの雑魚と一緒にしない方がいいわ。もちろん私は手加減をしない。元々そっちがルールを破ったわけだからね……痛い目を見たく無いなら、本気で来なさい」

「……随分と好戦的で物騒な巫女さんですね。私達はただお酒に飲みに来ただけなのに……争う気は無いのですが」

酒呑の返答に霊夢の機嫌が益々悪化していくばかりだ。

明らかに何か良からぬ事で魔理沙と早苗を手中に収め、それを自分達に見せびらかす様にして挑発しておきながら、争う気は無いなどと思ってもいない事を平然と宣う。馬鹿にしているのかと霊夢は本気で思った。いや、しているのだと確信した。

霊夢はこの時心に誓った。ここまで人をコケにした目の前の鬼を絶対に祓って殺してやると。

「……あらそう。なるほどね。私に祓われるのが怖いのかしら？ 確かにアンタだけ私とは一切顔を合わせなかったし」

「はい怖いです。貴女がとても怖い。だから私は貴女を避けてました。それが何か？」

霊夢の顔が無表情に変わった。

「そういうのが、  
管めてるって言うてんのよ!!」

## 再会の盃

霊夢はお祓い棒を振りかぶり、背後に無数の陰陽玉を出現させる。込められた殺意の霊力。向けられる敵意と殺気。一つでも触れば身体が崩壊を起こすだろうソレを前にして、しかし酒吞は不動を貫く。

コンマ数秒に満たない世界で、霊夢は更に怒りを爆発させた。自分を脅威と見做していないのか、構えもせず魔理沙を離そうともしない酒吞に、嘗められたり煽られたりする以上の屈辱を与えられた。

ならばお望み通り何もさせずに殺してやる。霊夢はお祓い棒を酒吞に向けて振り下ろす。

「ダメよ霊夢」

振り下ろす半ばで、霊夢の腕を誰かが掴み止めた。

同時に、全ての陰陽玉が突如空間に出来た玉と同じ数の切れ目に吸い込まれる。

「もう、異変は終わりました。これ以上のいざごきは、幻想郷の賢者として看過できません」

甘く妖艶で柔らかな声。なのに不思議と場を支配し強制力を持たせる女性の声。

後ろから霊夢の腕を掴み、お腹に腕を回して抱き寄せるその存在は、幻想郷にいる誰もから認知され畏怖される。それが味方であろうと敵であろうと、決して心を許してはいけなそうと思わせる魔性。

この場において酒吞童子と唯一張り合える存在感を持った彼女――

八雲紫がゆつくりと霊夢を背後に退けて、地上と地底両方の間に君臨した。

「これより宴の席。どちらも今は一度矛を納めては如何かと………そ

うですわよね、地底の管理者殿？」

紫はそう言つて今まで静観していたさとりに目を向けた。その姿はあくまで地上と地底のトップ同士で話すスタンスだ。決定権は地底の管理者。間違つても、ただのとある鬼一匹が地底のトップでは無いと皆に告げている様であった。

「……………そうですね。紫さんの言う通りです。私も事を更に荒げるのは本意では無い。そこにいる地上の方の狼藉も、今だけは許しましょう」

さとりも紫の言葉に応じる。肯定的な発言だが、しかし彼女のサードアイは常に紫を注意深く観察していた。一体どう言うつもりだと警戒し、彼女の真意を知ろうと躍起になる。

それがさとりの目が心を覗けない相手に対する反応と唯一知っている紫は満足そうに頷いた。

「そう言う事です。さあ地底の皆さん、どうぞ今宵は宴を楽しんでいってください」

そう言つて紫は一同を先程まで霊夢達がいた部屋に促した。

当然、誰も動かなかつた。ほんの一瞬前まで争っていた状態だ。どんな阿呆でもいつまた襲われるかわからないこの緊張状態を忘れ、樂しめと言われて素直に宴を楽しめる者はいないだろう。

だから。

「やつとですか……………いい加減お酒が恋しくなってきた所です。此方も良いお酒を持つてきましたからね……………さあ、早く宴を始めましょう?」

そんな事が平然と出来るのは、意図した上でそんな事を気にしない大物か。

はたまた本当に気にしていないとんでもない阿呆だけだ。

恐ろしく殺意の籠った何かが私に向けられた時、死を覚悟した。  
あ、死ぬ☆——つて。

やだ怖い。そんな怖い顔しないでよ霊夢ちゃん。ね？ だからそんな一瞬で妖怪を退治できそうな物騒なお祓い棒と、一瞬で妖怪を滅却するような霊力の塊を仕舞ってさ？ お姉さんと楽しいお話しない？

うん。する気がねえのな。知ってた☆

………いやだあああ!!! 死にたくないいいいい!!! 助けて皆あ………つて離れるんじやねえ弥助に豪児い!! 私から距離を取るな!  
せめて魔理沙を避難させてから離れる! 早苗は一緒に居てくれてありがとお! でも今は逃げて! あれ、完全に殺る気だから!!  
多分、鬼じゃないと死ぬレベルで危険な物だから!!

あわわわわ! わわっ! わっ!!! ぴぎい、殺しやないでええ!!!  
あまりの殺意に失神しそうだった。むしろ失神してた気がする。  
なんか記憶が曖昧だ。

だからいつの間にか博麗霊夢さんの恐慌を止め、私を助けるように私達の間に入ったその姿に私は涙を禁じ得なかった。

ゆかりんきちやああああああああああ!!!!!!  
さすゆかですよ! ゆかりんマジ神! ホント救世主!! もう抱いて! やっぱ出来る女は違うねえ。

同性なのにいつ見ても見惚れるくらい綺麗な姿。妖艶でゾクゾクする甘い声。セクシーで大人の余裕を見せ付けるその姿は美女のお姉さんって感じ。まるで私みたい。

………う、嘘じゃないよ。私だってあれくらい………本当だって!

まあそんな私に勝るとも劣らないくらいにエツちなお姉さんのゆかりん。

私の古い友達なんです。最近ご無沙汰だったけど、まさか私がピンチの時に助けてくれるなんて……………。

いやあ、一時はどうなるかと思っただけど流石ゆかりんですねカリスマが半端ない。言葉一つでこの場を支配するみたいな。誰にも拒否権を与えないこの横暴さと、それが許される彼女の度量。

やっぱりこのカリスマ欲しいわ。これあれば私ももしかしたら鬼の頭として上手くやっていけるんじゃないかね？

あ、実力込みのカリスマですか……………さいですか……………。

「やつとですか……………いい加減お酒が恋しくなってきた所です。此方も良いお酒を持ってきましたからね……………さあ、早く宴を始めましょう?」

そんなゆかりんのお陰で漸くお酒が飲める。ほら皆も早く宴の席に着きな! せっかくの御好意を無碍にしちゃあかんよ!

「やはり本物、なのですね」

だって思ったら目の前に突然目の覚める様な美人さん。勿論皆大好きゆかりんである。

ちよつとビックリした。人5人分くらい離れてた筈なのにいつの間にか結構近くにいるんだもん。しかもめちやくちや綺麗なお姉さん。心臓が飛び出るかと思っただよ。

えっ……………どうしたのゆかりん?

「お久しぶりです酒呑殿。相も変わらず御健在の御様子で……………私、安心しました」

ああ、挨拶か。なるほど、そう言えばしてなかったね。なんかさと



りちやんとトップ同士の会話みたいな事してたから圧倒されて忘れてたよ。

てか私はそこまで昔だと思って無いけど、あつちからしたら千年も会ってなかったんだよね。なにが変わらぬ美貌……………しゅごい。

「はい、お久しぶりです紫さん。貴女も千年前と変わらないご様子。こうして再び会えて、とても嬉しいです」

いやー。流石に千年も会ってないってわかったら会話するのも結構緊張するもんだけど……………意外と大丈夫だったね。しかもお互いの再会を喜び合えること自体がとても嬉しい。

「……………いつどの様に幻想郷に来た、なんて不粋な質問は致しません。ですが、一つだけ質問を……………何故、このタイミングなのですか？」  
ゆかりんは何処からともなく隙間を出現させて、そこから取り出した扇子を広げて口元を隠し私に質問してきた。

……………相変わらず絵になる。何考えてるかまるでわからない怪しげな表情をするゆかりんの口元が見えなくなるから、更に怪しげで胡散臭さが増している。だけど、それがカツコいい。

なんとも意味のわからない漠然とし過ぎて珍妙な発言も、その仕草で意味あり気に見えて逆に様になる。ぶっちゃけマジで何のことかわからない。

多分、これを聞いているほとんどの人が意味を理解していない。  
でも友の私ならわかる。それってそーゆるー風に見せるだけのポーズで、本当は怪しきなんて一つもない純粹で優しいゆかりんであることを!!

つまりこれは久々のやり取りをしようって事ですね。わかりました、師匠!!

私も出来るだけ表情筋を動かして、いつも強張っている口角を上げて頑張って笑みを作る。

「紫さん。貴女なら……………貴女だけなら気付いているのでしょうか？ 千年と長い時が満ち、私は目覚めた。それは様々な方々による思惑が遂に明かされたと言うこと……………私は、ただその流れに殉じたままですよ」

千年寝てた私がなんで今頃になって起きたのかわからないけど、まあそれは拉致った人達の思惑であって彼等の考えが漸く叶ったのでしよう。まあ解放された私には関係ないけど目を覚ますことは出来たので、とりあえず今は自堕落な生活を目指して頑張っています。って意味です。

意味深過ぎて思ってる事と言っている事がぶつちやけ全く違うこと言ってるように聞こえるけど………ゆかりんは何故かこれを理解してくれるんだよねえー。流石師匠。貴女の訓練のお陰です。

妖怪たる者、常に己の思惑を相手に見せず語るべしと言う教訓………今でも覚えてますよ!!

「なるほど………では、貴女はこの幻想郷でなんの欲望を見せてくれるのでしょうか？ まさか………かつてのようはこの世界の支配、などとは言いませんよね？」

「ふっ、そんなまさか。私の望みは安泰にある………この世界の支配など、興味ありませんよ」

私もゆかりんと同じ様に懐から大事な扇を取り出して、見せびらかす様にしながら口元を隠した。

見て見てゆかりん。実は前から自慢したかったんだよねーこの扇。これ、友達から貰った扇なんだ。なんと友達の羽をわざわざ抜いてもらって作られた扇なんです。凄くない？ てか綺麗じゃない？

白銀の羽を一枚一枚綺麗に並べて出来上がった羽根扇。友好の証としてあの娘自身から貰ったこれは、美しさだけでなく機能性も抜群。ちよつと扇いだけだからかなりの強い風が起こせる一級品。疲れず涼しい風を起こせるから夏場に持ってこい。

どうよこれ。いいでしょ。ゆかりんと悪の令嬢ごっこする為に態々誰にも見せずに隠していたのさ！

「………なんとも、良い扇を使っているんですね」

「ええ。私の大事な宝物ですとも」

「そうですか………わかりました。貴女の意見、しっかりと聞かせていただきました」

そう言つてゆかりんは目を細め……………私から視線を外して別の方に目を向けた。私もつられてそっちの方に目を向ける。

視線は私の斜め後ろ。相変わらず小さくて可愛いさとちりちゃんがいる。そんな彼女は私を見て呆れた様な表情をしていた。

あつ。これ、私がゆかりんと思わせぶりな話をして実はくだらない事しか話していないのバレてらあ。心読めるもんね。

ああ、折角の貫禄が……………ここは一つ煽つて皆に告げられるのだけは阻止しなくては。

「ささ、さとりさん。どうぞお先に……………既に席も用意されている事ですし、地底の管理者殿には上座に座つていただければ」

そそくさと道を譲つて彼女を促す。ちなみに今も私の思惑がバレているので更に呆れた表情をされたが……………関係ないね。私は全力で媚びを売るよ！

さて、本当に長くなつたが宴である。

皆渋々と言つた様子で席に着き、ゆかりんの乾杯の音頭と共に静かに始まった。歓迎されてないしされる気も無いのか私以外誰も乾杯の言葉を告げていない。本当に宴かと疑わしくなるね。

ちなみに早苗と魔理沙は保護者や友人の方々に返した。無論睨まれたがそれに関しては全面的に此方が悪いので仕方がない。

さつきは気付かなかつたけど、早苗をあんな危険な地底に長く引き留めた事はやはり良く無かつたのだ。親達もきつと早く帰つてくる事を願つていただろうに、私が早苗の我儘を良しとしたせい……………駄々を捏ねられたのは言い訳の内に入らないのだ。大人がしっかりせねば。

それに魔理沙なんて此方側のせいでも右足を失つたのだ。彼女のような年端もいかない人間の娘相手に、勇儀が大人気ない対応をしたのが駄目。

つまり全面的に私達が悪い。

という訳で、他の地底の方々と違って地上の方達から最悪の印象を抱かれている今、私の周りに殆ど誰もいない。勇儀と護衛の2人。そして――

「先程も言いましたが……お久しぶりです、萃香」

「……ああ……本当に久しぶりだ。酒呑」

久しぶりに再会した鬼の四天王の一人である萃香がいた。

「驚きましたよ。まさか地上に居るとは……あまり心配はしていませんでしたが、勇儀から行方不明と聞いていたので貴女をずっと探していました。なのにずっと見つけれなかった……見つけれないわけです」

「いやあ、面倒を掛けたねえ。でも、私の方こそ驚いたよ。まさか帰ってきていたなんてな」

久しぶりに会ったけど特に萃香は変わりなかった。……いや、変わった事はあるか。

ほんのり顔が赤い。つまり、酒に強い筈の鬼である萃香が、宴を前にして既に酒を飲み、酔っているという事を意味する。これは今までなら考えられなかった事だ。

「こう言った行事は蔑ろにしない貴女が……まさか、始まる前からお酒を飲んでいるなんて。楽しみは取っておくのが好きでは無かったのですか？」

「……ふん。いいじゃないか別に。昔と今は違う」

萃香の言葉に、近くで驚いた反応をする者が数名いた。一名はまだ私がいた頃の萃香を知らない弥助。

そして残りが、なんか呼んではいけないんだけど元部下としての種族的な立場からか、おっかなびっくり私の所にやってきた鴉天狗と河童の妖怪二人であった。

初めましてだから河童の方は見たことが無いのは当たり前なんだけど……何故だろう。天狗の方は何故か他人な気がしない。誰かに似ているのか？

まあ、それはいい。後回しだ。今はするべき事がある。

「さて萃香。それと、改めて勇儀も。寝てただけなので私は正直それでも無いのですが……萃香や勇儀には千年もの月日を待たせてしまった……。そのお詫びと、再会を祝して」

「ああ」

「そうこなくちやな」

私かなみなみと酒が注がれた盃を掲げる。それに合わせて、萃香と勇儀も酒が入った其々の物品を掲げる。相も変わらず水を得た魚のように私の音頭に呼応する家族達に嬉しさが込み上げて来て……ざれど2人ほど足りないこの酒呑の場に僅かな悲しみを感じながら。

「乾杯」

私達はお互いの酒を軽く叩き合い、勢いよくそれを呑み干した。

鼻を突き抜ける様なクセの強く、芳醇で濃厚な風味。アルコールの苦味と辛口な日本酒独特の味。かなり高級な酒であるが、贅沢にもそれを一口で飲み切る。

「ふう……美味しい」

思わず声に出してしまった。しかし、そう思わずには居られないほど美味しい。寂しく独りで呑むのとは違う、家族との乾杯である。美味しくないわけがない。

ただ、先程から刺さる二つの視線を除けばの話であるが。

「……ところで先程から気になってはいたのですが」

『ビクッ』

再会の酒の一口を十分に楽しんだ私は、ずっとこちらを見続けている二人の少女を放置し続けるのも申し訳なく思い、其方に目を向けた。

「お二人は初めましてですよね。酒呑と言います。どうぞよしなに」

「ヒッ」

「あややや……」

私の言葉に二人は悲鳴をもつて応えた。

……ただ挨拶したただけなのに悲鳴は流石にショックだった。かつての上司、それも鬼の四天王と元妖怪の山のトップがいる状況で恐がるのは仕方のない事だと思うけど……私は何か粗相とかしたくらいで怒ったりしないから普通にしたいんだけどなー。

それは勇儀も思ったのか、嗜めるように彼女達に話しかけた。

「おいおい。母さんが話しかけてるんだぞ。お前達もちゃんと自己紹介しろよ。昔から言ってるよな？ 私はお前達を盟友と思ってるが、そうやって相手によつて態度をコロコロ変える臆病で狡猾な性格が大っ嫌いなんだ」

「……………ってこのお馬鹿勇儀。何を脅しているのです。そんなこと言ったら益々この娘達が怖がるじゃないですか……………気を悪くしたらごめんなさい貴女達。ほら、勇儀も謝りなさい」

「いえいえいえ!! 滅相も御座いませんツ!! 本当に気にしてないですからどうか頭を御上げください!!」

流石に本人を前にして暴言を吐く勇儀を嗜める。何言ってるんだこの駄鬼は。見ろ、首を振ってるけどメチャクチャ小刻みに震えてるから。本当に申し訳ない。

(あばばばばばは!!! まさか伝説に聞いていた鬼の親玉が目の前にいるなんて!!? あの星熊勇儀を叱り付けるとかマジじゃん!! ヤバイヤバイ!!)

(くあwせdrftgyふじこーp)

(射命丸の奴が狂ったああ!!? ちよつと! 私を一人にしないでよ!!)

悲しいかな。かつて力と恐怖で妖怪の山を支配した鬼は、個人を超えて種族と言う枠の規模で怖がられているのか。私は恐怖政治を敷いたわけでは無いのだけど。

どうしようか……………魔理沙に使った精神安定の術も人間にしか使えないし。一応、妖怪に効く奴もあるけど……………見た感じ、彼女達は私より圧倒的強者っぽいから使っても効かないと思うんだよね。

これは彼女達が私に慣れるのを根気よく待つしか無いか……………?

「へ、へえ。わ、私は河城にとりつて言います。見ての通り、河童やっています」

「ああ、河童の方でしたか……どうですか？ 昔のように何かを作っているのでしょうか？ 何かいい物でも作れましたか？」

「い、いえ！ そんな、鬼の方々にお勧めできるような物は何も………はい」

「なんでも良いんですよ？ なにせ、千年も私は居ませんでしたからね……貴方達河童のもの作りには興味があるんです」

昔は色んなものを作ってたよな。大陸から伝わった火薬の使い方も彼女達はそれよりずっと前に編み出していたし。全自動お酒造りのカラクリも彼女達が編み出してからは重宝したものだ。

確か、雷の電気や水車の動力を使って動かすんだよね。その発想には私もよく度肝を抜かれた。

「そ、それだったらこんなのがありますよ」

一瞬、おっかなびつくりと言った様子で語り始めたにとりさん。しかし河童をよく知る私は知っている。これが仮初の姿であることを。

「今、私が使ってるのが光学迷彩スーツは他の同族達でも作れない私唯一の作品なんだ。これがあればどんな場所でもその場の景色に溶け込んで透明になれる優れものでさー。しかも匂いや妖力も隠蔽する優れもの!! 例え白狼天狗の奴等でもこれを着れば私を見つけることは不可能だろうね。背景をカメラで撮ってリアルタイムで液晶画面に映す発想は従来の光学迷彩と同じだけどこの子は違う。一つ一つの画面を球状にする事であらゆる角度から見てもその背景を映す。しかも画面はマイクロレベルまでに小さくしてそれを――」

そして尋ねてみれば予想通り、聞いても私の頭では全く理解できない彼女の発明発表が始まった。水を得た魚の様に喋る勢いは止まらず、聞き手の事を考慮しないその演説は私のよく知る河童と全く変わらない。

しかしそれよりも、だ。

「だから消臭薬品を科学の力で凝縮しつつその効力を損なわない方法を編み出したわけ——」

「にとりさん」

「ひゅい!？」

悪いとは思いつつもにとりさんの話を遮って私は声を掛けた。

「——……………あつー! いや、えつと、今の口調は違くて、あの……………な  
んでございますでしょうかあ!？」

話を遮れば突然にとりさんが情緒不安定な口調になった。が今はどうでもいい。それよりも、私はとても……………とても無視できない気になる言葉を耳にしてしまったのだ。

「透明になれる……………誰にも見つからない、ということですよね?」

「へっ? ……あ、はい。それが何か……………」

「その道具。私にも作ってくれませんか? 勿論、タダでは言いません。それ相応の報酬を約束しましょう」

誰にも見つからない。

それはなんて……………なんて甘美な響きなんだ!! 是非とも欲しい!! それがあればこっそり家から抜け出すことも、地底から抜け出すことも出来るじゃないか! 凄い!!

欲しいと思ったら即行動、即交渉。欲しい物が在れば私は妥協しない。

「えっ、でも、これ一点もの…………」

「作ってくれますよね?」

「は、はい! 誠心誠意作らせていただきます!!」

おねだりすれば彼女は快く首を縦に振って頷いてくれた。

わーい。了承を得られたやったー。え、今いたいけな河童を脅してなかったかった?」

……………そんなことないよ? 私はただお願いしただけだし。へ、変な言い掛かりはやめてよね!! それより、次の自己紹介しよう! そうしよう!



何故か作る為の費用が、とか労力と時間が……とか顔を青くしてぶつぶつ呟いているにとりさんを放置して、私はもう一人の鴉天狗の女の子に向き合った。

「それで貴女は……見たところ鴉天狗のようですが……何処かで会ったことありませんか？」

「……………(ふしゅう)」

しかし鴉天狗ちゃんは返事をしない。まるで屍のようだ……いや冗談ではなく、この子マジで魂が抜けてない？ 大丈夫？ なんか揺すつても反応しないし、体調でも悪いのか？

ちよつと心配になって私は彼女の顔を覗き込んだ。

うーん……………この鴉天狗の姉ちゃん。どっかで見たことあるんだよなあ……でも、こんな可愛い子に会ったら絶対私は忘れないし、勘違いか？

でも何処となく誰かに似ている気がするんだよねえ。私がいた頃に大天狗をやっていた誰かの面影が……………。

確か、名前が……しゃ、しゃ……………

「射命……………まる。そう、射命丸」

「……………ツはい!! ………………え?」

お、なんか返事した……………って、あれ? 今、射命丸の名前で返事したよね? え、おんなじ名前なの? ふむむむ……………。

確かに、射命丸に顔立ちが似ている。彼女を人間で言う10代くらいの若さまで若返らせたならこんな感じに……………いや、それより彼女の娘の文が成長した方が丁度こんな感じになる気がする。小さくてほにやほにやしていた彼女が成長するなんて全然想像出来なかったけど、こう似ている女の子を見るとスツと想像できた。

……………てか、文じゃね？

「もしかして……………文なのですか？」

「——ッ、覚えていただき……………感激の極みです。幼少の頃、貴女様に相手をしていただいた射命丸文で御座います」

私の問いに、彼女は明確な答えを以って返事を返した。

……………ああ、なんて事だ。

「……………そう、ですか」

すっかり忘れていた。いや、頭では理解はしていても意識はちゃんと理解していなかったのだろう。

千年前、と言う長い時間と認識の差を私は全く理解していなかった。

私が知る者達はみんな姿形が殆ど変わっていなかった。妖怪だからと言われればそれまでなのだが、それでも私は会う者達に多少の變化が見えていてもそれ程気にはならなかった。

でも幼かったあの文が妖怪として立派に成長した姿で現れて、初めて千年の月日を実感できた。

「大きく……………美しく成長しましたね。私はとても嬉しいです」

「ありがとうございますッ。貴方様にそう言っていただけなんて……………この千年思いもしませんでした」

感極まった様子で応える文。文は私の事を幼かった頃しか知らない筈だけど、幼かったなりに彼女もあの時のことだと思うことがあったのだろうか。

感慨深い、とはあまり言えない。何故なら他の者達にとっては千年であつても、私はつい最近の出来事として記憶にあるのだ。

昔の知り合いと会えば会うほど、私が置いてかれた様な感覚を覚えてしまう。まるで浦島太郎みたいじゃないか。私だけ一人昔のまま。

「ああ……………本当に。千年の月日が経ってしまったんですね」

悲しい。悲しいけど……………。

同時にとても申し訳ないと思っってしまった。  
久々に会った勇儀を見て、苦勞を掛けたと思った。でも、それだけだ。

妖怪の山を放っぽり出した華扇や透花に萃香の残りの四天王に腹を立てた。それぞれの理由なんて考えずに。

浅はかな事この上ない。私は馬鹿だ。大馬鹿だ。千年経てば本人の気など幾らでも変わる。物事の殆どが移り変わる。

私は、千年経った今でも私が帰る場所を残していてくれた勇儀に泣いて許しを乞い、許して貰えた上で感謝すべきなのだ。離れていった3人に怒るなど烏滸がましい。地に頭を付けて誠心誠意謝るべきなのだ。

「……………勇儀」

「なんだい、母さん？」

「……………萃香」

「……………なんだよ酒呑」

私の頬を熱い何かが伝った。

「本当に、ごめんなさい……………本当に、申し訳ない。貴女達に、一体どれ程の責任を押し付けていたのでしようか」

私は知らず知らずの内に涙を流していた。

「えっ……………ちよ、母さん!!？」

「はあ!! 何泣いてんだ酒呑!! 止めろ、私達は別にそんなんじや……………おい射命丸!! お前何しやがった!!」

「ひい!! あややや!! 私は何もしていませんっつてば!!」

ああ……………本当に、私は良い家族を持った。私には勿体ない家族を持った。

本来なら罵詈雑言を浴びせても誰も怒らないだろう。いくら見合っていないかったと言え、私は組織の長である立場を捨てて突然消えたのだ。普通は、こんなにも暖かく迎えてくれないのに。

二人は怒るところか私を気に掛けてくれる。なんて良い家族なんだろうか。

「文のせいではありません……ええ、ごめんなさい。お酒の席だと言うのに突然湿っぽくなってしまつて。文もごめんなさい。ほら、久しぶりなのです。私の近くに」

納得のいつてなさそうな2人を宥めて、私は文を手招きさせる。

おずおずと近くにやって来た小鳥ちゃんを抱き寄せて、私は昔のように彼女の頭を撫でつつ片腕を彼女の背中に回す。

サラサラと透き通る黒髪が私の指の間を抜けていく。フワフワとした黒い羽はいつであろうとも触り心地が最高だ。美しい女性に成長しようとも、私の中で変わりはない。

「覚えていますか？ 昔の貴女をよくこうやって撫でていたのですが……」

「はい……酒呑様……」

「それは重畳……萃香も此方に。久しぶりに飲み比べといきましたよ」

「よくわからないけど……まあ、いいか。私としてもリベンジしたかったんだ。今日こそ勝つてやるよ酒呑」

背中を撫でるのをやめて、私は懐から秘蔵中の秘蔵のお酒を取り出す。地底でも最高ランクのお酒だ。普段の私なら後生大事に取っておくレベルのお酒なのだけど、私にとっても久しぶりの再会。

こんな大事な時に飲まずにいつ飲むのか。

私は萃香と、隣にいる勇儀にもお酒を注ぐ。私は飲み比べは好きではないが、二人は飲み比べが大好きなのだ。なら、千年待たせた詫びとして二人の好きな事をさせて上げるのが、私がやらなければならぬ義務であろう。

未だ、私の野望は遠いままだ。

それでも、私が可愛がつっていた鴉天狗の文と鬼の四天王の二人目をこの手に取り戻したのだ。それは大きな前進である。

早く残りの二人を見つけ、そして盟友の天魔を加えてまた宴を開こう。ドンチャン騒ぎの楽しい楽しい宴だ。美味しいお酒を飲んで、美味しいご飯を食べて、可愛い子を侍らせる。

酒池肉林!!! そして始まる自堕落な生活!!!

その為にも早く帰ってきてえ!! 華扇、透花あ!!

## かつて酒呑童子と呼ばされた鬼

私は産まれた時から最強だった。

有と無の狭間から産まれた鬼。0と1を司る鬼。密と疎を操る鬼。鬼の名を伊吹山の萃香。

いつのまにかその名を背負い存在していた私。突然生まれたのか、伊吹山に住む妖怪達は私の妖気を求めて連日襲ってきた。

生まれて間もない私には妖怪とは未知の存在だ。何故襲ってくるのか。そもそもお前達は何なのか。それすらわかっていない。

でも恐怖は無かった。あるのは、未知に対する感情の昂りだけ。

私は感情の昂りのままに妖怪達を殺した。無意識にこれが正解だと思っただから。

「な、なんなんだコイツは……生まれたばかりなのに、同じ妖怪なのに、こんな強い筈が」

「あはは!! 妖怪! お前や私のような存在を妖怪と言うのか!! それにしては私とお前は似ていないがな!」

「ひっ! た、助けくれ……!」

「お礼に私も教えてやる! 私の名は萃香! お前をこれから殺す妖怪の名だよ!」

最初の頃は様々な物が未知に溢れていて面白かった。山にいる生き物と同じ形なのに、大きさは全く違って私との意思疎通も出来る奴。見たこともない形をした奴。

よく見かける小さい生き物は虫や獣と言うらしい。同じ形なのに大きいのは大体妖怪。見たことなくて大きいのも大体妖怪。

そしてどんな妖怪にも、明確に他の生き物とは違う妖気と呼ばれるオーラがあった。妖気の量が多ければ多い程その妖怪は強い。つまり妖気が多い程、そいつと戦うのが面白いと言うことだ。

命のやり取り。楽しくて楽しくて仕方がない。何故かわからないが、私は戦いと言うものに快樂を見出し出したのだ。

虫や獣などの山にいる小さい生き物共は私を怖がって何もしてこない。だから、唯一私の命を奪おうと襲ってくる妖怪達は私にとって

感情の昂りを満たす大切な存在だった。だから、私は襲ってくる妖怪達に敬意を持って全力で殺し返した。

だが、無知だった私はやり過ぎたのだ。無闇に殺し過ぎた。結果、当然のように妖怪達もまた私を怖がって近付かなくなってしまう。

「おい！ 逃げるな！」

「「ひいひい!!」」

逃げるアイツらを叩きのめしても、反撃すらしてこない。

違う、こうじゃない。私が求めていたのは、闘争だ。こんなつまらない事を望んではいない。

私の願望はしかし誰にも届かない。

私は強過ぎたのだ。今までどんな攻撃にも死を覚えた事は無い。どんな奴も一撃で殺してしまっていた。

あまりにもかけ離れた私の強さ。それが私の楽しみを奪い取っていたのだ。

つまらない。私はそれが耐えられなかった。もっと私を楽しませてくれ。気分が高揚するあのワクワク感を私に味合わせてくれ。

感情の赴くままに私は山を出た。山を出れば他の妖怪がまだまだ沢山いたからだ。また私をワクワクさせてくれると思ったから。

でも、私を満足させてくれる妖怪は居なかった。能力を使うまでもない。私の拳に耐えることすら出来ず、出会った奴ら皆が死んでしまう。

「飽きた」

妖怪達の屍の上で、私はそう独り言ちた。

ワクワクしない。面白くない。明確に何が面白くないのか私にもわからないが、面白くないのだから仕方がない。

私は退屈になった。

しかし死んでしまいそうなほどの退屈に比べたら、妖怪共を殺す行為はまだマシだった。逃げる妖怪達を殺すのも暇つぶし程度には

なった。本当に面白くはなかったが。

なし崩し的に、私は妖怪を殺していった。その度に妖怪達に私の噂が広まるのか恐れる者ばかりになっていく。そうするとまた私は面白くなる。

気付けば私は、自分と同じくらい強い何者かとの出会いを求めるようになった。

私に怯えず、逃げず、そして私と戦っても死なない……そんな強い奴を、

そうやって山の周りを転々としていた時、私はとある集落を見つけた。そこに住む者達を見て、私はまた感情が高揚した。

その集落には、私と同じ姿の存在が多数いたのだ。違いは角が付いていない事と、妖気を一切感じない事くらいだったが、そもそも身体の大小違いや胸の膨らみの有無など様々だったのでどうでもいいことだ。

私と同じ存在かもしれない。私を満足させてくれる奴がいるかもしれない。私は歓喜に震え、その者達と話し合いそして殺し合う為に意気揚々と集落に向かった。

その者達が人間と呼ばれる、根本から私とは全く違う生物だと知ったのはそれからすぐ後だった。

「やあやあそこのお前！　ここはなんだ！　お前達はなんなんだ！」

「あつ？　なんだこのガキ……ツッ！　お前、角付きか！」

「私は伊吹山に住む鬼、伊吹萃香さ！！　さあ、私と同じ姿をする者達！

殺し合おう！！」

村に入って人間に声を掛ければ、私はまた襲われた。それは良い。私の期待通りだった。

その後、私に向かってくる奴らが私どころか、私が殺してきた妖怪達にすら殺されるんじゃないかと思うほど弱かった事が最悪だった。

妖怪と違って貧弱な人間達は武器を持って私を殺そうとしたさ。だけど、弱かった。無抵抗でいても私の身体に一切怪我を負わせられないほど人間達は無力な存在だった。



それが私には面白くなかった。

少し腕を払えば、突風が人間達を吹き飛ばす。少し小突けば砂みたいに粉々になる。

私は、その時から人間に興味を失った。これならまだ妖怪を殺している方がマシだ。歯応えの欠片もない。

私はまた退屈になった。

それでも私は私と言う存在を真正面から受け止めてくれる奴を、私を楽しませてくれる奴を探した。諦めきれなくて、妖怪や偶に人間達を手当たり次第に狩る行為を続けた。

そうして進み続けて進み続けて……私は何も無い海に出た。

見渡す限りの青、青、青。空と同じ青色が果てしなく広がっている。全てを埋め尽くすその壮大な色に………

私は失望した。

「ふざけるな!!」

自暴自棄になって海を叩いた。その瞬間、私の視界からある程度の水が消える。しかしそれもすぐに別の海の水が流れ込み、再び私の視界を青で満たした。

「ふざけんなああ!!」

それがムカついて、私はまた拳で海を吹き飛ばす。また海は戻る。叩く。戻る。

こんなに暴れても海は抵抗すら見せない。ただ私の拳に吹き飛ばされ、しばらくすると戻って来てゆらゆらと波が揺れて動くだけになる。

この先に何かあるのだろうか。ここと同じ陸地か。それとも本当に何も無いのか。そして仮に陸地があったとして、そこに行った私は何が得られる？

また楽しいことを探しに行つて、結局なくて絶望するだけなんじゃ

ないか。

気づけば私はかつて生まれた地である伊吹山に帰って来ていた。

「……………」

失望した。絶望した。世界に、私の強さに。

他にも探せば面白い事があるんじゃないか。突き進んだ私がそんな希望を抱かなくなるには十分な出来事だった。

私が生まれてから日が空を跨いだ回数は1万を超えていた。生まれてから数日でこの山を出て行った私は、徐々に帰って来て周りの風景がかなり変わっている事に気づき、ようやく長い年月を実感したのだ。

そんな長い年月を掛けて探したのに、結局私は一度も満足できなかった。満足に近い事があったのは、この山で最初に襲われたあの時だけ。そうして山から出れば、私の中で何も変わらなかった。何一つ得られなかった。

私は不貞寝した。そこらの土の上に、そこらの木の上に、岩の上に、妖怪の骸の山の上に、人間達が住む村の上に。

様々な場所で不貞寝してやった。

不貞寝してから100年が経った。

私の中でしようもない知識ばかりが増えていく。元々旅をしていた頃から沢山のことを知る機会があったが、正直私を満たしてくれる物は何もない。

この100年で私は同族に会った事もあった。が、期待はしていなかったが正直肩透かしだ。妖怪の中でも鬼は上位と呼ばれる存在らしいが全然強く無い。結局他の有象無象と同じだ。

何やらお酒なる飲み物を好むそうだが、私には当て嵌まらないだろう。



「ただそんな事がどうでも良くなるほどに私は歓喜に震えたのだ。あまり覚えてはいなかったが、それでもお酒を飲んだ時の美味さ、そしてふっふつと湧き上がる高揚感。飲めば飲む程感じるワクワクとした気持ちを思い出して私は酔いしれた。」

「もつとだ！・もつと私にこれを寄越せ!!!」

「またあの時みたいになりたい。またあのお酒を飲みたい。」

「私は唯一の生き甲斐を見つけた。」

「オラ、酒をよこしなあ！ ヒック」

「で、出た！ 酒呑みの童だ！ 角付きがまた酔って襲いに来たぞツ!!」

「煩いなあ。ヒック。大体私は酒呑みでも角付きでもない！ 伊吹山に住む伊吹萃香だ!! いい加減名前を覚えろ!!」

「私は明確な目的を持って村を襲う様になった。酒を奪う。その為だけに村を襲った。お酒こそが私の心を満たしてくれる物だから。だから私は殺すのではなく奪う事で村を襲い続けた。」

「ただ村が抱えるお酒には限界があった。別に製造が大変だと言うわけではない。時間は掛かるがそこまで労力を強いられる物ではないからだ。」

「では何故か。それは、この地にいる豊穰の神に大量の酒を供物として捧げているからだそうだ。」

「嗜好品としての価値以外意味のないお酒を何故大量に作り出した理由が明らかになった。お酒を捧げれば捧げるだけ、村の周りの土地が豊かになるのだからそうするだろう。だから、彼等は殺されたとしてもソレをずっと隠していた。」

「頼みます。酒呑みの鬼殿……我々の備蓄にもうお酒はありません。献上品を神に捧げなければこの土地はたちまち困窮し、お酒も作れなくなる。それは貴方様も困るでしょう?」

「伊吹萃香だっつてんだろー……」

襲い続けて数日。村長が私に命懸けで頼み込んできた。

確かにお酒が飲めなくなるのは困る。しかし、私は我慢なんてしたくない。なぜなら、酔っているこの状態から醒めた時、私はまた世界に絶望してしまうから。

「なら私がその神にとつて変わってやるよお。私は密と疎を操る。この土地の豊穰なんて周りから掻き集めてやるさ」

そして私は村人を脅し、この地に住む神の神殿に向かった。

神、と呼ばれるだけあつて強いのかと少し期待したが駄目だ。多少私相手にも食い下がったが、私がちよつと本気を出せば跡形もなく消滅した。やはり、意味のない期待はする物ではない。取り立てて挙げる事もなく、面白みも何もなかった。

しかし良い事もあった。その神を瞬殺して神殿を漁っていた時に大量のお酒を見付けたのだ。

どうやらここに住んでいた神は大量のお酒を飲まずに後生大事に溜め込んでいた様だ。お酒は飲む為にあるのにこんなにも蓄えているなんて馬鹿な奴だと思ふ反面、溜めてくれたお陰で私は暫くお酒に困ることがないのでありがたいと言うのもある。

そして思わぬ副産物があったのもまた事実。

神がまだ地上から離れていなかった神代の時代。神殺しは禁忌とも呼べる。私の噂は各地に広がり、その日から神の尖兵共が私を襲う様になった。

とは言え、だ。神の尖兵は私の命を脅かすには全くの実力不足。幾らそこらの妖怪より圧倒的に強いとは言え、まあ私の暇つぶし程度になるくらいのものだ。

少し尖兵共を遣して来た神がどう言った存在か興味があつて、この間に退屈凌ぎに殺しに行ったが退屈なのは変わらない。

やはり唯一私を癒してくれるのはお酒だけ。

この頃の私は喧嘩をただ己が相手を蹂躪する事としか思つてはおらず、旅に出て強い奴や他に楽しい事を探しに行こうとか、そんな希望に満ちた事は一切思つていなかった。

唯一私が好きなお酒を飲む事はこの地で出来ていたし、また旅に出て絶望するくらいならこの地でお酒を飲みながら腐っていった方が  
良い。

「おーい。今日も来たぞー。ヒック……………オラ！ 酒を寄越せ！」

「出た!? 酒呑みの童だ!! 皆避難しろ!!」

「伊吹萃香だって……………まあいいや。お前達人間は私を恐れて酒を渡せばいいんだから」

相変わらず私はお酒を飲み、近隣の村を襲いつつ土地の豊穰をその地に集めていた。

楽しいと思えるのは酒に酔っている時だけ。世界になんの期待もしていない。私はそう結論付けた。

「酒呑みを名乗る鬼の童がいると聞いてみれば、成る程。噂は当てにならないものね」

だから、私と同じかそれ以上の力を持った妖怪が現れた時、私の認識は徹底的に壊されたのだ。

現れたその妖怪の名は八雲紫。スキマ妖怪を名乗る、馬鹿馬鹿しい程に強くて馬鹿馬鹿しい程に私と馬が合う後の親友だ。

アイツと命のやりとりをして初めて喧嘩というものを知った。初めて鬨の面白さを知った。初めて命の危機に陥る事で世界の凄さを知った。

三日三晩なんてゆうに超えるほどの時間、アイツと殺し合った。紫は辟易していたが私はとても楽しかったのだ。なにせ私を超える生物が初めて目の前に現れたのだ。楽しくない筈がない。

結局痛み分けと言う不本意な形で殺し合いは終わってしまったが、唯一私に怯える事なく気兼ね無い様子で話してくれる友が出来たので満足した。

さて、喧嘩して友達ができた。となればやる事は一つしかない。私の好きなお酒の付き合いだ。私の好きな物を知って欲しい。私をもっと知って、そしてお前の事を私に教えてくれ。

私は紫との出会いに有頂天になっていた。

「へー。紫はそんな昔から生きてたんだねー。道理で強い訳だ」

「そう言う貴女も強いわよ。生まれてまだ100か200程度の鬼が、ここまで力があるなんて思いもなかったわ」

どうやら私は日の本に結構知れ渡っていたらしい。この地を支配していた神達が一柱も残さず消滅したのだ。しかもそれをやったのが生まれてまだ間もない鬼。

神としてはそこまで強くない土地神ではあるが、それでも生きた年が万を超えた強い神だ。いくら鬼とは言え、そこらの妖怪に殺される事はありませんのだ。

私としては暇潰し程度に殺した神だったので本当にどうでも良かったが、それのお陰で紫とこうして出会えたのでその神に感謝してやらなくもなかった。殺してしまったけど。

「私も人の事は言えないけど、貴女も大概ね。ここまで妖怪の種族として壊れた存在は初めてよ」

「ほーん。まあ確かに他の鬼とは違うってわかってたけどさあ………そんなに違うかい？」

「違うわよ。こんな複雑怪奇で、歪んでいる鬼は初めてだわ。だって貴女、私に対して怒らないし嫌わないじゃない」

「あん？ ……別に普通だろそんな事」

「普通じゃないから言ってるのです。過去に会った鬼なんてね。初対面の私に態度が気に入らないとか言っつてすぐ襲っつてきて——」

紫は長く生きていた分、私の知らないことを沢山知っていた。それは私にとって興味ある話だったり、つまらない話だったり。ただ私は紫の話を聞いているのが好きだった。

紫との出会いは私を形作る上で必要なファクターだ。転換期とも言えるだろう。もし紫に会わなかったら、今の私はいないと断言できる。

何故なら紫と戦い、そして話を聞いて初めて私は外に希望を持てた。この山から出れば楽しい事が数え切れない程あるのだと教えられた。

「よし紫い！ 私を面白い所に連れてつてくれよ！」

「私が……ですか？ 貴女と違って私は忙しいのだけど……」

「いいじゃないか！ 私とお前の仲だろう！」

「まだ会って数日じゃない……はあ。わかりましたわ」

紫と会って数日。山に引き籠もっていた私は漸く決心がついた。これから紫に沢山の楽しい場所へ連れて行って貰えるのかと思うとワクワクした。

私は腐っていたのだ。たかが100か200年そこらで世界を知った気でいた。それが何と浅はかで、そして女々しい事か。

伊吹萃香とはなんて的外れな考えで絶望していたのだろう。

それに気付いた時、私は生まれ変わったのだ。ただの世間知らずな小鬼から、真の鬼に。

だから、私は伊吹山を出る。もう二度とこの山に帰ってくるつもりは無い。世界は広いのだと教えられた私は、過去に過ぎないこの場所に戻るつもりはない。

その為、私はこの場所に心残りを残す事はしなかった。ああすれば良かった。こうすれば良かったなんて過去に縋り付くような女々しい鬼になりたくなかった。

身辺整理の為に私は結局手付かずにあった金品財宝を奪った村に返しに行った。

「ヒイツ!!? 皆逃げろお!! 角付きが……童子が山から降りてきたぞおおお!!」

「酒好きなアイツだ！ また酒を呑みながら、俺達の村に略奪に来たんだ!!」

私が村に行けば阿鼻叫喚。当たり前というか、散々好き勝手やってきたのだ。誰も私と真正面から相對する奴はいない。この地を豊かにしたのは私だと言うのに、なんとも薄情な奴等だ。

そう思っても、切っ掛けはこの村のお陰なのも事実。私はなんだかんだこの村に恩義を感じている。

「酒呑みの童子だ!!」

それは酒を手に入れて以来呼ばれるようになった、村人達は怯える



恐怖の代名詞。

私はその名を聞いてニヤリと笑った。

「そうさ！ 私に酒に救われ、酒によって唯一無二の盟友と出会い生まれ変わった新たな鬼!!」

私は昔の自分を捨てる為に今の名を捨てた。

「私の名前は酒呑童子!! 酒をこよなく愛す鬼の名だ!!」

旅に出た。紫に連れられ様々な物を見た。

それは強い妖怪は言わずもがな、この世の荘厳な神秘であったり、人間社会の高度な文明であったり。そして意外だったのが、闘い以外に興味が無いと思っていた私が何と人間の文明にのめり込んだ事だ。

と言っても私が面白いと思っただのは奴等の策謀であったが。集団においての戦争の策略、政の策略、果ては物造りの策略。

裏切り、陰謀……見ていて面白い。弱者が強者を陥れる様や、常に相手より上をいこうと他者を蹴落とす、強者が野望に手を伸ばそうと色々汚い事をする物まで。私から見れば全て面白い。そう言う考えがあるのかと感心させられた。

思っていた以上に世界は広く、それでいて不思議に満ちていたのだ。だからこそ、私は紫に常々感謝した。

こんな楽しい事を私に教えてくれてありがとう。お前のおかげで私は生まれ変わった。

今思えば、紫はよく私に付き合ってくれたと思う。アイツは暇な私と違って何かの野望を胸に秘めていた。時々私から離れて音信不通になるとは言え、それでも私の約束をちゃんと聞いてくれた。

「だって鬼に約束しちゃったんだもの。約束を破れば何をされるかわかったものではないわ」

「私は別に気にしないけどな。あ、でも確かに盟友のお前から約束を破られたら……流石に悲しいかもな」

その時の紫の表情はこれ以上無いほど面白かったな。いつもの余裕そうな顔からポカンとしたアホヅラになったのだ。面白くないわけがない。

そんな会話をした翌日。私は紫と離れた。

元々私との約束は楽しませて欲しいと言う物だ。色々なところに連れられて様々な妖怪と知り合った。私との約束を十分に満たしてくれたのだ。約束は終わった。

それから暫くは各地を転々としながら強そうな奴を探しては酒を飲む事に明け暮れた。その間もどんどん酒呑童子と言う名は広まっていく。そうすると紫みたいに強い奴らがその名を聞いて私に会いに来るのだ。喧嘩に事欠かない。

因みに幼名でも名はまあまあ轟いていたらしいが、紫曰く気にならなかったそうだ。じゃあなんで私に会いに来たのかと言うと、『酒呑みを名乗る鬼の童』と言う噂が気になって来たのだとか。

紫の話では『酒呑鬼』と言う鬼は昔から有名らしい。鬼神やら、最強の鬼やら、そう言った表現の言葉はありふれた物らしいが『酒呑』を名乗る鬼は過去例外無く一匹の鬼だけらしい。

かつて戦いと酒の神として讃えられ、天の暴君とも呼ばれたその鬼。天界で何をやらかしたのか地上に落とされたものの、その鬼は暴虐なまま世界を支配し、月に単騎で喧嘩を売りに行った鬼の始祖。

昔を知る者ほど、その名は畏怖される物なのだとか。

その話を聞いた頃は正直どうでも良かった。酒呑童子の名前には誇りがあつたし、そう言った経緯で私の名が強者を呼び寄せるなら好都合だった。

過去の私じゃない『酒呑』某に頼っている様で気分は良くなかったが、出会った奴に私と言う存在を植え付ければいい。

そう気楽に思っていた。当時の私はその名に誇りこそあれど、その

名にどんな意味があるのか知らなかったのだ。

何百年経った後か。ある時妙な噂を聞いた。

なんでも、『酒呑童子』を名乗る輩が『鬼の勇儀』なる者を倒して配下に加えて、破竹の勢いで日の本を支配しようとしている。

そんな、私には身に覚えの無い噂だ。

曰く、月の光に輝く長い黄金の髪を持ち。曰く、額から生えた立派な角を持つ。ここまで聞いた時は、私に負けたその勇儀某が己の体面を守ろうと根も葉もない噂を流しているのかと思った。

まあその後、曰くその酒呑童子は誰もを魅了する妖艶な美女、と聞いてなんの当て付けだと喋っていた妖怪を思わず殺してしまったが。

こう見えて私も自分の体には多少なりとも思うところがあるんだ。考えてみる。紫と何年も一緒にいて、知り合った物からは大抵比べられるのだ。とある馬鹿者には紫と鬼の間で出来た子供か、なんて言われる始末。

どうでもいい話。

私はその話を聞いても特に気にしたつもりは無い。私の誇りを使って暴れることは正直ウザったいが、その辺に飛んでいるハエを態々叩き落とすなんて事をする程今は切羽詰まっていない。

たかが日の本、たかが一つの島を支配しようなんてその妖怪の程度が知れる。紫の様な、空に輝く一つの星を相手にするくらいの気概でもなければあ私は興味を持たないさ。

そう思っていたんだけどな。

「そんな、馬鹿な……………」

目の前には妖怪の山と呼ばれる一つの集団がいた。無限に生み出される私の分身達を相手に、その集団は一つの巨大な生き物みたいに私達を蹂躪する。

「なんなんだ……お前は……」

腐っても私の分身、小鬼だ。そこらの木っ端妖怪共に殺される程甘くはない。強い鬼や天狗達にやられるのはわかる。が、河童や土蜘蛛、獣妖怪共に圧倒される程私の分身達は弱くない。

なのに、一匹一匹が一騎当千の如く私の分身達を蹂躪する。

「お前は一体何者なんだ!!」

だけど私が驚いたのはそんな些細な事では無いのだ。味方に力を与える能力だつてある。そう言う妖怪だつている。

でも、お前は違うだろう。お前はおかしいだろう。

一体、その瓢箪に入った妖気は何なんだ？

「はっ。いくら自分の分身を増やそうが数を揃えようが、本物の百鬼夜行には敵わないさ。これが本物の大将の器だよ」

「貴女の敗因は、酒呑を侮ったことね」

「この鬼の気持ちも少しはわかるがな。我ら鴉天狗を集団で圧倒する組織がいたなど夢にも思わなんだ」

私に迫る3人の妖怪。片やその力を神と比較された鬼、片や鬼として異色な叡智を携えた鬼、片や天狗の長と恐れられた鴉天狗。

到底、誰かの下に従う様な輩ではない。一人一人が組織の頭となつて好き勝手生き、他を蹂躪する存在であるはずだ。一人一人が私と比較しても問題無い程には力がある。

事実、この世の理すらも覆す力が無限の膂力を持つと呼ばれた私の力を押し返す。疎となった私をその叡智が逃がさない。囚われる事の無くなった私を圧倒的速さで翻弄する。

そんな輩達が誰かに付き従っている。

何の力も無い、一見雑魚にしか見えない鬼に。

奴の名は酒呑。部下に用意された王の椅子に座って私が抗うのを

ただ見下した様に見つめるその存在。その身体の内にある物は何もなく。干からびた砂浜の様に欠片も妖力など見当たらない。

しかし、私だからこそわかる。奴の手に持つ瓢箪。その中にある量るのも馬鹿らしくなる程に内蔵された妖力を。

あれはもう一つの世界と言っている。酒呑と言う鬼の妖力だけが詰まった星だ。生物の枠組みから外れなければ釣り合いは取れない。私が世界中の妖気を幾ら掻き集めた所で超えるのは無理だと断言できる。出会った誰よりも、あの八雲紫すらも妖力だけなら軽く数百倍は上回るだろう馬鹿みたいに規格外な量。何せ、あの瓢箪から無造作に漏れ出した妖力のみで配下の妖怪達に多大なる恩恵を齎しているのだから、その規格外な力がありありとわかってしまう。

それは決して良いことでは無いのに。

アイツが私達の戦闘を肴に酒を呑む。一瞬、僅かな妖気が彼女に宿ったかと思うと、本当に酒で出来たかの様にその妖気は瓢箪の内に流れ落ちる。

鬼一匹分の中々の妖力。しかしそれすらも大海に一滴の水を落としかの様な物でしか無い。

あの瓢箪は封印だ。いや、封印なんて生易しい物ではない。呪いであり、奴を死へと蝕む災害と言っても差し支えない。何故なら妖怪としての本質を、身体にある妖気全てを奪い取ってしまうなんて封印でも何でもないからだ。

じゃああの瓢箪が酒呑を名乗る鬼の女を操っている本体なのかと言われればそうではない。操っているならその体には妖気が残る。しかしあの女の身体は空っぽだ。

あんな、抵抗すらもなく身体 of 妖気が取り出されてしまうなんて。妖怪の身体を持っているのに、妖気が無い。それは妖怪として成り立っていない。

身体が弱体化するどころじゃないぞ。鬼だろうが何だろうが、そんな事をすれば普通妖怪なら死んでしまう。

奴は何で生きている？ 何故生きていられる？

「ゲホッ……くそ……」

長い闘争の末、奴の前に私は跪いていた。勇儀を押し除け、天魔の妨害を捌き、華扇を一時的に無効化し……漸く酒呑の前に辿り着いた時には私は既に満身創痍。指の一本すら動かすのがやっと。

立つことすらままならず、私は敵の目の前で倒れ伏す事しか出来ない、

「こんな……ところで……」

死ぬのは怖くない。私は出会った数々の妖怪や同族から鬼としてあるまじき異端と呼ばれて来たが、鬼の気概が無いわけではない。むしろ戦いの果てに死ねるなら本望だ。それが裏切りであれ、策略であれ、憤る事はあるとしてもやはりそれを最後は認めて天晴れと叫びながら潔く死ぬ。

それが、酒呑童子と名乗った時から私が決めた己のルールだ。結局は受け入れてやる。意固地になれば、それは昔の私に戻ってしまうから。

だから私はこの集団に挑んだ。一対多数相手だろうと、どんな搦手の戦略があろうと、どんな汚い手を使われようと関係ない。敵が持つ全てを真正面から叩き潰す。

楽しいからやるのだ。だから、全力でやった結果負けるのも満足だ。

でも、悔しいとは思う。結局、目の前の私と同じ名を名乗る鬼に何も出来なかった。何も無いはずの雑魚なのか、それともその名に相應しい鬼なのか。初めて目にした時に感じた未知の期待を、その深淵を、私は何一つ知ることが出来なかった。

どんなに悔しかろうと、それでも私は諦めるしか無い。

せめてもの私の戦った証として、身体に残る最後の力を振り絞る。能力を限界まで使用し、目の前の鬼に全力で放とうとした。

もし私の思う通りの強さなら、一矢報いる所かきつと歯牙にも掛けられない一撃にしかならないだろう。それでも良いと、私は満足に逝

こうした。

「こんな幼いのに、よくやりますね。貴女の名は何なのでしょうか？」  
立ち上がるうとした直後、頭上からそんな呑気な声が聞こえて来た。

その言葉に私の身体は何かには押し付けられたかの様に動かなくなる。いや、違う。私が強制的に静止を掛けたのだ。

「何度も……言った筈、だ。私の名前は、酒呑童——」

「それは貴女本来の名では無いでしょう？ 仮に貴女が酒呑みの名を持つのなら、貴女が引き起こした数々の畏れが全て私に集う筈がない」

その言葉を聞いて、私の頭は真っ白になった。

いや、違う。むしろ彼女の言っている言葉が私の頭の中でストンと収まった。だからこそ、私の脳内がその事実には掻き乱されたのだ。

「何を……」

「もうわかっているのでしょう？ 私の前で名を名乗る違和感に」

違和感と奴は言う。名を告げる違和感。そんな物ある筈なのに。「名は体を表すと言いますが、幾らでも変える事はできます。しかし、だからこそ本質は変えられない」

まるで駄目な弟子に教鞭を執る師のように、この女は私を説く。

『『酒呑』。酒を『飲む』のではなく、『呑む』……貴女の能力は確かに近いのでしょうか。しかし、本質は『萃』。集めたり薄くするのが貴女の真骨頂ならば、『酒呑』は相応しくない』

私は短絡的だが、考えない訳ではない。

酒呑を名乗る鬼に酒呑童子と名乗る。その矛盾に。明確なる矛盾をわかっていたんだ。

もつと言えば、何故私が酒呑童子だと名乗っていたのか心の底では

理解していたんだ。だけど、私の理性に思考することを阻止されていたのだ。よく考えれば気付くことを、私の理性が阻止していた。

「わかっているのに、気付いていないだけです」

私は、酒呑童子と言う名で日の本を暴れ回った。なのに、一向に自分の存在認識が曖昧なままだった。

酒呑童子の名は確かに知れ渡っていた。何処に行っても酒呑童子の噂で持ちきりだった。恐ろしい鬼の代名詞とはまさにその名前だった。

しかしそれとは別に。私の前にやって来る妖怪達はいつも私をその酒呑童子と扱っていなかった気がする。

酒呑を名乗る鬼の童子がいる。幾ら暴れ回ろうが。人や妖怪、神を殺そうが。噂になったのは酒呑を名乗る鬼の童。

あれだけの噂を私は轟かせていた。行く先々で酒呑童子と言う正体不明の恐ろしい鬼がいるとは噂になっていたのに……私が酒呑童子だとは一度も思われた事は無かった。一度も酒呑童子と認識されたことが無かった。

私が酒呑童子になった事は一度も無かったのだ。

「そうか………」

私は既に負けていたんだ。ずっと昔から。

『酒呑』と言う名を名乗り出したあの時から、私はその名に負けていた。その名に取り込まれていた。

なんて滑稽な事か。勝ち続けた為に、自分が大き過ぎたと過信したが故に、世界に失望していたあの頃の私は……世界に挑み続けていた真つ最中だったのだ。必死に私と言う個の存在を護ろうとしていた。なのに勝手に失望して、抗う気力も次第に失せていき、最後にその名の魔性に取り込まれた。

取り込まれれば後は養分だ。私がやった行い全てが酒呑に還る。私は貢献するだけ。そこに鬼の誇りなんて物は無い。



「ははっ………」

私を満足させる奴がない？ 私は何をとち狂った事を言っていたのだろう。お前は小さな籠の中に大切に保護されていただけだったんだ。それなのに私は幼児の様に癩癩を起こしてあの山を見捨てた。故郷を、伊吹山を捨てた。

失望していたと思っていたのは私ではなく、身勝手な私をあの山が失望したのだ。

だから、あんなにも誇っていた昔の名を、私は簡単に捨てられた。捨ててしまうことが出来た。伊吹の名を与えられた私だと言うのに。私は伊吹を殺したのだ。

「情けないなあ、私は」

それに気付いて、私は自己を嫌悪した。この死の間際になって漸く気付くなんて、なんと滑稽で愚かな事か。自分の馬鹿さ加減に恥ずかしくて思わず死んでしまえうさ。

なるほど。『名を知る者達』が『酒呑』に異常なほど敏感だったのかわかった気がする。名前だけでこれなのだ。本人の意思に関わるか関わらないかはさて置き、名前だけで私を呑み込もうとする脅威。魑魅魍魎共が警戒する訳だ。

ましてや妖力の上限すらわからず今尚溜まり続ける規格外の瓢箪と、妖気の一欠片も無いのにその上で構成された無色透明の存在すら許されない不可能な身体。

全てが異常。その存在どころか名前すら馬鹿げている。利点も欠点も振れ幅が突出し過ぎ。少しは他の妖怪と足並みを揃えようとか思わないのだろうか？

私とて沢山の強者から異端の鬼と言われて来たが、それでもあんなに壊れていないと断言できる。

「それに比べて、本当にふざけた奴だなお前は」  
「心外です。私は別にふざけているつもりはありませんよ。常に真剣です」

私を名で呑み込もうとしていた癖によく言う。いや、助言して来たくらいだからそこに関しては無意識でやっていたのか？ 尚更質が

悪い。

ああ、しかし。しかしである。

目の前の奴になら殺されてもいいと思っていたが、それに気付いたからにはやはりこのまま終わるのは許せない。負け続けて終わるのは嫌だ。屈服したままなんて嫌だ。今まですつと掌の上で阿呆みたいに踊っていた癖に、何も残せず負けて死ぬ自分に嫌気が差す。

だって、今まさに私が戻って来たのだから。

伊吹萃香

「伊吹萃香だ」

それにそう思った時には、私は自分の名を告げていた。

「成る程。その名が貴女の本当の名前なのですわね」

「……………ああ、そうさ。忘れていたよ。ずっと忘れていた。私はこの名がとても好きだったんだ。何で忘れていたんだろうな」

今思えば、紫はずっと私に申し訳なきそうにしていた。ずっと何かを言いたそうにして、それでも私の顔を見て、苦痛に満ちた表情を何度ももっていた。

自分のせいだと思っただろうか。酒呑みの鬼を名乗る切っ掛けを私に与えてしまったことに。成る程。そう考えれば紫が酷く私に協力的だったのも納得がいく。そうでなければ、この世の胡散臭さを濃縮して形作った様なアイツがあんな素直に協力する筈が無い。

親友にまで世話を掛けさせるなんて、本当に私はみつともない奴だった。

「なあ、酒呑」

「何でしょうか」

だから、私は変わらなければならぬ。負け続けた私を、私の為に伊吹萃香変えなければならぬ。

何より、負けっ放しは私の性に合わないだろう？ そんなの私じゃない。

「お前の妖怪の山に私を入れてくれ」

目の前の鬼に勝たないと気が済まない。どんな事をしてでも、それ

が例えば生き延びる為にそいつの軍門に下ろうと、私は勝つてやる。じやなきや、こんなにも痴呆だったまま生きてきた私を許すことが出来ない。このまま馬鹿みたいに死ぬなんて、後悔して死んでも死に切れない。

勝たなければ、私は本当の意味で伊吹萃香と名乗る事を許せない。酒呑。今はまだお前の下だ。負けを認めよう。軍門に下ろう。私はまだお前に勝てない。私は弱者だ。自分の名を捨てて取り込まれた中途半端な鬼だ。

でも、私はいつかお前に勝つ。強者となつてもう一度お前の前に立ってやる。それがどんな卑怯な手であれ、どんなに鬼として間違つていようとも、私はお前に勝つ。

そうなつて初めて私は『伊吹萃香』の名を誇りにしよう。この名に報いる為に、私は『鬼の四天王・伊吹童子』に成り下がろう。

差し当たつてまずは普段から飲みつ放しだった酒でも断とうか。勿論、好きなのだから宴の席では飲むけども。それでも『酒呑み』は暫く控えないとな。

だから。

だから酒呑。

だから。だから。

私は認めない。あんな結末を認めてやるものか。

## 始まる動乱

眩しい日差しが私の顔に当たるのを感じ、私は目を覚ました。

日の光はいつぶりだろう。目蓋を閉じていたにもかかわらず、思わず眩しいと思ってしまうくらいに私はその光が慣れていなかった。

「ふぁ……………ん？」

太陽の光に無理やり叩き起こされた私は寝ぼけ眼のまま起き上がろうとして……………胸元で身動きする柔らかな感触に違和感を覚えた。しかも、自身もその違和感を受け入れる様に腕で抱き締めている。

抱き枕なんぞいつの間際に用意したんだろうと疑問に思いながら、暖かくて柔らかいソレを確認しようと首を傾けて。

私に抱きしめられた愛らしい一人の少女が私の胸に顔を埋めて、呆然の言葉がとても似合うぽやんとした表情で此方を見上げていた。

「……………」

「……………」

ぱつちりと目が合う綺麗な緋色瞳。いきなり目があつた物だからか、大きな目をこれでもかと見開いて驚きを露わにしている。それがいつかの幼いこの子の姿と被り、私は思わず抱き締める力を強くした。

「おはようございませう文。昨夜はよく、眠れましたか？」

「ツ……………!!!」

私の腕に抱えられた彼女に声を掛ければ、彼女は顔を真っ赤にさせながら私の胸から顔を上げて声無き悲鳴を上げた。

「あ、や、や……………あややややややや……………!!!?」  
「……………」  
「……………」

「文はあつたかいですね……………抱き心地もいいですし、このまま二度寝しちゃいそう……………」

「寝ないでください!!」

抱き締められたせいで身動きが取れないだろうことを良い事に、私は文の女の子特有の抱き心地を堪能する。細く折れてしまいそうな

腰に、それでいて柔らかい感触。人肌に似た体温は私の眠気を誘発してくる。

しかし寝ようとしたが文がモゾモゾ動くせいで眠気が妨げられてしまう。今の密着した状態だと素肌が擦れてくすぐったいから動くのはやめて欲しい。

ちなみであるが、私は寝るとき全裸だ。

「何で酒呑様、服着てないんですか!!?」

真つ赤な顔で生娘の様な叫びを上げる文。いや、私も経験がないので生娘みたいな物だが……嫌だな、三千歳くらい歳を取った生娘つて。

馬鹿な事考えてないで文の誤解を正さないとな。慌てようが可愛いのもう暫く見ていても飽きないのだが……

涙目になり始めたのが流石に可愛そうだったので、私は仕方がなく身体を起こして彼女の質問に優しく答える事にした。

「昨日の宴で文が潰れてしまいましたね。私が紫さんに家を聞いて送ったのですよ」

「へえっ?」

「帰ろうとしたら酔った文が寂しいって言って……私を離してくれなかったので私も一晩泊まろうかと思いいち……流石に着物のままでは寝づらいので脱いでしまいました。ごめんなさい」

「酔っ……ええええ!!?」

私の言葉にあいもかわらずオーバーなりアクションを取る文だが、実際本当なのだから仕方がない。昨夜の光景を思い出しながら、私は苦笑した。

昨日は久々の再会とあって盛大に飲み明かした。用意されたお酒に地底で手に入れた秘蔵の酒も飲み、更には途中で萃香が呼び寄せたゆかりんが追加で酒を増やし……

もう私の周りは皆んながベロベロに酔った。一人で立って歩けないほど酔ったので、勇儀と他2人の鬼はゆかりんによってさとり共々帰らせて貰い、萃香やにとりは未だに私を睨み付けてくる博麗霊夢と魔術師の女の子二人に預かって貰った。

で、一人余った鴉天狗こと文に関しては……誰も身柄を受け取ってくれなかったのだ。

先の3人は住んでいる所が違うらしいのと、何故か普通に嫌だと拒否されてしまった。同じ妖怪の山に住んでいるらしい早苗とその保護者達は宴会が始まってしばらくすると帰ってしまった。

じゃあゆかりんに預けようと思ったんだが……

「昨日の文は可愛かったですねえ……もつとしゅてん様といっしょにいるーって言って離れなくて……昔の頃を思い出します」

「わ、私そんな事言ってたんですか!? 嘘……えっ、記憶に無いんですが……」

「しゅてん様大好き? 好き?? 好き??って言いながら私の頬をキスしてくれましたよね」

「ぎゃあああああああ!!? 嘘ですよね!! まって、いくら何でも酔ってそんな事言わないですよね!!? 冗談ですよ酒呑様!!? そんな事ないって言ってください酒呑様!!? ……ああもう!! 馬鹿なんですか私!!?」

勿論嘘である。文は可愛いなあ……弄りがいのある可愛い女の子は大好きだぜ。

まあ、酔って倒れた文が私の裾を掴んで放してくれなかったのは本当だけ。でも文の取り乱し様はやはり面白いので黙っておきます。

と言うわけで、さとりさん達に勇儀等を任せて文に抱き付かれた私はそのまま彼女を家に送り届けたわけだ。

はい、という訳で回想終わり。取り敢えず文を抱きしめよう。温いよ文。温いぜ。

「文あ~~~~」

「ヤバイヤバイヤバイ……こんな事バレたら四天王の方々からなんて言われるか……。勇儀様に伝わったらまず殺されるだろうし……」

私が抱き付くのも無視して文は一人思い悩んでいる様子である。心配しなくても別に私が文の家に泊まる事くらい許してくれるだろうに、何を怖がっているのだろうか。そもそも勝手に文の家にお邪魔したのは私であり、この子は私を連れ込んだ訳でもないのだからむし

ろ怒られるのは私の方。

まあそんな些細な事は放っておいて二度寝である。私はこのやわつこいフワフワ羽毛付き抱き枕クッション『アヤ』で深い眠りに付くのだから。

「酒呑さま〜！ 起きてください後生ですから〜…!!」

そうして私は深い眠りについた。

「あややや……………どうしよう」

自分を抱き枕にして眠りについた元上司に文は困り果てていた。

おかしい。一体どうしてこうなった。グルグルと文の脳内でそんな意味のない思考が巡り続ける。

そもそも文と酒呑の間に組織的な関係は一切無い。文が妖怪の山の為に働き始めたのは勇儀が仕切っていた頃だ。文と酒呑の関係は上司や部下と言った社会的な関係ではなく、幼少の頃に相手をしてもらったおば……………お姉さんと言う認識が大きかった。

基本的に昔を知る天狗達は妖怪の山を力と恐怖で支配していた鬼を恐れていて、それは文も例外では無いのだが、酒呑と言う鬼だけは別だった。

「酒呑様……………」

文は自分を抱き締める酒呑の頭をそつと撫でた。昔、文が酒呑に何度もやってもらった事だ。頭を撫でて貰うといつも安心していただけを彼女は思い出す。

過去の記憶には幼い自分がいて、母がいて、酒呑がいて、天魔がいた。

母親と酒呑と天魔が楽しそうに会話をしながら、いつも自分の相手をしてくれる。とても穏やかで優しい世界。

唐突に、そして呆気なく失ってしまった過去。それ以降妖怪の山は常に殺伐とし、自分も何かにせつつかれる様に張り詰め続ける日々が続いた。

優しかった母は人間との戦争で亡くなり、天狗の憧れであり常に頼りになる天魔は人が変わった様に掟に囚われ、それを遵守する様部下に強制させた。

全ては酒吞が居なくなつてから始まつたのである。

「……………そうだ、天魔様……………」

報告しなければならぬ。

あの日以降、誰よりも己を律し規則に準じてきた天魔。鬼達が去り妖怪の山が無法地帯になりかけたのを、厳しい掟を敷いて、余所者や侵入者を徹底的に叩き潰すことで再び妖怪の山を統率した天狗の長。

文は天魔を尊敬している。幼少の頃より相手をしてもらった彼女を慕っていた。だけど、今の妖怪の山の風潮だけは気に入らなかつた。

大天狗とは名ばかりの、あの戦いを逃げ回る事で運良く生き残つただけの老害どもが上の地位に蔓延る天狗社会。天魔のおこぼれを貰おうと躍起になり、常に他者を蹴落とし隙あらば天魔の座を狙おうとする馬鹿共。

射命丸文はこの天狗社会に酷く嫌気が差した。本来なら彼女の力はそのらの大天狗に引けを取らない強さがあつた。にも関わらず彼女はその地位に就かなかつた。

妖怪の山に属しながらも高い地位に固執せず、そして誰の命令にも従わない、ただの幻想郷の1記者として自由な生き方を選んだ。

だけ。

「酒吞様が帰ってきた事……………あの方に伝えなければ」

文は心を鬼にして抱き付く酒吞を起こさない様引き剥がし、外に出る支度を整える。

瞬く間に支度を終わらせた彼女は、妖怪の山本殿に一直線に向かつた。幻想郷最速と誉れ高い彼女の速さを持つてすれば、連なる山々だろうが障害物にもなりはしない。

ものの数十秒程度で自宅から山五つを超えて、この地で一番大きな山の頂上に辿り着いた。

目の前には妖怪の山の総力を使って集めた荘厳な建物。山の威信



を広める為にと建てられた建物の門を開けて彼女は中に入っていく。向かう先は天魔の部屋……ではなく、天狗の会議室だった。恐ろくだが、あの「鬼」達が幻想郷に帰ってきたと言う報が既に妖怪の山全土に伝わっている。

そして幾ら平和ボケした大天狗達とは言え、妖怪の山が再び鬼に支配される事を恐れている彼等がその事実を聞いて心中穏やかにはいられない筈である。

そんな臆病な天狗共が既にいるであろう会議室の前に文は立った。「なぜ今になって鬼が地上に出てくる!? まさか、再び妖怪の山の実権を奪いに?」

「聞けば最近妖怪の山に居ついた神の石柱が原因と言うではないか。やはり、奴等を妖怪の山に住ませたのは失敗では?」

「あのスキマ賢者が責任を押し付けてくるやもしれませんぞ?」

「あの者共を容認したのは天魔様。貴女でございます。どう責任を取るつもりですか」

聞こえてくるのは鬼が戻ってきた話と誰に責任を押し付けるのか、と言う不毛な会議である。

部屋の中にいるのは殆ど臆病な天狗達ばかり。皆、ただ鬼が戻ってきただけで妖怪の山の覇権が奪われると考え恐れるばかり。更には有りもしない責任を取らされると勘違いし、全ての責任を天魔に押し付ける発言をする者まで現れる始末だ。

「あややや、会議中失礼します」

文はそんな会議の話をつた切る様に扉を開けた。

「なっ!? 射命丸貴様、無礼であろう!!」

割り込む様に入ってきた文に、扉の一番手前にいた大天狗が吠える。それを無視してズカズカと乗り込む彼女の姿に、大天狗達は不信感を抱いた。

鴉天狗と言う種の習性上、上の者には基本従順だ。文もその例に漏れず、本来ならこんな大天狗達を蔑ろにする様な行いをしない。

なのに一体これは。大天狗達は判断に迷った。

そんな彼等の隙に入り込む様に大天狗達の前を突っ切った文は、上座にいる天魔の目の前までやって来ると片膝を立てて座る。

「天魔様。至急ご報告があります」

「……………本来ならこの様な無礼、認める事は出来ない……………が、良い。面を上げる、射命丸。話せ」

文が天魔の声に従い顔を上げた。

銀色の髪を腰まで伸ばし、白銀の美しい翼をこれ見よがしに広げ威圧する煌びやかな女性。可愛さとはかけ離れた美貌を前にして誰もが恐れ慄く。凍てつく様な氷の目で文に目を向ける、天狗社会の頂点に立ち妖怪の山を統べる天魔の姿があった。

天狗はあまり派手な衣装を身に纏わない。それは昔から同族を大切にし合わせようとする習慣故か、衣装を統一する為にシンプルで合わせやすい物だからか。

しかし天狗達の棟梁である天魔だけは違う。昔の遊女、それも格式高い花魁の様な衣装を身に纏い、座っている真横に紅の派手な傘を一本だけ置いている。

厳格で掟に厳しい天狗の棟梁とはかけ離れた見た目をしている。仮に彼女の噂を聞いていてこの姿を想像する者は誰もいないであろう。しかし、見た目が煌びやかなだけでやはり彼女の中身はあまりにも厳しく、口調も堅苦しいものであった。

騒ぎ立てる周りの天狗達すらも、天魔が話し出した瞬間騒ぎを止めた。静まり返った部屋の中で、文は一人報告を口にする。

「現在、私の屋敷だとある鬼を招待しています。此度の異変にも関係しており、今は疲れてお休みしていただいておりますが、どの様に対処しましょうか」

「……………鬼を、この山に招き入れたのか？」

彼女の報告を聞いた天魔はその話を聞いて顰め面を文に向けた。加えて黙っていた天狗達もその情報は彼等にとって許容できなかったのか声を上げ始める。

何故今回の騒動に関係する、それも鬼などを匿うのかと。たかが鴉

天狗一匹が独断で妖怪の山に鬼を招き寄せるなど言語道断だと。もし妖怪の山で鬼が暴れば、その首一つで責任を負える程甘くはないぞと。

文は僅かに眉を顰めた。

天狗の情報伝達は幻想郷随一の筈だ。なのに、今回の宴で訪れた鬼達の素性が伝わっていない。それは天狗の情報伝達が機能していないのと同義である。

恐らく八雲紫の介入だろうと文は考えた。出来るだけ素性を隠し、幻想郷に混乱が訪れるのを防ぐ……いや、延ばそうとしている。

あの時、目撃者は何人もいた。かの者達を隠すことは不可能である。ならば出来るだけ伝わるのを遅くして、後に訪れるだろう混乱の対策を立てようとしているのかもしれない。

八雲紫が苦勞する姿を思い浮かべて僅かに気を良くした文は、ひとまず騒ぎ立てる大天狗達を黙らせる為にもその名を告げた。

## 酒呑は今日も死ぬ

「んむ……………ふああ……………」

寒い。最初に思ったのはそれだった。

頭の中を占拠する眠気が寒さに負けた時、私の視界もクリアになり目が覚める。

寒い、と言うより人肌が恋しい。違和感のある寒気に私は自分の身体を見下ろして、全裸である事によく気付いた。

「あらまあ……………私は、確か文と一緒に寝ていたはず……………文は？」  
キョロキョロと部屋中を見回しても私が求める可愛い女の子の姿は無かった。はて、何処かに出かけたのだろうか。

とりあえず私は自分の衣服を着る事にした。ごく丁寧に畳まれたそれは多分文がやっつけてくれたのだろう。洗いたての着心地だった。

「ふむ……………文は、仕事ですか。精が出ますね」

今更だが文は私と違って組織に属する働き天狗だった事に気がつく。確か……………朝は新聞売買か情報収集、夜に哨戒か新聞作成だったか。既に日が半ばまで登り始めたのなら、彼女が居なくてもおかしくはない。と言うより、今までずっとニートの生活をしてきた私がおかしいのか。

自分で言つて泣きたくなかった。

「少し外の空気でも吸いますか」

私は気分を変えなるべく文の家から出る事にした。恐らく仕事に行つた文は当然帰つて来ない筈だから、それならこの機会に一人地上の世界でも満喫しようと言う魂胆だ。

文が住んでいる家は山と森に囲まれた自然豊かな場所だった。周りにはご近所さんも何も無い。自然しかない長閑で、わかりづらい場所に家が建てられている。ゆかりんに送ってもらわなきや一人で絶対に通りに着けないだろう。そんな辺境の地だ。

はて……………文ほどの妖怪なら恐らく相当の地位にいるはずなのだけど……………。勇儀は私達鬼が率いた妖怪の山は無くなったと言っていたが、それでも元部下である天狗達が引き継いだ妖怪の山は健在

であると聞いた。その話が本当なら、文以外にも沢山の天狗や山の住人がいるはずなのに……誰の気配もない。

……いや、よそう。考えても仕方がない。決して文が周りの天狗から嫌われてポツチなんだとか思っていない。

さ、さあ！ 私は本来の目的の為に動こうか！ 妖怪の山に華扇と透花がいない事はわかっているのだから、何処か違う場所を探しに行かなければ。早苗や魔理沙といった現地の知り合いも出来てツテがある事だし、まずはそちらから当たろう。

そんな風に前向きに考えて森を歩き出したのがつい1時間前である。

私は今、迷子になっていた。

あーれれえー？ おつかしいぞー？ 一人旅を千年以上続けてきた酒呑くんが迷子になるなんてあり得ないよね？

まるで相手の不自然な言動を煽る様に指摘する発言を心の中で自身に向けて放ちながら、私は一人崩れ落ちていた。

ちやうねん。私、基本的にアテもなく彷徨ってる事が殆どだから、こうして目的を持って探索することは初めてなんや。森の中なんてふらふら彷徨ってるのが普通だったから帰り道とかわからなくなるのは仕方ないねん。

不味いな。文の家を飛び出してからある程度して書き置きするの忘れたと気付いた頃には遅かった。帰り道が全然わからない。これでは今日一日何も見つからなかったとしても、文が帰ってきたらそれに頼ろう大作戦が使えないじゃないか。これだったら大人しく一人家で待っている方が良かった。

「……は、どうなんでしょうか？」

キヨロキヨロと周りを見回しも木、木、木。森に覆われているせいで暗くて、道標になるものが何も無い。これでは鬼探しどころか、人と会う事すら不可能だろう。まあ、理性なき動物や妖怪とは出会えるけど。

「おや狐さん。ここが何処かわかりますかね？」

ちやうど茂みから現れた狐を見つけて声を掛けてみたが無視された。悲しい。

クソが！ 無視するとはいい度胸だな狐！ その気持ち良さそうな尻尾でもモフらせろ！

私はその狐をダツシユで追い掛けたが、案の定脆弱な小鬼である私に野生の動物の脚力に追い付けずにそのまま逃してしまった。

「ハアッ！ ハアッ！ は、早過ぎるっ……！ さすが狐さんっ！」

野郎、手加減というものを知らんのか。こんないたいけな鬼を構ってくれないなんて酷いやつだ。これだから狐は………やはり、動物を飼うなら犬だね。猫も捨てがたいが、昔から犬は忠犬と呼ばれる程度には主人に尽くしてくれる。そういうところが大好きなのだ。それに、犬でなければ狼でもいい。狼も私に従順になってくれる事が多いのだ。それは妖怪でも例外ではなく、私が妖怪の山にいた頃はよく白狼天狗達と一緒にゴロゴロしたものだ。呼べば犬耳と尻尾を嬉しそうに揺らすあの姿が可愛いなのなんのって——

「おい、貴様」

その時、一陣の風が吹いた気がした。今は秋なのか、紅葉の葉っぱが綺麗に吹き荒れる。木々の隙間から射す太陽の光が舞い散る紅葉を照らし、幻想的な光景が私の目に飛び込む。

そして舞い散る紅葉の中心で、白い女の子が一人神秘的に佇んでいた。

いつの間にいたのだろう白い少女。白い髪に赤い瞳の少女は一見人間に見えるが、頭から生えた犬の様な耳と背中に見える大きな白い尻尾が彼女を妖怪だとわからせてくれる。

と言うより私がさつき頭に思い浮かんでいた白狼天狗そのものだ。  
まさか………私が白狼天狗に会いたいと願ったから天の神か何かが褒美に届けてくれたのではないか!?

「面妖な角を持つ女。貴様、妖怪だな？ 何者だ。何処の所屬か」

邪な考えの最中に白狼天狗ちゃんがコンタクトを取りに来た。私は何者だと。どうやら私に一定の興味を持ってくれているらしい。ファーストコンタクトで自己紹介は大事。これ絶対。

しかし、私が何者と聞いてきたか。なるほどなるほど………ふっ、聞かれたならば仕方がない。答えてあげようじゃないか可愛い可愛い白狼天狗ちゃん!

「私の名前は酒呑と申します。この度地底の底から遠路遙々旅に出てきたしがない鬼です」

「なに？ ……貴様、鬼か」

「はい。良ければ貴女のお名前を教えてくださいませんか？」

恐らく彼女は妖怪の山出身なのだろう。つまり、かつて鬼に仕えていた天狗の一人である筈だ。

萃香曰く、今の妖怪の山は天狗が支配しているがそれでも鬼としての権威は残っているらしく、地底に移り住んでいた鬼だと告げれば大体従順になると語っていた。となれば、この幻想郷と呼ばれる見知らぬ土地で頼りにできる妖怪の一人であるという事だ。

迷子になって焦ったが、どうやら私は運が良い。まさか、鬼と仲の良い種族の妖怪に出会えるなんて。

安心から心の中でホッと一息吐いた。それから彼女の自己紹介をよく聞こうと思ったのだけど………何故か目の前にいる白狼天狗ちゃんは黙り込んでしまい、遂には下を向いて俯いてしまった。

「あの、下を向いてどうしたのですか？ ええつと………具合でも悪いのでしょうか？」

彼女の様子が変だったので思わず駆け寄る。仙道の目で生命力を見てみたが特に異常は無さそう。突発的な何か起きたという訳では無さそうなので、彼女の持病か怪我か………。いや、もしかし

たら元上司の鬼に出会って緊張しているのかも。

ふむ。俯いて震えているけど、よく見ても生命力に不安定な所は一つもない。やはり怯えていると見て良いだろう。怯えて俯いちゃうなんて可愛らし……じゃなかった、愛らし……じゃなくて可哀想だ。ここは一つ包容力に定評のある私はその怯えと緊張を解してあげようじゃないか！

「そう怯えなくて大丈夫ですよ。別に取って食べたりなんてしませんから。ほら、怖くない」

安心したまえ白狼天狗ちゃん。こう見えても私は鬼の中で1、2を争う程の良識と優しさを兼ね備えた鬼だ。他の鬼ならいざ知らず、私ならドンと甘えてくれたまえ。

私はそう万感の意を伝える為に腕を広げて彼女を包み込むようにゆっくりと迫った。

すると彼女も私の思いが伝わったのか、私の胸に思いっきり飛び込んできて——えっ？

「あ……うッ……」

ドン！ と、衝撃が私の全身に広がった。合わせてやってくる胸への鋭い痛みと強烈な熱さ。

おかしい。大きな異物を飲み込んだかのような強烈な違和感。吐き気を催すような気持ち悪さだ。痛い。ちよつとでも動く痛くて声すら満足に出せない。

私はこの痛みを知っている。この鋭い痛みは、そう………何かで身体を貫かれた痛みによく似ている。

「なん……でえ………っ？」

勝手に限界まで見開く私の目。その目で私の身体に思いっきり飛び込んできた少女を見る。

恐ろしい顔で私を睨んでいた。恨み辛みが込められた様な感情を剥き出しにしてる訳ではなく、ただただ凍てついた顔で私を睨んでいる。そんな彼女の頬には血のような赤い汚れが付着して——。



「フンッ！」

「ヒギツ!? あ、づッ……………げええ”、え”、え”」

彼女が力強く何かを捻る動作をした。すると私の体内から肉と骨が抉れた様な歪な音が響き、あまりの痛みに視界が真っ白に染まった。

次いで喉から迫り上がってくる水。胃の中にあるものが逆流でもしたかの様に溢れる水が口や鼻から吐き出される。

苦しい。痛い。熱い。気持ち悪い。重い。クラクラする。

入っていた異物が引き抜かれる。粘ついた液体がかき回される音がした。すると、喪失感と共に冷水を当てられた様な冷たさが胸から身体中に掛けて広がっていく気がした。

気がしたただけだ。

そんな感覚を感じるよりも前に、私は肩から脇腹に掛けて再び熱さと痛みを兼ね備えた衝撃に襲われた。

私の体から激しく吐き出される血。全身から力が抜ける。身体を支えられず、崩れ落ちる。

「むう……………なんだこの鬼。あっさり心臓を一突と思えば、これだけで倒れるとは。弱すぎる……………」

少女が何か呟いているのが聞こえた。

髪も服も真っ白だった白狼天狗の少女は、全身から返り血を浴びたかの様に真っ赤な赤色に染まっている。そんな彼女の右手に握られたのは、私の身体を貫き引き裂いた刀。

大刀と呼ばれる刃が大きい刀だった。

「……………マジ?」

なんだ、あのぶつとい刀。

え。私、今あの大きな刀で身体貫かれなかった? 貫かれたよね?

嘘でしょ。てか引き抜かれる時、身体の中ぐりって捻られたよね。

だってメチャクチャ痛かったもん。訳がわからない上に最後、追い打ち掛けられたし。てか現在継続で痛い。

ああッ、メチャクチャ血イ流れてる! ヤバいどーしよ!?! このま

まじや死んじやう！ セクハラしようとしたら撃退されて死ぬとか  
情け無い事この上ないよ！

「うぐぐぐ……」

ズルズルと地面に身体を擦り付けながら移動する私。

ヤベエよ幻想郷。舐めてた。妖怪の楽園とか聞いてたからほんわかしてたのを想像していたら予想外の反撃に会いました。勇儀が私に合わないとか言う訳だよ。まさか、ハグすら許されない地底以上の修羅の世界だったとは……………。

「フン……既に虫の息か。どうせここで屍を晒すなら河童の餌にでもした方がいいだろう」

後ろからそんな声が聞こえた。

マジい！ 私、このままだと河童の餌にされる！ メチャクチャキレられてるでござる。早く逃げないとツ。

「せ、仙法……………風水、じゅっ……………」

私の意識が遠くなる。落ちる様に、下へ下へと潜り込む。

この地に流れる力の流れ。大地を潤す血脈を探し出す。

「見つ、けました……………『同化』」

私の身体がドロリと溶け出した。着ていた服も、右手に持つ瓢箪もドロドロに溶け出す。メチャクチャ気持ち悪い見た目と感触であるが背に腹は代えられない。

胸が痛い。チビリそうである。胸に風穴空いてるのに身体に負担の掛かる仙術使うとか、マジ頭おかしくなりそうだけど……………うおおおツ。逃げねーと殺される!!

「な、なんだこれは!? くっ……………まて!」

背後であの少女の静止の声が聞こえたが無視する。てか応えてられる余裕がない。頭がクラクラして意識が飛びそうになるのを堪えて、私は目的の地面の底へと逃げる。

あの場所へ。龍脈が流れる場所まで辿り着ければ何とかなる。

そうして逃げた先で、私の頭は真っ暗になった。



「はあ!? 母さんが帰ってきていない!? どう言うことだ!!」

地の底の更に底。今は捨てられし旧地獄。そこにある都市部の中央に立つ、最も大きく最も豪華絢爛な建物がその怒鳴り声だけで揺れ動いた。

声の主は勇儀。あの宴会から酔い潰れて、さとり達に送り届けられから既に半日が経過した後である。

ここ最近酒呑が帰ってきたから殆ど毎日酔い潰れ、半月前までは千年も味わっていなかった二日酔いの痛みに、勇儀は「慣れ」を感じていた。

ガンガンと響く様に痛む頭に苦笑しながら起きた勇儀は性懲りも無く今日の夜も飲もうと決めて、多分嫌がるだろう酒呑を誘いに彼女を探した。しかし何処にも居なかった。部屋にも、賭博場にも。風呂や厠等も探したが見つからず、そうして配下の鬼に聞けば帰ってきていないと言う返事が返ってきたのだ。

「へい。姐さん達をあの地霊殿の連中が送って来たんですが……ここに大将はいませんでした……あの、何か問題が——」

「大有りに決まってるだろうが!!」  
頭痛と焦りのせいも合間ってか、彼女の怒声に建物が軋んだ。

「今すぐ野郎共を集めな! 旧都にいる奴等もだ!」

「へ、へい!!」

(クソツ、やらかした!!)

勇儀の様子に恐れて素早く動き出す鬼達。目の前から誰も居なくなった勇儀は暫く立ったままであったが、突然苛立ちを表す様に硬く握っていた拳を壁に叩き付けた。

その一撃で壁諸共に建物の上層部一角が全て吹き飛び、その余波が旧都の街並みを荒らす。その光景を見た鬼達は更に震え上がり、急い

で配下の妖怪達を集めに向かう。

(どうして、なんてどうでも良い。母さんが行きたい所に行きたいなら止めはしないさ。だけど、なんで私は母さんの隣にいないんだ!!) 昨日の自分に勇儀は腹を立てていた。何故酒呑を放っておいて酔い潰れていたのかと。いくら鬼の四天王が二人揃っていたとは言え、幻想郷は今敵地に近い状態なのだ。あんな所で酔い潰れている余裕なんて無かった。

(気を緩め過ぎてた！ 母さんは今、とんでもなく弱っているのに！) 普段なら勇儀もここまで焦りはしなかった。敵地だろうが地獄だろうが、盛大に飲み明かして豪快に楽しむ。だけど今は時期が悪かった。

勇儀は知ってしまったのだ。酒呑の実力を、彼女の弱さを。

最初に違和感を持ったのは酒呑と再会した翌日だった。どうして、酒呑はあんなにも回りくどいやり方で賭博場を荒らしたのだろうか。勿論、弥助がセコイ真似をしたからだと言儀は聞いているし、酒呑が力を見せつける事を毛嫌いしているのも知っていた。だから、敢えてそのやり方に乗ったこともわかっている。

ただ一つだけ解せないのが、友達となったらしいパルスィが人質に取られたのにその状態のまま賭けを続けていたことだ。

本来の彼女であれば、自身の懐に入った者が危険に陥った時にはすぐに助けるだろう。その上で相手の土俵に立った筈だと。それはただ勇儀の勘違いであるが、とにかく勇儀は疑問を持った。

ただそれはほんのキツカケに過ぎない。酒呑が勝つ自信があったからこそ放置した可能性もある。

しかし、決定的だったのは弥助との決闘の後だった。

今の鬼達は昔と違う。酒呑がカリスマで纏め上げた鬼の軍団ではなく、勇儀の力に恐れて従っているだけの烏合の集となった。だからこそあの場で酒呑はその場にいる全員を咎め、許すチャンスを与えた。勇儀に殺せと命令しながら、勇儀が本当に実行しない様に勇儀に凭れ掛かって全員の命を助けた。

だけどあの時。勇儀は寄り添う様に倒れた酒呑に触れる事で、その

身体がボロボロになっている事を知った。

(母さんは今、力を使えない。力を使えば最後………私達のせいだ。母さんがあの日、犠牲になったからこんな事に。きっとその代償で、力を使ったら身体が………)

勇儀は酒呑の強さを知ってしまった。だがそれで愛想を尽かす程、彼女は落ちぶれてはいなかった。

酒呑が弱いなら護る。どんな苦難が訪れようとも、その身を犠牲にしても絶対に護り抜く。再会してからその想いは変わっておらず、寧ろそんな状態の今だからこそ想いは増すばかり。

酒呑の為ならどんな非道でも行おう。酒呑の為なら死ぬまで盾になろう。酒呑の為なら幾度だって駆けつけ、立ち上がり、その力になろう。

酒呑の為なら。酒呑の為なら。

「待ってな母さん。私は母さんの力だ。この身の全てが母さんの一部だ。

どんな事をしてでも、絶対に護る」

勇儀は配下の妖怪達を引き連れ、地上——幻想郷へと向かった。

今の彼女を止められる者は誰もいない。

## 合体！ 魔理沙☆少女

「ハッ!!」

胸からお腹にかけて感じた激痛に私は目を見開いた。

どうやら意識を失っていたらしい。何がなんだかわからないが、とりあえず身体が死ぬほど痛い事だけは確かである。

「酒呑！ 起きたのか!! よ、良かったあ……………」

ふと、私の顔を覗き込んでくる愛くるしい顔に私と同じ金髪の少女と目が合った。活発そうで、けどなんだか泣かして虐めたくなる様な……………あつといけない私の性癖が漏れるところだった。

つまりそこには、最近まで甲斐甲斐しくお世話していた私の魔理沙がいた。

「本当に死んだと思ったんだぞ……………私の家の前で腹に穴開けて血塗れで倒れてるなんて、心臓に悪いぜ……………」

心配した様な顔で私を見てくる魔理沙。目を潤ませ今にも泣きそうな彼女は、やはり見えていて飽きないなあと邪な考えをさせてくれる。なんて酷い。

「魔理沙……………口調がまた崩れてますよ」

「あつ、ごめんなさい……………」

「ふ、ふつ……………少し、意地悪してしまいましたね。私も、それどころではありませんし……………普段通りで、構いませんよ……………」

思わず胸に抱き寄せてメチャクチャ甘やかしたくなるのを我慢し、彼女の頭に手を乗せて優しくヨシヨシするのに止めた。

毎回思うけど、なんでこの子いつも乱暴な口調で話すのだろうか？

確かに活発な見た目の魔理沙には合っているけれども、女の端くれとして、やっぱり可愛い子にはそう言った乱雑な様子を嗜めたくなるのだ。特に、普段は男前な彼女が私の前ではお淑やかで女の子らしく染まっていく事になってなってみれば……………ぐふふ。考えただけでニヤけちゃうわ。

少しずつで良い。少しずつ私色に染めよう。飴と鞭は使いよう……………私、重傷なのになんてくだらない考えをしているのだろうか

か。自分自身に呆れそう。でも止められない止まらない!!

そうやって邪な感情を膨らませながら頭を撫でていた私だが、少しだけ周りの様子が気になり視線だけ辺りを見回した。

なにやら色々とゴチャついた部屋だった。恐らく料理器具にキノコや変な生き物が吊るされた台所の様な箇所や、所狭しと並べられた本が収まる棚に、何やら河童が作った様な機械や部品の数々。そして時折垣間見える女の子らしいぬいぐるみ。

最後に、中央に置かれた絶対に料理で使わねーだろって思える巨大な鍋。

うーん、カオスだな。

「ここは、何処なんでしょうか?」

「私の家だぜ。酒呑は玄関扉の前で倒れてたんだ。覚えてないのか?」

「ええ………逃げるので必死でしたので」

そうか、ここは魔理沙の部屋か。なるほど………確かに魔法使いらしい部屋だろう。魔法使いらしい部屋ってなんだって言われたらおしまいだが、私の想像で魔女っぽい部屋がこんな感じだからなんか納得出来た。

「酒呑………こんな怪我して、一体何があつたんだ?」

うっ………。

部屋を観察していたら魔理沙から怪我についての事情を聞かれました。

まあ、そりゃあ気になりますか。自分の家の前に瀕死の鬼が倒れていたら私だってなんかの事件を疑います。その事件に巻き込まれるんじゃないかと不安でいっぱいになります。

ただ………正直言い出し辛い。昔いた組織の元部下にあつてセクハラしようとしたら、なんか殺され掛けたって………ダサくない? めちゃくちゃ恥ずかしい。せつかく魔理沙の前ではカツコいいお姉さんキャラでいこうと思ってるのにそんな事実話したら幻滅されちゃうよ。

これは……やはり事実の隠蔽をしなければな。

「……実は先程、昔私がいた組織に向向いていたんです。多分知っているとありますが、妖怪の山って組織名です」

「お、知ってるぜ。文屋とか椀とか天狗達が支配してる山だろ？」

へえ、昔は酒呑もいたんだな」

「私の心は今もそこにいるつもりなんですがね……そう思っていた私はやはり古い妖怪なのでしょう……」

私はあくまで被害者ヅラで魔理沙に語り掛ける事にした。自分は無実だと、何も悪くないと弁明する言葉を頭の中でメチャクチャ考え始める。

まるで何か良からぬことがあったかの様に、神妙な面持ちで。かつ、悲壮感を漂わせる様に。

「はつきり言います。恐らく私は妖怪の山の誰かに命を狙われています。それが一部の者かどうかは分かりませんが……私達鬼をよく思わない相当上の妖怪か。最低でも幹部の者がいるかもしれません」  
それっぽく陰謀論を取り敢えず魔理沙に告げる事にしたのだった。

ちなみに恐らくとか、かもしれないとか使ってるから嘘吐いてるわけじゃないよ？ 断言したら嘘だけど、もしかしたらそんな事があるかもしれないよね？ 希望的観測論を取り敢えず言ってみただけだから。だから私は嘘をついてないし、事実無根かもしれない発言に罪悪感を覚えることはありません!!

「私にこの傷を負わせたのは白狼天狗の者でした。しかし、私の記憶では白狼天狗はそこまで高い地位にいた覚えはありません。実際、今はどうなのでしょう？」

「いや、多分変わりは無いんだぜ。確か哨戒？ って言ったか。見回りして、山に入った奴等を追い出す事に力を入れてる筈だ。」

「なるほど……尚更おかしいですね。彼女達は命令に忠実な筈です。本来ならこの様な独断専行はしない。なのに、なんの警告もなく突然襲いかかって来た……もしかしたら、その者は私を殺す様命



令されたのかもしれませんが。実際私も身内とあつて油断してヤラレてしまいましたから」

実際は私の邪な視線に気付いて普通に危険人物として認知されたからの可能性が高いけど……それはそれで危険な輩は排除って命令されてたら、上の誰かが私（危険な輩）を狙っているって意味にも取れるな。うん、間違つた事は言っていない。

「昔支配していた鬼が戻つて来たから、自分達の地位が危うくなるのを恐れてつて事か……確かに陰湿な天狗が考えそうなことだな」

おお……なんか適当にでつち上げた話だったけど、言つてみるもんだね。魔理沙もなんかウンウン唸りながら私の言葉を自分の頭に落とし込んで納得し始めている。これは堕ちたわ。チョロすぎる。魔理沙が怖い変態に騙されて誘拐されないか私、心配だよ……えっ？ つい最近、詐欺紛いのマッチポンプで純粋な少女を洗脳した危険な思想を持つ変態がいたつて？ なにそれ。そんなヤバい奴がいるの？ 怖あ……。

まあそれは置いておこう。後で気をつける様言えばいいし。それより私のダサい行いが魔理沙にバレる事は防げたわけだし、後は彼女に今の私の事を黙つておいてもらつて、この話が周りに広がらなければ全て解決だ。

「ですから魔理沙……私が殺されそうになつた事を、そして私が貴女に匿つてもらつてる事を内緒にしておいてもらえませんか？」

「ん？ それは、敵を欺く為にか？」

「そうです。この地において、私は誰が味方で誰が敵なのか現状わかりません。ならば情報は出来るだけ敵側に伝えない様にしなければ……貴女への負担が重くなる事は重々承知しています。本当に申し訳ない。ですが……私は今孤立無援です。貴女だけが頼りなんです。だから、どうか……私を助けてくれませんか？」

もしかしくなくても、私はヒモの才能を持っているのかもしれない。  
「ほら酒呑。ご飯だぜ——起きれないから食べさせてくれって？  
猫舌だからフーフーも？ ……まったく、お前は甘えんぼさんだな」

「身体も拭かないとだよな。起こすとき、ちよつと痛いかもしれないけど我慢してくれ……………あつ、痛かったか!? ご、ごめん。次はもつとゆつくりするから許してくれ……………怒ってない？ そっか、良かった……………」

「さて、夜も遅いし私も寝るか……………何処で寝るのかって？ そりゃあ床だ。ベッドは一つしかないから……………一緒に寝ようって、お前お子ちゃまかよ。まったくしょうがないなあ……………」

魔理沙がめちや甲斐甲斐しい。メチャクチャ甘やかしてくれる。

ていうか、魔理沙。きみ、片脚無いんだよね？ いくら傷が塞がっているって言っても君も重傷の患者なんだからそんなに動いたら駄目だよ。いや、魔法で浮くからヘーキって……………うーん。確かに家で生活する分には支障無さそうだけど、いくらなんでも私の世話までしなくて良いんだよ？ いや、私も甘えてるから言えた義理じや無いんだけど。凄く罪悪感が……………

隣で眠る魔理沙の頭を撫でながら、私はしばし思考に耽る事にした。

今日魔理沙の生活を見て思った事は、やはり片脚が無いと不便そうだなと言う事だ。片足が無いせいで重心が傾いているのか、魔法で浮いているにもかかわらずふらふらしている。

一応、これでも落ち着いた方ではあるのだ。まだ全身の包帯が取れていない時は立ち上がる事すらままならず、加えて脚の幻肢痛に魔理沙はずつと苦しんでいた。

幻肢痛については荒療治として、魔理沙に『元々片脚を失っている』と言いついては意識を変えさせて症状を無くさせたが、身体はそうはいかない。

むしろ本人は片脚の状態が慣れていると思ひ込んでしまつたが為に、随分と危なっかしい。早急になんとかしてあげなければならな

い。

次の日、傷もだいぶ癒えて動けるようになったので、私は改めて魔理沙と向き合い、改めて感謝の言葉を告げた。

「さて、魔理沙。先日は色々ゴタゴタしてしまい、感謝の言葉を告げられませんでしたが……改めてお礼を言わせてください。目的の一つである地上への復帰は貴女と早苗のお陰で達成できました。それにお世話までしていただいて……本当にありがとうございます」「いや、そんなっ！ 私も酒呑にはお世話になったし！」

「それでも、です。私は貴女に大きな恩を貰いました」

「そこでその恩を返す為にも提案があると前置きして、彼女にその話を告げる。」

「あの博麗霊夢を超える程の力はまだ無理ですが……貴女の長年の悲願である、その失われた脚を治す事は可能です」

「どうしますか？」と尋ねれば、魔理沙は狐につままれたような顔を浮かべた。

失われた脚を治す。それは難しいようであり、条件が揃えば意外とそこまで難しい事ではない。なにせ私は妖怪であり、かつ仙道を極めた至高の鬼であるから。例えば起こす奇跡が華扇の何万分の一以下でありシヨボかろうとも、私はそんな華扇の師匠である。

力が無くとも、用いる技術は多岐に渡る。

まあ、前提条件としてくっ付ける脚が無いと出来ないんですけどね。いきなり脚を生やすとかそんなトカゲの尻尾みたいな真似出来ませんよ？ なんせ私、沢山術は持つてても起こる結果が『え？ それ術使わないで鬼の力で解決した方が良くない？』なんて師匠からは良く言われたくらいだから、さっ！

「ほ、ホントなのか酒呑?! 私の脚が治るのか!」

「はい。ただ以前の様には直ぐに動かせないかもしれませんが、拒絶反応が出たりしないとも限りません。これに懲りたら、普段の様な乱雑な行いは止めましょう。例えば、まずはその口調などから変えてい

きましようか」

「うっ……わ、わかりました……だぜ」

「ふふっ。そんなに落ち込まないでください。私と2人っきりの時だけいいので、ね？」

私が悪戯っぽくそう言えば、魔理沙はコクリと頷いた。

よっしゃ！ そうなりやあ、魔理沙の為にもいっちょ奇跡起こしたるか！

いやー、本当なら早く治してあげたかったんだけど地底では出来なかったからねー。仙術は基本的に自然の力とか色々借りないと出来ないから、あの旧地獄世界だと力が足りないんだよ。

それに偶然なのか、私がここまで逃げてきたおかげで地脈の流れが魔理沙の家に繋がってくれたし、条件は揃ってる。

というわけで始めますか。酒呑の、『ドキッ！ 四肢が挽げちやった。でも大丈夫！ 誰でも簡単、三分で出来る四肢のくっ付け方』をな。

はい、材料として保存しておいた魔理沙の片脚と、霊符、龍脈、そして最も重要な『水龍の逆鱗』と『水龍の心臓』を用意します。

まず逆鱗を裏っ返しにして裏面全体に接着用の霊符を貼っていきます。次に魔理沙の片脚の表面に龍の逆鱗を付けて、離れない様に霊符を周りに貼っていきます。今回は太腿から千切れているので、逆鱗は膝小僧部分に貼り付けましょう。

「魔理沙。包帯を解いて傷口部分を私に向けてください」

「わ、わかったぜ……」

助手の魔理沙くんに患部の包帯を解いて貰っている間に、私は龍脈を引っ張って来ましょう。とは言っても、昨日私がこの近くまで地脈を引いていた様なので特に時間も苦労も掛からない。人差し指をちよいちよいって曲げて地脈のエネルギー……つまり龍脈を操り、この真下に龍穴を作る。

この工程こそが最も重要な事なんだよ。地底だと龍脈が流れて無かったから、そもそも龍穴を作る事ができなかった……。龍穴は龍脈が噴き出す出口。大地のエネルギーが湧き出す間欠泉の様な物だ。

この穴を作らなければ龍脈を取り出せない。そしてエネルギーが無ければ術を発動させる為の媒体が足りないのだ。

その理屈だとなんでお前や華扇は普段から術を発動できてるんだって言うと思うけど、それは簡単な事である。私達は妖怪………それも、災害の化身とも言われた鬼である。私達の身体や妖気は自然エネルギーに近いものである。だから龍脈無しで仙術が使える。

………んで、私は妖気が極端に少ないのか何なのかで使えないから、仕方なく周りに漂ってる薄つつつすいエネルギーで補っているわけだ。あと高度な術を使うときは勿体無いけど酒も媒体にしてる。本当に勿体無いけど。

閑話休題。

龍脈が溢れ出てるこの龍穴の場に限り、私は今華扇以上の仙術が使えると言うわけである。ヨッ！ 酒呑ちゃんカッコいい！！

「魔理沙。コレを傷口に当てて押さえ付けていてください」

「うええ………なんだこの気持ち悪いの………」

魔理沙に龍の心臓を渡して、太腿と脚の間にくっ付けて抑えて貰って………あ！ 忘れてた！

「いけないいけない。媒体のお酒を………」

お酒を………

「………酒呑？ どうしたんだ？」

「………いえ、なんでも………ありません」

——ヤバい。肝心なことを忘れてた。これから使う仙術にはお酒が必要だったのだ。それも『栄え』が宿った良質栄え水な酒が。

「………」

う、うくん………これはしくじった。酒呑ちゃん、珍しく凡ミスした。

一昨日の宴の日、私は持っていたお酒全てを大盤振る舞いしてしまったのだ。コツコツと集めた秘蔵の酒も全部。

やつちやったなあ………でも、ここまで来て魔理沙に『実はお酒が無くて脚治せませんでした。お酒持ってくるまで待つてクレメ

ンス!!』なんて言えるはず無いし……………。

仕方ない。ここは右手にぶら下がってるお酒でも使おう。魔理沙の為だし、流石に勿体ないとか言ってるんじゃないよね。私と同じ年月を歩んできたんだから。『栄え』も十分集まってるでしょ! なあ相棒!! 年月経てば集まるかなんて知らんけどさ! てかこの間は役に立たなかったんだから、今回は役に立てよ。

と言うわけで、お猪口に一杯分を私の大事なお酒を……………くっつ、なんて良い匂いなんだ! の、飲んでえ! これ一杯で私は甘美な味と酔いを楽しめると言うのに……………くそっ! 魔理沙の為だ!

私は懐からサングラスを取り出して目に掛けて、術を行使し始めた。

「えっ、なにそのメガ」

「——仙法・尸解術『過活性』」

「うわっ!? なんだこれ! 私の足が熱い!! それに眩しい!!」

龍脈のエネルギーを魔理沙と脚に叩き込んでいき、生物としての活性を促す。すると彼女の脚が発光し、龍の心臓が鼓動を開始し始める。

うん、気持ち悪い。

「……………地仙術『因果の楔』」

見た目が気持ち悪いのを我慢して術を唱え続ける。すると、龍の心臓から迫り出すように肉が生え、魔理沙の脚を包み込み始めた。

「ひあっ!? しゅ、酒呑!? なんだこれ!! あぐっ、ああああああ!!!」

まるで彼女の脚を取り込むように、侵食する様に増え続ける肉が魔理沙の脚を覆っていく。魔理沙の悲鳴が部屋中に響き渡り、それを聞いた私の額にも冷や汗が伝う。

な、なんて気持ち悪い光景だ。いや、予想はしていたけど改めてそう思わざるを得ない。

今、魔理沙の脚は活性化された龍の心臓によって取り込まれ始めている。龍脈を叩き込んだせいだ。生命力の高過ぎる龍は心臓一つでも生き続ける。ただ、心臓一つしか無い為に新たな外皮を得ようと必

死なのだ。言わば暴走状態。

このまま放置すると脚がくっつくどころか魔理沙の身体が龍の心臓に取り込まれてしまう。なのでそれを抑え込む為に新しい仙術が必要になってくる。

私はお猪口一杯に入った酒を膨れ上がる肉の塊に回しかけるように振るった。

「鬼仙術『鬼龍の宝印』」

本日最高潮の発光である。眩しすぎて暗視越しなのに目を瞑ってしまいそうだ。マジでグラサン掛けておいて良かったー……………。

ピカアアアアアアアアア!!! つてくらいに光り続けた魔理沙の脚。その発光が収まり始めると、出来上がったソレが露わになる。

「お、おお……………」

思わず私は感嘆の声を漏らしながら、掛けてたグラサンを外して観察する。

くっ付いた魔理沙の脚。それはまるで白魚の様に白く美しく、ちよつとエロティックな太腿だった。何がエロいかと言うと、千切れていた部分に龍が巻き付いた線画の刺青が刻まれていたのだ。ちなみに、なんか知らないけど魔理沙の目から光が失われているのもポイントである。所謂レイプ目ってやつか……………イケナイ気持ちになつちやうな。

ちよつと魔理沙の様子に興奮しながらもう一度魔理沙の足に目を向ける。太腿がちゃんとかくっ付いたのはわかったけど、他に問題が無いとも限らないからね。もう一度注意深く――

私はここでとある事に気付いた。

龍の逆鱗は流れに反る様に生えている。だから逆立つ様に鱗が伸び、鋭利な先端が天に向いている。膝に付いたその逆鱗は多少違和感はあるだろうが仕方のない事なのだ。

しかし……………何故か膝部分に貼った龍の逆鱗が無くなっていて。鬼の角みみたいなトンガリが膝小僧から反るように飛び出している。

……………はて、なんだろうかこのトンガリは。

## 戦渦

博麗霊夢は苛立っていた。朝起きて日課の賽銭箱チェックはせずに昼間まで不貞寝。起きて昼飯という名の朝飯を食べると、普通の巫女としてあり得ないほどダラダラして、偶にやって来る吸血鬼を弾幕で追い払い。何やら神妙な顔で説得して来る人形師や、焦った様子で尋ねてくる文屋を邪険にして一日を過ごしていた。

何故そんなにも苛立っているのか。それは確実にあの宴で起きた出来事が原因だろう。あの日から既に2日が経ち、彼女の機嫌はどんどん悪化していく。

「はあ……………クツソ暇だわ。良いことね。魔理沙や早苗がいないだけでウチが静かだわ。後はあのアホ吸血鬼と面倒臭いアリス、あと煩い鴉が来なければ凄いい嬉しいのに」

畳の上で横になり煎餅を貪るダメ人間。彼女にとって至福の一時である筈の今、その声色は不機嫌一色。明らかに意識が何かに引きずられている。

博麗神社はあい変わらず閑散としているが、それでも訪れる者達がないわけではない。参拝客でもなければ里の人達でもない、能力者や妖怪と言った普通とはかけ離れた者達しか訪れない。

そして今日もまた常識とはかけ離れた者がやってくる。

「ごきげんよう霊夢。今日こそ私の物になってくれる決心はついたかしら?」

「……………はあ。ホントに鬱陶しいわ……………」

いつものようにふざけた用事でやって来た吸血鬼に霊夢は溜息を吐いた。そんな様子の彼女に吸血鬼——レミリア・スカーレットは眉を顰めた。

「む、今日はいつにも増して不機嫌ね。もしかして……………あの日?」

「よし、祓<sup>コロス</sup>うか」

「フツ、凶星かしら? まあでもちようど良いわ。実力で貴女を私の物にしてあげる」

霊夢立ち上がると素早く祓棒を構えてレミリアに殺気を向ける。



木端妖怪ならばその視線だけで滅してしまいそうなソレを、レミリアは気持ち悪い笑みを浮かべながら涼しげに受け止め、悠然と構えた。空気が冷え切り、圧迫感とその場に充満し始める。博麗神社近くにいた小動物が危機を察して慌てて逃げ出した。

いつもより少し過激な弾幕勝負が始まる。その直後。「不味いことになったわ霊夢！」

2人が同時に動こうとした時、突然2人の間に誰かが割って入った。

「ッ、アリス！」

「人形使いか。私達の蜜月を邪魔するとは良い度胸だな」

霊夢が御祓棒に込めていた霊力を霧散させ、レミリアが苛立たしげに周囲の魔力を消し去って、珍しく慌てた様子のアリスに目を向ける。

どうしてくれると言いたげなレミリアの不機嫌な視線を、しかしアリスは構うことなく無視して霊夢へと向き直った。

「魔理沙が……魔理沙が何処かに居なくなってしまったの!!」

「……はあ? なによそれ。いつものことじゃない」

普段の冷静沈着とはかけ離れたアリスの慌て様に霊夢はおざなりに反応しながらも、自分の言葉を否定する様に顔を顰めた。

彼女の直感がざわめき立てるのだ。これから何か良からぬことが起きると。異変……それも彼女にとって酷く面倒な異変が舞い込んでくることを本能で理解してしまった。

その直感が正しいことを証明するかの様に、アリスは続け様にこう告げる。

「魔力爆発と一緒に魔理沙が消えたのよ! ミニ八卦炉も箒も持たずに、あの足で何処かに!!」

同時刻、妖怪の山中腹にて。

「ひいひい……っ!!」

河童、白狼天狗、鴉天狗、大天狗……妖怪の山にてヒエラルキーの上に位置する者達は今まで何者も恐れる事など無かった。妖怪の山に住む木端妖怪達に恐れられ、敬われ、君臨していた。

それが今、たった数十匹の鬼の群れに容赦なく薙ぎ倒され……ある者は逃げ出し、ある者は慄き蹲り、ある者は恐れのみあまり気を失う者まで。鬼の群れによって妖怪の山が既に半分まで支配されかけていた。

「ちっ……妖怪の山も墮ちたもんだな。昔の方が断然骨があつたつてのに……オラ！ 妖怪の山の精銳種族とか宣つてた天狗の制圧力はどうした!? 腐つても天狗だろうに話にならん！ 天魔をさつさと呼んでこい!!」

鬼の群れの先頭に立つ勇儀が吠えた。普段の気の良い大らかな態度は鳴りを潜め、怒りを露わに妖怪の山を侵略する。

そんな彼女の様子に大天狗を含めた殆どの天狗達が恐れる中、勇儀と正面から相對している射命丸文が冷や汗を流しながらなんとか彼女の進行を押し留めようと頑張っていた。

「ちよ、勇儀様。ホント、マジで急にどうしたんですか!? 地底との不可侵条約は!? 妖怪の山への不干渉条約は!」

「知るか！ そんなことよりも母さんが大事だ！ 邪魔をするならお前でも容赦しないで射命丸!!」

「ひえ〜!!」

勇儀の周りをウロチョロと忙しなく纏わりつく文。それに対して勇儀が拳を振るうが、幻想郷1、2を争う彼女のスピードに回避されて空振るばかり。そこに適当な弾幕を勇儀を含めた鬼達にバラ撒き、なんとか文は鬼の進行を足止めしていた。

しかし文1人では限界がある。既に妖怪の山の本丸が見える位置まで侵入を許してしまっていた。勇儀がそこに辿り着けばもはや本丸は攻め落とされたも同然だろう。彼女の腕の一薙ぎで妖怪の山の象徴は崩壊するのだから。

「そこまでだ星熊」

そんな暴挙を、この山の主が赦す筈がない。突如として勇儀を含めた鬼達に凄まじい突風が襲い掛かる。

巨大な竜巻をも超える、爆発に近い風。超高速で迫る大気の壁が鬼達を妖怪の山の麓まで一瞬で吹き飛ばす。もはや悲鳴を上げることすら許さず、勇儀を除く配下の鬼達は強制的に山を下山させられるのだった。

唯一耐えられたのは、大気の壁を拳で叩き壊した勇儀のみ。その彼女も暴風を完全に防ぎ切る事叶わず、その身体には深い裂傷がいくつも刻まれていた。

風を叩く羽ばたきの音。ヒラヒラと舞う銀の羽根。

勇儀は上空に目を向けて言った。

「……相変わらず、礼儀がなっちゃいな天魔」

「その馬鹿力は変わらずか、星熊」

応えるのは現妖怪の山の筆頭にして最強の妖、天魔。

かつて鬼の四天王と同等以上の力を持つと言われた、鬼でもないのにあの『酒呑』と盟友となった唯一の存在である。

そんな彼女が今、明確な敵対者として勇儀を天から見下ろしていた。

「久しぶりだな天魔。どうだ、再会を祝して一緒に呑まないか？」

「我が領地にここまで侵入しておいて良くそんな事を宣えるな。相変わらず不遜で自分勝手な鬼だ」

「そう言うなって。私はただお前さんに聞きたいことがあって来ただけだ。攻撃してきたのはそっちが最初だぞ？」

「貴様の頭は味噌か何かでも詰まっているのか？ 五百年前、鬼は妖怪の山に立ち入ることすら許さぬ事を私は告げ、お前はそれを了承した………忘れたとは言わせない」

「鬼でもないのに、あんな口約束よく覚えてるなあー」

かつて勇儀達が地底へと移住する際、天魔と勇儀は約束を交わした。

妖怪の山の全権利を天魔へ譲り、妖怪の山に害となる妖怪を連れて地底へと旅立つ。その際、天狗と鬼のかつての禍根を残さない為に、二度と天狗と鬼はお互いの領地へと踏み入らない事とする。

そんな取り決めが二人の間で行われたのだ。

本来なら鬼である勇儀は約束をした以上絶対に破らない。天魔が妖怪の山のトップである間は、絶対に。

けれども、それはかつての絶対君主が失われたからこそその盟約。本当の主が帰ってきたならば、もう妖怪の山は天狗の領地では無い。

「だけどさあ天魔。それはお前さんが妖怪の山の頭である間だけさ。いったよなあ？ お前に妖怪の山の全権利を譲っている間は、この山に立ち寄らないって」

「……………」

「その様子じゃ射命丸の奴はお前にまだ話してないのか？ ま、そんならそれで良いや。聞いて驚けよ天魔。実は——」

「かつての鬼、酒吞が帰ってきた…………でも言いたいのか貴様は？」

勇儀の言葉を遮り、天魔はそう告げた。

勇儀の目が僅かに細まり額に小さな血管が浮き出る。

「あん？」

「星熊。お前は勘違いをしている。確かに私は昔、最強の妖怪と謳われた酒吞様に仕えていた。かつての仲間としての意識も、忠誠心も覚えてるし、恩義もある。…………だがそれは過去であり、今ではない」

天魔の冷たく心が失われた様な言葉が粛々と紡がれる。そこに表情の変化は無く、淡々とした機械の様に色もなく。

ただ、審判を下す様に天空からそこにある事実を告げる。

「彼女はもう妖怪の山の長ではない。そして、鬼の種族は妖怪の山の敵である。それがこの山の掟。慈悲はなく、例外も無い。故に滅するのが私の宿命」

勇儀に対して天魔は冷徹な殺意を向けていた。かつての盟友にして同じ組織に属していた旧知の間柄とは思えない程に、鋭くも恐ろしい殺気を。

そんな天魔の態度に勇儀は当然疑問を覚えた。確かに二人は特別仲が良かった訳ではない。どちらも主に認められたことから戦場では背中を任せられる程度には信頼があったし、仲間だと勇儀は思っていた。なのに今の天魔は彼女に対してなんの情も向けてはいない。

「…………天狗如きが鬼に逆らおうってのかい？」

「舐めるな鬼風情が。かつての我等は貴様等鬼の種族に忠誠を誓った訳ではない。なにより……………」

天魔は腰に差していた紅い傘を手に持ち、それを広げる。

空気を叩く音共に広がる紅、紅、紅。不規則な風が彼岸の花を舞い散らせ、白銀の色彩音を奏でる。

速さが武器の天狗族。傘など持って戦うなど天性の武器を捨てるにふさわしき愚行だと、天狗の誰もが思うだろう。加えて鬼相手にその行いは馬鹿を通り越して、死に行く道化その者。

「現妖怪の山当主はこの私、天魔だ。鬼の四天王が一匹何するものぞ。分を弁えろ痴れ者が」

だと言うのに圧倒的なまでの絶対的な君臨者がそこにいた。その態度に一片の弱さを感じず、ただただ敵対者を蹂躪する覇者の風格を纏う妖怪の山の長がいた。

「…………くはっ」

大妖怪であろうとも恐れるだろうその妖気。気配でわかるその闘気。何者も与する強さ。

それらを前にして尚、勇儀は笑った。

「おもしれえ。前から私もお前とは死合を試みたかったんだ」

圧倒的強者であろうともその前に立つのは鬼の四天王が一人、星熊勇儀。硬く握られた拳は山を砕き、海を割り、理を壊す『怪力乱神』の力。

衝突は一瞬。されどその瞬間に幻想郷を覆う結界に亀裂が迸った。その余波は巨大で偉大な厚い壁を震えさせ、外の世界まで局地的な地割れと突風を起こしたらしい。

「ふむ……………揺れましたね」

「……………ああ、そうだな」

風を切り空を駆ける中、ふと私は振動を感じた気がした。

はて……………何故か懐かしい様な、それでいてトラウマが呼び起こされた様な寒気と怖気を感じたが気のせいだろうか。でも魔理沙も何か感じてる様だし、やっぱり何かあったか。うーん……………わからん。ま、わからない物は置いておこう。そんなこといつまで考えてても仕方のない事だ。

「それにしても大分飛ぶのが上手くなりましたね魔理沙。私は嬉しいです」

「……………酒呑のおかげだぜ。いつも本当にありがとうな」

あら可愛い。素直に感謝を言われるのはとても嬉しい。なんだか昔の華扇を思い出す。

まあ、可愛いことは別にして少し残念なことはあるが。

「……………はあ。結局貴女の言葉遣いは直せませんでした。何故なんでしょうね？」

「……………？ なんのことを言ってるんだぜ酒呑」

姿の変わった魔理沙に背負われながら、私は落胆の感情を隠せなかった。

いや、背負われて運んでもらってるのに何贅沢言うてんだって思いかもしれないその諸君。考えてみてほしい。結構苦勞して彼女の脚を治したのだ。私の大事なお酒も使って……………私の大事なお酒も使って!! ここ大事だから2回言いました。

まあとにかく、メチャクチャ頑張って治したんだから、ちよつとくらい私のお願いを聞いてくれても良いのに……………。魔理沙ったら、反

抗期なのか言葉遣いの話になるとこうして知らんぷりするようになってしまった。

「もういいです。それより箒なしで飛ぶのは大分上手くなりましたけど、足に違和感はありませんか？」

ジェット噴射の用に脚から炎を噴き出す様子を見た。

相変わらずアホみたいないな光景である。あんな普通の人間の脚が、何がどうしてこんな魔改造された脚になってしまったのか謎だ。いや、改造したのは私なんだが……。

元々、魔理沙は箒無しでの飛行があまり得意ではなかったらしい。浮遊は出来ても高速で動こうとすると制御が利かず、箒で推進力と微細なコントロールを補助していたのだとか。

しかし箒は勇儀が壊してしまった。しかもその箒は特注の一品で、替えが無いらしい。

……焦りますとも。別に生活に支障ないんだから箒無くても良くていい？ とはいかないですよ。

空を飛ぶ。一度それを経験してしまえば、もう飛べなかつた頃には戻れない。移動が楽とか、飛ぶのが楽しいとかそう言うのじゃなくさ。飛ぶと飛べないで生存率が圧倒的に違うのだ。

闘いで、逃走で。不利な状況で出来ないのか出来るのか……選択の幅が違う。飛べない私が言うのだ間違いない。

まあ、そんなわけで。被害者兼新たな力を約束してしまった魔理沙に対して飛行権を奪ったまま放置するのは忍びないと言うか。箒なしでも速く動ける飛び方を飛べないこの私がレクチャーしたわけですよ。

え？ 矛盾してるって？ はっはっはっ何を言う。私はこう見えてもかつて華扇と透花を弟子にしていた鬼の首魁ぞ？ 飛び方を教えるなんてそんな朝飯前……嘘です。二人が天才だっただけで、もつと言えば魔理沙もまた天才だっただけです。

いや、私もアドバイスくらいはしたさ。浮遊はできるけど、移動の推進力とコントロールが出来ない。ならば、その魔改造された脚を箒に見立てて推進とコントロールをすればいいじゃない、と。

うむ。我ながら言つてて（。D。）ハア？　つてなつた。だが残念。それを聞いた魔理沙は我が意を得たとばかりに見事その戯言を実現してしまつたのである。

「……………最高だぜ、酒呑。これなら、霊夢相手でも勝てる気がするぜ」

「それは良かった。とは言え油断は禁物ですよ。本来なら一千年と言う歳月の修練を経て得ることが出来る力を、邪法で省略している様な状況ですからね。何が起こるかわからな——」

私が言葉を言い切る前に、世界が反転した。

地面が天に。空が地に。回る回る。そして回転する世界の中、私は微かに見た。

一筋というにはあまりにも大きくて太い、光の束を。



## 錐揉回転

魔理沙は一早くその攻撃を察知していた。

妖力で出来たソレ。以前の魔理沙も、魔法と道具を使って擬似的に生み出しオリジナルの技へと昇華させた、その大元の技。

全てを焼き尽くし荒野へと変える光の奔流にして、太陽を思わせる力の強さ。

その技に名はない。しかし、魔理沙がそれを見て必死に習得した技には名があった。

その名がマスタースパーク。かつて、パチュリーに人間には余りある、過ぎた力の奔流と言わしめた必殺の一撃。

2人を襲った光は、その何倍も大きく、熱量や威力共に何倍も膨らんだ一撃であった。

とは言え弾幕ごっこにおいて無類の強さを誇る魔理沙である。意表をつかれたとは言え、避けるだけならそこまで難しいことでは無かった。

身体を捻り進路を変えることで難なく避けた魔理沙は、襲ってきた相手を確認するべく光の放たれた地へと目を向けた。

### 『黄』

それは暴力的なまでの黄色の景色である。太陽の放つ光を一身に受けようと花開く向日葵の黄色。土の色を掻き消す黄色の絨毯がどこまでも広がっている。

その向日葵の群れの中に、襲撃者はいた。

「ふん………目障りな気配が漂って来たと思ったら、貴女なのね魔理沙。随分とヘンテコな様子になってるじゃない」

### 風見幽香。

花を愛し、花に愛され、花を汚した尽くを殺す最凶にして最悪の妖怪。

それが魔理沙を襲い、悪びれる様子もなく君臨する彼女の名前であ

る。

「……………幽香」

「ごきげんよう魔理沙。脆弱な人間にして情弱な魔法使いの魔理沙。見ない内に仙人の真似事かしら？ いつの間に宗教変えなんてしたの？」

馬鹿にした様に彼女は魔理沙へと話しかける。厳密に言うならば『魔理沙を』と言うよりは『人間を』であるが。

それでも魔理沙の名前だけは知っているのだから、多少は認めているのかもしれない。魔理沙は一度だけ幽香と弾幕ごっこで勝ったことがある。

遊びとは言え勝負事で負けた。それは幽香にとって多少なりとも名前を覚えるに値する出来事だったのかもしれない。

とは言え彼女は妖怪。生存競争において強さこそが最も敬われるものであり、己の強さを疑わないからこそ誰であろうとも見下すのが彼女である。

そんな彼女が人間相手に気まぐれで声をかけることはあっても、刺すような殺気を向ける事は無い筈なのだ。ましてや、見かけたからと塵一つ残さない程の攻撃を仕掛ける事なんて、見下している人間相手にするわけがない。

「——不意打ちなんて、随分なご挨拶だな。お前はもつと余裕のある妖怪だと思ってたけど、そうじゃないらしい」

「いえ……………懐かしい妖気を感じた気がして思わず苛ついてしまったのよ、ごめんなさいね。まあそれが貴女だとは思ってなかったけど」

そう言って幽香は魔理沙の全身を見回した。

元々着ていた魔女つ子満載な衣服は何処にもなく、霊夢や早苗の様な黒い巫女服へと着ている服が変わっている。しかしソレを見ても誰も仙人とは思わないだろう。

彼女の身体の内側。厳密には全身へと流している源のその脚。そこから幽香は龍気を感じていた。

『龍』。仙人が山で千年、海で千年の修行を積む事で至る存在。神子とは違う、仙人が目指すもう一つの指標。

その気であろうとか、『魔』を目指していたはずの魔理沙が纏っていた。限りなく龍に近付いた仙人が放つ龍気を、魔法使いの魔理沙が宿している。これは本来有ってはならない事である。

俗世を捨て去り、自然の体現者として世界を知る仙人。この世の真理を解き明かし、魔へと堕ちていく導師。

真逆だ。いや、至る目的地はどちらかと言えば限りなく近いだろう。龍へと至った者はこの世の摂理を知る。この世の根源に至った導師は魔術を修め深淵を知る。

目的はほぼ同じ。しかし辿り着く過程はあまりにもかけ離れた対局の位置。

性別で男と女が分かれている様に。空と大地が交わらない様に。無と有で隔たれている様に。そこには違いがあり、仮に合わされば摂理は崩壊する。

だからもし、それが可能となるならば。

そこには摂理を覆す何かがあるのだ。

「酒臭い……………ああ、酒の匂いがプンプンするわね。お前、あの鬼に会ったな？ それも、少量とは言え濃密な『酒』<sup>榮え</sup>を浴びたな？」

妖気。自然の気に満ちた龍気の中に混じる、隠し様も無い鬼の妖気。

魔理沙の身体から漏れ出すその気配を幽香はしっかりと……………むしろ、嫌でも感じ取ってしまった。

「ハッ……………流石の私も同情するわ。あのロクデナシに目を付けられるなんて……………しかもそれ、ほぼ眷属化させられているわね。もはやどこまで自我が残っているのかしら？」

「……………五月蠅いな。さつきからよくわからない事ばかりペラペラと……………独り言か？ 何か話すならもうちよつと人に分かり

やすく喋る事をお勧めするぜ？」

「ああ、いいわよ喋らなくて。どうせまともに話せないんだし。ただ、聴こえてるのはわかからないから、一応親切で言ってるのよ」

幽香の言葉を聞き届けるよりも早くに、魔理沙の手から光の弾が幾百にも散らばり飛び出した。

もはや言葉は要らない。いや、そもそも仕掛けて来たのは幽香の方である。戦闘は不可避であり、話す事すら無駄に尽きるのだ。

襲い掛かる光の弾の群。幽香は持っている傘を大雑把に構え、横風ぎに一閃する。

直後、空中を奔る光の弾は視界の端から次々と連鎖爆発を起こし、空を巨大な爆風で覆った。

「危ないじゃない。向日葵に少しでも当たったら殺しじや済まなくなるわよ？」

邪悪な笑みを浮かべてそう告げる幽香は、ふわりと浮かび上がり空に身を躍らせる。

「仙魔符『スターダストレヴァリエ』」

優雅に浮遊する彼女に魔理沙は再び光の弾幕を飛ばした。

先程と同じ量の弾。しかし違うのはその弾の形である。星の形をした色取り取りの弾が幽香の四方八方から襲い掛かる。

「ふん。芸のない……………ッ？」

もう一度全ての弾幕を吹き飛ばそうと傘を振るえば、魔理沙の星の弾幕が軽い音と共に弾け……………幾つにも分かれ幽香へと殺到した。

瞬時に幽香は傘を開いて腕を振り回し、弾幕の弾を叩き落としていく。

が――

「――まだまだ、これだけじゃ終わらないぜ」

「チツ…………」

再び星の弾幕が魔理沙の後方へと浮かび上がり、幾百にも散らばって幽香へと迫り爆発した。途切れる事のない弾幕の嵐が幽香を襲い続ける。

かつて魔理沙が弾幕ごっこで言っていた一言。『弾幕はパワーだ

ぜ』の言葉を体現した通りの、途方もない数の星の弾。それが一斉に一つの妖怪へと殺到するその光景は、果たして弾幕『ごっこ』と呼べるのだろうか。

爆風の余波で周囲の雲が掻き消される。近くの森に細々と暮らす弱小妖怪は、その光景を見て震え上がった。

「で？ 私をそれで倒せると思ったのかしら？」

爆発が途切れ光の束に覆われていた幽香の姿が露わになる。

その体に傷一つ入っておらず、先程の焼き直しの様に魔理沙の眼前に佇んでいる。

「———それだけで倒せると思っただけか？」

「なにを———」

しかしそれを予想していたかのように魔理沙は次なる一手を仕掛けるために、その手には一枚の御札を手に掲げていた。

直後、幽香が気付くよりも早く、彼女の周りに霧散していた魔理沙の魔力が、いつの間にか2つの魔力塊となって幽香の真横に浮遊していた。

「恋心『ダブルスパーク』」

その2つの魔力塊から解き放たれた極太のビームが幽香を襲った。迫るビームを彼女は咄嗟に腕を広げてその攻撃を掌で受け止める。高音質で奇っ怪な音を周囲に響かせながらも、幽香は魔理沙のビームを掌で受け止め続けていた。

「小賢しい芸当———」

「———まだ終わりじゃないぜ。恋符『マスタースパーク』」

幽香の気を逸らしたその一瞬の間に、魔理沙はその一撃を放っていた。視界を埋め尽くす程の巨大なレーザー。それが魔理沙から放たれると、コンマ数秒も満たない内に幽香の全身を襲う。

直撃を感じ取った魔理沙はこのまま灼き尽くすとばかりにさらに火力を上げた。

そしてとうとう荒れ狂う膨大な魔力が行き場を失い、幻想郷の空に大爆発を起こす。その衝撃は地上まで伸びると、粉塵を巻き上げ巨大

なキノコ雲となつてその威力を知らしめていた。

最大火力の魔法攻撃に大爆発の二段構え。それでも、遠い昔の過去にかつて経験した理不尽なまでの大妖怪との戦いの記憶が、魔理沙に戦闘が終わっていない事を警告していた。

「……………これでも倒せないか。つくづく妖怪つてのは化物だぜ」

先程の焼き直し。平然とキノコ雲を振り払い姿を表した幽香に、魔理沙はその事実を無表情のまま受け入れていた。

「あああああああああああああああ」

突然の光の襲撃。それによつて魔理沙から振るい落された私は飛行スピードのまま錐揉回転して何処かを飛んでいる。

てかヤバいせめて回転止まってくれない!? 気持ち悪い! おええ…………。

腕を広げて、なんとか体勢をツ。逆回転を意識して身体を捻れば……………止まんねえ!! クソ、なんで私には飛行能力無いかなあ!? 頭湧いてんじやねえの? って——

「おべえ!?!」

視界が真っ白に染まった。直前に見た大きな建造物。気付いたときには私はそこに突っ込んでいた。凄い音を撒き散らしながら私の身体が何か硬いものにぶつかつてようやく止まった。

「……………」

一体全体何があつたのか。てか、最近私の運氣悪くね? なんなんほんま。

「イタタ……………あー、死ななくて良かった」

とは言え、私の悪運は捨てた物ではなかったらしい。派手に建物にぶつかったがそれだけだ。衝撃こそ強かったけど意外とそこまで大きな怪我は無かった。

どうやら私は襖やら障子やらを突き破ってこの建物内にダイナミック・エントリーしてみたんだけど、それがかえって衝撃を緩和してくれたみたいだ。ありがたい事である。仮にぶつかったのが大木とか岩とかだったら私の身体が派手に飛び散ってたと思う……………自分で考えて恐ろしくなっちゃったじゃないか！

「ここは、どこでしょうか？」

一体私は何処まで飛ばされたのか。そう思っただけで私が着弾？した場所を見渡せば、散乱した紙の束があちらこちらに舞い上がり散らかっていた。

「うわっ……………汚いですね。この家の主はあまり掃除が出来ない方なのでしょうか？」

「貴女のせいですよ!!」

突如、鼓膜を破るような大きな叫び声が私の横から放たれた。

突然な上に大きな声過ぎて心臓が飛び出るかと思った。び、び、びつくりさせるんじゃない!!

とは言え、やはり私は誰かの家に突入してしまった様子。プンスカ怒る少女を宥める為にも、ここは頭を低くして(遺憾に思いながら)謝罪の意を述べることにする。

「この家の方……………娘さんでしょうか？ 突然押し入って申し訳ございません。すみませんが親御さんを呼んできてもらいませんか？ 家を荒らしてしまったので謝りたいのです」

私はそう謝罪しながら声を掛けてきた少女を観察した。

歳は……………13、4歳ぐらいだろうか。若草色の着物の上に、袖が花柄な黄色の振袖を艶姿のような感じで重ね着している。紫の髪を肩口で切り揃えており、ワンポイントなのか花の髪飾りを付けている。そんな少女が何やら警戒した様子で私を睨みつけていた。

「……………どうやら、少しは話の通じる妖怪のようですね。あと、親はいません。今は私がこの稗田家の当主です」

「ほう。若い見た目をしているのに当主ですか。御立派なのですね」  
幼そうなのに偉いなあと思った。そう尊敬の念も込めて言った言葉だったのだけど、何故か睨まれてしまう。

はて、何か気に障ることも言っただろうか。そう思い考えに耽ようと思ったのだけど、外の部屋からドタドタと騒がしい音がして考える暇は無かった。

「阿求様！…ご無事ですか!!？」

駆け込んできたのは槍や刺又などの長物で武装した男達だった。

まず始めに私の前にいる少女を見て、次に対面の私を見て……………その刃を向けてきやがった。

「貴様、妖怪だな!! ここが稗田家と知つての襲撃か!？」

「いえ知りませんでしたけど」

「何用があつて我等を襲う!? 人里を襲えば博麗の巫女が黙つておらんぞ!!」

「襲うつもりも無いんですが」

「おいおい、止めちくれ給え。こちらは無害な鬼だぞ!? なんの理由があつて武器を私に向けるのさ!!」

「落ち着いてください。私は貴方達に危害を加えるつもりはありません……………ここに落ちてきたのは偶々なんです。悪意はありません」

「妖怪の言葉など信じられるか!! ……………阿求様、お逃げください。」

我々が命を賭してこの妖怪を足止めしますから」

「はあ……………危害を加えないと言っているではないですか」

まあ、妖怪を恐れる気持ちもわかるが。少しはこんなにも可愛い可愛い酒?ちゃんの言葉を信じてみても良いんじゃない……………? 余裕の無い男はモテないゾ☆

「本当に、危害を加えませんか?」

「阿求様!？」

お互いが相手を恐れて硬直状態だった中、阿求と呼ばれた少女が私に声を掛けてきた。

今だ警戒しながらも……………なんだろうか。私を興味深げに見ている気がする。



「はい。本当に偶々、偶然、悪意なく、縁があつたのか、不幸な事故があつた為にここに落ちてきてしまっただけで。ここで何か悪事を働こうなど一切考えていません」

「……………そう必死に言葉を並べられると逆に怪しく見えますが……………」

私のことをジト目で見ながらも、少女は覚悟を決めたように私の前に一歩躍り出た。

「貴女の事が知りたいんです。私とお話ししませんか？」

そんな風に私はロリっ娘に口説かれたのだった。